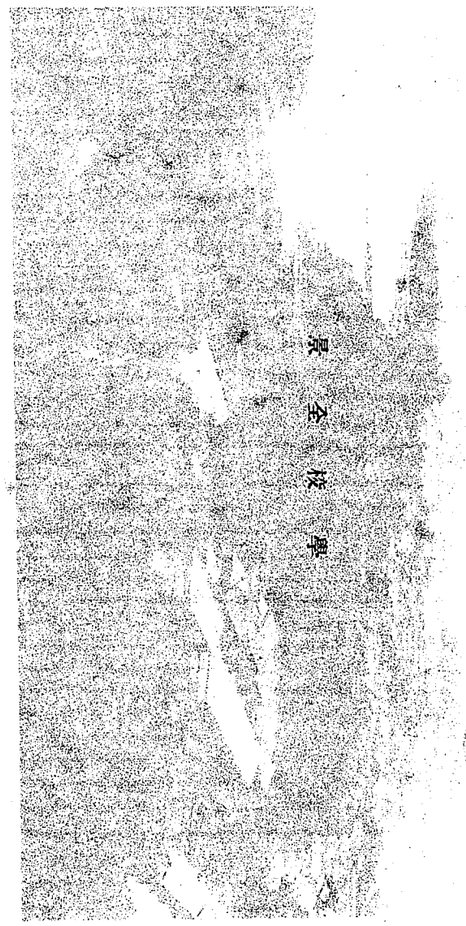


稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

景全校學





稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

濱口梧陵翁

岩崎明岳翁

濱口容所翁

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

濱口梧陵翁

岩崎明岳翁

濱口容所翁

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10







渋谷昭彰

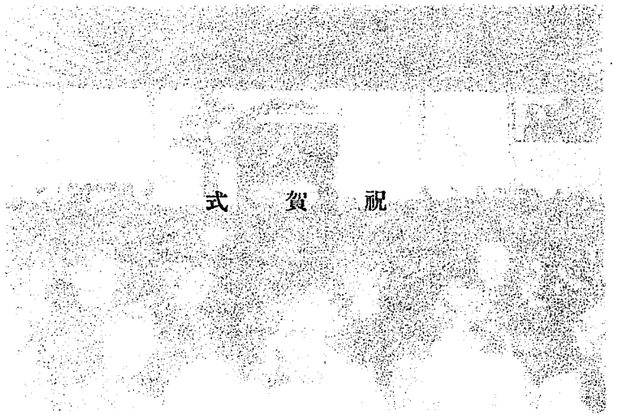
渋谷家初代

渋谷家二代

式　賀　祝

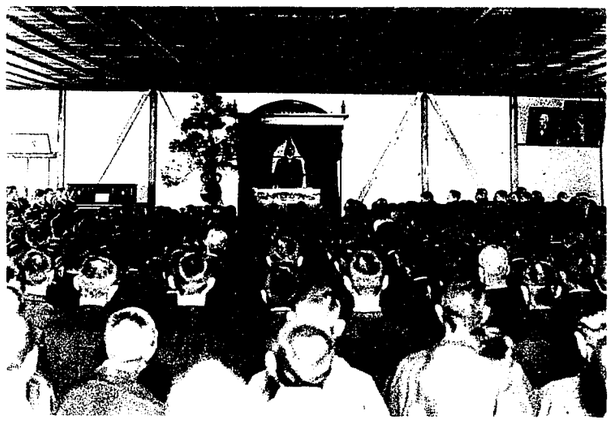
宴　賀　祝

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10





稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10





稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

祭靈慰會演講念記

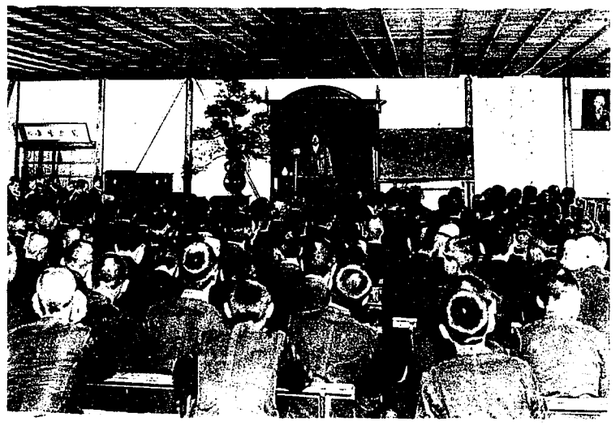
稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10





稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

十年以上勤續被表彰者

堤　校醫

川口父兄會長

廣瀨學校長

阿瀨校友會長

三木教諭

辻　使丁

現職員

山本書記

涌田教諭　金成教諭

加藤教諭

中井教諭　增干教諭

野田教諭

森岡教官　伊藤教諭

南條教諭　菅原教諭

廣瀨校長

佐藤教諭　島原教諭助廣教諭

植村教諭兒玉教諭

西岡教諭　川村教諭津々見教諭

梶原教諭

武內教諭

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

十年以上勤續被表彰者

堤校醫

川口父兄會長

廣瀨學校長

阿瀨校友會長

三木教諭

辻使丁

現職員

山本書記

涌田教諭

金成教諭　加藤教諭　中井教諭

增子教諭　野田教諭

伊藤教諭　森岡教官

菅原教諭　南條教諭　廣瀨校長

島原教諭助廣教諭　佐藤教諭

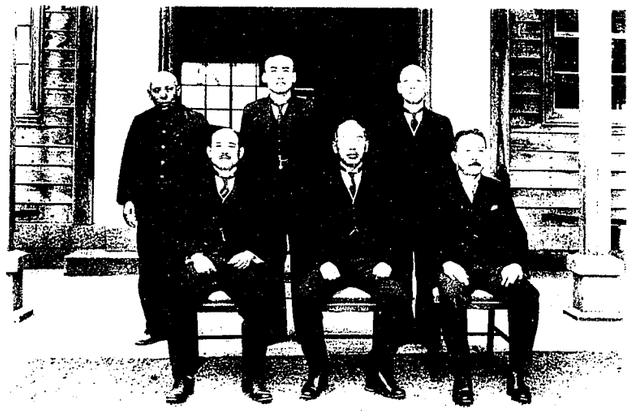
植村教諭兒玉教諭　西岡教諭

川村教諭津々見教諭

梶原教諭

武内教諭

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10





第六回全国水平社大会
第五回全国水平社大会
第四回全国水平社大会
第三回全国水平社大会
第二回全国水平社大会
第一回全国水平社大会
第六回全国水平社大会
第五回全国水平社大会
第四回全国水平社大会
第三回全国水平社大会
第二回全国水平社大会
第一回全国水平社大会

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

(部之化理)場會覽展

室教別特築改

(部之物博)場會覽展

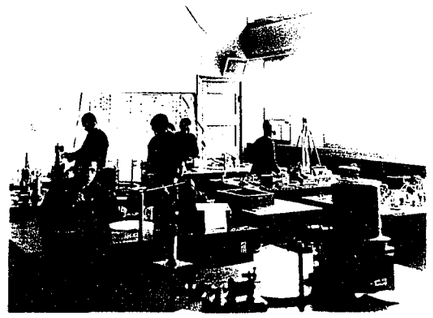
稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

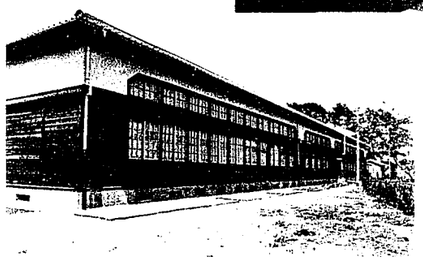
(部之化理)場會覽展

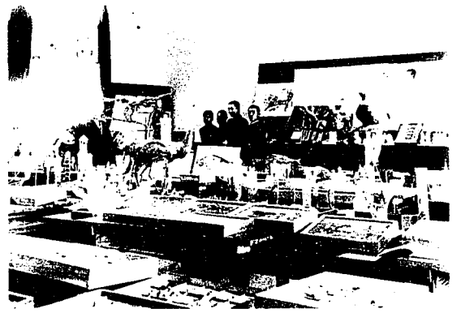
室教別特築改

(部之物博)場會覽展

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10







稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

會大育体念記

グンリブンタ祝奉

列行會社

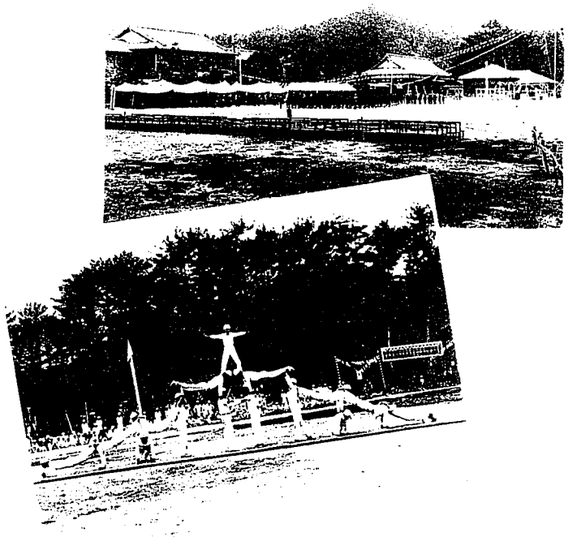
稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

會大育体念記

グンリプンタ祝奉

列行會社

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10





稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

會大道武念記

會大力角念記

(式球始)會大球野念記

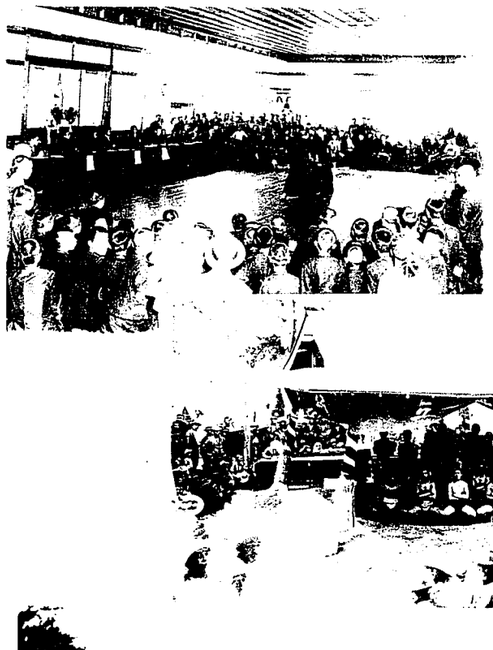
稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

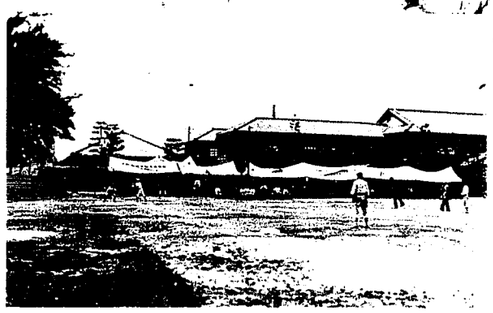
會大道武念記

會大力角念記

（式球始）會大球野念記

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10



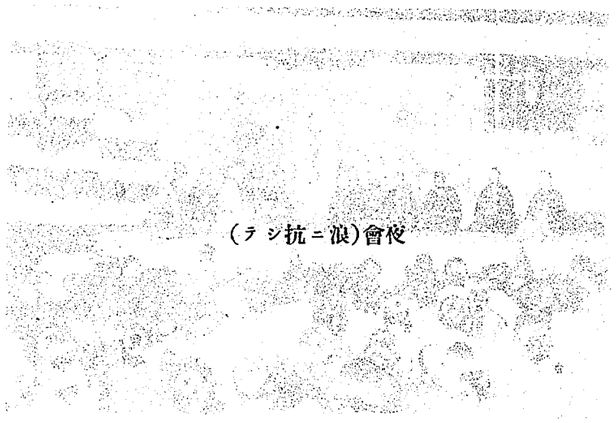


稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

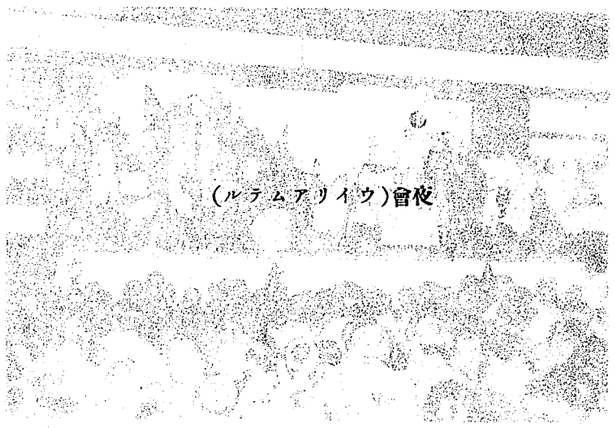
(ラシ抗＝浪)會夜

(ルテムアリイウ)會夜

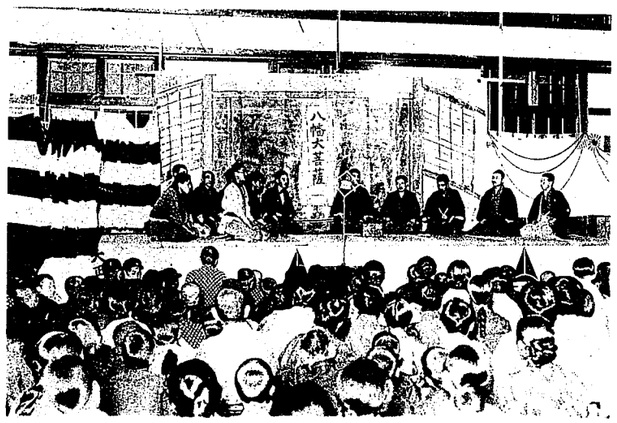
稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

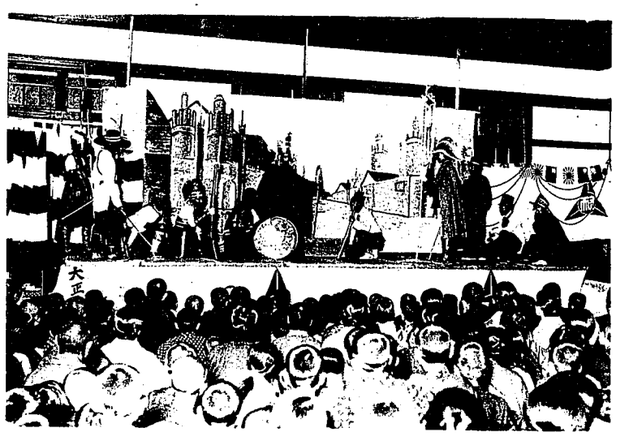


（テシ抗＝浪）會收



（ルテムアリイウ）會收





稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

訓　校

眞健美

（綱領三）

（箇條二十）

一、尊嚴ナル皇室ヲ崇敬シ常ニ聖旨ヲ奉體セヨ。
一、金甌無缺ノ國體ヲ擁護シ國運ノ發展ニ努メヨ。
一、敬神崇祖ノ念ヲ厚クシ父母ニ孝養ヲ盡セ。
一、敬虔謝恩ノ誠ヲ致シ悅ンデ師長ノ敎ヲ受ケヨ。
一、信念ヲ鞏固ニシ正シク強ク麗ハシク自己ノ天稟ヲ伸暢セヨ。
一、質實剛健ヲ旨トシ堅忍持久專心事ニ當レ。
一、心身ヲ鍛錬シ强健ナル身體ト澄測タル精神トヲ養成セヨ。
一、規律ヲ守リ責任ヲ重ンジ各其ノ本分ヲ完ウセヨ。
一、勤勞ヲ愛好シ創造工夫ヲ尙ビ絕エズ研鑽ニ努メヨ。
一、禮節ヲ重ンジ趣味ヲ養ヒ品位ヲ高尙ニセヨ。
一、朋友ヲ親愛シ互ニ切磋琢磨セヨ。
一、社會人トシテノ自覺ヲ高メ共存共榮ノ實ヲ擧ゲ進ンデ大國民ノ氣宇ヲ養ヘ。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

校歌

一、たゝふる波も那耆の海　たなびく雲や生石山
わが學びやは礎を　嘉永の昔こゝに置き
耐久學舍の名と共に　幾年月を過ぎにけり
二、三世（みよ）に輝くのりの道　徳を修むるもとゝして
慈愛の心たゝへつゝ　自由の里に身をきたへ
智能をひらき國のため　人のためにもいそしまむ
三、學びの庭に集ふなる　わが友どちよいざ勵め
はげみ進みて久しきに　耐ふとふことを忘れざれ
道義の山は高くとも　眞理の海は深くとも

耐久創立八十周年記念號目次

◎校訓……學校長……（一）
◎校歌……
◎三一會歌……（二）
◎卷頭言……（三）
◎本校沿革の概要……（四）
◎八十周年記念祝賀行事……
祝賀第一日……慰靈祭……祭文
祝賀第二日……記念式典……式辭……祝辭……感謝狀……祝電
祝賀第三日……祝賀歌……祝賀宴……記念講演會……展覽會
祝賀第四日……記念體育大會
祝賀第五日……武道大會……角力大會……夜會
野球大會

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

目次終

◎所　感……（一）
◎祝賀會成立經過……（八）
◎祝賀會寄附者芳名……（九）
◎會　計　報　告……（一〇）

☒三一會報

◎文　藝……（一〇）
◎三一會各部報……（一三）
◎學　校　日　誌……（一三）
◎現　職　員……（一四）
◎舊職員動靜……（一四）
◎八年度三一會役員……（一四）
◎生徒出身地別調……（一四）
◎昭和七年度三一會豫收支決算書……（一四）

☒校友會報

◎父　兄　會　報……（一四）
◎校　友　名　簿……（一四）
◎編　輯　後　記……（一八）

三一會歌　其ノ一

一、黒潮たぎる紀伊の海　松常磐なる那耆の濱
吹く潮風に雄々しくも　聳えて立てり耐久舍
二、歴史に榮ゆる學舍の　礎遠し嘉永の代
英偉の精神（コヽロ）今もなほ　我等が胸によみがへる
三、あゝ南海の健男兒　正しく強く麗しく
鍛へ磨きて永久（トコシヘ）に　輝かさなん三星章

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

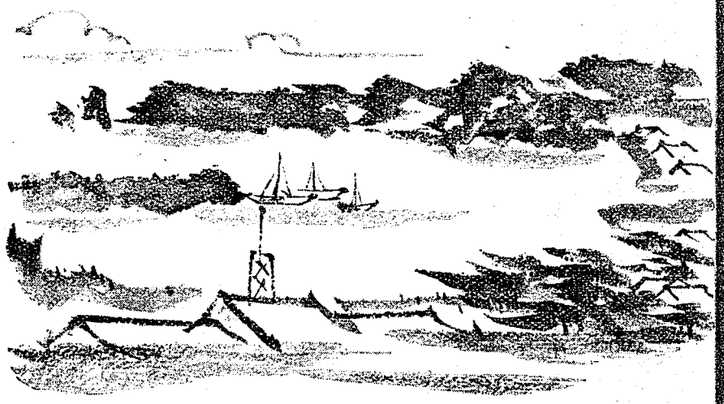
三一會歌

其ノ二

一、陽光波に輝きて　綠かげ濃き校庭に
鍛へし腕（カヒナ）誰か知る　いざ〳〵示せ耐久健兒
我等が力

二、熱血胸に高鳴りて　矜（ホコリ）に生くる傳統の
眞健美の旗おし立てて　いざ戰はん耐久健兒
我等が精銳

三、駿馬進むる若人の　心は燃えぬ血は沸きぬ
勝利の王座目指しつゝ　いざ輝かせ耐久健兒
我等が譽



卷頭言

那著灣頭翠綠滴る所久しきに耐ふてふ誓の下に本校が其の名を負うて雄々しく產聲を擧げたのは今より八十年前の昔である。茲に一時期を劃するに當り先賢の德を稱へて報本反始の誠を致し先進活動の跡を溫ねて一段の進展を期する念願を以て擧行されたる創立八十周年記念式並に幾多の記念行事は奇蹟的にも終始絕好の天候に惠まれ多數人士の多大なる援助と獻身的努力の賜として諸事滯無く完了し眞に有終の美を收めることが出來た。實に感激感謝に堪へない次第である。本小册子はこゝに此の意義深き記念すべき數々の事項を蒐錄し永へに追憶の緣たらしめんとするものである。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

本校の沿革概要

年次	事記
嘉永五年	海防ノ議天下ニ嚆然トシテ起ルヤ濱口東江、岩崎明岳ノ二翁時勢ニ觀ル所アリ稽古場ヲ廣村田町ニ創設シ海上胤平、佐々木五十鈴、小野石齋等ヲ聘シ村内子弟ヲ集メ晝ハ武ヲ練リ夜ハ書ヲ講ジ以テ士氣ノ振作ニ努メタリコレ實ニ本學ノ起源トス。
慶應二年	塾舍ヲ廣村大道ニ移轉增築ヲナシ永續ヲ誓ヒテ耐久社ト稱ス。
明治三年	校舍ヲ改築シ塾則ヲ定ム。
同二十五年三月	耐久學舍ト改稱ス、濱口容所、濱口梧陵、岩崎重次郎等相謀リ時勢ノ推移ニ鑑ミ舍員ヲ募リ維持ノ方法ヲ立テ教則ヲ規定シテ普通教育ヲ施スコトヽナス。
同二十七年三月	野田四郎舍長トナル。
同二十八年五月	本科ヲ三ケ年トシ豫科ヲ新設ス。
同　三十年三月	豫科ヲ廢止ス。
同三十六年四月	第一回卒業式擧行。
同三十七年三月	舍長野田四郎辭任濱口容所新ニ舍長トナル。
同三十八年七月	修業年限ヲ四ケ年トス。
同三十九年三月	中學校令ニ準ジ修業年限ヲ五ケ年トス。
同　年四月	濱口容所舍長辭任寶山良雄來任。
同　年六月	東久世通禧伯來舍文部省告示第五〇號ヲ以テ徵兵令第十三條ニ依リ認定セラル。
同　年九月	德川賴倫侯茨木維昭男來舍。
同　四十年三月	文部省告示第百三十九號ヲ以テ專門學校入學者撿定規程第八條ニ依リ專門學校入學ニ關シ中學校卒業者ト

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

明治四十年九月　同等ノ學力ヲ有スルモノト指定セラル
同四十一年一月　新築校舍落成ニ付現在ノ大濱ニ移轉。
同　年三月　米國エール大學敎授デ●テイ●ラツド博士夫妻來舍、土方久元伯來舍。
中學校令ニ依リ設立スルコトニ組織ヲ變更シ和歌山縣立耐久中學校ト改稱ス、爾今濱口吉右衛門獨力ニテ
經營セラル。
同　年十一月　新規定ニ依ル第一回卒業證書授與式ヲ擧行ス。
同四十四年七月　小松原文相、松村普通學務局長一行視察ノ爲來校。
同四十五年一月　敎室及寄宿舍增築工事落成ス。
大正二年二月　奥平忝昌伯來校。
同　年四月　校長賓山良雄辭任、香川直勝校長ニ任セラル。
同　三年七月　爾今十學級ニ編制ス德川賴倫侯澁谷在明中將、三浦英太郎男一行來校。
同　五年五月　香川校長辭任、近藤壽治校長事務取扱ヲ命ゼラル。
同　六年六月　近藤壽治校長ニ任セラル。
同九年四月一日　校舍增改築竣工ヲ機トシ改稱十周年記念並ニ新築落成祝賀式擧行。
同　十年六月　本校ヲ縣營ニ移管シ和歌山縣立耐久中學校ト改稱ス。
同　十一年三月　『アルゼンチン』國駐箚特命全權公使中村巍來校。
同　年十月　校長近藤壽治海軍中學校長ニ轉補、粉河中學校長松扉得悟本校長トシテ來任。
同　年十一月　天皇　皇后兩陛下御眞影拜戴。
同　十三年二月　本校創立七十周年記念祝賀式擧行。
同　年八月　皇太子殿下御眞影拜戴。
同十五年十一月　校長松扉得悟和歌山高等女學校長ニ轉補、酒井榮太郎本校長トシテ來任。
昭和二年四月　寄宿舍新築落成式擧行、校長酒井榮太郎兵庫縣立龍野中學校長ニ轉補、兵庫縣立豐岡中學校長瓜生兵吉本

昭和三年六月　校長トシテ來任。
同　年十月　演武塲新築落成擧行。
同四年六月五日　天皇、皇后兩陛下御眞影拜戴。
同　五年十一月　校長配屬將校外職員三名生徒百四十一名大阪城東練兵塲ニ於テ御親閱拜受。
同　六年一月　校長瓜生兵吉辭任。
同　年八月　新宮中學校長廣瀨置造本校長トシテ來任。
同　七年十一月　校長、配屬將校、職員二名生徒四十名大阪城東練兵塲ニ於テ御親閱拜受。
同　八年一月　特別敎室一棟（百八十坪）竣工ス。
同　年五月　創立八十周年記念祝典並ニ記念行事擧行

八十周年記念式典行事

第一日　五月六日　慰靈祭
第二日　五月七日　記念式
第三日　五月八日　記念體育大會
第四日　五月十三日　記念角力及武道大會
第五日　五月十四日　野球大會

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

祝賀第一日　慰靈祭

創立八十周年記念祝典に先だつこと一日、五月十六日廣村安樂寺に於て創立者濱口梧陵翁を初め職員校友等の物故者慰靈祭を執行された。式は濱口儀兵衛氏をはじめ職員全校生徒並に一般來賓、遺族等着席のもとに午前八時二十五分開始

一、導師登禮盤　衆僧合掌禮拜の時一同共に敬禮
一、敬禮勸請
一、表白文
一、入出二門偈
一、四句念佛
一、回向
一、導師下禮盤　復本席
一、校長祭文
一、燒香　遺族、校友總代、父兄總代、來賓、職員總代、生徒總代
一、一同敬禮

等あつて十時半終了、それより初代校長賓山氏肖像除幕式が左の順序によつて行はれた。

一、賓山氏肖像安置
一、奠供
一、讀經
一、衆僧退出
一、講話
一、一同敬禮

一、順次退出

同式場に於ける濱口儀兵衛氏の講話要旨。

祖父梧陵の耐久中學創立精神は地方の中堅人物をつくるにあり、現今政治上に於て種々の悪弊横たはる。これが匡正には先づ地方よりせざるべからず。諸氏は須らく耐久創立精神に立ちかへり一層學德の研讃につとめ創立者の精神に添はれんことを望む。

次いで瀧浦元本校教頭の、賓山先生遺蓍刊行會の經過に就いて述べ、終つて賓山先生令兄森氏起ちて一場の挨拶を述べられいと莊嚴裏に式が閉ぢられた、時に午前十一時五十分。

祭文

和歌山縣立耐久中學校創立八十周年記念式を擧ぐるに先つこと一日茲に悲しく祭壇を設け時差の典を具へ謹んで本校創立者梧陵先生、東江先生、明岳先生並に校主として多年犧牲的努力を拂はれたる容所先生を始め物故せられたる本校關係職員校友生徒諸氏の英靈を祭る。

悲しく惟みるに本校が其の名耐久にふさはしく世にも稀なる八十年の長き歷史を有し貴き創立精神脈々として今日に及べる實に天下の偉觀、聖代の祥事と謂ふべし是れ偏に創設者の偉大なる人格、卓抜せる識見に基くは固より關係職員諸氏が協心戮力眞摯熱烈絶へず其の根幹に培ふことに努められたると生徒諸氏が克く其の精神を体して奮勵せられたるとに因らずんばあらず。其の功績は永く後世に稱ふべく其の恩德は汎く後進を光被すべし。吉辰佳節ある毎に常にその偉德を追慕し歡を偕にし喜を分つ能はざるを憾とせり、今や八十周年記念祝典の盛儀を擧ぐるに際し感慨轉た無量なり。

生等乏しきを以て先賢諸氏の後を襲ひ欽慕感激甚だ切なるものあり夙夜兢々として遺緒を失墜せざらんことを期す、願くは永へに加護あらんことを。

茲に謹んで肺腑を布き恭しく先賢故人の靈前に告ぐ。

嗚呼鄉村の山川は依然として風貌を改めざれども年々歲々人相同じからず花散り葉萠えて初夏の山内靜寥寂寞香煙縷々とて

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

追慕の情盡きず尚くは英靈髣髴として來り饗けよ。

昭和八年五月六日

和歌山縣立耐久中學校長　廣瀬寶造

祝賀第二日祝賀式

全國中等學校に比類なき八十年の歴史に輝く我校創立記念祝賀式は七日午前十時三十分より講堂に於て官民有志、校友、父兄等一千餘名、參列のうへ擧行、天もこの日の歴史的な祝典を嘉してか氣づかはれた天候も朝來日本晴に照り映へ、絶好の祝典日和、今日の祝賀式の盛況を思はしめた。

先廣瀬校長の感激に充ちた式辭について鳩山文相以下別項所載の來賓各位及生徒總代の祝辭、終つて祝電披露あり、十一年勤續の三木敎諭、二十二年勤續の堤校醫、十五年勤續の使丁辻七右衛門の三氏に感謝狀ならびに記念品を贈呈し校歌を高唱嚴肅裡に式を閉じた時に零時を過ぐること五分。なほ零時三十分より盛大なる祝賀宴を武道場に張り午後一時半より約二時間にわたり耐久學舍時代の敎頭瀧浦文學士、校友土岐和高商敎授の別項記載の有益な講演あり、聽衆に多大の印象と感銘を與へて四時十分終了した。

記念式典

一、入場
　生徒職員
　校友父兄
　來賓
一、一同敬禮
一、君が代合唱　一同起立
一、勅語奉讀　一同起立
一、學校長式辭
一、祝辭
一、勤續者に感謝狀並に記念品贈呈　（校友會、父兄會）
一、校歌合唱
一、退場

式辭

本日茲に本校創立八十周年記念式ヲ擧行スルニ當リ長官閣下ヲ始メ多數貴賓各位並ニ校友父兄諸賢ノ御臨場ヲ忝ウシマシタコトハ本校ノ非常ニ光榮トスル所デアリマシテ同時ニ又甚ダ欣幸ニ存ズル所デアリマス、而シテ茲ニ意義深キ式典ヲ擧ゲ各種記念事業ヲ催シ得ラレマスコトハ全ク校友會父兄會並ニ有志ノ方々ノ多大ナル御援助御盡力ノ賜デアリマシテ此ノ点特ニ冒頭ニ於テ深甚ノ謝意ヲ棒ゲテ置キタイノデアリマス。

抑本校ハ幕末内憂外患交々至ルノ際一世ノ偉人濱口梧陵翁ガ人材養成ノ急務ヲ痛感セラレ濱口東江岩崎明岳兩翁ト相謀リ地ヲ廣村田町ニ相シテ學舍ヲ建テラレタノニ其ノ源ヲ發シテ居リマシテ是レ實ニ嘉永五年ノ遠イ昔デアリマス、其ノ期スル所ハ文武兩道ヲ以テ子弟ノ心身ヲ修練シ時勢ヲ達觀シ各分ニ應ジテ眞劍以ヲ事ニ當ル國士ノ養成ニアツタノデアリマス。

カクシテ此ノ風光明媚ノ地ニ固イ礎ヲ定メ地方文化ノ淵叢ヲ開キマシタ學舍ハ其ノ後慶應二年廣村大道ニ移轉增築セラレテ耐久社ト稱シ明治二十五年ニ至リ耐久學舍ト改稱シ同三十九年廣村西ノ濱即現在ノ地ニ移轉セラレ續イテ四十一年組織ヲ改メテ和歌山縣私立耐久中學校ト改稱シ嘖々タル名聲ガ廣ク海内ニ喧傳セラレタノハ其ノ當時デアリマシテ大正元年ニ至リ縣營移

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

皆トナツテ今日ニ及ンダノデアリマス、創始以來其ノ年次ヲ數ヘマスレバ正ニ昨年ヲ以テ八十周年ヲ迎ヘタノデアリマスガ時恰モ特別教室改築ノ事ガアリマシタノデ其ノ竣工ヲ待チ本日ヲトシ茲ニ記念式典ヲ擧ゲルコトニナツタ次第デアリマス。

斯ク其ノ位置建物並ニ編制等ニ於テハ幾多ノ變遷ガアリマシタガ絶エズ濱口家カラハ多大ノ犧牲的援助ヲ忝ウシ一般有志諸賢カラモ亦熱誠ナル後援ニ與リ其間一貫脈々トシテ流レテ居ルモノハ實ニ創立精神デアリマス、此ノ由緒深キ學園ニ學ビ此ノ創立精神ヲ体得シテ世ニ出デ高潔ナル人格卓越セル見識ヲ以テ活躍セル人士ヲ思フ時尊イ創立精神ヲ仰イデ私共ハ自ラ襟ヲ正シ先徳ニ對スル欽慕措ク能ハサルモノガアルノデアリマス、今ヤ國家ノ非常時ニ際會シ本校創立當時ノ國情ヲ偲ンデ感慨無量感奮興起、創立者ノ崇高ナル精神躍如トシテ私共ノ胸ニ甦リ此ノ八十周年ハ正ニ一時期ヲ劃スルモノデアリマス、卽チ一昨年來諸賢各位ノ御教示御援助ノ下ニ革新ノ歩武ヲ進メ內ニアリテハ職員生徒ノ涙グマシキ奮起精勵ト相俟ツテ本年一月ニハ特別教室ノ改築成リ茲ニ內容外觀其ノ面目ヲ改メマシテ八十年來作ツテ來マシタ尊キ傳統ヲ矜持シツヽ日ニ新ニ又新ナランコトヲ期シテキル次第デアリマス。

本校現在ノ教育方針ト致シマシテハ此ノ創立精神ニ基イテ制定サレテヲル校訓三綱領十二ケ條ノ精神ヲ發揮スルハ勿論改正セラレタル新制度ニ則リ地方ノ情況ト個性ノ天分トヲ考察シテ時勢ニ適應スル所ノ身體强健デ有德有爲有能ナル人材ヲ養成センコトヲ務メテ居マス、特ニ將來上級學校ニ進ム者ト卒業後直ニ實務ニ就クモノトヲ上級ニ於テ組別シ特別施設ノ下ニ最モ適切有効ナル教育ヲ施シ漸次其ノ成績ヲ收メツヽアルノデアリマス、勿論何レノ方面ニ向フモノニ對シテモ鞏固ナル國家的觀念ト着實ナル勤勞愛好ノ精神ノ涵養卽忠良ナル國民、眞面目デヨク働クシツカリシタ人物ヲツクルトニハ最モ意ヲ用ヒテ居ル所デアリマシテ從來世上ニ見ルガ如キ中學教育ノ缺陷ハスベテ之ヲ一掃スベク職員生徒一致協力一大覺悟ノ下ニ邁進シツヽアルノデアリマス。

之レ卽本校創立精神ノ存スル所デアリマシテ一ハ以テ先賢ノ鬱德ニ答フル所以デアリ一ハ以テ地方識者並ニ校友父兄諸賢ノ期待ニ副フ所以ト信ジマス。

茲ニ御臨席ノ各位カラ從來受ケマシタ御教示ト御援助ヲ謝スルト共ニ聊カ所懷ノ一端ヲ述ベテ更ニヨリ以上各位ノ御同情アル御鞭撻ヲ仰ガントスル次第デアリマス。

以上施辭ヲ列ネテ本日ノ式辭ト致シマス。

祝辭

本日和歌山縣立耐久中學校第八十周年記念式ヲ擧行セラルルニ當リ一言所懷ヲ述ブルハ予ノ欣幸トスル所ナリ。

惟フニ嘉永五年ノ昔、濱口梧陵翁ガ鄉閭ノ子弟ヲ集メテ武ヲ練リ書ヲ講ゼシモノ卽本校ノ濫觴ナリ爾來星移リ物替リ幾多ノ變遷沿革ヲ經遂ニ克ク今日アルヲ致ス遠ク遡リテ旣往八十年ノ歷史ヲ追想スレバ先人苦心ノ跡歷々トシテ感慨禁ジ難キモノアルベク特ニ梧陵翁創立ノ精神脉々トシテ其ノ間ヲ貫流シツヽアルハ予ノ信ジテ疑ハザル所ナリ今ヤ內外多事國家ノ人材ヲ要スル今日ヨリ急ナルハナク本校ノ使命更ニ一段ノ重キヲ加フ庶幾クハ學校一致篤ク設立當初ノ精神ヲ體シテ益々心身ヲ練リ智能ヲ研キ不撓ノ信ト不撓ノ意氣トヲ以テ國家ノ進運ニ寄與スル所アラムコトヲ。

昭和八年五月七日

文部大臣　鳩山一郎

告辭

本日茲に耐久中學校創立八十周年記念の式典に臨み所懷を叙して祝意を表するは本官の欣幸とする所なり。抑も全國に於ける中等學校の數約千二百を算すと雖も其歷史の古く創立趣旨の優秀なる本校の如き蓋し稀なり。

本校は嘉永五年國家多事にして內憂外患交々の至れる秋、濱口梧陵翁に依りて創立さる。翁刻下の急務は人材の養成にありとし、學舍を廣村に開き鄉里の子弟を集めて、文武の道を講じ守則信條を確立して、士氣の練磨に努め、大いに國事の忽にすべからざるを悟らしめたり。是本校の濫觴にして、爾來星霜を重ぬる八十年。

其間幾多の變遷あり、校運亦消長を免れざりしも、兩濱口家の多大なる犧牲的努力と地方有志の熱誠なる後援とに依り、久しく地方文化の中心として多數有爲の人材を輩出せり、特に明治晩年より大正初頭の頃學風大いに伸張し名聲嘖々たるものあり。名士の來り訪ふもの其の數を知らず。其後一時校規弛緩せる事ありしも、最近職員協力一致して銳意校規の振肅と校風の

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

刷新に邁進し面目大いに革まれり。

冀くは本校職員各位生徒諸子本日の盛典を長へに記念し、創立精神に復りて一層智德の修養に精勵し力を校風の錬成發揚に致すべく卒業生並に本郡有志各位亦宜しく心を本校の援助に寄せられ内外協力提撕して校運の伸張に盡瘁し一は以て本校の使命を完からしめ、他は以て創立者の精神を永へに朽ちざらしめん事を。

昭和八年五七日

和歌山縣知事　正五位勳四等　清　水　良　策

祝　辭

本日を卜し當校創立八十周年の式典を擧行せらるゝに當り不肖席末に列するの榮を得たるを以て一言其の祝辭を述ぶる所あらんと欲す。抑も本校の起原を溫ぬるに嘉永五年予が祖父梧陵、濱口東江、岩崎明岳等と相諮り廣村田町に武道稽古場を設けたるを以て嚆矢とす。

慶應二年同村大道に移轉し爾後盛衰幾變遷ありたりと雖も始終耐久を以て名とし堅忍持久社員及び教職員の熱心と努力とを以て維持し來りしが時運の進展は私立の必要を認めざるに至り大正九年之を縣の經營に移する至れり。

顧ふに嘉永安政の交内憂外患交至り我が國家にとりては深憂に堪へざるもの多々ありき。此時に當り祖父等天下の大勢を達觀し鄉黨の子弟を集めて利用厚生の實學を授け又武技を錬磨せしめ國家有爲の材を養成せんとせり。是れ本校創立の意思にして其後學課の編成等に幾變遷ありしも其精神は終始一貫して謬らざる所なりしなり。

今や我が國の情勢を觀れば之を嘉永安政の交に比して益々多事多難と云はざるを得ず、之を内にしては思想經濟の國難の叫ばるゝあり之を外にしては滿洲國の新興に當り國際聯盟と其所見を異にし遂に聯盟を離脫するの止むなきに至れり、我が國は深く國際の平和を希求すと雖も或は東亞の天地に風雲の將に來らんとする患なきに非ず。此時に當り我國民は國家を以て任ずる偉大なる信念と擧國一致國難に當るの意氣なかるべからず。此精神氣魄を養ふは徒らに盡瘁の勇を擬するに非ずして本校々訓の體現を以て念とし眞理探究の精神と質實剛健の氣風敬愛情誼の信念とによりて初めて實現する事を得べきなり。聊か所感を述べて祝辭に代ふ。

昭和八年五月七日

濱　口　儀　兵　衛

祝　辭

本日縣立耐久中學校創立八十周年記念式を擧行せらるゝに當り余亦其の席末に列するを得たるは頗る欣幸とする所なり。

抑本校は幕末嘉永五年海防論の國内に囂々たる際我縣の大先輩、故濱口梧陵翁深く時勢の趨向を察し、特に人材育成の急務なるを認め同志と相謀り今の地に稽古場を開設し專ら時勢に堪能なる青年有爲の士を敎育せるに初まり、其後久しく濱口家の私學として地方文化向上の上に多大の貢獻をなし大正九年三月に至り校地校舍一切を縣に寄附せられ縣立と成り以て今日に至れり、當初より星霜を閱すること八十を算し、卒業生を出すこと千三百餘名の多きに及べり。今過八十年を回顧するに創立者たる國士、梧陵翁の人格は一貫して本校校風の中心生命を形成し我國最古の中學校として將又精神學園として大に一世の注目を惹き校運時に隆替を免れずと雖も其の七十年の長きに亘る濱口家の莫大なる物質的犧牲並に精神的努力の結晶として發展し來れるを想ひ、創立者勿論濱口家各位に對し感謝の念泯然として禁じ難きものあり。

今や式典に際し遠く創立當初を追懷して今更先覺者梧陵翁の高邁なる識見に敬服すると同時に希はくは今後本校に學ぶ者深く翁の精神を体し國家並に鄉閭の期待に負かず、多時、多難なる邦家の前途に對し大いに自重奮勵し、愈々校運の隆昌に寄與せんことを一言以て祝辭となす。

昭和八年五月七日

和歌山縣會議長　中　井　勳

本日開校八十周年の式典を擧行せらるゝに當り招により此席末を汚すを得たるは余の最も欣快且つ光榮とする處なり。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

抑も本校創立は嘉永五年我國家有事の時に際し一世の偉人濱口梧陵翁が時代の進運に鑑み百年後の國家教育を洞察して私立學校として創立せられたり、この創立當時を回想すれば感激轉た切なるものあり。

時恰も外艦渡來尊王攘夷の論沸騰せる當時非常時國家に處する人物を養成するに文武兩道の教育の針を樹立せられたり、以て狹隘なる愛國心より忽ち目醒めて世界的に廣大なる精神養成に務められたり、爾來本校は八十の齡を重ね今日の盛大なる現象を見る倘無限の未來に向つて發展せんとする統一的精神を直覺し眞に慶賀に堪へざるなり。

今や偉大なる思想家梧陵翁は他界の人となり人物の演劇時間の餘りに短きを嘆かざるを得ず、されど今日の盛大なるところに翁の靈永遠に不滅なりと信ずるものなり、降つて明治大正の六十年間英米の自由獨立の思想佛國の自由民權の思想が縱橫に交叉し廣く社會に渦を卷く狀態を呈せり、こゝに所謂唯物實際と唯心主觀の二大思想が鮮かなる激流をなせり。

この間に處する本校の經營方針も亦良くこの思潮の調和發展を計りこの門に薰陶を受けし幾多の學生は續々時代に適應する國家有爲の材として社會の各方面に活動せらる。

今や本校は縣立中學校としてその設備と内容は駸々乎として一貫せる集團精神を以て校長中心主義の一大家族の如く校風は高く清く輝けり。

かく全國に其比なき八十年の歷史を有するこの學校の厥々として一貫せる集團精神を以て校長諸先生には教育に盡瘁せらることを期待し喜びに堪へず、茲に式典に陪し聊か所信を陳べて祝辭とす。

昭和八年五月七日

縣會議員　成川善太郎

祝辭

本日茲に八十周年の記念式に中等學校長總代として祝辭を述べ得ることは私の衷心光榮とするところである。自分は嘗て、若かりし時京都府立二中に奉職し、その寄宿舍浴風熟に關係して居た當時本校初代校長賓山先生視察にこられお褒めの言葉をたまはつたが、その賓山先生が今や故人になつてゐられることは一種無量の感慨を催さざるを得ぬ。

全國に中等學校多けれども創立八十周年を迎ふる學校、抑々幾校ありや。和中の如きは先年五十周年記念式を擧行したるがこれすら全國稀に見る式典であつた、八十年は實に目出度い。然してこの古き誇をもつ耐久中學校は又一面他の多くの中等學校とその趣を殊にしてゐた、卽人材の養成國士の養成であつた、倘此の中學校も世の推移につれ幾多の變遷盛衰を免がれなかつたが廣瀨現校長赴任されてより創立精神に立ち歸れと大聲叱呼斷然教育刷新を行ひ涙ぐましき努力を續け之れを補佐するに教職員の一致協力を以てし今やこの八十周年の盛典を期し劃期的時期を劃した、地下の創立者も定めし滿足して居らるゝことと思ふ。

こゝに滿腔の祝意を表すると同時に一層の校運の隆昌をお祈りします。

昭和八年五月七日

和歌山縣中等學校長總代　和歌山中學校長　奥　源　治

祝辭

本日本校創立八十周年記念式を擧行せらるゝに當り、其の席末に列するを得、洵に光榮とす。惟ふに八十年前我が邦教育施設の未だ整はざる時に於て、本校既に創設を見爾來校運年と共に揚り、今や校友千數百の多きを數へ、或は官界に、又教育界に、乃至は、實業界等に其重鎭をなすもの尠からず社會に貢獻する大なるものあるは寔に敬服に堪へざる所なり。然れども事は失意に成りて得意に敗ること多し本校今日の得意亦警戒を要するなきにあらず。茲に記念式を劃期とし更に捲土重來の擧に出でんとす用意のあるところ將來を期待するに足る。願はくは當事者一段の奮勵を得て益本校の聲譽を高うせられんことを。

一言を陳べて祝辭とす。

昭和八年五月七日

有田郡町村長總代　久保寅次郎

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

祝辭

本日茲ニ意義アル創立八十周年記念祝典ヲ擧行セラルヽニ當リ一言祝辭ヲ述ブ。

本校ノ創立ハ實ニ嘉永五年ニアリ此年　明治大帝御降誕アラセラレ當時世ハ漸ク舊態ヲ脫シテ新ニ就カントスルノ機運ニアリ。二月既ニペルリ武州大森海岸ニ砲術練習所設立サレ彦根藩モ亦浦賀砲台ヲ管理ス、八月和蘭我國ニ忠告スル等物情騷然タル裡ニ梧陵克ク燗眼ヲ以テ時勢ヲ達觀シ人材ヲ養成シテ國家ノ有事ニ資センコト目下ノ急務タルニ着眼シ茲ニ耐久中學ノ前身タル田町ノ道場ハ創始サレ專ラ皇國的自覺ニ本ヅキ士氣ノ練磨ト學理ノ研鑽ヲ以テ鄕黨ノ子弟ヲ誘導セリ。

爾來年所ヲ經ル事八十年其間時ニ消長アルモ正ニ屢〻中ニ乘リ日ニ新ニ其特色ヲ發揮シ地方文教ノ中心トナリ今日ノ隆昌ヲ見ル寔ニ慶賀ニ堪ヘザルトコロナリ。

本日茲ニ祝賀ノ盛典ニ列シ翁ノ遺德ヲ回想スルト共ニ一貫セル當校獨自ノ使命ヲ想フ。願ハクハ今後益々其ノ所信ヲ固クシ古キ歷史トニ克ク創業ノ精神ヲ繼承體得シ剛健不撓以テ皇國ノ將來ニ資スベキ人材ノ敎養ヲ望ム。

昭和八年五月七日

有田郡内小學校長總代　生駒國次郎

祝辭

本日の佳辰をトし、本校創立八十周年の記念祝賀式を擧行せらるゝに當り不肖其席末に參列することを得たるは、誠に欣幸とする所なり。

抑々本校は鄕土の偉人濱口梧陵先生人材養成の急務を痛感し濱口東江、岩崎明岳先生と相謀り、嘉永五年此の地に創設せられたるものにして爾來年を閱すること既に八十年全國稀に見る古き歷史を有し其間幾變遷を經たりと雖も校運日に就き日に進み學風愈々揚がる之れ一に兩濱口家の多大なる犧牲的努力と校長以下職員各位が獻身以て生徒敎養の爲に盡瘁せられ生徒亦能く其荷へる責務を自覺して師恩に遡ひ一意學德の修養に志せると尙一般有志の深厚なる後援とに依る結果に外ならず、今や本校の卒業生は一千二百餘名を算するの盛況を見、社會の各方面に活動して夫々重要なる地位を占め國運の振興に貢獻しつゝあるは洵に慶賀に堪へざる所なり、然れども現今世相漸く詭激にして浮華輕佻の流れをなすに至れるの秋に際し國家が健實有爲なる人材の輩出を要望するや切なるものあり。

冀はくは今後一層自重自愼知德の併進を圖り質實剛健以て本校創立の大精神を擴充し益々校風を振起して國家の進運に寄與せられん事を。一言以て祝辭とす。

昭和八年五月七日

湯淺稅務署長　横井德

祝辭

那耆灣頭薫風靑松を渡り沙鷗靑汀に遊ぶの勝地に於て我が偉大なる母校の創立八十周年祝賀の式典を擧げられる、生等の歡喜何物か是に加へん。

幕末の國情誠に騷然として宛然鼎の沸くが如く人皆其歸趨に迷ひて徒らに狂奔し國家の前途正に累卵の危きに在り。此の時に當り神州纖血の眞男子各地に立つて粉骨碎身す、誠に天下の偉觀たり。號中、我が梧陵、東江、明岳の三先生の如きは其身實業に携はると雖も識見高邁德望一世を風靡す。胸中唯、治國濟民の炬火に燃えて其の實績を擧ぐるもの枚擧に遑あらず。殊に國家の急務は人材の養成に在りとし學舍を創立して靑年を訓育す。是我が母校の濫觴にして其の舍礎の永久に堅固にして國家に盡す使命の益々遠大ならん事を標榜して耐久學舍と名附けられしは誠に意義ある事と言つべし。其後明治の末葉に到つて哲人寶山先生等の熱誠溢るゝ經營誠に其宜敷を得、門に入つて學ぶ者俄に激增し茲に學舍を改めて中學と成し直に推されて天下の模範となり門を出でゝ社會に活動する者亦年と共に多きを加ふ。爾來又經過する幾春秋、幾多の變遷を過て今日に到る。靜に眼を開きて現時の狀況を見よ、外に在つては社會狀態の變化に遭遇し、內に在つては少しく大勢順應の機構を欠く憾あり。校運縷に蹙り、名聲漸く昔日の如くならず、生等の日夜心に痛するもの實に茲に存す。然りと雖陰極は陽發の端緒にして徒らに失望落膽すべき時に非ず、幸に學德兼備の學校當事者と元氣潑溂たる生徒諸君あり、共に相携へて更生の意氣に燃ゆ、實に

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

壯なりと言ふべし。生等亦坐視するに忍びず愈々協力一致して驥尾に附して微力を是に併さん事を期す。抑々歴史の古きもの必ずしも尊からず、形体の大なるもの必ずしも優秀ならず、唯前途の光明を望んで進取の氣象に富めるものを以て尊しとす。今や學校關係者たる其校長たると、生徒たると、父兄たると、校友たると、使丁たるとを問はず眞に一致團結一路校運發展の爲に粉骨碎身せんとす。冀くは仁慈に富める監督諸官閣下を始め大方諸賢が我等の微衷を憫まれ深厚なる惠澤を垂れられんには其の所期の目的を達成する日の極めて迅速に來らん事を信じて疑はず。是切に〳〵生等の懇願して措く能はざる所なり、邦家聽近の情勢は内外共に多事多端恰も本校創立當時の國情に相似たり、生等一同創立者が抱懷せられし祖國愛の赤誠を取つて直に已が精神とし刻苦精勵以て君國に盡瘁し、偏に創立者の期待に應へんとす。

生等今日の盛典に臨んで誠に感慨無量、心に決する所亦大なるものあり、聊か所懐の一端を披瀝して祝辭に代ふと爾云。

昭和八年五月七日

和歌山縣立耐久中學校校友會々長　阿瀬卯兵衛

祝辭

本日當校八十周年の記念式典に列するの光榮に浴し、過去八十年の昔に遡りて、濱口梧陵先生等創立者の精神に想到し、感慨轉た禁ずる能はざるものあり。

想ふに八十年の昔は幕政の終末に際し、黒船渡來このかた人心恟々擾夷の意氣有志の胸間に漲り、海南の地特に勤王の志士多く愛國尚武の精神を以て子弟の敎養に任ぜられしもの、是れ創立當時の精神ならずんばあらず。

今や八十年の星霜を閲し、吾が國威は海外に輝き吾が校も亦其完備昔日の比にあらず。

然れども近時吾が國家は再び國難來を叫んで第二の維新を策るべきの時に當り子弟の敎養に一層急迫を告ぐるものあり。創立者の期圖せる愛國尚武の精神涵養を必要とすること昔時に倍す、吾等は本校が八十年の歳月を經ると共に益々其精神を發揮せられん事を祈りて息まず。一言祝辭を陳べて祝詞に代ふ。

昭和八年五月七日

和歌山縣立耐久中學校父兄會々長　川口彌兵衛

祝辭

新緑の香薫風に漂ひて清新の氣天地に漲る時本校創立八十周年記念式典を擧げらるに當り多數貴賓の御臨場を辱ふし懐しき校友諸兄と茲に相會してその歡を共にするを得たことは生等無上の光榮とする所であります。

抑々我が校がその礎を定めたのは遠く嘉永の昔外艦頻りに我が邊境を脅かし物論囂々たる時でありまして一世の英傑梧陵先生時勢を達觀し國家有用の材を養成せんと意を敎育に用ひられ東江、明岳諸先覺と謀りて學舍を風光明媚なる那耆灣頭に創立せられ鄉土青年志士の敎養に努められたのでありましてこれが我が校の前身耐久社であります。

爾來客所先生其他幾多の先哲の熱誠なる經營と相俟つて德化の及ぶ所敎化の布く所たゞに地方文化の中心となしたばかりでなく廣く海内にその名を馳せて多數有爲の人材を輩出し八十年の傳統は燦として其の光を放つたのであります、これ誠に全國稀に觀るの盛事であつて日夕この由緒ある學園に研鑽する生等は常に我が身の榮譽と幸福とを痛感する次第であります。

今や帝國の内外極めて多事時局頗る復雜にして國民の歸趨やゝもすれば迷ふ所あり、齊しく建國の精神に立ち返りて祖國の歴史を矜持すべきの秋、生等學徒亦我が校の創立精神に甦り先輩諸兄に依りて色彩られたる光輝ある歴史を受け嗣ぎ更に一段の進展を期すべきであります。

瞻生石山悠々として去來する白雲は吾等高遠の理想を敎示し那耆灣頭颯々として渡る松聲は先哲の遺德を永久に物語つてゐます。生等この佳辰に際會して感激措く所を知らず、聊か蕪辭を述べ以て祝辭と致します。

昭和八年五月七日

和歌山縣立耐久中學校生徒總代　拔井惣三郎

感謝狀

貴下大正十一年本校ニ就職以來今日ニ至ルマデ勤續セラルルコト實ニ十有一年終始一貫專心職務ニ盡率セラレタル功勞洵ニ多

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

大ナリ茲ニ本校創立八十周年記念式ヲ擧グルニ當リ聊カ記念品ヲ贈呈シ感謝ノ意ヲ表ス。

昭和八年五月七日

教諭　三木俊雄殿

感謝狀

貴下明治四十五年本校ニ就職以來今日ニ至ルマデ勤續セラルヽコト實ニ二十有二年終始一貫專心職務ニ盡瘁セラレタル功勞洵ニ多大ナリ茲ニ本校創立八十周年記念式ヲ擧グルニ當リ聊カ記念品ヲ贈呈シ以テ感謝ノ意ヲ表ス。

昭和八年五月七日

和歌山縣立耐久中學校
校友會長　阿瀨卯兵衛
父兄會長　川口彌兵衛

校醫　堤清彥殿

感謝狀

貴下本校使丁ニ就職以來勤續實ニ十有五年終始一貫忠實職務ニ勵精セラレタリ茲ニ本校創立八十周記念式ヲ擧グルニ當リ聊カ記念品ヲ贈呈シ以テ感謝ノ意ヲ表ス

昭和八年五月七日

和歌山縣立耐久中學校
校友會長　阿瀨卯兵衛
父兄會長　川口彌兵衛

辻七右衛門殿

祝電

謹んで八十周年記念祭を祝賀し前途の發展隆盛を祈る

濱口擔

創立八十周年の祝典を擧けさせらるゝに際し謹みて祝賀の意を表す

世弘耕一

御盛典を祝す

田邊中學校長　宮崎諦寬

創立八十周年の御盛典を祝し將來の御隆昌を祈る

粉河中學校長　池村平太郎

御盛典を祝す

新宮高等女學校長　窪田公平

御盛典を祝し愈々御發展を祈る

伊都中學校長　梅津隼人

御盛典を祝す

粉河高等女學校長　鈴木喜一郎

御盛典を祝す

橋本高等女學校長　若尾泰壽

御盛典を祝す

和歌山市立第一高等女學校長　水田敏太郎

御盛典を祝す

紀北農業學校長　遠藤勘三郎

御盛典を祝す

串本商業學校長　烏越正三

謹んで盛典を祝す

吉備實業學校長　後安榮吉

御盛典を祝し將來の御發展を祈る

大泉米吉

御盛典を祝す

堂野前種松

貴校慰祭靈を遙拜す

堂野前

創立八十年祝典を賀す

布施

御祝典を賀す

創立八十周年記念日を御祝申上ます

和歌山縣師範學校寄宿舍　北山尙夫

謹んで御祝典を祝す

和歌山市　宮非平安堂

和歌

御祝

舊職員　九州學院長　高木又男

さらにまた久しくたへて榮ゆらし
やそとせやすく經にし學び舍

和歌山高等商業學校長
花田大五郎

子より孫まこの曾孫と學ひつき
八十年經たりいや榮えなむ　比露思

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

祝賀宴

會場は武道場　天井と四方には萬國旗を以て宴會場にふさはしい裝飾が施され、武道場西側南北七間を正面としそれに向つて東西十六間に長卓が數列雪白の白布にて被はれ、處々に有田高女生の丹精になれる盆栽を配し、來賓父兄校友有志等約五百餘名の祝杯と記念扇子、折詰等正しく配列されてゐる。

かくて零時三十分奏樂裡に一同入場、學校長、川口父兄會長、來賓總代花田和高商校長の挨拶ありて祝盃をあぐ、この間樂音は絶えず放送され、和やかな雰圍氣のうちに母校の前途を祝福し和氣靄々歡の盡くる所を知らなかつた、かくて一時半阿瀬校友會長の發聲にて萬歳を三唱、有意義に宴を閉じ直ちに記念講演會に移つた。

祝賀宴次第

一、一同入場
二、父兄會長、學校長、來賓總代挨拶
三、萬歳三唱（乾杯）
四、解散

記念講演

企業形態の發展

土岐政藏

凡そ吾々人類社會には日夜諸種の現象が起りつゝあります毎日吾々は缺かさず新聞を讀んでゐるが、夫には世間の種々雜多な出來事が報道されてゐる。この出來事を大別すると自然的現象と社會的現象とに分つ事が出來るが、大雨が降つて某處に洪水があつたとか、地震が起つたとか云ふ現象は所謂自然的現象であり、築港が出來るとか、物價が騰つたとか、强盜が捕つたと云ふが如き現象は社會的現象である。自然的現象の事は別と致しまして、社會的現象の內には本校の本日の式典の如き教育現象あり、又物價の騰落とか、印度の關稅問題とかの經濟的現象があり、强盜が捕つたと云ふが如き刑事的現象がある。之等の諸現象の根本的な發生原因は唯一の人間の『慾』と云ふものにある、卽ち人間には堪へず『不足の感』を有する、腹が減つたとか、水を飲みたいとか云ふ原始的な肉體的な慾望から始つて、眞理を探究したいとか信仰を得たいとかの精神的な文明的な慾望に至る迄々々樣々な要求があるが、この不足の感のある一方之を充たしたいと云ふ『願』がある、この『不足感』と『願』とが合して慾望となるのである。この慾望が

は今も申す通り樣々あるが、結局物質的慾望と精神的慾望とに分たれるが、精神的慾望を充たす爲には先づ物質的慾望を充たさねばならぬ事が多い、この慾望を充たすものは所謂『物』であります、之は吾々の慾望を充たす有用なもの卽ち善き物と云ふので外國ではGoods, Luteと申して居る、物は吾々の慾望を充たすものであるが、自由に得られるものと、自由に得られないものとがある、空氣とか日光とが云ふものは前者であつて之に對しては慾望さへ意識しないのであるが、家屋とか衣服とか食物の如きは自由に得られない、卽ち稀少性を有するのであるが、この慾望を充たす『功用』とか『稀少性』とて『價値』が發生し、この價値を有する物を財とか『經濟財』と云ふのである。この財を得る爲に努力する事を要する、かく働いて財を得て慾望を滿足する行爲を『經濟行爲』と申しますが、之は吾人人類の諸行爲の內の極めて重大なるものであつて、幾多の經濟行爲が一定の秩序に下に繼續せられて一体をなす時、之を『經濟』Economyと云ふのである。

扨て人類の慾望が發達するにつれて經濟も發展するのであるが、大体その發展階級を分ちて

自足經濟時代（非交通經濟時代）
交通經濟時代（之は都市經濟時代と國民經濟時代とになる）

となります。

最初の經濟形態は家族經濟であつて、一家族は孤立的な經濟を營み一切の財産は一家一門の共有財産で一門で生産したものを一門で消費して他の家族とは交渉がなかつた。

その後次第に人類增加と共に數も多くなり數家が一村を形造る事となると、その村の田畑、山林を共有して一村が單位となつて、こゝでも孤立經濟を營んだ、所謂鄉土經濟で自己等の生産せるものを自分等の慾望充足に充てると云ふ自足經濟であつた。

然るに尙人口の增加と共に土地の擴張を必要として、他の村落と爭ふ事が多くなり、分捕品を見ては他のものの生産したものを欲しくなり、結局他と爭ふて之を分捕りするよりも平和的に交通して、お互に餘つたものを交換した方が得策だと判り。一の經濟と他の經濟との交換が始り、交通經濟時代となつた、最初の頃は直接に物と物とを交換したに過ぎなかつたが、交換が複雜となるにつれて、多勢が一定の場所に集つて物々交換を行ふに至つたが、之は今日の『市』の始である處が元來が爭ふ事の好きな上に、互に人の物を欲しい場合であるから、だましたり、だまされたりする事が多いので、市には神社佛閣の如く、神聖なる場所が多く選ばれた。

交換が繁しくなると當然必要となるのは交換の用具たる貨幣であります、貨幣の出現以來御承知の通り原始的なものより現今の如きに至る迄種々の階段を經てゐる。

貨幣を用ゐて生産者と消費者との間に財が流通する事とな

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

るが、この發展階段に二つある、之は、他人の慾望を滿足せしむる財を作り之を賣つて貨幣に變へ、之を以つて自己の欲する財を買つて、以つて自己の慾望を滿足する点では同一であるが、前の階段では、生産者が物を作る場合、他人の注文を受けて之を作り、而も、その注文主が、自ら之を消費すると云ふ所謂『注文生産』時代であつて、後の階段は生産者が一切の生産を誰からの注文を受けたと云ふのでなく、社會の何人かが買ふであらうと見込をつけて物を作る、即ち商品として市場に出して貨幣に換へる目的で物を生産する所謂『市場生産』又は『商品生産』と時代で、今の時代は正に之である。生産者は物を作つて市場に出す、その爲に要する必要物は貨幣で買ふ、而して生産品を賣つて得た貨幣が、最初投じた貨幣よりも多くなければならぬ、即ちG－W－Gの形で行くのである。貨幣經濟時代では、貨幣さへあれば、何時にても財を得て慾望を充足する事は出來る、俗に云ふ『命より二番目』の貨幣を得る事は經濟の中心となつて來た、そこで一切の經濟活動は金を殖す事を目的とするに至つた。之を『營利』と云ふのである、云ひ忘れたが、生産が『市場生産』となるにつれて、生産者と消費者との間に交換の媒介をなす『商人』と云ふ階級が出來た事は勿論である。

處で市場を對手にする生産なり商賣には果して儲かるか如何かと云ふ危險がある。之には技術上の危險と、經濟上の危

險とあるが、この危險を背負つて、營利を目的として經濟上の活動をなす事を企業と申します、その營利組織を企業と云ひ、之を營む者を企業家と云つてゐます、企業は貨幣經濟時代の産物なりと云ふ事が出來る。

以上で企業とは如何なるものであるかを明にしたと思ふから、以下その形態の變化について話します。

企業の最も簡單な形態は個人企業である、個人企業ではその利害が一身にかゝるから自然業務に熱心になる、又他人の制肘を受けないから敏活に業務を處理する事が出來る、斯んな長所を有するけれ共、社會が次第に複雜となり、機械の發明使用から、一つの仕事をする爲に多くの資本を要する樣になるから個人では仕事が出來にくゝなる、又個人企業では個人の盛衰存亡は直に企業に影響を及す缺点がある、數人が寄つて共同企業を營むと個人企業の長所たる熱心だとか敏活を多少失ふ缺点もあるが能力と資力を廣く集むる事が出來るし企業が個人から放れて存在する事となるから、個人の盛衰から支配される事が少くなる、又能力あつて資力の不足せるものと資力あつて能力の不足せるものとの結合が行はれて、社會の資本と人の能力がよく利用される事となる、現代では個人企業では大きな仕事は出來ないで次第に共同企業が之に代りつゝある。然らば共同企業に如何なる形態があるかと云ふと

1主として人本位に結合せるもの、即ち組合企業
2主として資本の結分せるもの、即ち會社企業
3主として事業の結合せるもの、即ちカルテル、トラスト

の如き結合企業

組合企業と云ふのは吾々の日常馴染なる産業組合である、之は個々に分立してゐては到底資本家とは太刀打の出來ない中産以下の人々が團体の力によつて經濟的に生きんとする趣旨から成れるものである、一國の健全なる發達は中等社會の繁榮に待たねばならぬ、中等社會は社會の中堅であるからである、之等中等社會の企業家が勤儉貯蓄し、小資本を合して『一致の精神』を以つて始めて産業組合が生れ、各員の不斷なる協力を以つてその健全なる發達を期し得られるのである。而して産業組合が健全に發達すると資本の横暴と戰ひ或程度迄之を阻止する事が出來るのである。産業組合には信用組合販賣組合、購買組合、生産組合の四種あつて多くの産業組合は之等の内數種を兼ねてゐる事は周知の事である。

次に會社企業と云ふのは資本の結合による共同企業である會社の事を英語では Company と云ふが、之は共にパンを食ふと云ふ意味なりときいてゐる、だから共にパンを食ふ一家の人々が共力して出來た事業は會社の始りらしい。

會社の種類には種々ありますが我商法では

一、合名會社
二、合資會社
三、株式會社
四、株式合資會社

の四つを認めてゐる。

合名會社は會社の内最も組織簡單で個人企業に近く、社員は二名以上で、何れも無限責任と申して會社の財産を以つてその債務を辨濟する事の出來ない時は各社員はその出資額を越へて連帶無限の責任を有するのである。之は佛國の Société en nom collectif に相當し數名の社員はその家名を合せて會社の商號としたのでこの名があります、その起源は十二―三世紀の伊太利に發し同族間に共同して商工業が營まれたものである。後には同族以外の者でも信用さへあれば之を社員となす事となり、十八世紀頃には歐洲全土に普及したのである。

合資會社は無限責任社員と有限責任社員とから成るものであるが、その起原は全く合名會社とは異なる、即ち合名會社は今申した如く家族から發したものであるが、合資會社は之と全く異なり、商人と金主との契約から發生したものである。佛國では Société en Commandise と云ひ、獨乙では Kommandigesellschaft と云つてゐるが、Kommandi はコンメンダに發してゐる、コンメンダと云ふのは中世紀伊太利のコンメンダと云ふ商習慣から出たものである。之は一種の匿名組合の如きもので甲と云ふ金主が乙と云ふ商人に金を委託する、乙

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

は全責任を以つて商賣し主として外國貿易に從ふ、損益は甲乙共に分擔し、甲なる金主の受くるものは利益の分配で利子ではない。而して金主たる甲は如何なる場合でも出資額以上に金をとられる事はない。卽ち責任は有限である、處が商賣に從事する乙は對外的には個人營業であるから無限責任を負はねばならぬ。このコンメンダ契約は伊太利からアルプスを超え南獨乙に入り大なる發展をなした、之は今の合資會社の起りである。主として獨、佛で發達したが英國では餘り之を見ない。

以上の二つの會社は、家族か又は他人でも互によく信じ合つた親しき少數の人々が寄つて作つたものであるから、獨乙では之を人的會社と云ふてゐる。卽ち資本を合せた共同企業であるが人的の要素が濃厚で個人企業に近いのである。

處が次に申上げる株式會社と株式合資會社は廣い範圍に資本を集めたもので、之を資本會社と云ひます。

この內株式合資會社の方は無限責任の社員と、有限責任の株主とからなるもので、合資會社と株式會社との折衷した樣なものであるが、大体之は免許主義時代の產物で、佛、獨法制の丸移しと云つて差支ないのである。我國では殆んどこの種の會社がない。規定の無用論を唱へる人が多いのである。之を省略して株式會社に移ります。

二十世紀は株式會社全盛の時代と云はれてゐます。株式會

社はその資本金を分ちて株式なるものを作り、之を所有せる者、卽ち株主によつて組織せる會社であつて各株主の責任はその所有株の金額に限る、卽ち有限責任であります。之もその起源を伊太利に發してゐるが、大に發達したのは十九世紀になつて機械が發明され利用されて以來資本を多く要する樣になつてからの事である。株式會社の西洋並に日本に於ける發展の跡を見る事は面白い事であるが時間の都合上之を省略して、その本質を話して見たい。之は株式會社に關する我商法の條文を見ても判る通り

1、證券制度と申して出資の証として株式を發行して之を賣買自由のものとせしむ。

2、重役制度と申して出資者が會社の仕事に直接關係しないで重役と稱する一部の人々にその經營を委す事。

3、有限責任制度と申して、前に申した通り出資者たる株主はその出資額以上の責任なき事。

を特徵としてゐますが、今少しく之等の事につき說明を加へて見たく思ひます。

1、證券制度　株式會社の最大目的は大資本を集中して大事業を起す事である、例外も澤山あるが根本の目的は之である、元來株式會社でやらねばならぬ儀な仕事は短期に完成するものではなく、仕事は極めて大規模で、事業が長く續く性質を以つてゐる、夫で事業に投下された資本が早く廻收される事あらば事業を中止せねばならなくなる。夫では困る。一方資本を出す方は如何なる都合で金を入用とする事あるかも知れないのでその資本を長く固定されては都合が悪い。何時にても他に使用出來る樣にしておかねばならない。こゝで會社と資本を出す方とが利害を異にする事となるが之を調和するものは株式會社である。卽ち株式會社では事業に對する放資を株券と稱する有價證券の形にして賣買自由なものとしてゐる。之を資本の證券化と云ふ。

この資本の證券化は資本主義の歷史上非常に重要なる出來事であつて今迄は物の賣買しかなかつたものが、この証券化と共に『企業の賣買』が行はれる事となつた。今日取引所で例へば鐵紡は何圓、日本郵船は何圓と稱してゐるのは、その企業の何萬分の一かが賣買される處の價格である。處が形の上から云ふと小會社でも株の賣買が出來るのであるが、その賣買が少ない關係から取引市場では價値を認められないので、一般の放資物件とする爲には大事業にせねばならない故にこの株式制度は大資本の集中を目的とせねばならなくなる。

又前に申した樣に自足經濟から交換經濟に移り殊に市場生產時代になると生產と消費との間が分離されて稍もすると過剩生產が起る事となるが、この分離は株式會社制度の行はれてから一層遠くなるのである。卽ち單に世間に賣れる商品を作ると云ふのではなく、世間によく賣れる商品を作る企業を作り、更にこの企業の何萬分の一を代表する株式が取引所で賣買されるのであるから、今迄の商品過剩生產どころか今度は企業の過剩生產が起る樣になつた、目今の實例を擧げると人絹といふ商品は非常によく賣れる、今迄の處、原價の倍に賣れる樣で人絹會社の株は非常に騰貴してゐる、然しながら人絹を製造する會社の設立や、紡績會社の人絹製造の設備は次第に盛になりつゝあるから、數年後は大きな生產過剩が起るのでないかと憂慮されてゐる。實際必要以上に企業が成立すると、いざと云ふ時の經濟界の波動は極めて大きくなる。

斯の如く証券制度は資本を生かす効益があるが、極度に發達すると恐慌を起る危險が一層烈しくなる。

2、重役制度　重役制度は株式制度と相俟つて公衆の放資を便利にした、形の上から云ふと株式會社は創立總會によつて成立すらのであるが、實際上は總會前に已に發起人なるものがあり、發起人は事業の發見者で組織者である。又何人が重役になるかは大體豫定されてゐる一般株主は事業に參加するのではなく、計畫書を見て放資慣値あらば株主となるのみである。處で株主の多

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

くは事業の一部を所有してゐる事を自覺しないで、半期々々の配當を當にし株價の騰貴を當にするものである。株主の方では事業の經營は重役に委せきりである重役の方は有限責任であるし怠慢になり易く、不正橫暴も行はれ易い、事業百年の計を立てる事をしないで儲かる時は利益をどん〳〵流出せしめ、株主を喜ばせ私腹をも肥やす、双方共眼前の利益を見て喜ぶ有樣である。

歐洲戰爭中五割乃至十割の配當を續け乍ら、一朝不景氣風に見舞はれると直に無配にした會社も少くない。業績の擧らぬ會社でも重役達が株價維持と自分達の賞與を貰ふ爲、又自分達の地位を擁護せん爲に、正しからぬ決算書を作り無理な配當をする。卽ち蛸配當をする。株主も之を喜ぶ傾向がある。この無理な配當で行詰つて會社の破綻を曝露せる會社は隨分多く、之は法律に照すと重役達は立派な犯罪となるのであるが、之を嚴重に檢擧せば刑務所の二つや三つ建てなければならないと云はれてゐる。一方重役が會社の健實を計る爲に利益を社内に留保して無配にでもすると忽ち株主達から追ひ出されると云ふのであるから、株主自身にも罪ありと云はねばならぬ。

3、有限責任　株主はその持株の金額だけは拂込の責任ある

が、夫以上の責任はない、卽ち例へば二、に五十圓株百株を有せる株主がある、この人はその額面五千圓に達する迄は拂込の義務あるが、仮令會社が破産して財産がマイナスになつても夫以上の責任がない。この有限責任制度が株式會社の根本的特徴なりやについては嘗て學界の巨頭間に論爭があつたが、夫は別問題として有限責任の制度は株式會社の發達に非常に貢獻せる事は事實である。三井、三菱の如き資本を集むる必要のない大富豪が種々の事業を株式會社組織でやつてゐるのは他の理由もあらんが、有限責任制度である事が大きな原因をなしてゐる。

會社が儲かる時はその利益を如何程でもとるが、大損失をして財産がマイナスになる時は持株額以上の責任はないと云ふ事は不都合ではないかと考へられた事はあつた、各國の立法も或は特許制度をとり、或は無限責任を強いた事もあるが、之は少くとも形の上では不都合はない事になつてゐる。夫は株式會社は少くとも年一回、又は決算毎にその財政を公表する事を強制されてゐる、取引をする對手方は始めからその考へで取引をする。つまり内容のよく判らない無限責任の會社よりも、内容のよく判つた有限責任の會社の方は安全である筈である。有限責任は必ずしも不當でないので

近時の立法はその設立に免許主義を廢し自由主義をとるに至つた。之と同時に會計公開の規定は益々擴張されつゝある。有限責任には必ず財政の公開と相關連して進むべきである。企業は個人の經濟から放れて大發展をなし得るものであるが、有限責任はこの發展の最後の階段となつてゐます。

處で株式會社では財政を正直に公開してゐるかと云ふと、一般には實に怪しいものであつて、隨分無理がある樣で、昨年まで世間並以上の配當をなしており乍ら一旦恐慌に會ふともろくも破綻に陷るが如き實例は少くない、其處で計理士制度の確立、その利用を充分にする制度がなくてはならなくなる。

我國の計理士制度は昭和三年一月一日から實施されてゐるが、全く骨拔同樣であつて、實業界の淨化には殆んど役に立つてゐない。

以上で株式會社の大体の事を話したが、最後に株式會社の現代社會に於て有する意義につき一言せん、經濟が幼稚なる時代に於ては一般に經濟生活が安定して平穩であつたが、經濟が次第に發達し、封建時代が崩壞すると共に從來被治者であつた平民が金の力を以つて貴族階級に對立し、自由平和の思想が遂に政治上の革命となり次に產業革命が行はれて、十九世紀の半には自由競爭主義が確立されるに至り、之によつて經濟界は大發展を遂げた、之に株式會社制度が資本の集中及利用を誘致し、資本主義發達の最高調に至つたのである。處が前にも申した通り、市場が擴大するに從ひ需要供給の觀測が正確に行はれず、技術が日に進み、固定的な經費は漸增するし、不安が非常に增大した。このバラ〳〵な利益追及の競爭の有樣を社會主義者は『無政府的生產』と謂つてゐるのは敢て酷評とば云へない。この結果が恐慌が度々且つ深刻に起り抵抗力の少き中小企業が倒れ大企業の力は次第に强くなり、大企業の持主と多數の勞働者が殘る事になると由々敷き社會問題となるので色々の主張も出て來るのであるが、夫より先き企業者同志でお互に自殺的競爭をやめてお互の利益を保護しようではないかと云ふ考へで起つて來たのは企業の合同、卽ちカルテル、トラストである。カルテルとは相互の競爭をさけ相互の利益を增進せんとする目的で經營上の一部又は數部、——卽ち生產カルテル、販賣カルテルの如き——に亘つてその行動を一にせんとする同種企業の聯合で、トラストとは市場獨占の目的で同種企業が合同する事を云ふ、最初はかかる結合は恐慌後の前後策として一時的のものであつたが、今日では景氣の惡くない時から不景氣の豫防策として、その組織は强固になつて來た、此上に國家の統制あり、經濟は自由經濟時代より拘束經濟時代に移りつゝある。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

新教育の先驅者

瀧浦文彌氏

寶山先生が海外視察をして歸朝されてから紀州の此の不便な土地にある小さな寺子屋の樣な學校に喜んで來られたことは先生の高傑な御人格に依るのであると言ふお話が昨日慰靈祭の時にあつたのでありますが私は又此は梧陵先生の立派な御人格を敬慕されて來られたものであると考へるのであります。寶山先生は十八、九歳頃までは極めて難儀な生活をされたのであつて諸君のやうに樂な生活ではなかつたのであります。即ち幼少の頃兩親に死別した次男坊であつた先生は直ちに京都で或る曹洞宗のお寺の小僧となりお經を讀み坐禪をくんで生活をしたのでありますが、その間道元禪師の人格的薰陶を受けその後二十歳の頃同志社に入りては又人格主義的教育を受けられたのであります。先生が米國遊學中感激を受けた事は專ら精神方面の事でありました。日本の學校は大部分官公立で私立もあるにはあるが極めて微々たるもので劣等なものが多いが英米に於ては私立の學校の方が官立より勝れて居るのであります。本校は創立八十周年として本日記念式を擧げられましたが日本に於てこそ、その歷史は長いが英米では百五、六十年の歷史を持つ學校なら決して少くなく英國には五百年七百年と言ふ長い歷史を持つてゐる學校もある。そしてそれ等の學校は皆創立者の名を冠して學校の誇として居て本校で言へば濱口學校とでも言ふ風であります。先生が錦を着て日本に歸られた時官立の高等學校であるとか、公立の中學校であるとか云ふ事には全く無關心であつたのであります。彼の地においては精神的な血が流れた學校が多いのに日本に歸るとそうした學校の缺けて居ることを物足りなく思はれ、創立者の血が流れた學校でなくてはと考へられて居た時過々本校の話を聞かれて喜んで來られたのであります。扨て梧陵翁の人格非凡であられたことは皆樣の既に知りつくされて居る事でありますが、翁は殊に國家的觀念の强かつた人であります。その一端を知るには翁の東洋に關する地理的研究があり支那經營論或は滿蒙經營論等を見ればその卓見がよく窺はれると思ひます。此等は要するに日本の將來を憂へる余りの著作であり先生の愛國心の發露であります。

翁は政治には隨分活躍された人でありますが敎育により多くの興味を持たれて居ました。而して先生の敎は專門でないから所謂新しい時代の敎育者ではなかつたが實に人格的な大敎育者であつたのであります。翁の精神を不朽に傳へる此の堤防を構築せられた時山にある木を移すに一々その枝を考へてされたと聞いて居ます。寶山先生は裁松と言ふ號を持ち「敎育は總て松を培ふ如し」と言はれたが之は翁の精神と全く合致したものであります。寶山先生は眞の人間に達する道は

三H主義である。即ちHead（頭）Heart（心）Hand（手）の敎育であると言はれて居ました。所が此の頭の敎育は今日到る所で行はれ殊に今日の敎育は智識に傾くとさへ言はれるが此に反してハートと手の敎育は動もすれば缺けて居る感がします然し近時音樂、体操、作業、圖畫、習字などの敎育にも力を入れる樣になり、又今日校長が申された樣に上級に於ては一種二種に分れて上級學校に進む者の外は農業商業などを敎へられる樣になつたがこれは實に喜びに堪へない。我々が本校に奉職してゐた當時の事を考へますのに、その頃は生徒は机なども三人で共用して共に大事にし、又勉學に於ても互に勵まし合つたものであります。農業作業なども實行して今の一種二種制度に似たものをも行つて見ましたが、これはまだ當時の時勢には合ひませんでした。所が現在でも音樂、繪繪、運動などは甚だ調和をかいてゐます。例へば野球にしても十人二十人の僅かな生徒がやるにすぎず全ての學生が皆平等にやるのではありません。さう言ふ点から考へると先生は實によくそれ等の点で一致融合してゐたと思はれます。或は水泳登山を樂しみ、或は書をかき、或は漢詩和歌を作るなども先生が青年の時代から晩年に至るまで常に一貫してゐました。私は謠も樂音も知らぬが先生は地方の人々にも謠を敎へられ又書を盛に生徒に奬勵するとか夜會に於てはよく御自身台に立たれて常に生徒に親しまれたものであります。この事は當時の生徒に特になつかしみを與へた樣に思はれます。或は又よく生徒を集めて愉快に自由な會話をされた事なども思ひ出されます。殊に特色ある當時の寄宿舍の事は最も私の心をひくものゝ一つであります。先に土岐君が申されましたコンパニーと云ふのは多數集つてパンを喰ふ事から來たのださうですが集つて喰ふといふ事は大變よい事だと私は思ふのであります。學生が三錢五錢の金を集め樂しく話しながら煎餅、餅などを喰ふのも敎育上非常に意義ある事であると思ひます。今日寄宿舍生活は一高などではなか〳〵力を入れてゐる樣でありますが、大抵の學校に於ては衰微しており今日和中校長が京都二中の寄宿舍廢止について話されたが誠に殘念な事である。今日一寸見ますと非常に多くの自轉車が並んでゐましたが學校から二里三里はなれた家の生徒でも少くとも一年二年は寄宿舍生活をしてほしいそれはこの生活が學生々活の華であり之によつて始めて人格は出來るのであり、又眞の意義ある敎育をなし得るからであります。例へばこの寶山先生の遺稿を見ますのに校歌、三一會歌を作つた事や寄宿舍の事などについて書いてゐますが、これによつて當時の寄宿舍の狀態がよくわかります。諸君も一度はこの遺稿を讀んでみるがよいと思ひます。それに因ると先生の本當の敎育は寄宿舍に於て生徒自らが互にみがき合ふ事によつて出來たのであります。殊に當時の食事について考へますと、現代日本の敎育に

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

おいてはこの食事について本校昔の様には餘り深く考へられないのは非常な缺陷であります。あちらこちらに三々伍々により集つて愉快な談話を換しながら自由な食事をする、これは今日の官公立の學校では實行がむづかしい、然し英米に於ては日本の學校の様な食事をする所はどこにもありません。或私の友人が英國の學校に行つてゐたがその學校に於ては先生の講義をきかなくともよく只一緒に飯を食へばそれでよいのだ、それほど食事が教育の中心をなしてゐるのです。私は幼稚園をやつてゐますが幼稚園などに於ても四五歳の子供が御飯をこぼさない様にしようとする努力などは子供の精神の發達によい教育であります。子供達は十一時頃になると食べたくて仕方がないがまだ食べさせてくれないから我慢し食事の時には必ず感謝の歌を歌はねばならぬとか云ふ事は非常に克己心を養ふこと、思ひます又御飯菜葉などをいやだとすき嫌ひする子供も外の子供達が皆たべるのでそれを恥とする様になり次第にすき嫌がなくなり又我儘を言はなくなる。さう言ふ風に食事は實に教育の根本であつて愉快に思ひ〳〵の談話をしながらたべるとどんなにまづいものでもおいしくなるものであります。私がこゝに厄介になつた當時の記憶の中でも最も深くのこつてゐるのは賓山先生と一緒に樂しく食事をした事であります。この食事について現代教育界で餘り深く考へられないのは實に缺陷であると思ひます。とにかく日本

の教育に於ては或点は盛であるが或点は缺けてゐる様に思はれます。次に又私は靈の教育もやゝともすると缺けてゐないかと思ひます。昔の寺子屋にも靈の教育がありました。例へば孔子様のお祭りをした事もその一つであります。賓山先生も子弟の教育に於て特に信仰の大切な事を説かれました事は我々が先生について特に記憶せねばなりませぬ、昨日の安樂寺の慰靈祭なども實によい靈の教育であります。先生が全ての場合に於て嚴肅且敬虔な方であつた事は言ふまでもないが先生が本校に於て朝夕の禮拜を始められたのも宗教的な所であります。米國に於て朝夕の禮拜を實觀された先生はすぐに宗教までもうつす事は不可能であつたから先づ朝禮ぐらゐは行はうと考へられたのであります。先生は靈の教育をしなければ眞の英雄になれない事を諒解されまして信仰を養ふ事を常に希望されたのであります。我々が人を憧憬する事が實に教育の精髄である事を考へてほしい本校は三十年前に於てこの宗教々育に出發しました。これによつても賓山先生は新教育の先驅者なりと言はねばなりませぬ。諸君の中には或は生徒が三四百で少いと自ら卑下する方があるかもしれませぬが、之の方が却つて教育の本旨から言つても好都合であると信じます。どうか諸君は頭の人であると同時に腹の人であり又智の人であると共に膽の人であり手の人であるどつしりとした人物となり梧陵翁が幕末に於て眞の英雄養成に努力された精神に則り昭和維新の英雄となられん事を切望いたします。

展覽會

地理科

自然の美はしき地に創立日本一の歷史と傳統と光榮とを祝賀する本校は八十周年記念卒業の一とせとして展覽會をなすに生徒成績品については日頃における學習狀態の結晶を校友父兄及び一般大衆の人々に批判と指導とを仰ぐためで新入の一年生より五年まで全校生徒あげて必ず一品以上を提出せしめその中の優秀品を展覽したのであるが中には各學科各種の多忙の折柄涙ぐましい努力のもとに數点を數日間に出品したる母校愛の厚いしかも清い物語の主人公も二三に止らない。五年は通論四、三年は世界、日本に關するもの、二、一年は教科書及地圖附錄の圖表と分擔をして總動員の作業によつたのである、地歷館と銘うつて展覽せるもの大体次の通り。

(一)、地理通論關係——星、陸、水、氣、生物各界についての圖表、その他人文關係のもの數種

(二)、地理特論關係

(イ)外國地理、世界現勢圖と國旗、六大陸斷面圖、歐、亞諸國面積標式圖、諸洲國に關する各種の地圖及圖表

支那の黃河、楊子江の特色圖例、支那の主要貿易港と其產額圖、歐洲の氣候圖、ライン地溝帶に關する景觀地圖及斷面圖和蘭の土地の成圖と利用、アフリカ大地溝帶の斷面圖、金剛石の產額圖、ナイヤガラ瀑布の平面と斷面、米國の雨量と主要產物約分布、ワシントンとカンベラとの都市計畫、主要國

の職業別、列國間の戰債

(ロ)日本地理、日本地理臨表、阿蘇、箱根、甲府、關東西南部の模型圖及斷面、六大都市の交通比較表

大阪、東京を中心とせる貨物自働車に及ぼす影響、大阪を中心とせる交通圖、阪神、伊勢海地方の紡績地帶と主要工場分布、近畿地方と都市計畫、日本ラジオ放送局分布、日米貿易とその內容表、本邦鐵道の異型式、米の過剩と不足地方の比較、福井縣の消費する生糸集中圖、國立公園の日米對照及吉野、熊野國立公園、專門學校分布圖

(ハ)鄉土關係、本縣に關する人口、交通、溫泉及地質、火事、醬油柑橘等の各種分布圖表、都內各町村地形圖、柑橘の分布、耐中と全國高校、大學豫科分布及進路學費圖、第一位（世界、日本、紀州）の鄉土特產物表、鐵道開通後に於ける湯淺及廣の發展圖（名物分布圖）

(三)、地圖、模型特產物關係

湯淺、動木圖幅の彩色圖、近畿、關東、東北（西田氏）地方掛圖耐中を中心とせる鳥瞰圖、昭和四年以降のスクラップブック、近畿地方、本縣の地理模型、製作品の湯淺、筏島を中心とせる地理模型、同滿洲國模型、吉備實業學校の果物、罐詰九種と柑橘の害虫、病原菌及圖表、金英、大日本、旭、帝國、內外、大正、山彥、丸新、紀伊國屋の各除虫菊會社より出品の產額世界一の乾花、蚊取線香、のみとり粉等及各ポスター、湯淺醬油同業組合の出品にかゝる湯淺名產醬油及金山寺等、模型機械としてパナマ運河模型、箱根火山の地形、地球運動の說明器

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

種目	國寶品名	作者及時代	社寺所在地
木彫	毘沙門立像	不詳	有田郡岩倉村栗生
〃	大日如來座像	〃	〃
〃	不動明王及二子童立像	〃	〃
建築	藥師如來座像	藥師堂	〃
〃	藥師堂	應永二十三年	〃
文書	紙本墨書置文	〃	〃
木彫	釋迦如來座像	不詳	田栖川村栖原
〃	藥師如來座像	〃	湯淺町大字別所
〃	地像菩薩座像	勝樂寺	〃
〃	阿彌陀如來座像	〃	〃
〃	十一面觀音立像	〃	〃
美、工	綵漆彌螺鈿壇	傳乙年滿皇后御寄附	廣利寺	宮原村
繪畫	須彌涅槃圖	淨妙寺	箕島町
木彫	藥師如來座像	藤原末期	田殿村
建築	八幡神社本殿	長保寺	海草郡濱中村
〃	若宮神社本殿	八幡神社	南廣村
〃	高良神社本殿	應永年間再興	〃
建築	大門(仁王門)	不詳	長保寺	海草郡濱中村
〃	本堂(釋迦堂)	〃	〃	〃
〃	鎭守堂	〃	王子神社	日高郡比井崎村
美、工	陶器銅經筒附、紙本法華經	〃	〃	〃

木彫 四天王立像 滕樂寺 湯淺町

三二

本校八十周年記念圖畫習字展覽會概況

一、期　日　五月六、七、八の三日間

一、出品數

總出品點數　一〇六三點

(1)本校總出品點數　四六四點

圖　畫　水彩寫生畫　一三五
　　油　繪　一一
　　圖　案　一三九
　　想畫(案內圖)　一三
習字　習　字　八二
　　ペン習字　七二
　　英　習　字　一二

(2)校外出品總點數　五九九點
圖畫。習字。手工。

(イ)郡內小學校　一九六
(ロ)縣下小學校　圖　畫　一六一
(ハ)縣下縣外中等學校　圖畫　七六
　　習字　七八
(ニ)佛蘭西兒童　圖畫　四九
(ホ)養神雜會、地方作家　四一
卒業生作家(日本畫、油繪、書)

一、出品校

(1)郡內小學校
湯淺小學校(實專)　鳥屋城小學校
南廣小學校　保田小學校
廣小學校　辰ヶ濱小學校
田栖川小學校　五西月小學
津木小學校　箕島小學校
糸我小學校　衣奈小學校

(2)縣下小學校　郡別
和歌山師範附屬小學校以下縣下各郡(日高郡、那賀郡、和歌山市、西牟婁郡、東牟婁郡、有田郡、伊都郡)優良小學校兒童作

(3)縣下中等學校
海草中學　日高中學
田邊中學　和歌山中學
粉河中學　高野山中學
和歌山工業　伊都中學
和歌山商業　新宮中學
有田高女　海南中學

(4)縣外中等校
市岡中學(大阪)
西條中學(愛媛)

一、參考出品者(五十音順)
赤松　柳三氏(卒)　油繪　三
阿瀨卯兵衛氏(養)(卒)　日本畫　三

池田幸太郎氏(卒)(作)　油繪　一
市間太一郎氏(養)　日本畫　二
大泉　米吉氏(舊職)　油繪　四
數見　友宏氏(卒)　日本畫　二
狩野　光雅氏(卒)(作)　日本畫　一
菊地　海莊氏(作)　書　一
園部　郭香氏(卒)(作、二科會友)　油繪　一
田中彥兵衛氏(養)　日本畫　三
婁木　直良氏(養)(卒)　書　一
中井　長二氏(養)(卒)　油繪　七
永野　義徹氏(養)　書　一
花田　實氏(卒)(作)　日本畫　一
林　善雄氏(養)(卒)　書　一
林　善六氏(養)　書　二
宮芝　誠吾氏(養)　油繪　三
宮地　芳信氏(養)(卒)　日本畫　三
保田　龍門氏(作)(日本美術院同人)　油繪　一

一、陳列狀況
第一室　本校習字作品
第二室　本校習字及英習字及ペン習字作品縣下縣外中等學校英習字作品
第三室　郡內小學校圖畫、手工、習字作品佛蘭西兒童圖畫作品
第四室　縣下小學校優良圖畫作品
第五室　本校圖畫作品(油、水彩寫生)

三三

稻むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

第六室　本校圖畫作品（寫生畫、圖案、想畫案內圖、毛筆畫）
第七室　縣下中等學校習字作品
第八室　縣下中等學校圖畫作品
第九室　參考特別作品（養神雅會。地方作家。卒業生作家）

創立八十周年紀念理化實驗室

五年　松下季彦

我が耐久中學は、創立八十周年を迎へ、生等もこの祝典に列するの光榮を得、更に、この記事を掲するの光榮に浴し感激措く能はざるなり。

時、恰も初夏に入らんとする五月八日、空、晴れ渡り、この祝典を祝福するが如し。

先づ校前の、紀念大アーチをくぐり、校内に入れば、最初に、圖畫展覽會場に到る各會場を歷覽して、新校舍に足を一步踏み入れんか、ペンキの色も、あざやかに、木の香も新しき會場並列す。

その會場を巡りて將に、終らんとする時、そこに一室あり、そは物理化學實驗室なり。

入口より入りて先づ第一に發見するのは眼前の机上の水槽からパツ〳〵と火が出てゐるものである更に面白いのは、その火が瞬間に消滅すると、ふわり〳〵とした楕圓形の煙が立ち登る、これは「水から火が出る」燐化水素の實驗である。更に進むと大きなプロペラを廻して走るプロペラ電車、本物、そつくりな模型の、汽船ガラスの管をアメのやうにして、曲げたり、膨らましたりしてゐる。ガラス細工部、天上からは模型の飛行機が數臺風に吹かれてユラ〳〵とゆれてゐる。

左方には天上まで、達しさうな、高い木が頂上より、五色のテープを四方八方に張り、天井の中央から張られたテープと交錯して一美觀を呈してゐる。其の木を上下して小さな箱が動くこれが即ち、エレベーターである。机上のボタンを抑へると氣持よく上下して興味は津々として盡きない。

更に眼を轉じて室の中央を見ると、コト〳〵と可愛らしい音を立てて左の柱から右の柱へ引張られた銅線の上を窓の開いた小箱が走る。向ふに到着すると再び此方へ動いてくる。

これが空中ケーブルである。

「ボー」と大きな何か破烈したやうな音がして大きな焰が上る。何だろうと思つて隅の方を見ると「富士山の爆發」と大書して「白砂糖」に「塩素酸カリ」を加へ、その混合物に硫酸一滴を落して爆發の實驗をやつてゐる所である。

次の机上には蒸氣機關が置いてある。下方の蓋を開いて點火する。しばらくするとシュ〳〵と蒸氣が出てくる、上方の棒を上げると、本物そつくりな「ヒー」と云ふ音が出る、側方の輪は回轉を始める「コツトン〳〵」と機關車が動いてゐるやうだ。その右には、電車が置いてある。電池をレールと架空線に繋ぐと、ぐる〳〵と何回も電車が回轉し始める、前後のヘッド、ライトがともされる。

左の机上には發動機の模型を置き、壁に説明が丁寧に附せられてゐる。

更に進む、いよ〳〵終に近づいた。

そこには一方には生徒作品のモートル、電鈴、變壓器其他苦心慘憺

してなれる作品が並べられてゐる。

一方の机は人絹製造部である。

詳しい説明は壁に書かれてゐる。大要を見ると、原料は脫脂綿である。それに種々の藥品、二硫化炭素、苛性ソーダなどを加へて粘液性にしてそれを空氣で壓して管より出して、車に繰るのである。出來上つた人絹はテグスのやうであるが切れ易い。この實驗は非常によく出來た。

かくて、この興味深き面白い實驗室の參觀を終り、次の映畫、幻燈暗室利用實驗室へ進むのである。

左に出品物及び出品者名を記して、この稿を終りたいと思ひます。

實驗種目	實驗者
學校出品	五甲　伊藤
燐化水素（水から火が出る）	五甲　柳本
	五乙　栗山
富士山の爆發	五甲　松本
	五乙　竹中
炎出	五甲　森田
	木村
	柏田
人絹製造	五甲　永井
	五乙　周參見
硝子細工	五甲　上野山
生徒出品	五乙　佐竹
エレベーター	五乙　松下
空中ケーブル	五乙　中平

博物科

四年　川口順吉

八十週年紀念展覽會は五月六日より三日間にわたつて開かれたが此の上なき天候に惠まれて非常な盛會に終つた。殊に衆人の注目を集め最も盛んだつたのは我々の關係する自然科學展であつた。こゝに當時の模樣をふりかへつて見よう。

先ず我々の最も苦心したのは陳列方法であつた。自然科學博物科としての眞理を大衆化するといふ陳列方針に對しては制當られた會場は余りにも狹く且つ建築の關係上壁面の利用が出來ず展覽の効果が大いに遜減されたのである。しかし努力によりゆるされた範圍に於て縱に橫に空間を利用しやう滿足の狀態にまでなし得たのであつた。

學理の大衆化の方法として次の樣な方法をとつた。即ち

一、各色テープ毛絲を利用し説明圖と實物を結んだ事。

二、説明圖（特に解剖体）を多數に準備した事。

三、各所に「係員に御遠慮なく説明をお求め下さい」の掲示をせること。

四、委員は會期を通じて開會中は毎日數十回進んで説明せること。

五、各所に平易な解説を掲示せること。例へば「こばんいたゞき」の液漫には

（頭部の小判形をなせるものは吸盤である。サメや其の他の大きな魚類の口の附近に吸ひ着き何處までも附いて歩く。サメ類が他の魚類の肉を裂いて食ふ時にこぼれて浮ぶ小片を口にうけるまづ魚類中の乞食と言つてよいでせう）と自然科學室としては

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

圖表や、模型、乾燥、液浸の標本ばかりでは物足りないから金魚の水中游泳、かぶとがに、しやこのタラヒで飼育したもの、かめの水潭飼養等生きたもゝ飼養等により大へん活氣を呈した。

陳列順序

會場に入れば先ず右側に大古地貌、生物の想像圖が時代順にかゝげられ、下には本校秘藏の中生代白堊紀産化石、續いて「石から布が織れる」と題して石綿製造順序、入口左側に油菜の鉢植に黄蝶と蜂を吊して神護色と警戒色の說明を付し、次に地層彎曲標本、木校所藏化石貝類標本、昆虫標本、牛頭、犬、猿、雞、かめ、魚の全体骨格實物標本、魚類軟体動物、脊椎動物の液浸標本、小犬、鯉、いか、れすみ、蛇、小貓、兎の解剖生徒成績品、其の他貝、昆虫鱗粉轉寫、鑛物の生徒成績品、花序模形、石膏や蠟製の塑像ナス、キウリ、魚の標本成績鏡十數品、肥料試驗鉛筆製造順序、寄生虫の標本と傳染經路の說明圖顯微鏡、尚所々に猛禽類ツル、山鳥、猿、兎、イタチ等の剝製、鑛物昆虫採集用具等あり。殊に興味を以て見られたものは古代生物及び生態圖、化石、やつめうなぎ、牛頭に於ける角及び齒、生徒の解剖成績品、うみたなごの胎兒姙娠中の液浸、約三米の蛇の脫皮、及び骨格、食用蛙其の他蛙の標本、食虫植物、生きたかぶとがに、人体模型、人頭骨百五十——二百倍擴大の顯微鏡裝置（蛔虫、蝶の鱗粉、そうなす花粉、竹の莖の斷面、蠅の口及び足先蜘蛛の足先、雞の羽虫、蚊の頭部、ノミの頭部、兎の精虫）等であつた。一般から特に說明を求められたものは六尺もあらう、大なる人体模型に依る內部構造の說明、寄生虫、顯微鏡裝置、蒲萄、蛇皮、蛙の種美、こばんいたゞき、二頭は

ぶ、動物解部、牛頭骨等である。

監視について感じたことは生徒兒童よりは成人の方が觀るにも聞くにも熱心であつた。こゝで陳列開催した甲斐があつたことを喜ぶ、其の例として混雜のため日を重ねて來た人、又これで四回目ですと言ふ人もあつた。又非常に精細に觀て一時間以上も費した人もあつた。頗る眞面目な態度で陳列上に關して意見を述べられた人、標本を寫生する人も數人をかぞへた。或は說明なれた監理生徒をタヅ〳〵さす樣な質問をする人も頗る多かつた。

平易な解說、說明に一般は大滿悅で觀覽も說明を求めるにも聽くにも頗る熱心眞摯であつた。「どうも有難う御座いました」と老いも若きも皆申し合せた樣に挨拶して次の室に去るたびに數日來の勞苦も酬いられた喜びに又元氣にうれ〳〵蛇の如き人波に混つて說明を繰かへした。（終り）

博物科展覽會委員（野田先生、堤、吉村、川口、北谷、川島、前田、山名、花田、兒島、熊岡）

武具展覽會

なほ圖書室に於て吉村、柚野二氏の特志によつて多數の珍らしき武具蒐集一般の觀覽に供し本展覽會に一般の光彩を添へられたことを厚くこゝに感謝しておきます。

武具展覽會陳列目錄

一、刀（銘兼元　石井平太郎氏出品）
一、無銘刀（森音次郎氏出品）
一、刀（銘浪花住月山貞吉造之　穴澤千代出品）

一、刀（銘莊司勝彌直秀　慶應三年八月長光撰刀　阿瀨卯兵衛氏出品）
一、刀（銘莊司筑前大掾大慶直胤　文政十年仲春　河內清吉氏出品）
一、短刀（銘備州長船兼光　千川安松氏出品）
一、無銘刀（肥後國迫謚國村鞘背親善　千川安松氏出品）
一、拵付太刀（銘備州長船則光　文明三年八月日　千川安松氏出品）
一、刀（銘御勝山麓住藤原永貞　慶應元年八月於江府作之　白鞘入　鐚巻卯右衛門氏出品）
一、刀（大）（銘備州三原住具正作　天文三年二月日　平田寅藏氏出品）
一、刀（小）（〃　平田寅藏氏出品）
一、太刀（銘月山貞吉　中野寅楠氏出品）
一、刀（若州宗良　中野寅楠氏出品）
一、刀（銘濱部眼龍子壽實　文化十五年二月日　中野富楠氏出品）
一、刀（越前守源來信吉　〃　〃）
一、刀（銘尾崎源五右衛門助隆　寛政五年八月　〃　〃）
一、拵付短刀（銘兼作　中野富楠氏出品）
一、短刀（銘不名　〃　〃）
一、脇差（和泉守口貞　〃　〃）
一、太刀（銘月山貞勝　吉信秀治氏出品）
一、拵付太刀（銘福岡一文字吉房　〃　〃）
一、刀（粟田口眞國　〃　〃）
一、總青貝槍（稻本伊右衛門氏出品）
一、古代兜（〃　〃）
一、大薙刀（銘阿波國住人岩佐藤四郎守國　赤桐虎吉氏出品）
一、短刀（無銘拵付　矢倉隆氏出品）

一、鐵扇二
一、馬杓二
一、轡一
一、鎖鎧二組（以上矢倉隆氏出品）
一、短刀（宿紀金光　菊池海莊遺愛　柚野市平氏出品）
一、刀（備前住則光　文明三年日）
一、刀（參河守藤原天道陳直作　柚野市平氏出品）
一、無銘打根（〃　〃）
一、勝色大袖具足（〃　〃）
一、友成大小拵付（竹林兼三郎氏出品）
一、短刀（銘莊司直秀　久保賢藏氏出品）
一、金銀桑眼、火繩銃（吉村氏出品）
一、馬具足（和歌山市　朝比奈氏出品）
一、法螺具一對（〃　〃）
一、采配一對（〃　〃）
一、打根一本（〃　〃）
一、唐團扇一對（〃　〃）
一、腰付辨當一對（〃　〃）
一、水筒一個（〃　〃）
一、旗三流（〃　〃）
一、木曾義仲陳鉦（〃　〃）
一、加藤清正公手判（和歌山　九鬼氏出品）
一、同長烏帽子（〃　〃）
一、刀（肥前國忠吉（二尺三寸五分）吉村氏出品）

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

一、刀(莊司次郎太郎直勝　吉村氏出品)
一、刀(粥一文字二尺三寸藤原國情　〃　〃)
一、刀(伯耆守平朝臣公幸一尺八寸六分　〃　〃)
一、刀(奥大和守平朝臣元平一尺八寸三分　〃　〃)
一、刀(備中貞次　二尺二寸分　高辻氏出品)
一、刀(備前長船祐定　〃　〃)
一、太刀造一振(吉村氏出品)
一、刀(南紀住眞政　二尺五寸五分　唐尾兼三郎氏出品)
一、軍　扇(吉村氏出品)
一、小　弓(〃　〃)
一、遠用兜(〃　〃)
一、刀(長船勝光合作一尺九寸六分　〃　〃)
一、刀(濃州兼定二尺三寸一分　〃　〃)
一、刀(鈴木大和守助政二尺四寸六分〃　〃)
一、刀(長曾禰虎徹　二尺三寸六分　〃　〃)
　老翁近藤勇帶刀ト同銘
一、矢壺(　〃　〃)
一、槍穂大小五本　(〃　〃)
一、鐵鉾數個　(〃　〃)
一、刀(宗壽　南條氏出品)
一、刀(近江守繼平　矢倉氏出品)
一、唐繼短刀　(〃　〃)
一、無銘刀大小　(河島氏出品)

祝賀第二日　記念体育大會

三八

創立八十周年記念祝賀行事の第三日目の体育大會は八日午前九時半校庭にて擧行された。前二日の好晴のあとをうけ當日の天候が氣づかはれたが、それも杞憂に歸し薄曇りの誂へ向の運動日和、それに甦ては我校運動會の名物として人氣を呼んだ社會行列も幾十年振りに復活したほか寒祝タンブリング、鰻皮はぎ、扇の導き、亀さんの競走、暗夜の突撃等々例年行はれる体育大會のそれとは趣を異にしたプログラムが觀覽者の歩足に拍車をかけて超滿員の盛況を見せ稀有の盛況裡に午後六時半終了した。

當日のプログラム及記錄は左の如し。

記念體育大會記錄

一、百米競走　(一年全)
二、二百米競走　(三年全)
　1神　人(二六、八)　岡　畑　大　江
　2畑　野(二八、　)　野　田　栗　原
　3吉　井(二六、六)　中　村　中　田
　4崎　山(二七、二)　庄　司　長　田
　5梶　野(二八、二)　井　爪　川　崎
　6三ツ村(二八、三)　岡　　湯　田
　7野　島(二七、五)　花　手　川口、内芝
三、二人三脚

第一(藤田谷　(武田吉田)
第二(高居宮井　(江川浦崎)
第三(根来谷　(林(善)岩本)

四、白兵戰　赤組(勝)
五、自轉車徐行
　一等　二等　三等
　1、栗　山(五年)　岩　本(五年)　破　戸(五年)
　　金　森(五年)　大　橋(四年)　峠　原(四年)
六、日本海々戰　(二年)　白組勝
七、二百米決勝　(四年)
　一等　二等　三等
　1、濱　口(三三、二)　持　田
　2、林　　(三〇)　拔　井
　3、彌　宜(二六、五)
　4、生　駒(二六、五)　峠　原
　5、
　6、鍵　山(二九)　北　山　上ノ山
　7、籠　谷(二八)　籠　門　吉　田
　8、大　原(二六、二)　今　井　中　井
　9、川　岸(二七、二)　別　當　松　本
八、百足競走
　イ、1栗原、花手、伊藤、畑野(三年)
　　2久保田、鈴木、九鬼、兵野(二年)
　ロ、1籠門、熊岡、籠谷、杉田(四年)
　　2田邊、林、岡、崎山(三年)
九、武裝競走
十、雙龍の爭ひ
十一、百米競走　(二年)
　一等　二等　三等
　1、後　藤(一三、五)　堤　横　井
　2、藤　谷(一四、五)　九　鬼　淺　井
　3、島　田(一三、九)　大　畑　平　岡
　4、森　田(一四、三)　武　田　伊　藤
　5、川　口　　中　西　武　田
　6、田　口(一四、三)　酒　井　兵　野
　7、安　井(一四、五)　吉　田　上　田
　8、久保田(一五、六)　九　鬼　直　山
　9、崎　山(一六、三)　別　當　山　下
　10、矢　部(一五、六)
十二、大玉送り　(一年全)　赤勝
十三、二百米決勝　(五年全)
　一等　二等　三等
　1、破　戸(一三、六)　林
　2、森　田(一三、四)　竹中(敏)　花　井
　3、片　山(二四、八)　南　條　安　田
　4、拔　井(二三、四)　金　森　玉　置

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

6、瀧　本(二五、五)梅　本　村　尾
7、東　(二五、九)中　平　奥　田
8、永　井(二九、五)山　本　案　志
9、西　(二六、〇)佐　竹　平　松

十四、綱　引　甲組の勝

十五、密集教練　午後之部（一時開始）

十六、合同体操

十七、倒立競走
1、崎　山　兒　島
2、龍　門　峠　原

十八、陸　戰　赤勝

十九、障碍物競走　有志
1、野　田　上ノ山　伊　藤
2、竹中(敏)　彌　宣　林

二十、鰹の皮はぎ（三年全）
甲　組　勝

廿一、俵　奪　ひ（五年全）

廿二、スプンレース　校友、父兄、有志

廿三、扇の導き　有志
第一　玉　置ー竹　中　吉　田ー宮　木
第二　瀧　ー上ノ山　佐　竹ー峠　北　山ー阪　口
第三　玄　後ー伊　藤　上ノ山ー野　村

廿四、小學校選手繼走　四百米、八百米豫選

廿一、龜さんの競走
1、上野ー崎山　利光ー山下　蔭谷ー西川
2、武田ー九鬼　中西ー田尻　澤崎ー吉田

廿二、暗夜の突撃

廿三、步　戰（白勝）

廿四、小學校選手競走　百米、二百米豫選

百米 {一回一着　大崎東部山崎君(一四、二)　二着湯淺　木村君
{二回一着　大崎東部宮本君(一四)　二着濱中　土肥君
{三回一着　南　廣　畑中君(一四、七)　二着濱中　淺川君

二百米 {一回一着　笹　島　山崎君(二九、二)　二着湯淺　小島君
{二回一着　笹　島　大西君(二八)　二着湯淺　中　君
{三回一着　大崎東　前山君(三〇、八)　二着濱中　寺下君

廿五、クラス對抗
1少年部　一等　二年B組　二等　二年A組　三等　一年B組
2青年部　一等　五年乙組　二等　五年甲組　三等　四年乙組

廿六、暗夜の賓（校友、父兄、有志）

廿七、小學校選手競走百米、二百米決勝
百米之部
1、湯　淺　木　村君
2、大崎東部　山　崎君
3、同　宮　本君
二百米之部
1、笹　島　大　西君(二八、九)
2、大崎東　前　山君
3、湯　淺　中　君

廿八、地球廻し（來賓、職員）

廿九、戰闘教練（五年全）

四十、閉會、演技終了六時

祝賀第四日　劍道角力大會

八十周年記念劍道、角力大會は十三日開催劍道は午前中校内試合、午後は對外試合なり。角力は午後一時半より開始、劍尖火を吐き肉彈相搏つの盛觀に滿場の觀衆を魅了した、結果左の通り。

五月十三日創立八十周年記念
劍　道　大　會　開始　午前九時　終了　午後五時

一、型の部
イ、大日本帝國劍道型
打太刀　野　田　宏　和
仕太刀　花　井　義　正
ロ、鎖鎌術直猪心流型
打太刀　中村一心齋先生
仕太刀　田　畑　政　彦先生

二、試合の部
イ、各學年甲組對乙組試合

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

二學年の部　甲組勝
三學年の部　甲組勝
四學年の部　甲組勝
五學年の部　甲組勝

ロ、本校對縣下中等學校試合

二學年の部

（日中本校 ○○ 加納浩 ― 海南本校 ○○ 岡野榮治）
（貨商本校 ○○ 幸前平松 孝一正隆 ― 和中本校 ○○ 湯川忠夫 鈴木啓二郎）
（和商本校 ○○ 石村兵野 幸和永三 ― 粉中本校 ○○ 土肥義輝 武田清）
（海中本校 ○ 村田上野 勝富造 ― 和師本校 ○○ 田村堀清秀 勳）

三學年の部

（海中本校 ○○ 福塚野田 伊佐夫義宏 ― 貨商本校 ○○ 富山野島 榮藏一雄）
（海南本校 ○○ 宗梶野 孝正雄 ― 日高本校 ○○ 堀本川崎 寛一猛）
（和中本校 ○○ 森下花手 保信蕭 ― 粉中本校 ○○ 平井澤崎 勝實）
（和師本校 ○○ 山田長田 禮男文一 ― 和商本校 ○○ 嶺野神人三代治 和男）

四學年の部

（日中本校 ○○ 森管原 繁怡 ― 海南本校 ○○ 松原三木 幸一忠夫）

五學年の部

（和中本校 ○○ 關谷口 信夫重治 ― 海南本校 ○○ 高木鉢内 貫造貞一）
（日中本校 ○○ 一松栗山 俊博男 ― 海中本校 ○○ 中場力二郎周參見端穗）
（和師本校 ○○ 濱花井 寅夫義正 ― 貨商本校 ○○ 江川竹中 茂夫衛）
（粉中本校 ○○ 入田濱口 清次義夫 ― 和商本校 ○○ 山田野田 稔宏和）

ハ、郡内醫察青年試合

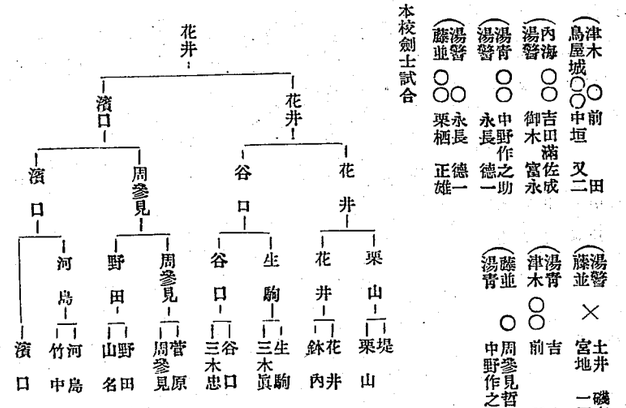
（湯醫島醫 ○○ 野口東池 保一靜男 ― 内海本校 ○○ 刀玉置 龜敬介）
（宮原湯鄕 ○○ 大森古久保 幸一隆嶋 ― 湯醫青 ○○ 白井堀田 健勇三）
（南廣湯醫 ○○ 歛宇田 三四治仲二 ― 内海青 ○○ 見矢堀田 政吉健三）
（湯醫田殿 ○○ 辻枝 周次豐 ― 湯醫殿 ○○ 土井三枝 礎吉幸）
（鳥醫南廣 ○○ 田中田中 晶榮一 ― 田殿湯醫 ○○ 森田田中 源一武市）
（鳥醫田殿 ○○ 吠村岩 健一倉 ― 湯青 ○○ 武田山田 理良吉）

（和中本校 ○○ 佐々木豐彥 ― 貨商本校 ○○ 炭田山名 芳一義雄）
（海中本校 ○○ 林生駒 了諦三善 ― 和師本校 ○○ 藤本堤 正明正久）
（粉中本校 ○○ 岩橋川島 秀雄義治 ― 和商本校 ○○ 阪本吉村川島 定一司代義治）

ホ、外來劍士高點試合

（津木鳥屋城 ○○ 前田中垣 又二 ― 湯醫藤並 × 土井宮地 磯吉一正）
（內海湯醫 ○○ 吉田御木 滿佐成永 ― 湯青津木 ○○ 前吉本田）
（湯青湯醫 ○○ 中野作之助永長德一 ― 藤並湯青 ○ 周參見哲夫中野作之助）
（湯醫藤並 ○○ 永長栗栖 德一正雄）

ニ、本校劍士試合



尙、この大會に湯淺町吉村廣氏より古刀（在銘）、柚野市平氏より短刀（在銘）中野不老堂より本大會プログラム、松本寫眞館より本校劍士に鷄卵數十個を寄贈さる。御厚情を深謝す。

吉村賞は本校劍士試合優勝者花井義正、柚野賞は外來劍士高點試合一等、海草中學中場力三郎の兩氏授與さる。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

八十周年記念角力大會記事

青葉をわたる風も爽かに四月の溌陽射す絶好の角力日和。この日四月十四日午後一時半より創立八十周年紀念行事の一つである近村青年角力及び箕島商業對本校角力大會はいとも盛大に開催された。その内對校角力の記事のみ摘出することにする。

燦然と輝く過去の歴史によつて彩れてゐる我部は如何今日の日を待つてゐたことであらう。

灼熱燃ゆるが如き夏の日も池水氷れる冬の日も厭はず、くつせず互にはげまし、はげまされつゝその技を練磨のみに盡し、土俵の改築をほどこし、全ての準備全くなつた部員の意氣あたるべからざるものあり戰はざるにすでに敵をのむ感があつた。

豫定時刻一時間前頃よりこの晴の試合を觀むため殺到した好角家の群は校庭の土俵をとりかこみベンチといふベンチムシロといふムシロは埋められ、眞に立錐の餘地なしといふ有樣であつた。定刻一時半校長の開會の辭あり終りて滿場熱狂裡に兩校選手十八名入場すれば期せずして滿場より耐久耐久の聲援起り、やがて行はれた肉彈相博つ盛觀は滿場の觀衆を魅了し、一勝負ごとに起る觀衆のどよめき！土俵に漲るあの殺氣！美なる戰男性美の極致！お、何といふ壯觀だ！

結果左の如し。（○○勝）

箕商		本校
○○山名		○岩崎
○岸		○○中谷
○福井		○○平岡
○○田伏		中川
○○橋本		○田尻
○○原		安田
○○河島		北山
○○上田		○橋本
山田		○○村上

あゝ實に意外であつた。必勝を期してゐた我が部員も、勝運惠まれず、刀折れ矢つきて、不幸十四對九にて終に箕商の陣門に降つたのである。血と淚の中に腕を扼して部員は如何無念の淚に咽んだことか。永い間の努力は水泡に歸したのである。しかし悲しみの後に起つたのは何讐！といふあの耐久スプリットだつた。そして部員一同は今日を期して來るべき時機にこそこの恥辱を雪ぐ事を誓つたのだ。吾々角力部員は聲を大にして絶大な援助をして下さつてゐる校友諸兄に云ひたい。この一戰によつて角力部は更生したいふことを。そしてその翌日より至實村上指揮のもとに又々血と淚の練習は行はれた。夕日光を西山に沒する頃まで土俵に集ひ、胸も碎けよと打ち當る肉塊の響は那耆灣頭に心よい響をつたへた。

校友諸兄幸かな部員は若武ばかりです。二年を主体とした元氣一杯な若武ばかりです。若い故に多幸なりといふのでは決してありません。精悍華の如き平岡、巨體にして角力巧者なる田尻、元氣一杯な岩崎等々すべてこれが二年であることを考へる時角力部の前途多幸なるかなと叫ぶものは筆者のみではあるまい。あの黄金時代を形成した原見、糸谷の時代を再現することは空想ではない。必ずや耐久角力部黄金時代來るといふ日のあることを筆者は斷言するものです。

最後に校友諸兄！園技にして男性的な吾角力部に大いに期待せられ今後共一層の御援助の程をお願ひする次第です。

創立記念夜會

校友會主催記念夜會は十三日午後七時より武道場に於て開催された觀衆千數百名にのぼり滿場立錐の餘地なき盛況を呈し十數番のプログラムに夜の更くるを知らず散會したのは翌午前零時半であつた、當夜のプログラムは左の如くである。

1 開會の辭　校友會長
2 ハーモニカ合奏　三年音樂科
　故郷の我家
　友を懷ふ
　三一會歌其二
3 童話。併屋問答　二年福長治
4 詩吟　五年木村良信
　山川草木（乃木希典）
　うつしよ（〃　）
5 謠曲　鉢の木　シテ川口彌兵衛
　ワキ戸津井善吉
　ツレ宮地芳信
　地佐藤安一
　眞榮講一同
6 喜劇　懸取　五年海瀨角藏
7 獨唱　英國々歌、其の他　五年生有志
8 英語劇　ウイリアム・テル　四年生有志
9 狂言。ドブカツチリ
10 ヴアイオリン獨奏、金婚式　三年神人三代治
11 笑話　志摩靜一
12 五絃琵琶、舟辨慶　南條旭連
13 映畫　チヤップリン流浪の旅　全卷
14 義太夫　菅原四段目寺小屋の段　岩崎喜雀
15 英語劇　ターニップ　四年生有志
16 詩吟　五年峠健三
17 絃樂　栩野伸一
18 創立回顧劇　浪に抗して　校友有志
19 ハーモニカ合奏　四年有志
　世界の平和
　青年の歌
　三一會歌其の一
20 詩吟、筑後川を下る（山陽）　五年岩崎勇
21 喜劇、餅搗　眞榮講一同
22 映畫　旗本退屈男　全卷
23 閉會の辭　校友會長

祝賀第五日　記念野球大會

本校創立八十周年記念祝賀行事の最後を飾る野球大會は十四日本校球場に於いて開催された。絶好の野球日和に和中、和商、游草の三强豪を迎へての興味ある三試合が展開される事とて觀衆陸續として詰か

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

け、中堅後方の松原に迄及ぶ眞に未曾有の盛況裡に午前九時三十分廣瀬校長の始球式あり、こゝに血戰の火蓋は切つて落された。

箕商對日高中戰

午前九時三十分開始
零時十分終了

日	1	0	2	1	1	0	0	0	‖5
箕	2	0	5	0	0	6	0	0	A‖13

球審　谷本
塁審　赤桐、見矢

日中好戰せしも第六回表箕商の猛打をあびて遂に壓滅す。

日高(先)									
村	本	佐	岡	尾	浦	淵	淵	木	
津	松	羽	松	西	眞	田	柏		
2	6	1	5	3	8	9	4	7	

38	7	0	11	2	2	5	1	0			
敗打	安打	犠打	三振	死塁	盗塁	失策	打撃	二打			
41	11	0	6	5	4	8	2	3			

箕	島							
戸	上	川	鍋	山	池	藤	中	松
5	7	1	8	6	2	3	9	4

和中對耐久戰

午前零時四十五分開始
午後三時十五分終了

和	2	0	3	0	0	3	‖11		
耐	0	0	2	0	3	1	0	0	‖6

球審　南部
塁審　木野、西郷

第一回　和中玉置四球太田の三前バント野選となり兩者生き玉置三盗太田も二盗と西尾の右翼二塁打に二者生還、木本の遊飛を禰宜好捕し西尾併殺を喫し和田の三塁打を放ちしも宇野の遊飛に止む。

第三回　和中西尾の右翼安打木本の右翼三塁打に西尾生還和田二飛し木本も還り宇野中堅に安打を放ち直ちに二盗さらに三盗すれば捕手高投して宇野生還三點を加へ和中の一方的試合に終るものと思はれたが破戸の肩やうやく定りて吉田、竹鼻を三振に喰止む、耐久一死後林左中間に二塁打し松野遊飛一塁低投に林三塁に進み絶好のチャンスを迎ふ、續く岡畑第一球を左前安打し林、松野兩者生還二點を奪回す。

第五回　和中三者凡退後耐久松野四球を選び岡畑の一飛に二塁に盗られ後藤中堅前にクリーンヒットし松野生還、禰宜一邪飛に二死となつたが破戸四球森澤の左中間二塁打に後藤、破戸生還し同點となり觀衆總立となる。

第六回　和中三者凡退後耐久林右中間に三塁打し松野二飛失、岡畑四球にて滿塁の好機を摑み後藤三振したが投手暴投し林生還一點をリードす。

第七回　和中一死後西尾四球木本左翼安打し和田の右翼安打を野手後逸して西尾木本生還、和田三進捕手の三塁牽制高投に和田生還和中二點の勝越となる。

第九回　和中和田左翼安打、宇野四球吉田の投前バントに三、二塁によりピンチヒッター稻田立つに及び破戸左翼に退き森澤投手となる森澤の健投功なく四球となり滿塁捕手逸球ありて一點玉置左飛に斃れたが宇野還り一塁よりの盜者を刺さんとする間に稻田も還り三點を加ふ、耐久最後の攻撃に入り破戸四球に出たが森澤の猛直球を投手好く摑み併殺を喫し、持田も亦投直に死して萬事休す。

中(先)									
置	田	尾	本	田	野	田	鼻	田	村
玉	太	西	木	和	宇	吉	竹	稻	木
8	4	3	2	1	6	9	5	P.H	7

和									
39	9	1	8	8	7	4	2	2	
敗打	安打	犠打	三振	死塁	盗塁	失策	三打	二打	
34	6	1	5	7	2	7	1	1	

耐	久								
畑	藤	宜	戸	澤	田	田		野	
岡	後	禰	破	森	持	柏		松	
8	4	6	1	7	5	9	3	2	

三塁打　和田、木本、林
二塁打　西尾、林、森澤

海草對和商戰

午後三時四十五分開始
午後五時三十分終了

海	2	0	0	0	0	0	4	0	‖6
和	0	0	0	0	0	0	1	‖1	

球審　川村
塁審　中筋、吉田

悼尾の海草對和商戰は豫想を裏切海草の一方的試合に終り和商最後に一點を醵いたるのみ。

海草(先)									
一	下	川	本	本	田	藤	田		
松	下	荒	濱	楠	宮	和	瀬	森	
6	4	2	9	5	3	7	8	1	

36	8	0	7	3	1	0	1	2	
敗打	安打	犠打	振三	死塁	盗失	策打	打二		
32	7	0	9	4	1	6	0	1	

商									
賀	本	井	代	垣	川	木	原	和	
雜	山	赤	熊	稻	吉	三	杉	曾	
6	3	7	8	1	2	9	4	5	

所感回顧

佐々木先生と比叡山

阿瀨卯兵衛

此の度の祝賀會で種々の感激がありましたが、最も私の心をひいたのは佐々木定信先生が二十五年振で校門をくゞられ式典にも慰靈祭にも御臨席下さつた事である。先生は人も知る昔の寄宿舍の名舍監で當時百五十餘名も居つた舍生から慈父とも親しまれ鬼とも恐れられた人である。當時の舍生には隨分豪勇の者が多かつたが先生の前へ出ては全く頭が上らなかつた。皆先生の廉直果斷に畏敬して居つたからである。天下の模範中學天下の模範寄宿は先生の恩惠による所誠に少なくなかつた。當時一通學生の私としては寄宿舍に於ける先生を知らなかつたが先生の人格には深く敬服して居つた一人であつた。忘れもせぬ三年生の秋の修學旅行に先生と金子重太郎先生とに引率せられて比叡山に登つた事がある。其頃の比叡山には電車もケーブルも無く京都の吉田から鹿ヶ谷を過て徒歩で行つたものである。漸く頂上に近づき平將門によつて名高い四明ヶ嶽は指呼の間に仰がるゝ所まで達した。所が其

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

涼み話水泳部由來記

河童生

所から道が二つに分れて何れが登山道か一向に分らない。そこで皆が協議の結果二組に分れて別々の道から頂上登りの競爭をやる事になつた。溫厚柔和な金子先生と大部分の生徒等は一方の道を。剛氣果斷な佐々木先生と十名程の者とが一方の道を進む事になつた。勿論私は佐々木先生に從つた一人である。さあ四明ヶ嶽を望んで耐久健兒が山上の競爭をおつぱじめた。所が佐々木組のとつた道はだん〳〵下方へ向き始めた。先生此の道は登り道で無いらしいですねと云ふと。よし來た皆が已についてこいと云つて道なき荊ぐるみの中を遮二無二頂上を望んで登り始めた。後に從つた生徒は又も面喰つた。先生こんな荊ぐるみの中を登れないではありませんかと云ふと、登れぬ者は隨いてくるなと云つて御自身はどし〳〵進まれるから皆も勇氣を出して一生懸命雜草を分けてかけ登り金子組を拔いて頂上に着き萬歲を叫んだ時は誠に愉快であつた。爾來私は種々の困難に遭遇する度に此の事を思ひ出して元氣を振ひ興すのが例であります。又京都へ上り比叡山の山容を仰ぐ度に昔の事が懷ひ出されて心の內で微笑を禁ずる事が出來ません。此の間も久し振りで佐々木先生に御會ひして又懷舊の念が湧いて來ました。私の一生涯を通じて困苦に遭へば遭ふ程佐々木先生と比叡山とが念頭に浮んで來る事でせう。

「どうだい、一つ漫談的に耐中水泳部の由來を聞かせて呉れないか。八十周年記念でお目出度の折柄、理屈抜きで――」

「そうだな、水泳部も今年で八年、學校も八十年、お目出度の八の八と來たね。一杯機嫌でやるんだから事と次第によつて脫線するかも知れんて、いやどうも脫線し勝の僕なんだがマア、其處は我慢して聞いて呉れ」

× × ×

時は大正十四年、葉月初めの幾日かは忘れたが、河童連中が天州の濱や廣川の川口で、水泳同好會と云ふ樣なものを作り上げた。作り上げたと云ふより自然に湧いて出たと云ふ方がピッタリ來る。

で、最新式泳法のクロールで御座いと、名前だけは何處へ出したつてお恥かしく無い奴、其の實、今から見りやカラッシキ、ナッチャいないしろもんで、泳ぐより漂ふと云ふ方がいゝ位で幾リットル辛いのを呑んだか知れない。高石勝男氏をコーチした杉本傳氏の著書と首つ引きで呼吸法がどうの、ストロークがどうのつて、やつては見るものゝ我がものと思へど利かぬ手足哉つてね。それでも當地御自慢の早泳ぎ名手たる漁夫某氏の扱手をグッとも云へない位引き離して流石と云はしたもんだ。其の涌き上つて來たグループが、學校の一部として承認される爲には、相當な努力が費された。

明けて十五年、春三月――なんて云ひ出すと、チャンバラ交りの樣だが――自然發生的なそれが、部費こそ無に等しかつたが、公然と三一會の一部として認められ朝山竹松氏が理事として名を連ねた。ォット、一人の樣だから分解して御說明申上ると、朝倉一彦、山田良吉、竹林於兎三、松宮順一の四氏、略して朝山竹松氏。今では水泳部の所謂大先輩とか申上げる御歷々。

練習の設備としては、短艇部の古い和船を利用して移動タ――ニング台を作つた。オヨソ物凄い奴で、スタートすると反作用で船が意外の方向へ流れて了ふ。それ故發動機船の胴に扣へてスタートターンの練習をした。和船の胴に垂直に張つた板が淺い爲、ターンの時、船底を蹴つて牡蠣で足を切つたそれから水母に惱まされた。全くひどい話で水母に顏をやられた爲、四谷怪談のお岩の樣になつた事が屢々有つた。或は金幾錢を出して有田川は大師下へ日參したりした。其の間の練習以外の苦勞つたら今の部員の考え付かない程のものだ。

此の年、和中プールで第一回縣下中等學校水上競技大會が開かれて、七名の猛者が出場した。第四位で意氣揚々と引上げた。が、但參加校四校、隨分引き離されたが自己の極度のスピードで、最後迄レースを捨てなかつた。上つて來たらヘタ〳〵とブッ倒れて口からヤタラに泡が涌いた。最後迄出來る限りやつて見る。倒れて後止む。此れが水泳部の意氣で有り、又事實そうだつた。此の意氣があのプールを完成したのだが……。兎に角、第一回出場に依つて耐中の型が本格的なものになつた。

その翌年部設立の四氏が學窓を去られてしまつて、石橋恒孝氏が主將として部を率いた。部員が次第に多くなつて來る部費も多くなつた。櫓式のターン台も出來上つた。先輩の在湯の三氏は每日缺かさずコーチに來られた。が依然として水母の猛襲は、有田川糸野の里へ合宿するの止むなきを得さした。

重い櫓式ターン台を分解して、學校の車に載せて、廣から金屋近くの糸野迄、部員一同と、先輩三氏とが、エンヤコラサで引いたものんだ。何でも糸野へ着いたら、トップリと夕闇が濃く橫臥して居て、宿所たる學校の垣根や、近所の家々の垣根の夕顏だけが白く浮び出て居たよ。そして、小學校の校庭で部員一同ターン台を圍んで、黑潮廻る南の國――の部歌を合唱した時、頻を傳ふ涙を如何とも出來なかつた。

――こりや變な漫談になりさうだ――

が、然し並大抵な苦勞じや無かつた、川に据ふたターン台を、增水の爲深夜濁流の危險を冒して高所に引上げたり、全くどうして、漫談にしちや餘りに悲愴過ぎるよ。

稲むらの火の館所蔵 渋谷家文書 資料番号 10

第二回縣下中等學校水上競技大會は、試合斷の爲、部員全部が出場した。得点には至らなかつたが、一ヶ年間の長足の進歩に世目を驚かせた。又その年、高商で關西中等校水上競技大會が開かれた。此の時、若冠——その當時はね——寺杣君が此の大會に水泳部個人として最初の得点二点を稼いだ。

第三年目の夏が訪れた。

依然として、水母に苦しんだ。此の年も再度糸野へ合宿した。代り番に炊事當番を定めて、炊く飯を、皆でおいしくパクつた。增水、濁流が矢張り練習を妨げた。

プールだ、プールだ。牡蠣、水母、濁流に惱まされ、部設立當時よりの念願であるプール。プールを作らう!!

——此の當時の意氣は、恐らく耐中三一會のどの部にも無かつたと云はして戴き度いね——。

其の年の第三回縣下中等學校水上競技大會の時、時の主將野田省吾氏が、和中プールを壓し潰す殊勳を立てた。と云ふのは、當時の背泳、長距離に縣下第一と自他共に許し且つ任じて居た和歌中の、現在は、慶應の國際的長距離選手たる根來幸成君を最後の五十米で堂々七米餘も離つた事だ。無名の若輩、野田省吾氏が、一躍して縣下長距離のナンバーワンのペナントを獲得したんだ。然して戰友寺杣氏と共の活躍は水泳部をして五校中の第三位を得せしめた。

苦鬪に苦鬪三春秋、水泳部獨特の頑張りは、漸くその華を示し出した。以來耐中水泳部は縣下の長距離界を牛耳つて居る。映畫なら前篇の終と云ふ所、矢張り水泳部の黎明期、此處を以て終りと出來よう。

昭和三年秋十月。

多年の念願であるプール建設が、野田省吾氏の率ひる部員一同の手で開始された。屢々集つては、その設計に頭を捻つたり、如何にして費用を集めるか。方々のプールは——と云つても當時縣下には、和中と、高商としか無かつたが——如何樣なのか?

困難だ。學校當局に願つても駄目な事は知れ切つて居る。だが、出來る所までやらう。吾々の力で、吾々の手で、骨が砂利になつてもやらう。斷行だ!!

職員生徒が泥に塗れて作つた、煉瓦が象る三光星。ビールの空瓶が形作る九曜星の植物園。アレだ、アレが手本だ。

部員の意氣は火と燃えた。場所は、廣村火藥場に通じる橋より、北へ下つて六十米、江上川岸。觸立斷行の最初の鶴嘴が、小石まじりの芝地に、カチリ火花を散らした。

——時、昭和三年十一月三日、明治節の佳日だ——。

學校當局の知らぬ間に工程は進んだ、が間もなく當局の耳に入つた。許可か?不許可か?、出來るか?出來ないか?、其時の氣持つたら、言葉や筆では表現出來なかつた。そして許された時の嬉しさ……。

掘つた、掘つた。釣瓶落しの日が暮れて、寄宿舍の燈火が江上に映つても、田中伊之助部長や、野田、寺杣氏等各部員等の泥塗れの姿が見出された。手が肉刺で脹れ上つた。それが又潰れて赤ぺイになつた所から、ジクジクと水が出た。松が倒され、芝生が縱二十五米、横十一米、深さ三尺のプールに置き變へられた頃には、冬が來て居た。冬休になつた。先輩諸氏も工事に參加され、横十二米に大きくされ、一日一日と底も深くされた。泥水に浸した下半身は無感覺になつてしまひ、小石に傷つけられた手の甲は寒風に血を噴いた。

斯くして春へ。

滿潮時の水壓で掘設は不可能だ、と云ふ物理教師の理論が新興の血潮に燃ゆる部員の寄汗の一斷行に依つて覆され、野田主將の強硬な主張、獨行と、部員の熱心と、田中部長の私費を抛つての努力が酬いられて、學校の御大典記念事業としてコンクリート工事が起され、部員、先輩、生徒、職員、父兄、校友、地方有志の寄附に依つて完成された。「野田主將之を起し、田中部長之を成す」の記念碑位は立てらる可きだと思ふ。此のプールと植物園こそは、耐中八十年の歷史と共に、天下に誇る可き生きた教育資料だと思ふね。

隨分話が長くなつたから以後はザーッと話すが、プール完成後の進歩は目覺ましい限りであつた。

强豪和商との第一回對抗競泳は、この新設プールで微塵に潰したし、縣下の大會で百米優賞盃を上山宗男君が最初に獲得し、高商の大會で和中と火を吐く熱戰をやり、來會の關西十幾校をアット云はせ、八百米優賞盃を縣下の大會で最初に獲得したのは兒島高一君だし、言語を絶する成績があつた。

昔、耐中の選手は水を享樂してゐるに過ぎぬ、と嘲笑された水泳部が、今や近府縣に覇を爭ふに至つたのだ。費用の僅少の爲、良いコーチを招くを得ず、多くの大會に出場するを得ない水泳部。最惡不利のコンディッションの下に斯くも活躍した、否しつゝ有るのは何故か、意氣だ。不屈不撓の熱氣だ、費用の多少を敗戰の云草にする卑怯を去れ、金力に依つて決する勝負なれば、男子の潔しとせざる所、頑張りだ。ブツ倒れるまでやるんだ。これが水泳部の全部だ。全部が燃ゆる火だ。聞く所に依ると近來水泳部スピリネトが、いさゝか曲解されて居るとか。一つの或る出來事を捉へて、その事實のみを云々する尻メドの小さは、大人として採らぬ所、集團的、熱火的意氣を、大きく眺めて欲しい、苦難苦鬪、その來るを斷じて辭せぬ水泳部の意氣を愛されたい。

いや話が飛んだ所へ飛んだ。兎も角、ざつと苦鬪の八年史を終つたんだが、此の駄文が、卒業後母校の近くに來られない部の先輩氏に、水母や濁水等と鬪つた部が如何にして成長して居るか、又現在部員に、吾々の部が如何にして生育して來たか、或は校友、諸先生に朧氣ながら分つて戴ければ幸甚。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

中學時代の憶ひ出

校友會幹事　岩崎平助

私の中學校に入學したのは明治四十一年ですから二十六年前の話であります。恰も學社時代から中學校に改稱された翌年で、母校中興の名校長瀧山先生十年間御勤續の後半五年間であります。此頃は正に天下の模範校として名聲隆々其名海内に轟き、小松原文部大臣を始め舊藩主徳川頴倫侯、米國エール大學校長ラッド博士夫妻、東久世伯爵、杉村楚人冠、鐮倉圓覺寺管長釋宗演禪師、村岡理博、水野工博、藤村文博、森外三郎氏、山本良吉氏其他知名の人士陸續として來校し、何れも眞に天下の模範校たるの實を備へてあると激賞された頃でありますから、私の在學五年間は丁度この黄金時代の中核をなす期間でありました。この意味で私の中學時代を思ひ出す度に無上の光榮と幸福とを感ずるのであります。當時すでに天下に名高い中學が夥多あつたが而も遠く信州、甲州東京邊より西は四國、九州、朝鮮あたりから一年級へ入學する有樣、之を以て見ても眞に海内隈なく知れ渉つて居たが模範校だと頷かれるでありませう。

何がさうさせたか、何が故に模範校として其名を天下に轟かしたかといふ事は、當時若かつた自分には充分分らなかつたが、以下數項書いて見ませう。

一、當時の生徒は何れも稜々たる氣慨に富んで居た事は特筆大書すべきであつて、誰でも極度に自己反省して少なくとも自己の行動の他の模範とするに足るべく心掛けたものです。知育に体育に特に徳育に於て一層痛感出來るのであります。學校自体が崇高なる有徳者の創立にかゝるものなれば、之れを無上の矜持とし茲に學ぶ者誰かこの誇りを穢してなるものかとの自重心強く、爲に校内は最も神聖なる大道場と化したのであります。一例を擧ぐれば試驗時の如きも無監督でさへあつた事があります。先生は問題を板書して用紙を配つてさつさと職員室へ歸つてしまふ。生徒は互に相誡め合つて不正など働く者一人もなく、たまゝ〳〵カンニングなどするものあらば相互制裁にて撲滅せしめたのであります。監督なしで試驗を行ふなんぞいふ事は他校では絶對に行はれられない理想であるが私等は其理想を實地に行つて來たものであります。又一例を擧ぐれば、或年の夏東朝社主筆杉村楚人冠氏の來校を受け、親しく宿舍に起臥された時の事であります。正午過ぎ同氏は寄宿舍裏の松原を逍遙された所一生徒松林中にハンモックをつり夫れに横はり乍らノートを一心に讀んで居る。杉村氏の近づくを知りハンモックより下りて一禮すれば、杉村氏生徒のノートに目をつけて曰く　杉村「それは何のノートか」生徒「修身の筆記であります」〈當時は修身の教科書なく全部校長の訓話

を筆記したもの〉杉村「試驗でもあるのか」生徒「否」杉村「何故修身の筆記など讀んで居るのか」生徒「之を讀むのは何となく面白いから」――この一エピソードが杉村氏を痛く感激せしめたと申します。修身のノートをよんで面白いと感ぜしめる位訓話が徹底して居るのか、近江聖人の昔を今目のあたり見る心地がすると述懐せしめたといふ。さすがに見聞の廣い新聞記者をも驚嘆せしめたといふ事です。之は一二の例にすぎませんが萬事かくの如くで、以つて當時の生徒の氣風の一端を伺ふに足りると思ひます。然し之は主として徳育に關する話ですが、運動の如きも例へば庭球野球の如きも遠く和歌山方面へ遠征して完全に覇を唱へ和歌山の街を耐久の制服で闊歩したものであります。試合の時など多人數で彌次られても僅々數名の應援團で彌次り返して敵方の彌次團を慴伏せしめる丈の氣慨があつたのであります。殆ど剽悍と名のつく程稜々たる氣魄に富んで居たのは痛快であつた。之を要するに生徒各自に創立の精神並に母校の燿やかしい歴史を重んじ且つ校主や校長各先生方の教育精神を充分理解し何事も自治的に處理し何處までも模範校たるの實を擧ぐる樣努力したのであります。

二、寄宿舍生活　常に百四五十名の舍生を擁し、自ら當番をきめて自炊もすれば湯も沸かす。自炊當番の如きは冬の日も早朝に起きて一時に五六斗の米をたく。それすら大事業であるのにおかずもたかねばならずそれを料理して盛り分けねばならず、お茶の如きも一二斗沸かす。とても早朝から炊事場は修羅場であつて而も毎日繰り返すのだから大したものである。それでも誰一人苦情をいふ者もなく皆孜々として當番長の命の儘に動く、まるで聯隊の炊事場の樣である。而も寄宿舍の周圍には何等の圍ひもなければ、出入の門は二本の柱が立つて居る外扉がない。青山も動かず只白雲の去來に任せる底、奥床しいなんぞ云ふばかりでない。かて、加へてこの寄宿舍には門限といふものがない、出入一に生徒の氣儘勝手にしてあり、又罰則といふものがなく又受けるものもない、全く當世には珍らしい自由境であつた。かくの如く全く解放された自由の里ではあつたが自由の反面に於て生徒の責任感が一層強かつたので決して脱線するものが見たくもなかつた。是も耐久中學校の異色の一である。

三、次に憶ひ出深きは毎年行はれた天長、紀元二大節の夜の夜會である。之は本年久方振りに擧行いたしましたが、當時は運動會と共に三大行事として觀覽者堂に滿ち盛況限りなし。先生の謡曲や仕舞生徒の各種の餘興等悉く自らの手で構作したものゝみで茲にも自治の精神は遺憾なく發揮されて痛快である。近鄉近在の人はこの餘興を見んとて入場券を奪び合ひ遠近を問はず、夜の更くるを厭はず來集し已

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

が子弟の餘興に興ずる樣全村を擧げて一大家庭たらしめ之が又生徒勸誘の上に校運を隆昌ならしむる上に預つて力があつた事と確信する。

四、次に先生も生徒も勤勞を厭はなかつた事　當時は中學でありながら手工もやれば農業も營む。手工では自分等が主になつて教室用の机を製作した。約七十脚位も出來たでせう。勿論職人ならぬ素人の事であるから立派な物は出來なかつたらふが二十何年後の今日迄何處かの教室に殘つて居る筈である。又農業は約四反ばかりの畑でしたが芋も作れば菜も野菜も作る。雞も豚も飼ふ。之は正課の時間に行はれたのでしたが、臨時に土木事業例へば附近の山から土を運んで道路や運動場を修繕し、梧陵翁の墓掃除は毎月十九日に八幡の森で行はれ、明神山の植林や文房具品の生徒販賣等迄勞働を尊び勤倹力行を勸めてくれた。道路普請の後で農園で作つた芋を蒸して先生も生徒もむさぼり食ふ。その園藥さといつたら師弟や親子やら朋友やら分らぬ親密さは今も忘れる事の出來ないものになつてゐる。

五、當時は二、三艘の短艇があつて時々ボートレースを行つた。自分等も時々それに乘つて栖原や刈藻等に行つたのが再三でなかつた。又一年一回二三日泊りで發火演習に出かけた。金屋方面、箕島方面、御坊方面に行つたのが特に印象が深かつた。此時は全生を戰鬪員と非戰鬪員に分ち非戰鬪員は全校の職員生徒の二三日分の食糧をつんだ大行李を引きながら行つたものだ、炊事は寄宿生が一手に引受け一時に一石以上の大炊事を誰に手際よく又頗る無造作にやつてのける。毎日の訓練といふものは恐ろしいものである。其他書き綴れば偉人又は歴史上著名な人の命日忌日を卜して祝祭會をやつたり、毎朝必づ行つた二十分間の朝會で校歌を合唱し諸先生より夫々特色ある訓話を聞かして貰つたのも深く腦裡に刻まれて居る。私の在學當時は私立時代で隨分思ひ切つた教育法が施された樣に後日になつて感じられた。この人格的自由教育並に勞作教育など約二十年後にして一般世間で主唱される樣で、たしかに實山校長の慧眼には恐れ入らざるを得ない次第である。

今日母校八十周年記念式も無事終了し恩師實山校長にも劣らぬ名校長廣瀬先生御統率の下に校運は益々隆盛ならんとし往年の黄金時代又目捷の中に來らんとして居ます。吾等はこの中等教育への眞の完成の日の一日も早く將來せん事を熱望して茲に駄筆を擱く事に致します。

昭和八年六月一日

創立回顧劇

「浪に抗して」　三幕四場

八十周年記念夜會上演臺本

飯沼仁一作

人物及配役

濱口梧陵　岩崎平助
濱口東江　中井長二
岩崎明岳　宮地芳信
小野石齋　岩崎茂
海上六郎　鎌田彌一郎
嘉平　山田良吉
利助　林昌治
番頭　阿瀬卯兵衛
女中　鎌田彌一郎
男甲　小賀久七
同乙　神人惣一
女甲　阿瀬卯兵衛
老婆　寺柚政雄
村役人　岩崎茂
いち　鎌田彌一郎
新六　堀田健三
久吉　宮地芳信
其他村人

時代　安政元年秋より同二年春まで
場所　有田郡廣村及其附近

〔第一幕〕

第一場、安政元年の秋。街頭。幕の外で行はれる。嘉平登場、續いて利助登場。

利助　おい、嘉平さんぢやないか。何處へ行くのや。

嘉平　鳥渡濱口さんの内へ。

利助　さうか、儂も行くところや。丁度良かつた。一緒に行かう。（嘉平の提げてゐる物を見て）それ何や。

嘉平　これか。これ鯛ぢや。今沖で釣つて來たのを一匹上げようと思ふて來たんや。

利助　儂も誰らんもんやけど、差上げようと思ふて持つて來たのぢや——それやさうとお前とこの親爺さんが去年の秋時化で船と一緒に分らんやうになつてから、相變らず便りがないのか。

嘉平　その當座は何時かヒョツコリ歸つて來るかも分らんと夢に見たり、待つ氣もあつたが、今ぢやすつかり諦めてしもた。

利助　さうか。元氣な人やつたけどな。

嘉平　運が惡かつたのやろ。親爺が舟もろ共に分らんやうになつた時にや全く世の中あ闇ぢやつたよ。あの時、梧陵さんが金を貸して呉れるし、舟まで拵えて呉れた。それでなかつたら今頃儂やこの村に居やれなんだ。思ひ出すと有難

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

涙あこぼれるよ。

利助　儂も母親に患はれて思ひ掛けん度用が要つて苦しんで る時に助けて貰ふたのや。金は出來た時に返して呉れりや と仰言つて一寸も請求なさらんが、さうされると返さんで るやれんやうになる。精一杯働いて返す積や。

嘉平　儂等みたいにお蔭を蒙つてるのは五人や十人できくまいな。

利助　うん。

（兩人上手へ退場）

幕開くと濱口家の座敷。梧陵と番頭が對座して話してゐる。

番頭　私から申上けてはさしでがましいやうでございますが少しはお内のことをお考へになつて下さいませ。

梧陵　お前は先刻から内のこと内のことゝ云ふが、國のことを考へんでも關はんと云ふのか。

番頭　いや、さう云ふ譯ではございませんが、何分にも費用が量むことでございますから、青年の調練はお止めになつて下さいませ。

梧陵　家のために思ふて言ふて呉れるお前の言葉は何でも聞き度いが、このことばかりは聞入れられん。村の青年の訓練のため少し位の失費は支障へなからう。

番頭　少し位と申されますが月々の入費でも大したものでございます。不時の用意にと蓄へてる梅干、澤庵だけでも五六丁もございます次第で。これが他のことに使はれる金でございましたなら、私が兎や角申上けるのではございませんが、これではまるで金を捨てる樣なものでございます。

梧陵　人間、金を儲けるばかりが能ぢやない。儂には儂の考へがある。

番頭　ではございませうが、村の青年の訓練にまで手を出されなくとも……

梧陵　お前は、儂が物好きで鐵砲を擔いで驅け廻つてゐると でも思ふてゐるのか。又儂がやらなければ一体誰がやつて呉れるのだ。

番頭　それはお上へ任せておけば、宜しいのでございませんか。

梧陵　しかし、今の幕府が何の頼りにならう。兎に角、もうこの話は止めて呉れ。以後一切言ふて呉れるな。

番頭　それでも——

梧陵　そう云ふな。云ふてもこれ丈けは聞かぬ積りぢやからな。

（暫く沈默。番頭は不滿らしい樣子）

（女中登場）

女中　あの、たゞ今嘉平さんが大きな鯛を持つて來て呉れました。それから利助さんが百合根を。

梧陵　さうか、二人はもう歸つたのか。

女中　いゝえ。

梧陵　では、話があるからと此方へ通して呉れ。

女中　はい。（去る）

番頭　此の座敷へ通すのでございますか。

梧陵　惡いのか。

番頭　（返事なし）

（女中再び登場）

女中　仰せではございますが、裝が汚いから何れ改めてとのことでございますが——

梧陵　裝は如何でも關はん。忙しいのなら仕方がないが、さうでなければ通して呉れ。

女中　はい、畏りました。（退場）

番頭　私は一寸——

梧陵　もう遠ひ東江さんに明岳さんがお見えになるかも知れないが、お見えになつたら直ぐ此方へお通し申して呉れ。

番頭　畏りました。（退場）

（嘉平と利助登場）

嘉平　寔に見苦しい格好で恐れ入ります。

（利助も共に挨拶する）

梧陵　そんな遠慮は要らん毎日顔を合せてゐるのだからな。今日は珍しいものを持つて來て呉れたさうだが、以後は決してそんな心配をせんやうにな。

利助　ほんの詰らないもので、失禮でございます。

梧陵　如何だ。教練は少し馴れたかな。

嘉平　はい。始めた頃から見れば餘程樂になりましてございます。

梧陵　大分樂になつたか。そんなら早速今夜からもつと烈しくやつて見ようかな。

（兩人顔を見合せる）。

梧陵　近頃は忙しいか。

嘉平　お蔭樣で、相當漁がございますので、この分では拜借致しました金子も少しづつお返へし出來るかと存じて居ります。

梧陵　それは何より結構だ。しかし、何時も云ふ通り、無理をしてまで返して呉れるに及ばんぞ。（利助に）今年の取入れはどんなものだな。

利助　この夏は照込みが强過ぎて水の足りない田もございましたが、先づ平年作でござゐませう。

梧陵　さうか。儂はまた良くて八分作位ではないかと心配して居つた。（間）それから話と云ふのは他でもないが、近い中に夜學を始めようと思ふてゐる。これはまだはつきり極つてゐるのではないが、相當な人を迎へて教へて貰ふ積りだ。さうなれば消達も入つて呉れるであらうな。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

嘉平　それは私共にとりましては願つてもない仕合せでございますが、何分この様な暮しをしてゐるのでは、盆正月に先生方への付届けも出來兼ねますで——

梧陵　その心配は無用ぢや。出來ない者には儂から謝禮をするからな。

利助　この上そんなにまでして戴いては罰が當ります。

嘉平　全くお禮の申上げようがございません。

梧陵　禮は皆が立派な人間になつてからにして貰はう。

利助　お話中でござるますが、一足お先に御免蒙ります。

梧陵　用があつたのか。引止めて濟まなかつたな。大勢に號令を掛けてばかりゐるのでは如何しても落付いて、思つてゐることを話せんで困るので、斯うして膝突合せて語りたいと心掛けてゐながら遂ひ支障が生じて思ふやうに行かんでな。これに懲りずに、暇な時には時々訪ねて來るやうにして呉れ。

（利助、座を立つ）

嘉平　では、私もこれでお暇させて戴きます。

梧陵　さうか。

（二人退場、番頭入違ひに入つて來る）

番頭　たゞ今のお話を伺つてゐますと——

梧陵　何だ、お前聞いてゐたのか。

番頭　この上又夜學とやらを始めなさるとのこと、以ての外でございます。お叱りを受ける覺悟で私が申上げるのはお家のためを思へばこそでございます。青年訓練だ、夜學だと一文の儲けにもならぬことをなさるのを默つて見てゐるのでは、番頭たる私の役目が勤まりません。

梧陵　お前の言葉は有難いが、何遍も云ふ通り、これ丈けは聞けぬ。

番頭　と申されましても——

梧陵　くどい。もう云ふて呉れるな。

（東江、明岳登場）

番頭　これは〳〵、お出迎へも致しませず失禮致しました。

梧陵　お忙しい所をお呼び寄せ致しまして恐れ入ります。

東江　いや、別段これと云つて用もないのでございますから朝夕は餘程凉しくなりました。

明岳　稻刈も近い中に始りませうな。

梧陵　どうぞ、御ゆつくりと。（退場）

番頭　世の中が益々騷しくなるばかりで、この先は如何なることやら見當がつきません。

東江　しかし、如何なるか分らんと云ふ見當丈けは確かなものですな。

明岳　全くです（笑ふ）幕府の立場の苦しいことはよく分りますが、あの弱腰では心細い至りです。

梧陵　それに就いて私から話し度い——と云ふよりもお願ひ

致したいのです。丁度、今も村の若い者が見えましたから話したのですがこの度夜學を開かうと思ふのです。

東江　成程。

梧陵　教練の方は一通りとまで行くまいが、兎に角やる丈けのことはやつてゐますが、學問の方は皆目お留守になつてゐます。これではいけないと思ふのです。幕府が賴むに足りないと知つた上は、地方青年を有事の際に役立つやうに仕立てねばなりません。しかし、それには單に武を練るばかりではなく、大いに新しい智識を取入れなければならないと思ふのです。

明岳　それで夜學を思ひ立ちなされたのですか。

梧陵　まアさうです。先程、又要らんことを始めると云つて番頭から叱られたのですが、云ひ出したからにはやらずに居られない性分でして。このことは以前から心の中で考へてゐましたが、果して自分にやれるか如何かと迷つてゐたのです。しかし、事態が愈々切迫して來ます、くよ〳〵してゐる場合ではないと考へたのです。そこで意を決して御相談申す次第でございます。

東江　これには何か動機がありさうに思はれますが——

梧陵　さうです、去年の六月、アメリカの軍艦がやつて來て威かし半分に開港を迫つたことは御存知でせう。その時私は丁度江戸に居りまして、是非外國へ渡つて各國の文化を視察したいとの念に動かされました。で、知合ひの役人を通じて海外渡航の許可を幕府に願つたのですが、ねつから許しがなかつたのです。中には密航を勸める者がゐましたが、私としては公然と渡航したいので、こそ〳〵と渡り、こそ〳〵と歸つて來るのでは視察して來た結果を公けに發表することも出來ないから骨折損だと考へたのです。辯解するやうですが、決して之は私の臆病からではなかつたのです。

（この間に女中茶菓を持つて來る）

明岳　それはよく分つてをります。

梧陵　渡航が許されず、斷念の止むなきに至つた時、先づ地方青年を教育しなければならない、これこそが自分の使命であると悟つたのです。

東江　それで何時もより早く歸鄉なさつたのでございますか

明岳　實は儉り早く歸られたので如何したことかと不思議に思つてゐたのです、さうでしたか。

梧陵　そんな譯でございますから、夜學設立につき私の意の存する所を汲んで戴きたいのでございます。

明岳　崇義團組織の當時は武を專らにする方針であつたやうに思ひますが、今度のはさうでないのですか。

梧陵　其處です。あの頃は黑船に怯えて、ただ攘夷のために盲目になつてゐたのです。しかし、現在世界の狀勢から推

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

して擯夷一本槍では行けないことが分りました。アメリカ其他の國が威し付けるとは云ふものゝ何も戰爭を持掛けるのではないのですから、禮を盡して交際を求めるのなれば吾國も妄りに拒むべきではないと信じるのです。要は威し付けられない丈けの文化、國力を持つにあるのです。尊王攘夷を以つて倒幕の具に供する輩はいざ知らず、眞に國を憂ふる者の第一に考へなければならないのは國力の充實であると思ふのです。

東江　その目的を遂するために青年の敎育の必要が認められるのですな。

明岳　私とても頑迷な鎖國は反つて國を亡す素であると考へて居ります。外國の長所、殊に驚くべき程の發展してゐるその文化は寛大な心で攝取すべきでありませう。議論は先づこれ位と致しまして、夜學には何處か適當な場所があるのでございますか。

梧陵　私も考へて見たのですが、何處か心當りがありませんか。

東江　あの吉田さんの裏納屋は如何でせう。確か空いてゐたと思ひますが。

梧陵　空いてゐるのなら當分それを借りることにしませう。初から大きなことは望めませんから。

明岳　名前はもう極つてゐるのでございますか。

梧陵　極つてゐると云ふのではありませんが、耐久社としたら如何でせう。他にもつと良いのがあれば變へても宜しいが。

明岳　耐久、久しきに耐へるですか。

梧陵　さうです。

明岳　結構だと思ひますが。

東江　良い名前ですな。

梧陵　創立までには色々困難があること、思ひますが、青年の敎育訓練のために吳々も御協力をお願ひ致し度いのでございます。

明岳　及ばずながら一肌脫ぎませう。

東江　私も出來得る限りのことを致しませう。

梧陵　早速御承引下さいまして忝なう存じます。それでは、粉骨碎心耐久社創立のために邁進致しませう。

——幕——

〔第二幕〕

同日の夜。眞暗な廣村を見下す八幡神社の境內。數名の避難者が廣を敷き、戸で圍つたり、蒲團を被つたりして寒氣を凌いでゐる。

男甲　昨日はあの地震で津浪が來んのやないかと心配して、この八幡さんの境內で野宿したが、今日は朝からよう晴れて餘りえゝ天氣やから大丈夫やろと思ふて家へ歸つたのが惡かつたのや。ほつと安心してる所へ昨日よりも大きなやつがぐら〳〵つとやつて來た、と思ふ間もなしにあの津浪ぢやないか、何を取出す暇もない。全く着のみ着のまゝぢや。

男乙　誰しも同じこつちや。あの津浪ぢやかなわない。

男甲　今朝村へ歸る時には、今夜も慄えもてこの境內で夜明しせんならんとは思はなんだ。

男乙　何しろえらいことになつたもんぢや。

子供　腹減つた。

女甲　姦し云はんと待つてなよ。

子供　腹減つて寒いな。

女甲　姦しいな。この子は。

男甲　頑是のない者をまァそんなに叱るもんぢやない。

子供　（泣き出す）

男乙　丁度夕飯前であつたさけに、皆晝飯を食つただけやから腹減つてるよ。子供は尚更のことぢや。

女甲　そんなに泣くと又大きな地震搖つて波が來るぞ。

男甲　小さい者を威すなよ。

男乙　（腰を浮かせて）あ、あれや何ぢや、あの火は。

男甲　すゝきを燃やしてるんぢやないか。彼方にも、此方にも。

男丙　さつき若い者が炬火を持つて、梧陵さんと連れて行つたが、すゝきへ火を點けたのぢやな。

男乙　何時又波が押寄せて來るやら分らんのによう呑んなとこへ行けたもんや。

（女乙が狂氣のやうに驅けて來る）

女乙　儂とこの信吉を知らんか。

男乙　目に掛らなんだな。

女乙　一緒に逃けて來たんやけど途中ではぐれて失ふて——

男甲　さう心配しなさんな。

女乙　あが子を失ふて心配せんとるやれるか。

（女乙慌しく去る）

（吉松登場。無言で蹲つてゐる老婆に話す）

吉松　婆さん。

老婆　吉松か。おいちが見付かつたか。

吉松　探せる丈け探して見たが見付からん。暗い上にこの騷ぎやさけに、夜が明けにや分るまい。

老婆　あたしやもう泣く力も無うなつた。

吉松　もう一遍探して來て見よか。

老婆　さうしてお呉れよ。

（吉松退場）

（二人の青年が炊出しの握飯を持つて配給に來る）

青年一　おつと、二つづつ取つてお呉れ。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

女甲　これはまァ御苦労さん。にんにこ持つて來て呉れたぞ（子供に食べさせる）

（各人握飯を取つて喰ふ）

青年二　まだ彼方の方は配つてないんやが、足らんかも分らんな。

青年一　有る丈け配つて見よう。

（二人去る）

男乙　（丙に）さうガソ〳〵喰ふなよ。

男丙　さう云ふお前もぢやないか。

男甲　此處から見下すと村はまるで眞暗な海の底ぢや。灯一つ見えやせん。

男乙　すゝきの燃える火の勢も大分弱なつたな。

男甲　おいッ。又大きな波ぢやないか。

男乙　あッ、あッ、すゝきの火も消えて失うたぞ。誰もあの波に持つて行かれにやえゝが。

（女等は身振ひする）

男丙　家も田も、何も彼も波に洗はれて、明日から一体如何すりやえゝのぢや。相當な身寄りでもあるのなら關はんが心細いこつちや。

女甲　空は眞暗ぢや。

老婆　何も見度うない。聞き度うもない。

（若い女が通り掛る）

老婆　おい、おいちぢやないか。（女は驚いて振返るが默つて去る。老婆は人違ひだと知つてがつかりする）矢張り違うたか。

女甲　夜が更けると餘計に寒うなつた。（子供に）おい眠つたのか。

老婆　あたしやもう生きた空ァせん。一そのこと死んで失ふた方がましぢやつた。

男乙　婆さん、緣起でもないことを云ふものぢやないよ。おいちさんが死んだと極つたものぢやなし、この騒ぎぢや誰が何處にゐるやら分らんのが當り前や。

老婆　さう云ふて呉れりや有難いが、あたしやあの娘が死んだんぢやないかと思ふともう——

男乙　夜が明れば分るよ。

女甲　早う夜が明ければえゝのにな。

老婆　夜の明けるのが待遠しいけど、夜が明けてもおいちが見付からんと思ふと、夜が明けん方がえゝ。

（利助が息をはづませながら現れる）

男丙　おゝ、村の方へ行て來たのか。

利助　梧陵さんに連れられて、十人ばかりですゝきへ火を點けて來たのや。

男甲　村は如何ぢやつた。

利助　如何も斯うもない。色んなものが轉がつてゐて足の踏場もない程や。それにこの暗闇では如何することも出來やせん。仕方なしにすゝきへ火を點けたのや。すると間もなしに山のやうな波がやつて來てすゝきの火も消して失はれた。若し村の中まで入つて行てたら、それこそ今頃は佛さんになつてたやろ。

女甲　恐しいこつちや。

男甲　あの波や一番大きかつたらしいの。

利助　ほんそこらあたりまで押寄せて來てたよ。あの時や、無我夢中で走つた。何處を如何走つたのやら分らん。さァ斯うしても居れん。一寸法藏寺の方へ行つて來う。（去らうとする）

老婆　利助さん。

利助　何か用か。

老婆　あの、あたしとこのおいちに逢はなんだか。

利助　逢はなんだな。

老婆　お前さんこれから法藏寺の方へ行くのなら、若し逢ふたら、あたしが八幡さんの境內にゐるさけにと云ふてお呉れよ。

利助　うん、逢ふたらさう云はう。（去る）

男甲　あゝ寒い。婆さんも寒からう。これ着てなよ。（蒲團を掛けてやる）

老婆　大きに有難う。寒い位は何ともございませんで。

（彼方此方で「〇〇ないか」と探し叫ぶ聲がする）

（村役人登場）

役人　梧陵さんは先程確か村の方へ行かれたが、まだ歸らんかな。

男乙　まだ見えませんが。

役人　一緒に出掛けた若い者も通らなかつたか。

男丙　へえ、今利助さんが村へ行つて歸つて來たと云ふてゐたが、あなたさんはお逢ひなさらなんだですか。

役人　儂は逢はなんだ。

男乙　（指しながら）あ、其處へ見えるのがひよつとすると梧陵さんかも知れませんぜ。

（一同その方向を透かして見る。間もなく梧陵と新六が現れる）

役人　梧陵樣でしたか。皆が心配して居ります。

梧陵　いや、私はこの通り安全ぢや。それより先刻の園ひ米の交渉は都合よく行つたか。

役人　それがです。

梧陵　藏を開けて呉れませんか。

役人　何分この樣な有樣ですから是非にと談じ込みましたが庄屋を始め村の役人共が、無斷で御藏米を出しては殿樣からどんなお叱りを受けるやら知れんと云ふて承知しないのです。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

梧陵　そいつは困つたな。じかし、私は米を貸して呉れるやうに重ねて話して見ませう。又若し御藏の米を出して罪に問はれるやうなら私一身で引受けて、他に累を及すやうなことはしないからと說いて見ませう。この一千何百の者を見殺しにするには忍びません。

役人　御尤もでございます。それから村の樣子は如何でござゐましたか。

梧陵　この上悲しい知らせを聞せたくはないが、村は全滅、泥の海ぢや。私がその一本松の所まで引返して來た時、前よりも大きな波が襲うて來て、燃え上るすゝきの火も消されて失ひました。（間）おゝさうだ。藏の圍ひ米を借りに行かねばならん。（步き出す）

役人　私もお伴致します。

梧陵　握り飯の方は一通り行渡りましたかな。

役人　大体一通りは——

梧陵　この邊へも。

男乙　はい、戴きましてござゐます。

梧陵　さうか。（新六に）お前怪我でもしたのか。

新六　はい、大したことはございませんが。

梧陵　そんなら此處らで休んでゐるがえゝ。

新六　これ位の傷で、大丈夫でございます。

梧陵　人手が要る時には呼びに來るからな。休んでゐるがえゝ。

新六　（梧陵と役人退場）

男乙　（新六に）大したことはないのか。

新六　うん。今になつて急にズキン〳〵痛み出した。

男甲　それは悪いな。

（新六、脚を撫でる）

新六　なーに、直ぐ直るよ。梧陵さんのことを思へばこの位の傷は當り前ぢや。

男乙　それもさうやが。

新六　梧陵さんが指揮して呉れたればこそ行けたのや。そいでなけりや誰でも行けるもんぢやない。危險極る闇の中へ飛込んで行くのに、常日頃敎練の指揮をしてゐるやうな調子でゐなさるんやからな。

男乙　さうかな。

新六　梧陵さん以下十八人で炬火を持つて行つたが、その途中、行く手に迷うてゐた者を十人ばかりも救うた。若しさうでなかつたらあの人々は先刻の波に浚はれてゐたに違ひない。

老婆　十人ばかりも救うたのか。その中においちがなかつたのか。

新六　（老婆に氣付き）おいちさんが見えないのか。

老婆　そんならもうあの娘は生きちやゐまい。お前さんはおいちの顏を知つてるのか。

新六　知つてゐるどころぢやない。婆さん。

老婆　新六さんであつたのか。あたしや誰や知らんと思ふてた。內の吉松に探させてるし、皆を捕へて訊いて見るのやが、とんと分らん。

新六　そりや一体、何處ではぐれたのや。

老婆　何處ではぐれたのやら薩張分らんよ。

新六　そいぢや、何處かに紛れてるのやろ。おいちさんも婆さんを探してるかも知れん。

老婆　皆がさう云ふて呉れるが——

男丙　おい、其處へ誰か來るやうぢやないか。

（皆の者が其方を見る）

（裾を濡らしたおいちが力なく步いて來る。新六は自分の傷も忘れたやうに走り寄る）

新六　おゝ、おいちさんぢやねえか。（手を執つて連れて來る）婆さん、おいちさんだよ。

老婆　おいち、心配したぞ。

（おいちは無言で濡れた裾を絞つてゐる）

男乙　お前さんそんなに濡れてゝは寒からう。火を焚かうか

男甲　と云ふても此處には火打の用意もなし、儂や其處らで火種を貰ふて來う。

男丙　それもさうやが、その着物ではたまるまい。男物でもえゝから、儂や一走り行つて借りて來う。

老婆　濟みませんでござゐます。

男甲　お互ひ樣ぢや。儂も行かう。（丙と共に去る）

女甲　あたしの着物を一枚（と脫がうとする）

新六　そんなことしちや、お前さんが風邪を引くよ。格好が悪いかも知れんけど、暫く儂のやつでも一枚重ねてた方が——（上に着てゐるのを脫いで、おいちに着せようとする）

いち　そんなにまでして貰はんでも。

（新六は關はずに後から着物を掛ける）

老婆　あたしやもう、お前は波に持つて行かれたのやとばつかり思ふてゐたよ。如何して今頃まで——

いち　皆と一緒に逃げ出したけど、道に迷ふて方角も分らんやうになつて田圃の中へ倒れてゐた。ふと氣が付くと眞赤に火が燃えてた。そ、それを目當てに草臥れた足を引摺つて來たのや。

老婆　危いところやつたな。

いち　あの火が見えなんだら——あゝ、考へる丈けでもぞつとする。

老婆　あの火はな新六さんたちが點けに行て呉れたんやぞ、

（新六を指す）新六さんは脚に怪我までして。よくお禮を云

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

ひな。

いち　有難うござゐます。

新六　すすきに火を點けたな儂等やが、それに氣付きなさつたな梧陵さんや。お禮は梧陵さんに云ふて呉れよ。（いちの顏を見る。二人の顏に微笑が浮ぶ。遠くで人を呼ぶ聲が聞える）

――幕――

〔第　三　幕〕

第一場、安政二年春の日の午後。堤防構築の現場。上手には積上げられた堤防。嘉平と青年甲、青年乙が慥つてゐる。新六が畚で土を運んで來る。

嘉平　もうすつかり春になつた。津浪から彼是半年になるからな。

青年甲　おい、新六さん一服したら如何や。

新六　（畚の土をあけながら）さうしようか。

青年乙　（煙管を天秤棒ではたきながら）新六さんはやけに馬力をかけて働くな。

青年甲　おいちさんを貰ふたからな。

青年乙　（鉢巻をつけて唄ふ）津浪が取持つ縁かいな、と。

青年甲　違ひない。

青年乙　何でもあの津浪の晩すゝきに火を點けなんだらおいちさんが死んでたかも分らん。その火を點けて呉れた新六さんが氣に入つたと云ふのぢやないか。

嘉平　そんなら儂も好になる筈やないか。あの時や儂も一緒に火を點けに行たのやからな。

青年乙　それもさうやな。

青年甲　ぢやが、あの晩、新六さんは、濡れたおいちさんに自分の着物を脫いで着せてやつたのやて云ふぢやないか。

新六　余り冷かすなよ。

青年乙　噂すりや影ぢや。おいちさんが來たよ。

（おいち、簞笥と茶呑茶碗を提げて登場）

いち　（耻らひながら）皆さん、澁茶で失禮でござゐますが、どうぞ。

青年甲　こいつは有難い。每日濟まないよ。

（各々茶を注いで飮む）

青年乙　（飮み終へて）もう一杯貰はうか。

青年甲　昨日今日は、日向は暑い位やな。（腰の手拭をとつて額の汗を拭ふ）

いち　あたしは一寸家へ歸つて來ますから。（去る）

嘉平　今日は海はよう凪いでるな。

青年甲　こんな素知らん顏をしてゐて津浪を起すなんて思ひも寄らんな。

新六　あの時のことを思ふと全く夢のやうぢやな。

青年乙　忘れるに忘れられん――とは云ふもの、如何やらあの時の苦しみが海らいで來たやうな氣もするな。

新六　津浪も津浪ぢやが、儂や津浪よりも梧陵さんの方が大きいのぢやないかと思ふのや。吾々は津浪に呑まれてたが梧陵さんは津浪を呑んで掛つたぢやないか。

嘉平　さう云やさうやな。その上、次の津浪に備へるためにこの土堤を拵へると云ふのぢやから、あたり前の人間にや出來ないこつた。

青年甲　あの津浪の夜が明けて村の有樣を見た時にや、一体如何して暮して行けるものかと途方に暮れたよ。家は潰れてゐる、田圃は石ごらになつてゐる。泣くに泣けなんだ。それに梧陵さんは隣村の庄屋さんに談判して圍ひ米を借りて下さつた上に、自分でも二百俵下さるし、他の人々にも說いて吾々のために當座の食に困らんやうにして呉れた。

青年乙　家のない者にや假小屋を建てゝ呉れるし、百姓道具を拵へて呉れるしな。この鍬も拵えて貰ふたのやで。（鍬を示す）

嘉平　儂なんざ、新調して貰ふたばつかりの舟をあの津浪で碎かれたが、そのことも云はずに默つて又新しいのを拵えて下さつたのや。

新六　梧陵樣は全く生神樣ぢや。何から何まで至れり盡せりぢや。

青年甲　それによ、村のためにこの土堤を自分で金を出して拵えようと仰言るんだ。儂等村のためやさけに只でも働かんならんところや。勿体ない話やないか。

青年乙　働いた日傭賃は其日〳〵拂ふて下さるし、その日暮しの儂等にや有難いこつちや。

嘉平　忙しい時には內の仕事をするがえゝ、暇な時に土堤普請せえと云はれるのやからな。斯う云ふちや失禮やが、働く者ア津浪のお蔭で反つて金儲けの道が拓けたやうなもんぢや。この土堤や五百間位も拵えるちうから、儂等三年や四年働ける譯ぢやないか。

新六　もう三十間ばかり出來たかな。

青年甲　その位やろ。

青年乙　この土堤を築くにも、たゞ築くんぢやなしに、今度の津浪から資永の津浪、それよりも前の津浪の高さや通り路まで調べてるのやて言ふぜ。

嘉平　そらさうよ。土堤へ松を植えるにも一本一本その枝振を調べてから何方向けて植えるかまで指圖なさるんぢやもの。ほんまに何處まで深いのか分らんな。

新六　それでゐて一寸も偉い顏せんから偉いもんぢや。

青年乙　ぢやから濱口大明神て云ふのや。

青年甲　百姓の作不作から、漁士の漁不漁まで吾がことのやうに氣になさるのやからな。この間もよ、儂や畦路を物を

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

搶うて行くと梧陵さんが向ふから來られるから避けようとする前に自分で田の中へ避けて下さつた。儂や何氣なく行過はうとすると、梧陵さんが「御苦勞樣」と聲を掛けて下さるのや。思はず冷汗をかいたな、あの時にや。

（久吉（四十才位）登場）

久吉　ちよいと皆の衆に相談したいことがあつてやつて來たがな。

青年乙　久吉さん、改つて何の相談ぢや。

久吉　他でもないが、儂等斯うして安心して生きて行けるな誰のお蔭ぢや。

青年甲　云はずと知れたこつちやないか。儂らも今話してたところや。

久吉　うん、さうか。そんなら、くどいことは云はんでも分つて呉れるやろ。一つ梧陵さんを祀るお社を建てようと思ふのぢや。儂や、今彼方で働いてる衆にも相談して見たがそりやよからうと云ふので、お前さん方にも話しに來たのや。

新六　誰かていやと云ふ者ァあるまい。

青年乙　そらさうやとも。

青年甲　儂らにとつちや、梧陵さんは命の恩人、生き神樣ぢやからな。せめてお社を建て、お祀りする位のこたァせんならん。

嘉平　それもさうやが、儂やそりや止めにした方がえゝのやないかと思ふのや。

久吉　お前や反對するのか。

青年甲　嘉平、一体お前や何と思ふてる。人一倍御恩を受けてるお前ぢやないか。その癖に——（腕を振上けて毆らうとする。乙が割つて入る）

青年乙　ま、まアそんなに怒るなよ。

青年甲　怒るなと云ふても怒らんとるやれるか。この恩知らず奴が。眼醒してやらんと氣が濟まん。こんな奴と一緒に働きたないわい。村の恥さらしぢや。

久吉　全くぢや。ぢやがな、嘉平さんにも何か譯があるのやろ。それを一つ聞かして貰はうぢやないか。

青年甲　譯も糞もあるもんか、お前や一人で反對するのやな。畜生。反對するならそれでえゝ。そ、其代り今日限りこの村にや居やれんと、さう思へ。

久吉　さう云はんで、嘉平さんにも云ふ丈けのことを云はせて上げたらえゝやないか。な、嘉平さん。お前さんはまさか梧陵さんの御恩を忘れたんぢやあるまいな。

嘉平　御恩は誰にも劣らず有難う思うてる。

青年甲　その御恩を受けつ放しにしようと云ふのか。

嘉平　いゝや、決してそんな積ぢやない。

青年甲　そ、そんなら何故——

青年乙　ま、待てよ。（甲を制する）

嘉平　頭から反對したなァ儂や悪かつた。しかし斯う思ふのぢや、梧陵さんを神樣に祀るために社を建てるがらと云ふても、梧陵さんは御自身御承知なさらんのぢやないかな。

新六　と云ふのは？

嘉平　梧陵さんの平生を見れば分るこつちや。たゞさへ高振られないあの方が、神樣に祀るなんてことァ聞入れて呉れまいからな。

久吉　成程、それも一理ぢやな。しかし、村の衆が相談し合つて此處まで話や纏つてるのやから、中途で止めることは出來ん。お前さんは、梧陵さんが御承知下されば、神樣にお祀りすると云ふ主旨には不服ないんぢやな。

嘉平　主旨には心から贊成でござるますよ。

青年甲　さうならさうと初から云ふたら、儂やあんなに怒りやせんのに。遂ひカッとなつてな。

嘉平　儂や悪かつたのや。

久吉　そんなら話や分つてる。で、お前さんはそんな考へかも知れんが、兎に角、一應梧陵さんにお話して見たら如何かな。

嘉平　お話しするだけならお話してもえゝやろ。

久吉　就いては、今夜から夜學が始まるとのことやから、その席でもお前さんなり、新六さんなりから申上げて欲しいのぢや。

新六　そりや儂が引受けるよ。しかし夜學の席では一寸云ひ出し悪いな。

久吉　なに、たゞお耳に入れる丈けのことやから、何處でも關はんやろ。實はお社が出來上つてから申上けようと云ふ人もゐるのやが、一應申上げてから建つた方がよからうと云ふことになつたのや。そいぢや頼んだぜ。儂やまだこれから廻らんならんとこもあるさけに失禮するよ。

青年乙　御苦勞でござんした。

（久吉退場）

青年甲　（嘉平の肩に手を掛けて）儂や早合點して、あんなことと云ふたけど怒るなよ。

嘉平　そんなこと何とも思てやせん。

（暫く間）

青年乙　そりやさうと、去年の一月に又アメリカのペルリたろべロリたろ云ふ奴、黒船を七杯も引連れて來たちうし、イギリスやロシヤ船も來たちうぢやないか。其中にこの濱へもやつて來るんやないかな。そんな奴を片端から打拂ふ譯に行かんものかな。

青年甲　それやさうお手輕に行かんよ。それでよ、梧陵さんが教練ばがりぢやなしに、學問も大事ぢやちうので夜學を始めることになつたのや。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

青年乙　夜學で黒船を追拂ふのか。

青年甲　そんなこたあるもんか。よその國にはあんな黒船は何杯でもあるのに、日本にや一杯もない。それで外國に負けんやうにするには學問せんならんと云ふので夜學を始めることになつたんやさうや。

青年乙　成程な。さうかな。

青年甲　儂やうまいことよう話せんけど、お前も夜學へ行けよ。さうすりやよう分るぞ。

青年乙　行くことにしようかな。

青年甲　嘉平さんも新六さんも行くのやな。

二人　うん。

嘉平　お前も是非行けよ。何なら今夜誘ひに行くぞ。

青年乙　ほいや、誘ひに來て呉れ。

嘉平　よし。それから行くのなら夕飯を食はんと腹を空かして來い。えらい御馳走が出るさうやから。

青年乙　そりや有難いな。どんな御馳走が出るやろな——まだ茶殘つてたかな。今日は無性に喉渇いて仕樣ない。（茶に噎せる）

新六　大分休んださけに、始めようか。今夜の御馳走を樂しみに。

青年甲　どれッ。御馳走を腹一杯喰へるやうに腹空かしに掛からうか。

（各人立上つて土運びの用意をする）

第二場。前場と同じ日の夜。吉田氏の裏納屋。梧陵、東江、明岳、小野石齋、海上六郎は上手に、村の青年、嘉平、新六、利助其他が下手に居並ぶ。

梧陵　——近くは一昨年、六月ペルリが浦賀に來り、一月に再び浦賀に來り、續いてイギリスの汽船が長崎に、ロシヤの軍艦が下田に參りました。斯く四海の狀勢を眺めますと吾國は正に非常時に際會してゐると云はねばなりません。この時に當つて私が新しき教育の必要を痛感し、こゝに居られる東江さん、明岳さん方に諮りまして幸ひ快く御協力下さるとの言葉を戴き、こゝに本日耐久社の創立を見るに至つたのであります。御集りの諸君は、耐久社創立の主旨は既に心得てゐられることゝ思ひますが、本日を機として層一層努力せられんことを望む次第であります。津浪を防ぐためには土堤を築かねばなりません。諸外國から蔑りを受けないがためには文化を築き上げねばなりません。それには、青年諸君の向上發展を俟つより他はないのであります。少し長くなりましたが之を以つて耐久社創立の挨拶と致します。

東江　先程からの梧陵さんの言葉に、これ以上私が附加へるべきことはございません。梧陵さんから耐久社設立について御相談に預りました時に、私は微力ながらもお盡しませうと約束致しました。兎に角、私として出來得る限り盡力する積で居りますから、如何か諸君も眞劍に武を練り學を究められんことを切に希望致します。甚だ簡單ではございますが御挨拶まで——

明岳　私が云ひ度いと思つてゐたこと——いやそれ以上のことを先に云はれて失つたやうで特に私から申すべきことが無くなりました。この耐久社創立の議が起りまして、その緒に就かんとした時、あの津浪に逢ひまして中絶して居りましたが、本日漸く開設の運びに至りました。最初のことであり色々不備な點もありませうか、諸君と共々に改善して行きたいと思つて居ります。殊に適當な場所が見當らず當分この吉田樣の納屋をお借りすることになりました。しかし建物の立派な所から必ず立派な人間が生れるものではありません。要は諸君の心掛け一つです。只今も梧陵さんから話された如くに、正に非常時であります。でありますから、波も立たぬ日に津浪のことを思ひ起し、有事の際に狼狽することのないやうに努力せられんことを望みます。

梧陵　一寸御紹介致します。此方に居られますのは此度諸君の敎導のため赴かれました小野石齋氏でございます。

小野　私は緒方洪庵先生を通じて此度當地へ招かれました小野と申す者でございます。諸君と共にみつちりと勉强致し度いと存じて居りますから、どうか宜しく。

海上　私は既にお馴染の海上ですが、本日耐久社創立の日を期して新なる氣持を以つて諸君に接する積で居ります。

梧陵　以上で本日の挨拶を終ることに致します。この中には昨年十一月の七日、あの津浪の翌々日、村の張番に立つて貰つた者が大分ゐるだらうな、その時小さな地震がある度に逃げ出した者がゐた。この中にも逃げ歸つた者がゐないかな。（中には頭垂れ、頭を掻く青年がゐる）そんなことでは困る。それから今日は創立紀念に御馳走をする約束をしておいたから、誰も夕飯を食つて來なかつたことだらう、如何だ食べて來たのか。

青年甲　いゝえ、食べずに參りました。

梧陵　君は如何だ。

青年乙　私も食べずに參りました。

梧陵　さうか、皆よく食べずに來て呉れた。私達も何も食べずに來た。夕飯の時刻は遙かに過ぎてゐることだから早速御馳走を運んで來ることにしよう。誰か一人來て呉れ。

（嘉平、梧陵に從つて退場）

（青年等ヒソ〳〵話し合ふ）

甲　どんな御馳走だらうな。

乙　おら先刻から腹グゥ〳〵鳴りよつて仕樣ない。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

丙　おい、大きな聲出すなよ。
（嘉平は握飯の入つたもろぶたを持つて梧陵の後から登場）
梧陵　今夜の御馳走はこれぢや。この握飯を遠慮なく二つづつ取つて食べて呉れ。私も食べる。
（青年等は期待を裏切られたやうな顏付、併し各人が握飯を取つてうまさうに食ふ）
梧陵　（自分も食ひながら）如何ぢや、味は格別であらうな。津浪の味がするであらう。津浪の夜、二つの握飯にありついた時を思ひ出しはせんか。
海上　梧陵さん、こりやしたゝか一本參りました。ハヽヽヽ
（爆笑）
東江　御趣向感じ入りました。
梧陵　これで創立第一日の一段が濟みました。これから私の指揮で八幡の森から金屋（カナヤ）の方を一廻りすることにします。
（立上らうとする。新六進み出る）
新六　一寸申上げたいことがございます。
梧陵　何か耐久社に就いての意見でもあるのか。
新六　いや、さうではありません。これは私一個の意見ではなく、村民全体の意見でございまして、私から申上げるやうにと仰付かりましたのでございますが——
梧陵　うむ、村民全体の意見とは。
新六　他でもございません。あの津浪の時を始め、その前後

あなた様から蒙つた御恩は量り知れません。その御恩の萬分にも報ゆるため、村の者が寄り〳〵相談致しまして此度濱口大明神のお社を建てゝお祀りすることに極りました。就きましては今夕一應お知らせ申して、その御承諾を得たいのでございます。
梧陵　おゝ、そんなことがあつたのか。私は少しも氣が付かなかつた。
新六　村を擧けてのお願ひでございます。何卒御承引下さいませ。
梧陵　いや、假令村全体の意見であるにしてもそれは成らぬ。
新六　御承知下さらないのでございますか。
梧陵　私は此の度の津浪によつて村の蒙へるのを愛へ、昔の盛んな頃の廣村に返さんがために、及ばずながら努力したに過ぎない。神にも佛にも祀られやうとは毛頭考へてゐない。若しそのやうなことをするのならば此の上お世話をすることは止めにする。
新六　とは申されましても——
梧陵　心持は有難くお受けするが、その儀は取止めるやうに申傳へて呉れ。それよりも各々が志を一つにして村のために働き諸君が耐久社創立の主意を身にしめて奮起して貰ひ度い。此のさゝやかな耐久社を、三十年、五十年、八十年百年と益々光輝あるものに盛り立て行つて呉れさへすればそれ以上のものを望まうとは思はない。私の望みはただこれ丈けだ。（間）それでは心から耐久社萬歳を唱へることに致しませう。
（一同起立、梧陵の發聲で耐久社萬歳の聲が起る）

靜かに幕

三三・四・三〇作

附記
耐久社創立は嘉永五年なるも劇中にては安政二年となり、從つて津浪以後になつてゐる。耐久社なる名稱は慶應二年に附けられたものであるが、劇に於いては創立當初に命名されたものとしてゐる。其他、劇の構成の都合上事實に相違する點あり、又觀客其他の關係を考慮して、心ならずも主人公の性格に反する科白を餘儀なくされた個所もある。
尙この作は主として杉村氏編「濱口梧陵傳」に依るものである。

小鳥でさへも巢は戀し
せめてその日の思ひ出に

慰靈祭に臨んで

五年　平木　秀

安樂寺の狹い御堂には立錐の餘地もなく、ぎつしりとつめられて、人の浪は縁側にまで押寄せてゐる。然し其所には緊張の空氣が堂一ぱいに滿ち溢れ、慰靈祭と言ふ觀念は十分各自の念頭に刻まれてゐる。淡暗き御堂を燭火はいやが上にも莊嚴にして、我々は仙境に來た心地がして、自然と佛の前に頭の下るのを感じた。僕はそれから瞑目をして靜かに先づ梧陵先生の肖像畫の御姿を思ひ浮べ、今迄に聞いてゐた先生のお話や八十年間の本校の歷吏の盛衰を追懷し連想した。やがて導師安樂寺住職濱口師が表白文を又廣瀨校長先生が祭文を讀まれた。其の間僕は此れ等の話句を一々頭でかみくだき考へてゐる間にたゞ感激に滿ち〳〵感慨無量で一語々々が身にしみ渡るのを感じた。そして遺族、校友、父兄總代、來賓の方々や職員及び生徒代表等が燒香をした。白煙は漾々と四方に立ちこめ、其の煙の中より梧陵先生が滿足な御顏で出て來られるかの樣に思はれた。やがて煙も跡を絶つ頃本校初代の故資山校長の肖像畫除幕式が行はれた。此れは本校卒業生の園部氏が畫かれたそうである。
笑みを含んだ溫順な慈愛に富んだ顏、きりつと結んだその口、健康其のものゝ樣な顏色等が實在の先生の前に居る樣な感を與へた。
其の後濱口儀兵衞、濵浦文彌。森外三郎の諸氏のお話ありて、最も意義深い式も無事終了した。此の時僕は色々お話を聞いて、我々は眞に創立精神に生き、益々我校の發展を計らればならぬ事を痛切に感じた。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

慰靈祭に列して

三年　竹内長兵衛

此の二三日前まで續いた梅雨の樣な雨はあとかたもなく晴れて、今日は雲一つ無い良い日和である。もう墨堤の花がそこゝに咲き初めてゐる。我々はその墨堤畑を通つて、慰靈祭に列すべく安樂寺へ向つた。

安樂寺に著くと、すでに來賓の人も大分見えられてゐた。待つこと三十分餘にして慰靈祭が愈々始められた。來賓の方は席席が無い位にたくさん見えられ、未だ遲れて來る方が大分あつた。誰も咳一つせぬやうになると愈々讀經が始まつた。讀經を聞いてゐる內に次第々々に心が妙に落着いてきて、佛樣の有難さが胸にせまつて來るやうである。皆の心が落著いてきた時分に讀經が終つた。續いて和尙さんによつて我が耐久中學校の偉大なる創立者濱口梧陵翁及び名校長、新教育の先驅者とうたはれた實山先生の靈前に燒香を恭しく捧げた。その時地下に眠られてゐられる兩先生は、どんなに耐久中學校の發展を驚き且つ喜ばれたことであらう。僕は胸が一ぱいになつた。今後益々耐久中學校の名を辱かしめないように、且つ耐久中學校の隆昌を心に誓つた。

再び讀經が始つた。靜肅な感じがひし〳〵と身にせまつて來る。しばらく讀經が續いた。やがてゆる〳〵と燒香の白い煙が立ち始めた。

式は終り、續いて今日わざ〳〵東京から見えられた濱口儀兵衛氏の講演が行はれた。氏は耐久中學校に緣故が深く、常に絕大の御後援を下されてゐる。我々の敬愛してやまぬ御方である。この御方の御話は耐久創立の精神を懇切に、又實山先生のことにわたりのべられた。このお話によつて僕は愈々兩先生の偉いことがはつきりとわかつた。次に實山校長時代の敎頭であられた瀧浦先生の有益なお話が長時間あり更に實山先生の兄さんのお話があつた。實山先生の兄さんは度々實山先生の肖像を振沉り〳〵お話をしてゐられた。やつぱり弟がなつかしいのであらう。兄さんは元三高の校長をしてゐられたそうで、こうも兄弟そろつて偉い人になられたのには驚いた。

講演が終つて皆思ひ〳〵に強く梧陵、實山兩先生の偉大なる人格に感嘆し、創立精神を強く胸にきざみつけながら門を出た。門を出るとぶんと墨堤の強い香が鼻をつく。空は相變らず晴れきつて東の方にある一つの白雲はじつとして動かない。梧陵先生の植えられた天州の松原はつきりと綠色に見える。梧陵先生の德がそこ、ここに一ぱい滿ち〳〵てゐるやうな氣がした。

創立八十周年を迎ふ

五年　最田正吾

四方の草木は皆新綠に蔽はれて、若葉の香も漂ひ始めてゐる晩春、我が第二の家庭たる耐久中學校は、創立八十周年記念式を擧行した。此の意義深き今、本校で學を受ける事の出來るのは此の上も無い光榮と思ふ。

抑々我が校は、嘉永の昔、黑船が盛に我が海岸に迫つて來た時、一世の偉人濱口梧陵翁が、同志の友二三人と相謀つて、鄕土の靑年を文武兩方面から訓育し、眞に鄕土を守り、祖國を護る樣な人格者を育成しようとしたのであつた。その當時以來濱口家が本校を私營せられて居た。然しその時分は、耐久舍で今の中學には及ばなかつた。後、初代の校長實山先生を迎へてからは、學校の面目を一新せられた。それから又色々と設備を完全にし、中學校令に依る私立耐久中學校となつた。大正九年よりは、和歌山縣營となつて今に及んだ。此の變遷の間には、校地も變り、經營者も變つたけれども、今に到る迄持久されたるは、是實に創立者の精神を寸体して來たからだ。

世の習慣として、榮枯盛衰を脫する事は出來なかつた。或る時は其の名を四海に博した事もあつた。又或る時は大して香ばしくない樣な事もあつた。然るに、其の名に負ふ耐久中學は、久しきに耐へて來たのは何の爲であらうか。此の如き嚴肅適切なる創立精神は、海內に中學は多いけれども、何れの地にも決して比類す可きものは無いであらう。且つ又八十年と云ふ長い美しい歷史の点に於ても、恐らく無二であらう。茲に創立八十周年記念式を盛大に擧げ得られるのは、決して偶然ではない。

記念行事の大略を述べよう。先づ五月六日には、學校と關係の深い安樂寺にて、慰靈祭を行つた。之は本校創立以來の、諸關係者多數の先輩の、御靈を慰める事を本旨とするものである。此の日、天は朗らかで、和風そよ〳〵として新綠の梢を渡つた。祭場安樂寺は相當込み合つて窮屈であつたが、生徒は最後まで靜肅さを維持し、敬意は十分現はれてゐた。尙當日は初代校長實山先生の肖像畫の除幕式をも併せて行はれた。

續いて第二日、此の日こそ最重要の意義有る日だ。即ち創立八十周年記念祝賀式が擧げられる。講堂はあまりに大きくはないために、全校生徒を收容し、來賓の方々、父兄の方々、及び校友の諸賢を大多數も收容する事は、大いに困難を感するのであつた、身動きも出來かれた位であつたけれども、生徒はどこまでも嚴肅の態度を失はなかつた。眞に盛大で、且つ莊嚴な感がせられた。午後は祝賀會の後、記念講演會があつた。

第三日八日は、我々の陸上競技大會だ。例年とは少しその趣が異つて、興味津々たるものがあつた。プログラムは順調に進んで行つて滯ることはなかつた。每年も觀衆は相當澤山有るが、本日はどうだ。あの廣いグラウンドの四周は、觀覽者の人山で滿ち滿ちた。その日は終了が少し遲れたから、大体の後片附をして一齊に解散した。

右三日間に亘つて、地歷理科及び圖書習字に關する展覽會が開催せられた。觀覽者每日その數を知らぬ程の盛況を呈した。

第四日目は全般的の後片附をして、敎室其の他全校內は、實に綺麗になつて、以上の樣な大事が有つたとは思はれない位であつた。

其の週土曜日は相撲、劍道大會あり、夜會も行はれた。翌日曜日は野球大會、此等も皆盛況裡に完了する事が出來た。

噫、思ふに此の記念行事は凡て、盛大に完了してしまつた事は、實に我々にとつて欣幸至極だ。天は我々の誠意を容れたのか、約十日間はよいお天氣で、萬事好都合に進行した。革新第三年の重任を負ふ我々は此の難行事を兎に角立派にやり通すことが出來た。

我々は此の大事業を完了した後も、怠惰あることなく、此を一時期として校風を益々充實し、地下に安眠せられる梧陵先生以下の先輩諸兄の御恩の萬分の一なりとも之を報じ、耐久中學校をして、永久に盛榮せしめなければならない。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

八十周年記念行事記事

五年　竹中敏光

昭和八年五月六日、我が耐久中學校四百の若人の待望久しかりし八十周年記念行事慰靈祭の當日は來た。五月始めよりの雨天も五日より快晴、六日又快晴太陽燦々として輝く、歡喜裏に運動場に集合して安樂寺に向つた。緊張の中に進行し、我等生徒の腦裏を創立者梧陵先生の創立精神がかすめ、そぞろに先生の偉大なる人格が偲ばれた。又故濱山校長の肖像が出され、出席下された濱口儀兵衛氏〔梧陵先生令孫〕故校長の際敎頭となされた瀧浦氏又は故校長の兄樣に當る森氏の御話を聞き一層感を深めた。

昭和八年五月七日、記念式典が行はれた。十時より校友、父兄、來賓入場して講堂充滿し、式典は嚴肅に進行し祝辭終り、最後に校歌を高らかに歌つて終つた。校友父兄にして我が校出身者は久し振りで校歌合唱し在りし昔の在學中の學校生活を思ひ出した事であらう。

十二時より演武場において祝賀宴會が開かれた。續いて講演會が開催土岐氏、瀧浦氏によつて盛大に行はれた。

五月八日、又晴なるも日照りつけず絶好の運動日和である。塵一つ無く掃き清められた校庭に白く浮き上つたコースの鮮かさ、色様々な萬國旗、學校生徒は勿論の事アーチをくゞる觀衆も運動會氣分に溢れてゐる。

君が代合唱終り廣瀬校長の開會の辭終つて、一年生の百米決勝をトツプに愈々運動會の幕は切つて落される。見よ、若き血潮に燃ゆる若人達の腕を、足を、そして躍動する男性美、健康美の極致を。

觀衆は刻々數を加へてグラウンドを包圍する。プログラムは進行し耐久放送局からは運動場の中心にある擴聲器を通じて競技の進行並に記錄を賑やかに場内にアナウンスして觀衆を飽かしめ無い。かくて競技はプログラム通り進行して晝食、憩ふ間もなく午後の番組に移る。

劈頭全校生徒の合同体操あり、その整然たるは賞讃に値する。小學生リレーで幕常科四百米リレー、高等科八百米リレー、青年八百米決勝あり、優勝は幕常科高等科共に濱中小學校に歸し、青年は宮原青年宮井君に榮冠下る。プログラム中「百足競走」「拜借競走」「龜さんの競走」「社會行列」等天眞爛漫自然に溢るゝユーモアを以つて滿場を笑殺せしめた。步戰は又寒快極りなく、やがて當日最後の呼物たる「演習」の火蓋が切られ、忽ち銃聲鳴りひびき其の間嚴然たる爆音を立てゝ發砲せられ勇ましく展開されたる紅白二軍の壯快なる野仕合であつた。

かくして我が校が校運益々隆盛なれと校歌合唱して閉會の辭終つて廣瀨校長の發聲の下に兩陛下並に耐久中學校の隆盛を祈つて萬歲を三唱して、此の盛會なりし運動會も最後の幕を閉ぢたのであつた。

五月十三日、午前校内劍道大會ありて、二年以上全部行ひ意氣勇ましく掛聲演武場になりひびき劍光火花を散らし緊張裏に進行した。

校内大會に於て花井君優勝の榮冠を獲得す。午後校外劍道大會、相撲大會有り、相撲大會昔の隆盛時代をしのんで盛大に行はれる。

又劍道大會は和師、海草中學等七校の外來校並に先輩地方有志警官等の參加を受け盛大極まり無し、接戰、接戰又接戰觀衆は汗を握り腰を浮かす、劍光飛び氣合膽をえぐる。遂に一等海草中學中場力二郎君に二等本校出身栗栖君に、三等和師沼君に下り、盛會であつた。角力劍道兩大會も終了す。夜七時より夜會有り午前一時近くまで行はれた。

五月十四日、野球大會有り、九時より行はる筑商對日中の試合は十五對五で筑商の勝となる。正午より耐久中學對和歌山中學の試合で我が耐久選手は奮闘し死守するも勝運に惠まれず古豪和中に倒された、實に十三對八であつた。後和商對海草の試合で一對六で海草の勝となり、山の如き觀衆の熱狂の下にいとも盛大に行はれた野球大會も終りを告げ、此の意義深き盛大な八十周年記念祝典行事も遂にゴールインしてしまつた。

創立八十周年記念

五年　安田浩洋

約一年も前から頭の底にこびりついてゐた記念日も早や目前に迫り明日は慰靈祭といふ五月五日、職員生徒協力一致してその準備にあたつた。綠門を造る者、展覽會場を造る者、那智の滝が黄昏れて濱風がさわさわ木の葉をゆすぶる頃、準備大体整ひ明日から始まる記念行事に胸躍らせつゝ歸途についた。

×　×　×

明くれば六日慰靈祭、服裝を正しく安樂寺に至る。香煙縷々として立ち上る中に私達は幾多の亡き師、先輩の冥福を祈り將來の母校の發展を誓はずにはゐれなかつた。

願はくは亡き人々よ！

安らかに眠つて下さい！

さ、かくして私達は慰靈祭を非常に有意義に嚴肅に行ふ事が出來た。午後は少し殘つた明日からの準備に急がしい。展覽會の見物人も增して來る。

×　×　×

七日記念式、若葉をゆすぶる微風も心地よく清々しい氣が學校全体に滿ちてゐる。五百名に垂んとする來賓、校友父兄等講堂に滿ちていとも嚴肅に式は始められた。「君が代」「勅語奉讀」に續いて校長先生式辭、各來賓生徒總代等の祝辭あり、皆一樣に創立者を崇め全國にも稀な八十年の貴き歷史およびその創立精神の脈々たるを讃へられた。私達は一種の誇を感ずると共に國家多事多難なる時にあたり深く〳〵胸底にに銘する所があつた。最後に校歌を高唱して母校の發展を祈りこの式を閉ぢた。こゝに附記したい事は文部大臣(代理)、知事閣下其の他多數來賓の御臨席を辱うし祝辭を賜つた事である。私達はこゝに心からの謝意を表したい。

午後直ちに來賓父兄校友の祝賀會が開かれ講演會が開かれる。

展覽會場は非常な人出だ。青赤黄と色とりどりの萬國旗、テープ、モールが張りまはされ請所に設けた擴聲器からは喧しくて期な曲が流れる。展覽會場の係は大童になつて右往左往する。迷子が泣き叫ぶ、あちらでは理化實驗で人々を喜ばせてゐる。地方の見物人は心血をそゝいで作つた生徒の作品に目を瞬る。暗室では活動寫眞や幻燈が映寫されてゐる。暮色が靜かに邊を包む頃明日の運動會の事を思ひながら家路についた。

＼　＼　＼

八日、愈々今日は最大行事の一つ記念大運動會だ。運動場の中央から萬國旗が八方に引かれ朝風になびき掃き清められた運動場に引かれ

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

たラインが白く、くつきりとしてゐる。運動が開始された。見物人がだん〳〵増して來る。

プログラムは進む。天幕の下など早や人の山だ。元氣で濛濛たる生徒の運動は見物人を無性に喜ばせる。樂隊は勇壯な曲を奏で運動場の中央高くつるされた擴聲器からは陽氣で朗な曲が流れ出る。今日の呼物社會行列が始まつた。玄關前から押し出した社會行列隊、樂隊を先頭に魚屋、神主、僧侶、號外屋、支那人、乞食、虚無僧、チンドン屋黒んぼ等々徐ろに見物人の前を練り歩く、見物人は腹をかゝへて笑ひ子供等は喜んで後を追ふ。今耐中は一大觀樂境と化してゐるのだ。運動場をめぐる一体は人、人、人の山だ。タンブリングは曲藝師よりも巧だ。人々は瞬きの目を瞑る。小學校選手は愛校心に燃えて必死の力走だ。學級對抗競爭は各組語所に陣取つて必死の應援する、先生等の競爭、生徒等の喜ぶこと。

最後の戰闘教練が始まる。銃聲に驚いて子供が逃げる。活氣ある小隊長、分隊長の號令爆藥が裂けて土煙があがる。煙幕濛々として立ち込める。最後の突撃と共に休戰ラッパの音も團曉として早や薄暗い那智黒頭に響き渡る。人々が歸り始める。汗にまみれた熱血の男子は今はたはたとゆれる校旗に對して閉會の目禮を捧げて微動だにしない。

× × × × ×

十三日、劍道、角力大會。縣下から集つた猛者を一手に集めた我が校選手は孤軍奮闘の感があつた。外では角力大會あり、肉彈相うつ大熱戰を展開してゐる。若人の熱と意氣に終始した意義ある一日であつた。十三日は夜會あり非常な盛會であつた。

十四日野球大會。快晴の野球日和だ。朝から押し寄せた群集は近來の好ゲームだけに引きもきらず滿員すしづめになつて溢れてゐる。箕商對日中の試合によつて火蓋は切つて落された。一球一打さへ見逃さじと觀衆は手に汗を握る。カーンと白球が青空に弧を描いて飛ぶ。どつと起る喚聲——拍手——ファインプレー。武運拙くして日中熱涙を呑み、耐中善戰して和中に敗れ、海草の健棒に和商の追撃及ばず最後のサイレン那智灣を壓して響けば一日の好ゲームに魅された大群集はなだれの如く歸つて行く。

× × ×

あゝ待望久しく待ち憧れた八十周年記念行事も稀に觀るの盛況を以て首尾よくこゝにその終を告げた。

八十周年記念野球大會

五年　前田正義

我が校八十周年最後の記念行事たる野球大會の今日も亦快晴。これですべての記念行事も完全に滯りなく、何等の事故なく行はれ得る事た天に感謝したい喜びをもつて登校。直ちに運動場の設備にとりかゝる。すべてキチ〳〵と氣持よく準備が進んで行く。天幕が張られ、ベンチが運ばれ直ちに觀覽席が出來あがる。

ホットして晩春のにぶいだるい日光に照らされてゐる運動場を見廻すと最早、數名の觀客が天幕の中におさまつてゐる。晝頃になるまで見物人の出足の遲かつた運動會當日と比較して野球は矢張り現代の寵兒たるを感ぜざるを得ない。ラヂオ設備も出來あがり、幕も張られすべて準備が整つた。生徒も指定の部署につく。

受付を開始すると、見物人の大部分は斷られればならないのだ。遠く鄉土軍を聲援せんと和歌山市から來た人もある。子供、老人、婦人まで續々つめかける。もう指定の觀覽席はつまつてゐる。最前入場した箕島商業、日高中學の選手のユニフォーム姿も、ネット越しに見られる。又しばらく、つめかける見物人に惱される。サイレンの音が觀衆の騷然たる聲にもみ消されさうに響いた。試合開始。

日中の純眞な中學生らしき試合ぶり、箕島は少し老練といつたやうな感がした。快いバットの響、眞白な球が中空を縫つて行く、外野手が綠の芝生を懸命に走る。外野手の快技、拍手の音、觀衆のざよめき最早土手の上にも松原にまで觀衆があふれてゐる。あれ程まで八釜しく禁止してゐた海岸側の土手にまで人の頭が何かを載せたやうに並んでゐる。始め日中がリードしてゐたが箕商がモリかへして凱歌を擧げた。人々は急に空腹を感じてか辨當を食べ始めた。空に薄い雲が流れ始めた。

午後零時半、我が校は和歌山中學と相まみえた、觀衆の熱狂裡に試合は進んで行く、矢張り我が校への聲援は斷然多い。二点先取された二点を返した、又三点、次に我が校が一点勝ち越した、生徒の喜び、見物人の熱狂、かくしてシーソーゲームを演じたが、遂に力及ばず古豪和中に勝を譲つた……。

海草中對和歌山商業、强豪の對抗だ、遂に薄い雲が空を蔽つて暗い影を落した。矢張り强豪の試合である。以前の試合と趣が變つてゐるやうに思はれた。暗くなつたせいか以前の試合の如き明朗さが感ぜられなかつた。

サイレンの響、本大會掉尾の大試合も終つて海草中の勝利に歸した。觀衆はホットしたやうな溜息をもらして歸つて行く、今日の試合を語りつゝ。

生徒集合、後始末の割當、ガラ空きになつた運動場には薄闇が漂つてゐる。

後始末、疲れたのか默々として仕事を進めて行く。天幕が取り去られベンチは講堂へ、明日はもう授業があるのだ。教室掃除、紙屑が拾はれて行く、運動場は何事もなかつたやうに、靜まりかへつた。美しく。

集合、だるさうなサイレンの響、夕闇が濃くなつた。解散。皆の顔には疲勞と安心が表れてゐる。顧みれば此の一週間は勤勞週間の如き感があつた。昨夜、夜會があつた。就寢二時、今朝會場整理、野球大會の準備、この連續的の勤勞によつて耐久精神が涵養せられるのだ。思へば意義深き一週間だつた。心中何物かを得て我々は重き足を我が家へ運んで行く。

懐古劇を觀て

五年　三木京次

悽然たる追憶、それは吾々の祖先を襲つた大津浪だつた。

物凄い風は野山を荒れ狂ひ、空は全く鉛色、海面に接する所、山の如き大浪、陸へ〳〵と押し寄せ〳〵見る〳〵中に吾々の安きホームが呑まれて行く。早くも津浪と知つた村の或先覺者、東方の小高き丘にすゝきに火を付けた。斯うして非常の手段で人々を集め、後より寄す

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

る激浪、人家の間に〳〵白く光つて大音と共に其等は失せてしまつた。併し何よりも人、人の生命それは安全だつた。その先見と非常の手段、實に偉大なる行爲ではないか。

此の後に從ふものは何か。人家は勿論村の田畠は全く荒野と化し、そうして人々の飢は夢るばかりだつた。

此の有樣を見た彼、又もや沛然として起る慈悲の心。困れる者には衣食や金を與へ、或は船を失ひし者には新らしく造らせて元の仕事に復し生活の安定を計られた。又一方せめて今後の災難を防がん爲、獨鼻莫大の財を投じ五ケ年の歳月を費やされ、海岸に見事な長堤と松林が生れた。それが又當時の失業救濟事業だつたのだといふ。實に偉大な事業ではないか。村人の中には、「おい吾々や津浪で大儲けだ、舟は新になるし。」など言ふものさへあつた。斯うして何くれと、刻下の難局の打開に或は人々の生活の安定にと心を煩はされた。此の人こそ實に吾々の恩人濱口梧陵先生だつた。時局救濟を自ら負ふ先生は遂に村人の尊崇の的となり、話の種となり、誰一人として先生の恩誼に泣かない者はなかつた。全く生き神の如く仰がれた。

ペリーが浦賀に來る。或は米、露と和親條約を結ぶ等時勢は益々他事多端となつた。

茲に早くも時勢を達觀された先生、學問の必要を直感され、東江、明岳兩先生と謀り先づ〳〵夜學を設け村の青年志士を集めて敎育することになつた。何もかも算盤的な番頭さんしきりに是を止めた。併し自信の强い先生は斷乎として動かなかつた。

或晴れた日村の青年達が新らしく造られた堤防の上に腰を据へ、全く大津浪の形跡も見えぬ靜かな海を眺め今更のやうにうやましく沖を望んだ。沖には點々と白帆が見える。四國の山々が見えてゐる。天王の波止は白く光つてゐた。「吾々や今日斯うして居られるのも全く先生のお陰だ。」「なんと偉いもんぢやなあ。」「金の事は氣にするな。都合のよい時返してくれやよいと言はれるんぢやもん。吾々や濟さずに居れん。」と、何時の間にか話は先生に移つてゐた。

やがて村人に嬉しい夜學のスタートは切られた。先づ梧陵先生、東江、明岳先生の御挨拶、續いて敎鞭をとられる何々先生の御挨拶。諸先生の意義深き御詞は靑年の胸深く宿つた。之實に吾が校の第一頁となつたのだ。その淡暗い行燈の光も、今は去ること八十一年、遂に永遠不滅の火となつた。

創立記念劍道大會

五年　花井義正

晴天だ!!　晴天だ!!

我等が天下に誇る最古の學舍の創立八十周年記念日中の今日も又晴天だ。空には少しの雲も無い。準備より今日まで天は我等に與して來た。今日まで我等耐久鍵兒は創立精神に復り、文武の德を修めて來た。以後も此の學舍で學ぶ者は此の精神に生きて行く事だらう。そして今日、武の方面の大會。即ち、劍道、相撲大會は深い意義を以て開催された。

朝早く高き靑天井を仰ぎながら途を學舍に取つた。處々にポスターが張られて、「十三日劍道、相撲大會。」の九字が道行く群衆に呼びかけて居る。見よ。我等が誇るに足る吾が耐久は嘉永の昔、濱口梧陵先生が意を靑年の敎育に止め、文武を以て當時の靑年を指導してより今日まで八十年の長い歷史を有する學舍である。これより我等は其の長壽をお祝ひすると共に偉人梧陵先生に厚く感謝せねばならない。途中二三の學友に會つた。皆欣々として禮をかはしあつた。校門近くに高く我等健兒により作り上げられた杉の大アーチを過ぎ校內へ入つた。

そして高く空の一角を仰いだ時、自分は云ひ知れぬ尊嚴の氣に打たれた。それは朝風にはた〳〵と音を立て、旭光を浴びて、くつきりと浮き出された紅に燃ゆる日の本の國旗であつた。我が國は此の日の丸の御旗のもとに建國二千五百九十三年の歷史と名譽を有して儼存して居る。同じく我が校も八十年の榮ある歷史を有して居る。校舍を盜ふ草木もはるかに見ゆる山々も今は喜びにひたつて居る。

劍道大會の開始も近づいた。道場は戰の前の靜けさの樣にしーんとして居て神前の扉はきつと左右に開かれ、神殿はくつきりと浮き出されて居た。又、其の左右に机や椅子や莫座が綺麗に、眞直に並んで居た。

大會は開始された。校長先生の祝辭は波の如く、或は激し、或は穩やかに道場に響き渡つた。創立者の精神には今や花が咲き梧陵先生もさぞ今日の此の大會を見て御滿足なされて居られる事であらう。又竹刀の音、雄々しく叫ぶ掛聲は行きし故人の魂を呼び返す事であらう。「やあ」「とう」の勇ましき掛聲を聞き我等健兒はじつとして居られない。血がおどり、腕がなる。我等創立精神は此の劍道により得られるではなからうか。我等が武に親しむ事は、又文を學ぶ事が創立者の意に報ゆる第一步でなからうか。

健兒よ。共に劍に親しまう。どどど……と喊聲が起つた。相撲が始まつたのだ。又此の相撲についても美しい歷史を此の八十年の中に織込んで居る。一時は天下に耐久の名を輝かした日もあつたのだ。今や力士は必死の試合を演じて居る。又道場においても劍士が雄々しく勝負をして居る。時々土俵から山をも崩すばかりの喊聲が聞えて來る。勝負がきまつたのであらう。

日は早や西山に傾き、武道大會も終を告げた。創立八十周年記念日の一日もこれで終つた。最後に自分は此の記念日に際し、「武に親しみ、創立精神に生きよ。」と聲高らかに叫び、又濱口梧陵先生に厚く感謝の意を表さう。

展覽會

五年　伊藤辰夫

圖畫習字を見て美的感興に浸りながら次の室に入ると趣が異つて自然界の動植物を初め鑛物がぎつしりと並んでゐる。兎の解剖、蛇の解剖等々。

次には顯微鏡が十數臺行儀よく並んで、夫々微細物が何百倍かに擴大されてゐる。純白な天体望遠鏡は偉大なる力を誇つてゐる。左を見れば不可思議なるあぶり出し。方円の器に從ひながら恐るべき力を秘めた水を利用した水壓機。起電機が居並ぶ。

歩を東へ〳〵と進めると次の室。不思議の中の不思議、水の中から自然に火を吐く、燐化水素の實驗。タービン水車、電信機、無線電信機等ずらりと居並び、發信器を押せば、カチ〳〵、と可愛い音をたてる。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

ザー〳〵ッ、といふ音に思はず天井を仰げば、そこには可愛い〳〵小さな、ケーブルカーが走つてゐるではないか。エレベーターも上下してゐるので微笑をもらす。又ガラス棒を「アメ」の様に、ぐにや〳〵にして細工をしてゐる。

飛行機、汽船の模型。中でも特に精巧に造られてゐる丑君の汽船。突然に大きな音がして煙が上つたので、側へ行くと富士山の噴火だきうだ。此れは白砂糖に塩酸加里を混じて硫酸を一滴落すと、此の様に燃えるのだきうだ。何と、甘い〳〵白砂糖があのやうな勢で燃えるとは……

次は白紙に水で何か書いてゐるので「まじなひ」でもするのかと見てゐると、今度はそれに水を吹きかけると、忽ち赤く「祝八拾周年」と字が表れたので、見物人はきつねにつかまれた様な顔々。

小さな電車が電燈をつけて走り廻り、側では大きな電磁石が鐵棒を「ガチヤン」と吸ひつけて引けども押せども、なか〳〵離れない。何と大きな力の出るものだ。子供が黒山のやうに集つてゐる。

人絹製造所、赤いどろ〳〵のものが水の中に押し出されると、すぐ白い細い絲になつて、巻かれてゐる。

ほんとうに面白くて、不思議な室で、時間の經つのも忘れられる。活動寫眞があるといふので、次の暗室に入ると、大きな獅子や虎が動き廻つてゐる。今度は漫畫で猫君、大きな自分の体の二倍もありそうな靴をはいて、すましてゐるので、人々は一度にどつと大笑する。

次はX光線の實験。こんな簡單な弱い光線で、物を透して何が見えるものかと思つてゐると、成程々々、財布の中の、お金が二つ三つ浮び出たので、驚異の目を見張る。次に「テスラコイル」の實験で、何萬ボルトの電流が物凄く放電をしてゐる。又可愛らしい、おもちやの小犬の口に手を近づけると、丁度なめに來る様に、手に放電をする。

「ほんとうに電氣は不思議な、偉大な力を持つてゐるものだ。」と痛切に感じながら次の室へ……

創立八十週年記念式に參列して

四年　福島忠夫

創立八十週年記念式、嗚呼何たる意義深き、歴史的記念式であらうか。我校生れて八十年其間幾多の變遷を經つゝも堅實なる歩みを續け、以て今日の榮ある式を擧行したのである。鳩山閣下代理初め多數の名士の參列ありて此處に新緑の香湛ふる若松の下に壯麗に式は擧行されたのである。

校長先生の言々句々感謝感激に滿ちた式辭、文相閣下代理、和歌山縣知事閣下、濱口儀兵衛氏以下多數の人々の文面は皆我校の神聖なる歴史を稱へ、尊嚴なる創立精神を稱へ、將來益々發展せんことを祝福したのだ。その時私は思はず快なる手の聲をあげんとした。それと同時に我等此の學舍に席を同じうする者の幸福を痛感した。恐らく他の四百の學友も同樣に左樣感じたであらう。すし詰めになつた我等の兩股は感激の餘りにふるへ、驚のあまりに我等の視線は壇上のみを注視して登壇者を射すくめんばかりである。やがて榮あり、歴史もつ我等の校歌を合唱する時がきた「我學舍の礎を嘉永の昔此處に置き」我等は誇りやかに天にも響けと高唱すると共に「智能を開き國の爲、人の爲にもいそしまん」此の如く我等の意氣を高唱したのである。

かやうにして未曾有の盛會は終つた。しかし皆の瞳はまだ正面にふられてゐた。我等は大きな感激に打たれてまだ夢路をたどつてゐるのだつた。

稍あつて席を立つと共に「あゝ働かん、努力せん我等は我が目的に邁進せん。此が我が校に報ゆる手段だ。これが今日のこの日を意義あらしめることだ」。私はかく信じつゝ感激に滿ちた式場を去つたのであつた。

創立八十週年記念式に參列して

四年　竈門一郎

五月七日、此の日は我校の創立八十周年記念式の日だ。天も、この意義深き、目出度き日を祝ふが如く、天氣此の上もなく晴朗だ。

我等は、午前九時講堂に入場し、縣知事以下各來賓の臨場を待つた。次から次へと限りなく來賓、父兄、校友の方々は入場せられ、約一時間後には、場内は立錐の餘地もなく、文部大臣代理及び縣知事其の他貴賓はすべて着席された。場内は全く水を打つた様だ。この時、加藤先生の合圖で總員起立、敬禮、勅語奉讀、校歌合唱、つゞいて文部大臣閣下の祝辭、縣知事の祝辭、其の他縣下の主だつた方々の祝辭あり、殊に濱口儀兵衛氏の祝辭を讀まれた時、吾々は、何となくなつかしく感じ、梧陵先生の面影がしのばれて、感慨一入深くさせられた。これ等祝辭中には期せずして、我校の創立精神を讃美し、八十年の燦たる歴史を稱へてゐる。

あゝ、之を聞き、この祝辭を受け、感激せざるものが幾人あらうか。滿堂全く靜まりかへり靴の音も聞えない。恐らく誰しも、同樣に感激してゐるのだらう。

場内正面に掲げられた梧陵先生、並に客所先生の肖像は、文字通り久しきに耐へたこの耐久學舍の健全な發達に滿足され、そしてこの盛會を祝福して御覽になつてゐる樣だ。

こゝに、この尊き學舍に育てられてゐる我等は、偉人梧陵先生の創立精神と八十年の尊き歴史を尊敬し、感激し、その幸福、一種の優越感を强く感ずるのである。

創立八十週年記念式に際して

四年　川口順吉

新緑に降りそゝぐ五月の陽光と那智の浦吹く爽やかな潮風と、此の快晴に惠まれて我等はこゝに記念すべき創立八十週年を迎へた。喜びに滿ちて校庭に集つた我々は朝日を背にうけて端然として聳ゆる校舍を仰ぎ、歡喜と感謝と一種の誇に胸のおどるのを覺えたのであつた。

顧るに嘉永の昔、鎖國の主義破れ、開港の論天下に囂々たりし時、一世の偉人濱口梧陵先生深く時勢を達觀され濱口東江翁、岩崎明岳翁等とはかり道場を田町に開き武を練り智を講じて少壯青年の士氣を鼓舞せられたもの之が即ち我が校の濫觴であつた。爾來校運の盛衰消長ありて變遷を幾度か經て今日に至つたのである。而して其の間耐久中學の名と共に終始一貫鮮兒の血を流れて來たものは立派な創立精神であつた。文部大臣をはじめ來賓各位の祝辭も期せずして此の創立精神の讃美に一致した。かゝる立派な精神と歴史を有する學校の生徒とし

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号 10

て敎へられる我々は強い感激に胸を打たれるのである。しかし我々は我が校八十年の歷史と校運の盛大を喜ぶ共に、其の者を振りかへり創立以來幾多名士の努力と諸先生の御盡力と更に諸先輩の美しき奉仕とを思ひ出さねばならぬ。

昭和六年我等が新校長を迎へ更生の第一歩を踏み出してより此處に三年、其の間先生方の非常な御骨折と生徒各自の自覺により校風大いに揚り他校に優るともおとらざる地位に達し得たのである。思ふに校風の發揚は我等の責任であり、又創立者及び諸先輩に對する義務である。而してそれは生徒各自の向上によるもので、全校生徒一致して學業に修養に勉勵する事によつてなし得るのである。我等は現在の様な程度に滿足してはならぬ。更に乾坤一擲往年資山校長時代を凌駕するやうな時代を建設せねばならぬ。

記念式に臨み校長先生のお話や來賓各位の祝辭を受けた我々は更に此の感を深くし大なる決心と輝かしい前途に對する希望にもえたのである。

耐久健兒よ、此の記念式を機會として創立精神にかへり、正しく、強く、美はしく我等が三星章を輝かさうではないか。

式典に列して

三年　野田義宏

昭和八年五月七日。我耐久中學は創立八十周年を迎へました。抑々耐久は嘉永の昔時恰も內憂外患一時に至れる時、一世の偉人梧陵濱口先生は儁秀卓拔の識見を以つて、早くも人材養成の急務を痛感し、濱口東江外有志の人々と謀りて、此地に學舍を創立せられました。爾來星移り、歲變り、幾多の變遷を經ましたけれども、引續く濱口家の多大なる盡力と、一般有志の熱誠なる後援とに依り、多數有爲の人材を輩出せしめ、一時海內に嘖々たる名聲を博したのであります。そして今日は既に其の八十周年を迎へ、今その祝賀の式典を擧行せらるゝのであります。自分は今其の遠き後輩として第三學年に在學中の者で鴻大なる先賢の恩德を感謝すると共に、轉た自己の責任の重且つ大なるを惟ふものであります。

午前十一時一同入場。校長先生の挨拶に始つて式は次第〳〵に進んで行つた。肅然として咳一つする者はない。君が代の合唱に續いて文部大臣祝詞、縣知事祝詞を初め澤山の祝詞が讀まれ、次で勳績者表彰式に移り、最後に元氣に滿ちたる校歌の合唱で式は閉ぢられました。斯くしていとも盛大に行はれた式典も本校のサイレンを合圖に終を告げました。

思ふに創立の精神といひ、その歷史といひ、宇內に誇り得る我が名譽ある耐久學舍、之を守るべき我等の責任は重い。お互に今日の感激を記念し、彌々益々母校の發展に盡さなければならぬ。自分は今後一層努力して名實共に世界の耐久となすべく希望して已まない次第であります。

式典に列して

三年　長田文一

五月七日、待ちに待つた八十周年記念日が來ました。生々とした若

葉を通して吹く和らかな空氣を深く吸ひながら學校の門を入りました。樂しさうに元氣な聲で話してゐる者もあれば笑つてゐる者もあります。同級生に會へば御早よう〳〵。あまり嬉しさのせいか、或る者はすました顏をして、ペコツと頭を下げ肩をすつて通り過ぎる。面白くなつて獨り笑ふ。

入場を知らすサイレンは恐ろしくうなります。そうして間もなく、話し聲もぴつたり止んで水を流したやうに生徒父兄、校友、長官閣下は靜に、しかも緊張して續々と講堂に吸ひ込まれました。

正しく開かれた硝子窓、敎壇に置かれた美しい花、古き迚築物にして良く淸潔された床此れ等は全生徒及び他の人の襟を正しくさせたことであらう。勅語奉讀、君が代合唱續いて校長先生の感激に滿ちた式辭が述べられました。校長先生は此の歷史ある學校に御越下さいまして此のかた二年余といふ年月の間創立者濱口梧陵先生の創立精神に基き其れに立ち歸らなければならないと言ふ御決心を持つて日夜諸先生と相計つて新敎育の方針を御立てになり又十二ケ條の校訓を御定めになり、學問並びに道德方面に一段の力を御盡し下されてゐることは何んなに我々はうれしく心强く感じこの涙ぐましき御熱心に我々はどんなに感謝したことでしやう。

次いで長官閣下及び小中學校總代、父兄、校友總代の祝辭がありました。いづれの祝辭にも耐久中學校は歷史が長く、併かも特別なる世界的偉人である濱口先生の鄕土を思ふ精神から出た立派なものであり、又以後此の學舍を卒業して社會に大いに活動した人物が多く出でまして一時は日本ではなく世界迄でも其名の輝いた時があつた。といふことを耳にして一層我々の誇を感じ、他校のやうな事をやつてゐるやうでは、到底創立精神を全うすることが出來ないであろうと、その時しみ〴〵と思ひました。

なほ今日の記念日に當つて我が中學校の爲に幾年も一生懸命に御盡し下された三木先生、校醫の堤先生、それに小使さんに、校友會長よりの心からの御禮の文と贈り物をしました。

かくて勇ましく校歌を高らかに合唱して嚴肅なる式は全く終つたのは零時五分でした。

式典に列して

三年　川口秋志

昭和八年五月七日、この日は我が耐久中學校としても僕としても永久に記念すべき日であります。

我が國には澤山の中學校がありますけれども我が校のやうに古い歷史を有しその上創立精神の偉大なることは他校に例がありません。これらの誇をもつ我が校はこの五月七日に八十周年を迎へるのであります。その喜び、それに直面した我が幸福はとても我が筆舌には盡されません、その喜び、幸福を感じ、再び來らぬこのよき日を記念しようと頭に銘して式場に進んだ。

講堂に入れば、はや五年四年生は席についてゐた、僕等も腰掛に座して式を待つ、僕等の後から下級生が入場した。全校生徒が入場してから、父兄校友續々登場した。父兄校友席に滿ちた頃、僕等の入つた反對側の戶を開いて式場に臨まれたのは文部大臣代理、縣知事、濱口

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号 10

儀兵衛殿以下多くの來賓悠々として設けの席につく、その時は咳の音も聞えない靜かな緊張した空氣が式場に滿ち〳〵てゐた。僕の眼も誰の眼もその瞬間、自然とこれらの長官貴人を見つめた。

記念式は開始されて校長先生の感激に滿ちた式辭を始め、容易に下されない鳩山閣下の祝辭。その上東京からはるゞ〳〵お出でになつた濱口儀兵衛殿以下多くの來賓の祝辭、それらの祝辭を讀まれるたびに僕の頭は下り、何とも言へぬ光榮、有難い心で僕の胸は一杯になつた。祝辭の大體はすぐ分つて一層嬉しく感じた。そのとき僕は、梧陵先生の偉大なる創立精神に基づき一層奮勵努力して自己の本分を盡そうと思つた。

濱口梧陵先生を偲ぶ

三年　花手禧次

有田郡内廣村に於て孤々の聲を上げた梧陵先生は實に鄉土の偉人である。廣村は昔から幾度かの海嘯に出合ふた、梧陵先生はかくの如き不幸な歷史を有つてゐる廣村に生れたことは先生にとつて如何に幸であつたか。

濱口家は代々地方の豪家である。先生は七代儀兵衛にあらせられる。先生は多くの當時の名士と交際し、武藝を重んずることに心を用ひ以て精神をきたへたといふ。又嘉永年代に入りては專ら國防に力を傾け又先生の愛國の結晶として人材を養成すべく設立せられたものである。これぞ全國に誇りて餘りある我母校耐久舍である。又一方先生

の村民を愛撫する事、慈母の如くであつた。廣村再度海嘯に遭ふや村民救助に全力を盡し私財をなげうつて今度又もかゝるみじめな有樣を見ざるべく巨額の費を投じて堤防造林をなした。海岸の鬱々として成長しつゝあるあの松並木を見よ。

嗚呼先生一生を通じて自分をなげうつて人の爲に盡せし熱誠なる誠心、僕は今有し日の先生の事を聞く度に先生の天下に殘せる偉大なる功績を追懷して感激おく能はざるものがあります、我々は先生の遺物たる我が母校を一層發展させようと心に深く誓ふのであります。

展覽會場

二年　和田堅一

僕は展覽會場の監視役に當つて居たからはつきりと見なかつたけれども少しは見たのでそれを今書いて見よう。僕の監視した室は習字ばかりで退屈になつて來る。二階は圖畫ばかりで見て居ても面白い。僕は最初に科學實驗室に入つた。一番初に大きな船が置かれてあつた。僕は細かに作つてあるのを見てびつくりした。隅の方で富士山の噴火の實驗をして居た。次に參考圖畫室に入つた。

これが非いたのかと思ふやうな立派な作品ばかりだつた。小學校の時敎へてもらつてよく知つてゐる。中井先生の圖畫もあつた。圖畫室を出ると急にやかましくラヂオが響き出した。一室は習字で入らなかつた。

三室へ行くと小學校の作品があつた。フランス兒童作品はよく書けてゐた。

五六七室は僕等がこしらへたのだから知つてゐるので別に入らなかつた。七室にもどつて來るとA組の監視人が無かつたので代つてやつた。又いやな室だと思つた。

八十週年記念式に列して

一年　浦崎利貞

昭和八年五月七日、朝はよく空晴れてまことに氣持のよい日であつた。僕は外に出た時。頭に何者か、うかびあがつた。それは耐久中學八十週年記念の事であつた。僕達は此の際、入學してより數週の後、意義ある此の八十週年記念式に出會つたことは、いふまでもなくうれしいことです。學校に來て思ひ出したことは、あゝ長い八十年の前僕は生れてゐない時分に、此の耐久中學校をお建てになつた濱口梧陵先生は、此の地方の人々に學問をさせようと考へて、此の學校をお建になつたのである。かゝる意味の深い此の學校で勉强をする僕には小さいなりにも嬉しいありがたい思ひが胸一つぱいになつた。

式は、十時から行はれた。其の時には講堂が一つぱいであつた。此の學校を卒業した人は、何百人、何千人あるかわからない程だ。校長先生の式辭について、多くの來賓の方々から、祝辭を戴きました。其の時の僕達の喜は言ふに言へない喜である。此の長い八十年をすごした學校はおそらく日本中で我が耐久よりほかはないとのお言葉であつた。僕はこの長い八十年を、これよりもつと〳〵長くしたいと思つてゐる。

おごそかな式がすんだのは、丁度午後零時すぎであつた。

祝賀會經過概要

昨昭和七年は本校にとつては創立八十周年といふ世にも稀なる慶祝すべき校齡を迎へ、而かも校風は幸にも廣瀨校長一昨年御來任以來面目を一新し、大いに振興向上の機運に向つてゐましたので何とか記念祝典を盛大に擧行したいとの要望が校友、父兄、學校三者の間にそれとなく唱へられてゐたのでありますが、その話が愈々具体的に持ち出されたのは昨年の初夏、新綠に風薰る五月十三日のことであります。阿瀨校友會長、岩崎同會幹事長の兩氏がその夜廣瀨校長宅を訪れられたのでありましたが折節全國中學校長會議に出席のため校長は上京不在であつたので、佐藤主席敎諭方に立寄られ學校並に父兄會と三者協調して一つ盛大に擧行したき旨話されました。

同月下旬廣瀨校長出張先より歸任せらるゝや否や直に阿瀨校友會長を訪問せられ、本年度縣豫算金額壹萬八千圓を得て改築すべき特別敎室の竣功が今秋までには覺束ないため本年度に於ては之を見合せ、明春その落成を見るまで延期し勞々それまでに準備を十分整へて盛大に擧行し得る樣諒解協力を求めらるゝ所がありました。次で六月廿三日　校內職員會議の席上、學校長より愈々明年八十周年記念祝典を擧ぐべき旨正式に發表せられ、その大綱を協議する爲計畫委員として佐藤、中井、三木、野田各敎諭並に槻原書記の五名が委囑されました。

右計畫委員は直に委員會を開催して種々協議の結果、大要次の樣な原案を作製致しました。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

一、擧行時期
　明春（昭和八年）五月八日（創立記念日）より略ぼ三日間
二、行　事
　一、式　典（文部大臣祝辭申請）
　一、十年以上勤續者表彰
　一、祝賀會
　一、記念講演（なるべく本校卒業生に依頼）
　一、展覽會（圖畫習字、地歷博物、理化等）
　一、運動會
　一、劍道大會
　一、野球大會
　一、雜誌記念號發行
三、記念事業
　記念圖書館、道路變更、國旗揭揚臺設置、運動場擴張、溫室、農具建設等
右式典行事及記念事業に要する經費として概算金三千二百圓を校友會父兄會、兩濱口家、學校職員及一般有志より醵出願ふ事としました。
次で
六月廿八日　生徒父兄會總會席上廣瀨校長並に永井父兄會副會長より祝典擧行についての說明並に父兄の協贊を仰ぎ度旨熱望せらるゝ所がありり。
七月十四日　校內職員會議の席上先日委員會に於て作製した原案を說明してその諒解贊成を求め茲に學校側としての計畫案を取纒めたのでありますが、その際相撲大會及圖書館移轉改築を行事並に事業の中に加へられたき旨の希望より之をも採擇して原案を決定しました。
尙職員一同より祝賀會へ金壹百圓醵出することも議決。
七月廿日　校友會、父兄會、學校側三者合同の第一回豫備協議會開催
　出席者
　校友會　阿瀨會長、浦副會長、岩崎幹事長
　父兄會　川口會長、永井副會長、崎山、川口兩常任幹事
　學　校　廣瀨校長、佐藤敎諭、梶原書記
時恰も盛夏、殊に蒸し暑い午後三時半より六時半まで三時間の長きに亘り少時の休憩も取らず、學校側作製の原案に基いて更に凝議を重ねた上二三修正追加して大体原案通り決定しました。即ち
追加項目としては
一、生徒にも祝菓子を配與すること
一、祝典費寄附者並に式典當日の來賓には記念品を贈呈すること
　右二項の經費は祝宴費及記念雜誌費より融通すること
又記念事業については
一、御大典記念圖書館の移轉改築は全部父兄會に依頼すること（此の經費約三百圓）
一、道路變更は主として永井副會長に御盡力を願ふこと
一、運動場擴張は政府の救濟事業（土木港灣改修）と相呼應して達成に努むること
一、國旗揭揚臺設置
等を決定し次回はやゝ廣範圍に亘つて來校を煩はし發起人會を組織することゝして散會。
九月廿日　殘暑はまだ燒けつく樣な猛威を逞しうしてゐたに拘らず祝

典協贊の好意に溢れて多數の出席を得本會の前途に輝かしい光明を投げかけ盛況を躍感されたのは誠に嬉しくもあり又感謝に滿たされた次第であります。
　出席者（二十八名）
　學校側　廣瀨校長、佐藤敎諭、梶原書記
　校友會　阿瀨會長、浦副會長、岩崎幹事長、宮地、中井、寺柵各幹事
　父兄會　川口會長、永井副會長
　　戶田、岩崎兩顧問
　　玄後、崎山、花手、岩崎、太田、森、瀨藤、三ツ村、戶塚、最田の各役員
　町村長　河內田栖川、丸畑津木、戶田廣の各村長
小學校長　三輪廣、直山南廣、元田津木の各校長
先づ廣瀨校長より祝典計畫に關するこれまでの經過、並に學校側の希望等を述べ、父兄、校友、一般有志諸彦の御援助を仰ぎ祝典を盛大に擧行したき旨を開陳して協議に入り
一、記念祝典、記念事業の內容並にその所要經費豫算（約二千三百圓）につきては前回の豫備協議會に於て決定した原案に贊成
二、寄附金募集金額は一口貳圓以上とし締切を本年末とすること
三、發起人を校友會、父兄會各役員、郡內各町村長及各小學校長に依頼すること
四、寄附金募集並に記念祝典行事遂行の主体名稱を耐久中學校創立八十周年記念祝典協贊會とせば如何との議ありしも前例に據り創立八十周年記念祝賀會とし發起人に於て前項事務を分擔進捗せしめること
五、寄附金募集の結果に基き更に全体會議を開き祝典並に記念事業についての事務分擔を詳細に定むること
　其他必要に應じて時々會合を催すこと
六、本日欠席の町村長、小學校長、校友會、父兄會役員等に對しては書狀其他の方法に依つて發起人たることの承諾を求むること
右決議に基き發起人の承諾を得て左記寄附金募集趣意書を發送してしまつたのはかれこれ十一月初旬でありました。

○ 耐久中學校創立八十周年祝賀會趣意書

我が耐久中學校は本年を以て創立八十周年を迎へました。今その創立當時を追憶致しますれば一世の俊人須口梧陵翁儁敏卓拔の識見を以て、嘉永五年、早くも人材養成の急務を痛感し濱口東江、岩崎明岳兩翁と謀りて此の地に學舍を創設せられ、爾來星移り歲廻ると共に幾變遷を經たけれども、その間兩濱口家の多大なる犧牲的努力と一般有志の熱誠なる後援とにより、久しく地方育英の淵叢をなし多數有爲の人材を輩出せしめて、その學風と教育方針とは一時海內に喧々たる名聲を馳せたのであります。其後大正九年に縣營に移管せられ以て今日に至り本年正に八十周年といふ尊い歷史を作つたのであります。固より久しきに亘るその間には校運の一消一長は免れ難かつたのでありますが、よくもこの長年月の久しきに耐へ得て光輝ある創立精神を今尙脈々として存してゐるといふこの一事のみにても全國稀に覩るの盛蹟でありまして、我等鄕黨の大いに矜とすべき所であります。況してや卒

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

業生を出すこと既に一千二百有餘名何れも當學舍に於て薫化せられた人格と修練せられた才學とを以て國家社會の各方面に活躍貢獻しつゝあるを見ては吾等は一入創立者並に經營者の盛德を欽仰すると共に本校の將來を祝福せざるを得ないのであります。殊に今や八十周年に際し一時期を劃し校運の進展目覺ましきものあるは御同慶至極に存する所であります。

茲に同志相集り此の意義深き祝賀の誠を謀りましたところ恰も本校に於ては校舍の一部改築中のためその竣成を俟つて明春記念祝典を擧行することになり別記計畫がありますので、下名等發起して欣然之を協賛し普く諸賢の御賛同を得その御援助に依り祝典を盛大にし記念事業を遂行して以て一は地方育英のその業績に酬い一は文化發展の根幹に培はんとする次第であります。

どうか右趣意御諒解の上、奮つて御賛同下さいます樣切に御願ひ致します。

昭和七年十一月

發起人（次第不同）

校友會役員

阿瀨卯兵衛　浦　清兵衛　栩野常次郎　岩崎　平助
宮地　芳信　岩崎　茂　野田　彰　森　秀雄
堀田　健三　水野吉太郎　中井　長二　山田　良吉
三尾新次郎　寺柚　政雄　鎌田彌一郎　神人　惣一
長尾　勇　敷見清太郎　玉置　勇藏　橋本　竹藏
戸木安太郎　小賀　久七　久保清太郎　島村安次郎

雁　主一　原　太市　御前　正夫　中野吉次郎

生徒父兄會役員

竹林兼三郎　岩崎　勝　川口彌兵衛　永井　徹
川口　清吉　崎山　房吉　周參見信助　森　音次郎
玄後宇一郎　吉田伊兵衛　最田長太郎　濱口八十五
花手　啓三　岩崎　保　戸塚　嘉春　湯淺治郎右衛門
吉村　廣　上野貞次郎　橋本伊右衛門　三ツ村勘太郎
神人三治郎　太田千代吉　中野　貞藏　辻岡　次助
光定　正次　藤田安太郎　川口　龜一　佐々木善治
東　三朗　瀨藤　亮平　西井　源吉　伊藤　彌助
島　孫太郎　石井竹次郎

郡内各町村長

久保寅次郎　喜多長一郎　島津　太郎　生駒　楠藏
崎山繁次郎　河内　清吉　戸田保太郎　直山　政吉
丸畑雄次郎　山下　定市　島田　彌六　保井　榮助
中岡　澤造　森田　源晉　梅原源五郎　三角　敏雄
今井左近右衛門　堀川　淳吉　金山　智覺　稻垣愛之助

湊主佐一郎

郡内各小學校長

生駒國次郎　御前　喜夫　井爪幾太郎　平松竹二郎
高居　利助　林　虎之助　高垣　英一　平木　正
三輪吉之助　直山　種吉　元田喜十郎　森　吉雄
佐原　毅　上野山龜一　中西　正雄　川口　虎市
撰波郡之助　清水　清吉　高垣　光楠　高垣　光市

川岸幸太郎　浦　明一　林　房楠　中西　米一
由本文次郎　田中　昌一　一ノ瀨貫一　三角　隆二
建島　重良　楠林　種一　伊澤　俊一　中島　昇平

記

一、金　額　一口　金貳圓以上
一、御送金　本年十二月末日迄に耐久中學校内記念祝典係宛御送金下さい。（振替口座大阪七八六一二番）
一、支　途　別紙收支豫算並に記念事業種目御參照のこと

○

昭和八年を迎へるに及んで諸準備は漸く具体的に進めることゝなり先づ二月九日春魁けて肌を劈く寒氣を凌ぎ發起人會を開催し多數の出席を得て次の事項を協議しました。

一、寄附金醵集狀況報告
一、未收寄附金醵集委員選定の件
一、講演會講師招聘の件（阿瀨校友會長に人選並に内交涉方依頼）
一、記念品調製の件　扇面（耐久）の文字を荒木陸相に揮毫依頼等

これと相前後して學校からは國語習字等展覽會出陳依頼の書狀を校友名家、縣下中等學校、郡内小學校其他議員の個人的因緣を辿りて發送しました。

○

四月十日　待望の祝典も愈々一ケ月の後に控へてゐるので、例年に增して特に多忙だつた學年終始の繁務もまだ全部片付かない中に校内各係代表者會議を取り急いで開催。

一、寄附金醵集に關する其後の情況報告
一、記念行事に慰靈祭を加へ、其他記念品費等の關係に依り祝典費豫算更正の件
一、各係に於て立案せる實施計畫發表
一、講演會講師は元本校教諭瀧浦氏及校友土岐和高商教授に交涉内諾を得たこと

等について報告並に協議する所がありました。

○

四月十二日　校内外部合同協議會を開催、校内よりは廣瀨校長、佐藤教諭、梶原書記其他各係主任。外部よりは川口父兄會長、阿瀨校友會長、岩崎同幹事長、高垣湯淺、三輪廣、上野山南廣各小學校長及校友會、父兄會役員等多數出席、先づ廣瀨校長より挨拶あつて後

一、寄附金醵集狀況の報告（現在一五五〇圓）並に今後更に各方面特に校友諸氏の御盡力を待つて豫定額に出來る限り接近せしめること。
一、豫算更改に關する件　單位圓）

講演會費　五〇
体育大會費　二〇〇（内譯運動會八〇、野球五〇、晝食三〇）
記念品三〇、角力一〇）
展覽會費　一〇〇
雜誌費　三〇〇（外に場合により校友會より一〇〇、三一會より若干）
慰靈祭費　一五（後に追加）
印刷通信費　二〇〇
夜宴、記念品費　八〇〇（記念品は一本十五錢位の扇子とす

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

勤續者表彰費五〇圓は校友會及父兄會より支出することゝして右豫算を承認決定

一、祝典其他の日時變更の件

五月　六日　慰靈祭
五月七日(日曜)　祝賀式
五月　八日　大運動會(以上三日間通じて展覽會)
仝　十三日　劍道及相撲大會
仝　十四日　野球大會

一、行事を次の係に分ちて各部分擔のこと

式典係(慰靈祭及記念式)
祝宴係(接待及記念品)
体育會係(大運動會、野球大會、劍道大會、相撲大會)
展覽會係
講演及雜誌係
庶務會計係

一、各部實行委員人選依囑の件

校友父兄兩會長へ一任のこと、なり發起人中より夫々適材適所主義により人選依囑しました。校内に於ては右計畫に基き外部との連絡を緊密に保ちつゝ着々その準備を進めてゐましたが

四月十八日　阿瀨校友會長、岩崎同幹事長來校、祝典期間中記念行事として大夜會開催を追加し懷しい思出の行事復興のことを話されましたので、協議の結果、五月十三日(土)夜、本校劍道場に於て、校友會主催とし出演は學校、校友會及一般有志に依頼することゝしました。

かくて愈々準備を急ぎ諸計畫は豫定通り實施し得る目算もつきましたので、案内狀を印刷し、廿四五兩日に亘つて夫々關係方面へ發送し、尚一般校友に對して地元新聞紙上に廣告して通知に代へました。

期日の切迫につれて各係共その準備に遺漏なきを期し、內外協力一致して專念事に當り繁忙又繁忙、每夜深更に及ぶまで寢食を忘れて精勵し涙ぐましい精進をつゞけて、ひたすら未曾有の祝典へとその實現の足どりを急いだのであります。

○

茲に特に記して謝意を表したいのは記念品扇子調製についての阿瀨校友會長の一方ならぬ御盡力と、記念事業の一なる國旗揭揚臺建設に關する川口父兄會長の御厚意とに對してであります。

記念扇面の揮毫については、豫て當地と緣故の深い荒木陸相に御依頼方花手氏を煩はしてゐたのでありますが、陸相は時局重大の節とて御多忙のため期日までには實現不可能となりましたので、四月中旬を過ぎてから遽に計畫を變更し阿瀨校友會長の非凡なる技術と多大なる盡力とに依り、耐久社當時揭用の墨色既に薄褪した額面文字「耐久」(菊池海荘筆)を引き寫し縮寫して、今回の祝典には誠に相應しい記念品が出來上つたのであります。

又記念事業の一なる國旗揭揚臺の建設は國家意識を鮮明にし國民精神統一の特に痛切に要求せられてゐる時節柄、誠に有意義であり且つ緊要な企てでありますが、祝典費醵集額が豫定額に達し乘れましたので、遺憾ながら暫く見合せなければならぬ羽目に立ち到つてゐたのであります。然るに父兄會長川口彌兵衛氏はこの事情を諒察せられ欣然として多額の資金を投げ出し、國旗揭揚臺の單獨寄附を快諾せられたのであります。

かくて一は輝しき傳統を有する我が耐久を天下に紹介する好箇の記念品となり、一は尊き由緒ある我が學舍の更に進展を標榜すべき劃期的記念事業となつて永く後世に傳へられることゝなりました。而かも兩氏とも人格高潔にして令望あまれく、或は校友會長、或は父兄會長として校運の隆昌に日夕盡瘁せられてゐる方であり、誠にその事に相應しいその人であられるを思ふ時、そゞろ欣喜感謝の念に堪へない次第であります。

○

其間各係に於ても各々數回の會合を重ねて愼重細密に案を練り議を凝らして準備萬端を整へ、手ぐすね引いて愈々その日の到來を待つばかりとなりました。

○

天佑か神助か、さしも降り續いた霖林も、直接準備に取りかゝる前日より霽れ上り、萬事頗る順調に進捗して先づ五月六日の物故關係者職員、校友、生徒の慰靈祭嚴修を以て記念行事は開始せられ、五月七日の式典、祝賀會、講演會、八日の大運動會、以上三日間開催の展覽會、十三日の劍道、相撲大會、同日夜の大夜會、十四日の野球大會を終るまで奇蹟的にも絕好の天候に惠まれ何れも豫想外の盛況裡に終始することを得ましたことは誠に欣快に堪へないのであります。

○

顧へば昨年五月校友會長及同幹事長に依つて祝典擧行の口火が切られて以來滿一ケ年、その長期間に亘つて校友會、父兄會各位は勿論、一般有志諸彦より寄せられた熱誠なる御聲援と獻身犧牲的絕大なる御盡力とに依つてかなり大がかりな祝典行事各方面共、些の澁滯なく未曾有の盛況を以て首尾よく結了致しましたについても今更感ぜしめることは「人の和」の如何に大切であり又これさへ得るなれば如何に偉大なる事業をも容易に成し遂げ得られるものであるといふ確信を如實に實證されたことであります。

天下の驚異的存在「耐久」のために期せずして寄せられた各位の熱誠なる御盡力は或は醵金に、或は行事に、一々その御功績を校史記載せんにも紙面に限りあるを遺憾と致します。

茲に誠心誠意滿腔の感謝を捧げつゝ擱筆する次第であります。

耐久中學校創立八十周年
記念祝賀會寄附者御芳名

金額	氏名	
五〇〇圓	濱口儀兵衛	理化設備費
五〇〇	濱口吉右衛門	同　上
參九〇	父兄會	岡書閣閲覽室移轉改築費
壹五八	川口彌兵衛	國旗揭揚臺新設費
五〇	校友會 父兄會	十年以上勤續職員及小使、贈呈記念品代
壹貳〇	校友會	記念號雜誌費ノ內ヘ

以上特別指定寄附

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

（以下受入順）

金額	氏名
壹〇圓	阿瀬卯兵衛
弐	宮芝輝巳
同	平松正巳
同	小泉秀夫
参	楠部敬一郎
弐	川口遜
同	栗生功
同	田端榮三郎
五	畑山鐵亮
弐	畑　榮一
同	崎山一平太
参	小川道郎
弐	吉田知邦
同	金森喜一郎
五	中川正二
弐	池下實夫
同	植田庄藏
同	狩野辰雄
同	小寺幸吉
同	左成謙次
同	酒井千秋
金額	氏名
参	石田豊三
弐	中西悦太郎
同	久保靜雄
参	平林福壽
弐	吉村敦
同	明樂通雄
同	三尾喜太郎
同	楠部善二郎
同	玉置俊一
同	鈴木芳藏
同	吉野秀造
同	栩野新吉
同	森田源之助
同	淺井シマ
参	酒井眞之丞
弐	矢倉　隆
同	中平忠太郎
同	川口安吉
同	木村正義
同	大南章雄
参	堀　武芳
五	藏野喜介
弐	田尻よしの
弐	永廣武信
同	森脇信行
同	津木政之丞
同	津木周夫
同	淺井幸男
同	藤田信吉
同	津村龜太郎
同	村上熊吉
同	山本富之助
参	水崎鐵治郎
弐	葛蒲谷義郎
同	林中謹一郎
同	庄司勘六
五	川口龜市
弐	和田榮次郎
同	光定正次
同	光定道穗
同	最田長太郎
同	東　吉松
同	鉢内覺助
壹〇	井爪壽良
弐	花井　幸
同	清水正一
同	山本長松
弐	鈴木楠松
弐	内芝大二郎
五	塩崎榮一
壹〇	堤　清彦
弐	谷口延市
同	敗見惣吉
同	箸尾彌太郎
同	宮地安左衛門
同	中西確太郎
同	西　俊一郎
同	若宮秀禮
同	吉野秀造
同	栩野新吉
同	森田源之助
同	淺井シマ
参	酒井眞之丞
弐	矢倉　隆
同	中平忠太郎
同	川口安吉
同	木村正義
同	大南章雄
参	堀　武芳
五	藏野喜介
弐	田尻よしの

金額	氏名
弐	大江良助
同	長田平吉
同	尾崎昌輿
同	高野眞吉
同	川崎朝三
同	三木伸之助
同	神山德松
同	竹中信親
同	服部權右衛門
同	湯田傳一
同	西井源吉
同	內芝秀吉
同	竈門龜千代
同	宮井喜市
同	神人三治郎
同	柳本良治
同	柏田豊楠
四	崎山正次
弐	三葛龍太郎
同	大橋藤四郎
同	三木福太郎
同	松下庄次郎
同	栗山喜太郎
同	拔井久治郎
弐	上田藤太郎
同	河村紋平
同	兵野由松
同	池浦　弘
弐、参〇	石井增次郎
弐	福島作太郎
同	田口義太郎
同	峠原德松
同	野島庄藏
同	瀧　昇
同	生駒喜三郎
同	松田龜太郎
同	直山政吉
同	岩本定吉
同	吉田菊三郎
同	吉井喜代松
同	川口松太郎
同	中井幸一
同	拔井伊右衛門
同	松浦庄左衛門
同	東　三朗
同	瀧本應之丞
同	神山德之助
同	上野山國太郎
弐	上野山政造
同	大浦市太郎
同	山下眷助
同	松本安吉
同	成川英一
同	山名由次郎
参	三ッ村勘太郎
弐	湯淺治郎右衛門
同	森　音次郎
同	熊岡種之助
四	吉村　廣
弐	澤崎清吉
同	西岡與右衛門
同	栗原文右衛門
同	池永虎之助
同	田邊安吉
同	森田敏治
同	兒島源兵衛
同	森　政楠
同	近藤喜代楠
同	金森　傳
同	持田芳藏
同	堀　雲巖
同	後藤政造
弐	九鬼次郎太夫
同	澤崎源一
同	松下順正
同	田畑重兵衛
同	濱口勝吉
同	金澤かず
同	吉田鶴吉
同	花田忠一
同	岩倉市右衛門
同	中平清次郎
同	佐竹信一
同	梅本助右衛門
同	辻岡次助
同	林　安吉
同	武內市次郎
同	兒島義文
同	石垣義千代
同	北山義丸
同	山本繁熊
同	新川榮次郎
同	片山義左衛門
同	古寺善七
同	川岸幸太郎
同	別當庫一

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

貳 寒川善祐
同 中田菊松
同 中村太郎
同 中野貞藏
同 太田千代吉
同 松下義太郎
同 登尾正一
同 平木正
同 井原常太郎
同 敷見常次郎
同 坂口新七
同 枠谷寅太郎
同 安田眞造
同 北谷勝之助
同 寺柚延市
同 大原喜三郎
壹○ 島津製作所
貳 二澤忠勝
參 資部佐四郎
五 玉井友太郎
貳 稻葉梅楠
同 平林久一
同 資本重義
同 上田藤一郎
參 岡本泰次

貳 根來一夫
同 根來福雄
同 土岐繁松
同 木村まさ
同 花手啓三
同 江尻可敬
同 田端楠松
同 柳本松太郎
同 平岡信助
同 中山馬太郎
同 山本長太郎
同 澳禎三郎
同 玉置ユリ
同 松下正男
同 宮下又七郎

貳 野田貞夫
同 細平利雄
同 原見柳
參○ 濱口彰太
貳 板谷義信
同 戸津井善男
同 菅谷美輝夫
同 浦政楠
同 鈴間爲之助
同 三角隆二
同 逧島重良
壹○ 薬玉佐彌太
貳 玉置なつへ
同 上野山雅一
同 岩崎善雄
同 上野山房吉
同 川口種楠
同 大浦安太郎
同 島津孫太郎
同 脇村定吉
同 川口彌一郎
同 生駒盛造
同 宮井清次郎
同 武田太次郎

貳 山崎久男
同 木谷義太郎
同 寺村善助
同 中井治八郎
參 土田喜彌太
同 千川善四郎
貳 大久保政春
同 山口善之丞
五 土井眞三次
瀧 秀信
貳 小賀環
同 案志竹次郎
同 周參見信助
同 吉田由太郎
同 宮木清
同 如野好藏
同 石川利一
同 山本菊太郎
同 森紀彦
同 北山俊夫
同 保田重藏
同 楠間隆男
同 島田有吉
同 武内英德

參 長尾勇
貳 高辻英之助
同 辻稔
壹○ 松本信夫
貳 利光御代楠
同 岩崎保
同 福長吉
同 中谷久代
同 有本朗
同 森秀雄
同 川口誠一郎
同 川口清吉
同 密浦庄次郎
同 上野山佐一
同 宮本眞次
同 宮本眞喜男
同 小賀宗一
同 山本喜代松
同 佐々木善治
同 桑甚一郎
同 吉田一重
同 中西文右衛門
同 阪本芳楠
同 杉本庄次郎

貳 成田茂吉
同 宮井廣吉
同 林幾太郎
同 谷口芳松
同 松藤清二郎
同 藤谷朝太郎
同 今井左近右衛門
壹○ 松下公福
貳 彌宜松三郎
同 岡田住太郎
同 伊藤彌助
同 九鬼惠廣
同 上野貞次郎
同 前田秀夫
同 鍵山みち
同 森幸二郎
同 河島米三郎
同 野田四十一郎
同 川口清八
同 谷口幸次郎
同 大谷福一郎
同 久保田綾
五 泉谷藤市
貳 戸塚嘉春
同 平松十郎
同 岡藤太郎

貳 守法惠運
同 川口彌兵衛
貳○ 吉田信太郎
貳 石井竹次郎
同 林葉毛里
同 渡部吉代
同 采女孝一
同 兒島幸吉
同 大畑艷子
同 田上房吉
壹○ 楠間龜楠
貳 宮崎勇
同 上北幸隆
同 小川誠一
同 吉田伊兵衛
同 吉田耕一
同 周參見哲夫
同 川口清八
同 谷口幸次郎
同 大谷福一郎
同 久保田綾
同 泉谷藤市
貳 戸塚嘉春
壹○ 采女美員

貳 吉田滿壽男
同 中村恒彦
同 菅原得水
同 久保嘉七
同 鈴川與八
同 濱野安治
同 戸田保次郎
同 額田榮次郎
同 森澤粂三郎
同 平谷助五郎
同 栗山芳雄
同 戸田貞吉
參 瀨藤亮平
五 廣瀨實造
貳 藤岡元次郎
同 嶋田注太郎
同 田口義臣
同 前田浩
同 生駒清太郎
同 山田円吉
同 田中鵜松
同 伊藤光哲
同 坂上包二
同 橋本伊右衛門

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号 10

参 岩崎平助
弐 岩崎爲吉
同 多飯田房吉
同 奥田孝一
同 藤田友次郎
同 山田瑞穂
同 安井熊太郎
同 木下守夫
五 泉平兵衛
五 玄後宇一郎
弐 玄後市郎
同 武内長四郎
壹〇 崎山房吉
弐 崎山林一
同 崎山正
同 片山清一
同 板原明
同 吉井楠太郎
同 青石和三郎
同 海瀬イヲ
同 宮井彌一郎
参 伊達信三
弐 河内清吉
同 野村正彦

弐 武田勝祐
同 丸畑雄治郎
同 崎山政千代
同 西川重太郎
同 曾根楠松
同 川岸茂
同 梅原源五郎
同 崎山繁次郎
同 崎山省三
同 森田源吾
同 平木伴次郎
同 永野錦太郎
同 栖原慶一
同 上山榮一
同 嘉成一郎
同 千川清吉
参〇 宮田準一
五 松下克巳
弐 雜賀貞淨
五 野原茂八
弐 太田千代吉
参 宮地芳信
弐 柳瀬喜一
同 桑兼義

弐 高垣光楠
同 星田ぬい
同 大橋紀男
同 湯田圭一
同 妻木端夫
同 太田修次
参 太田久助
弐 柏繁夫
五 柏保
弐 柏直登美
参 阪本恭雄
弐 兒島藤松
同 松下美智夫
同 市間敏
同 久德幸雄
同 宮芝敏彦
同 岩崎勝
同 岩崎功
同 岩崎順
参 御前七郎右衛門
弐 村田忠一郎
五 駒野虎吉
同 柴崎晃海
弐〇 岩崎厚

弐 兒島五郎
同 小池重直
同 兒玉誠一郎
同 堀川清
同 古田禎秀
参 永井徹
成人講座聽講生
五 有志總代法眼熊右衛門
弐 島津太郎
同 保井榮助
同 山下定市
同 三角敏雄
壹〇 濱口八十五
五 戸田保太郎
参 加納長兵衛
弐 竹林爺三郎
同 竹林節一
壹〇〇 耐久中學校職員一同
五 高垣英一
参 生駒國次郎
弐 直山種吉
同 山本豐楠
同 久保田四郎
同 三木銀一
弐〇 濱口吉兵衛

壹〇 島村富次郎
参 野田彰
弐 野田省吾
五 竹内安太郎
弐 伏木貞
壹 市間太一郎
弐 中野泰吉
同 楠林種一
同 山崎榮藏
同 多飯田藤兵衛
同 喜多長一郎
同 籠谷寅之助
参 神人惣一
五〇 濱口擣
弐 前田靜代
同 神山米千代
同 名島繁太郎
同 兒島周造
同 若林良一
同 寺柚懷德
同 古垣内宮次
同 菅澤百四季
同 梅本清三郎
同 上山乘治

弐 中谷哲三
同 田中敬造
弐〇 宮井勝次郎
弐 生馬士郎
同 岩崎庄右衛門
同 飯沼仁一
壹〇 御前慶造
弐 前田茂一
同 戸木安太郎
五 上野山信一
同 津村嘉四郎
弐 黍原啓三郎
同 田中美澄
同 近藤政治
同 橋本竹藏
参 佐々木寅三郎
同 小賀久七
同 元田喜十郎
弐 元田喜文
同 原太市
同 中野貞雄
同 橋爪徹三
同 梶原潔
弐〇 遠山清太郎
弐 尾尻茂樹

五 森吉四郎
同 津村文次郎
同 浦清兵衛
弐〇 兒島重太郎
同 山崎寅之助
同 伊藤稔
同 高居利助
同 伊澤俊一
同 吉信正彦
同 松本正信
五 金森誠之
同 田中長治
弐 竹中長四郎
弐・五〇 林昌治
弐 上野山龜一
同 門田又一
壹〇 玉置佐一郎
弐 塩路嘉一
同 森吉雄
同 高垣光市
同 武内一男
五 三輪吉之助
弐 赤松柳三
同 林源太郎
同 大野久吉
同 木村利郎
同 梁山俊雄
同 野田宏
参 横井德
弐〇 橋本隆太郎

弐 宮井勘助
同 森田義夫
弐 土岐政藏
壹参 大谷虎楠
弐 山崎清市
壹 山崎庄右衛門
弐 前田長之助
同 佐々木廣海
同 保田源四郎
同 敗見濟太郎
同 阿瀬誠二郎
同 安野谷源吉
同 籠谷勇助
参 中島昇平
弐 平田信夫
同 岡善一

稲むらの火の館所蔵 渋谷家文書 資料番号 10

弐 中尾泰三
同 津浦榮三
同 松宮順一
同 木下長次
同 牲川唯信
同 廣田權藏
同 楠山茂彦
同 堀川正一
同 栖原秋松
同 竹中迪雄
壹 村田貞之助
弐 大門龜太郎
同 境 こう
同 板原惠淳
同 池田梅吉
同 三崎金吾
同 寺柚慶太郎
同 數見勝太郎
同 林 友之助
同 河村しづゑ
同 藤城一三郎
同 森下明太郎
同 松原壯太郎

弐 楠井雄二郎
同 關根正清
同 間光三
同 久保清太郎
同 青石幸一 六〇
同 大松本寫眞館
同 岩上製靴店
同 出口運動具店
弐 井爪幾太郎
同 嘉田條太郎
壹 井原康隆
同 下野秀信
同 藪野彌助
同 由良光男
同 白子松二郎
同 小澤政楠
同 三谷龜太郎
同 丹羽一男
同 玉置留之進
同 堀田今一
同 中西正雄
同 栗生一男
同 川口虎市
同 決得武後
同 山本亮
同 高橋榮一
同 村上義人
同 太田彌四郎
同 塩崎秀松
同 林 利三郎
同 木根陽三
同 永岡文一
同 山下定胤
同 近藤信慶
同 野田喜一
同 寺神政雄
同 楠 寛之
同 津野勤次郎
同 高居彌次郎
同 清水五郎
弐 林 邦一
同 阪中貞子

弐 江川愛子
同 谷中源次郎
同 三木英一
同 菅田良應
同 上中忠吉
同 谷口眞吉
弐 澤田柳三郎
同 松阪彌吉
同 小林榮次郎
同 川口勇吉
同 黍原政次郎
同 平尾安松
壹 青石喜一郎
同 上田常七
弐 戸田正男

弐 浦崎彦十郎
同 榎本佐太郎
同 竹中安太郎
同 楠 陸三
参 増本彦五郎
弐 山本彌之吉
同 富上芳太郎
同 森下幸吉
同 小川馬吉
同 竹中久太郎
同 前田永太郎
五 橋本定右衛門
参 中井長二
弐 小川鵜雄
同 森田良四郎
同 御前正夫
同 上山雄治
同 古川一夫
同 佐原太郎
同 川口英一
同 津村英二
同 岩倉たか
同 西本嘉治
同 大南正雄

弐 小槇正司
五 山中龜松
弐 和泉繁一
同 籠谷輝雄
同 玉置勇藏
同 生駒德次郎
同 名島鹿之助
同 吉田正晴
同 水崎正美
同 大橋榮一
同 花田慥司
同 竹中一雄
参 玉置洋治
同 橋本忠治郎
弐 栗原長兵衛
同 大西圓右衛門
壹 崎山元吉
参 金谷伊兵衛
弐 增岡富藏
同 細田久右衛門
同 野田國隆
同 林 甚助
同 辻岡正二
同 武内修巳

弐 尾上繁一
同 佐原 毅
同 中西英雄
同 清水清吉
同 東正二
同 三木秀瑞
同 扶川雄志
同 高尾啓三郎
同 加藤要三
同 村上義人
同 太田彌四郎
同 塩崎秀松
同 林 利三郎
同 木根陽三
同 永岡文一
同 山下定胤
同 近藤信慶
同 野田喜一
同 寺神政雄
同 楠 寛之
同 津野勤次郎
同 高居彌次郎
同 清水五郎
弐 林 邦一
壹〇 波邊辰雄
同 阪中貞子

弐 川口 洋
同 水野吉太郎
同 青石雅夫
参 古谷虎弐
五 宮崎隨圓
参 水島竹雄
弐 保田昌亭
同 野村正一郎
同 堤 三次
同 津村芳太郎
参 塩崎龜七
弐 奥山隆雄
〇、参〇 上岡軍太
弐 堀 美雄
同 勝丸久視
同 山際義雄
五 山崎善一
弐 小原孝二
同 清水信二
同 東 常夫
同 川島武夫
同 石井光彦
同 福田義三
同 前田唯一

弐 宮井長二郎
同 岩本信亮
参 堀田健三
同 鎌田彌一郎
同 山田良吉 内海紡織株式會社
壹〇 廣分工場
弐 橋本忠一
弐 林 民治
同 龜井雲海
同 澤崎乘覺 三十四銀行湯淺支店
五 寺田鬼右衛門
弐 玉川政雄
同 橋本幸一
同 森口義楠
同 長谷隆二郎
同 青石近之助
同 國中貞夫
同 谷 勢次
同 藤本儀一
参 岩崎楠次郎
壹〇 波邊辰雄
弐 林 邦一
同 山崎龜吉

稲むらの火の館所蔵 渋谷家文書 資料番号 10

金一四二、五二〇	記念品費	
金三四〇、〇〇〇(外二三、〇〇〇校友會支出)	雜誌費	
金四三、九〇〇	講演會費	
金一〇四、四二〇	印刷費	
金二〇五、〇六〇	通信運搬費	
金二六四、六九〇	体育大會費	
金一五八、二一〇	展覽會費	
金四六、〇〇〇	慰靈祭費	
金三五、二八〇	夜會費	
金一〇一、九一〇	道路及橋梁費	
金一二三、九〇〇	雜費	
計金 二、二八五、三六〇		

◆正誤表

第三頁本校の沿革概要の記事中「明治四十一年三月……和歌山縣立耐久中學校……」トアルヲ「和歌山縣私立耐久中學校」ト訂正ス

氏名	頁	段	行	金額	正	誤
參寺田鬼子右衛門	一〇二	四	十二		寺田鬼右衛門	寺田鬼右衛門
同津浦榮藏	一〇〇	一	二		津浦榮三°	津浦榮三°
同野田眞夫	九六	三	一		野田眞° 夫	野田眞° 夫
弐梶野松次郎	九六	一	廿四		梶野松次郎	梶野松次郎
同岡畑重兵衛	九五	四	廿四		同°	
同後藤政逸	九五	三	廿四		後藤政造°	後藤政造°
同三木伊之助	九五	一	六		三木伸° 之助	三木伸° 之助
弐菖蒲谷義郷	九四	三	十一		菖蒲谷義郎°	菖蒲谷義郎°

會計報告

耐久中學校創立八十周年記念祝賀會收支決算書

收入

一金二、二六八、一〇〇	寄附金	
一七、二六〇	總高利息	
計金 二、二八五、三六〇		

支出

金 六四、九三〇	設備裝飾費
金六五三、五四〇	祝宴費
計金 弐千弐百八拾五圓參拾六錢	

弐石井傳一	弐近藤誠
同田中榮一	弐、五〇成川善太郎
五石井平太郎	同二澤永信
弐澁谷泰之助	弐山本文次郎
同岩崎茂	同稻垣愛之助
同古田啓次郎	同柏木永一
同森正	同小林弘孟
同朝倉一彦	壹龍田眞二郎
同生駒楠藏	弐吉峰瑞岳
同竹内泰一	同中井常藏
同渡部光彦	同海瀬伊三郎
同久保寅次郎	同船山武三郎
五田中政吉	同栩野常次郎
弐金山智覺	同斯波那之助
大森寅之助	

8 9 稲むらの火の館所蔵 渋谷家文書 資料番号 10 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9

兵營宿泊記

四年甲　光定道次

五月十八日

武裝は整つた。乘車の御注意もおはり今僕等四年級は元氣全身に溢れて出發しようとしてゐる。空は隈なく晴れ渡り春陽靜かに然し底力のある光をあびせる。毎日通つてゐる道だが、今日は何だかくすぐつたい感じがしてたまらぬ。おそらく現役兵にでもなつた樣な氣のする者もないではなかつたかと思ふ。

汽車は出た。九時の急行だ。僕等は刻々と僕等の人生に於ける一大經驗ともなるべき宿泊に、―或る希望に燃えて、―六一へと進みつゝある。

しばらく沈默がつゞいた、が間もなく其處此處に豫想話なども始まつた。「もう下車だなー。」

誰かの聲がした。紀三井寺を通りすぎたのにも氣づかなかつた。僕等は何時の間にかそんなに話に熱心になつてゐたのだ。驛を出た。電車道にそふて進む。空は出發の時よりも稍曇つて見えた。やはり都會に近づいた爲だらうと解釋したがその後の形勢ではどうやら降り氣味だ。そのどんよりとした中に唯一つ空高くそびえて風船球が見える。よく目を見張ると醬油の廣告だ。「……醬油」とかきぬいてゐる。增子先生のお話によるとあれが近頃流行の Air Line その事、その名も耳新しく感じた。公園にかゝる。我々はこゝで實に意義深き休憩をした。嗚呼、我が創立者、濱口梧陵先生の御銅像だ。僕等は今現にその溫顏に接してゐる樣に感じた。そうして靜かに訓示されてゐる樣な。僕等は感謝、敬虔の念に滿された。更にこの宿泊によつて―あの尊き我が創立精神に生きんがために―得る所多からんことを心に誓つた。

空は回復した。陽は赫々と輝り出した。道はあく迄もかわいてゐた。

間もなく僕等は兵營の人となつた。甲乙夫々一二中隊に分れる。室は思つたより綺麗ではなかつた。建物も古いためだらう。然しその古い中にも統一のされた整頓を見出した。雜襲も整理し稍つかれた然しするどい何物かを見つければならぬといつた樣なまなざしで僕等は沈默の中に部屋中を見渡した。先づ目についたものは壁の眞中の大きな貼紙だつた。それには某中佐殿御考案とかき、どちらからよんでも我慢我慢…とつゞく樣になり、そのまはりには進んで働けとか色々よい事をうまく書きならべてゐた。一寸上の柱を見るとそれには「水道使へばメートル廻る、井戸水使へば金まはる。」とか「電燈消しても國威は輝く。」とか軍隊らしい、標語が貼りつけられてゐた。何もかも珍らしい。

間もなく僕等は將校集會所の前に整列した。僕等は無論聯隊長殿に御挨拶にきたのである。

再び見ゆる慈母の如き溫顏、そして懇々と訓示されるあの古賀聯隊

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号 10

長の軍人精神そのものの行爲ー危險この上なき敵前三十米に於てさりのこされたる彼が部下の屍を、祖國のために斃れた屍を聯隊長自ら收容した、實に奇蹟的な行爲ー人情の花に僕等は感激の眼を以ておどる心を靜止しつゝ靜かに敬禮した。

「學生は飯をたべよ。」活潑な命令があつた。さつき銃の手入をした同じ机でいたゞくのだ。一すむさくるしい樣な感じがした。がその瞬間あの血の汗のにぢみ出る數日にわたる奮戰の後飢につかれて土にまみれた握り飯をかぢる我が忠勇なる兵士の姿が心眼にうつゝた。僕等は感謝にみちて辨當を頂いだ。

午後は丁度將校婦人方のために催された映畫を見學した。特に「君が代」といふのは面白くもあり又深く感する所もあつた。終つてから五時頃迄營內のそこゝゝを見學した。何處を見ても掃除の行き屆いてゐる事、全てが整頓されてゐる事には感心した。班にかへつたら晝間見えなかつた兵隊さんもかへつてきて急ににぎやかになつた。僕等はおとなしく盛際に集つて夕暮の景色をながめてゐた。さつきの人が又「學生は入浴に行け、引率をしてゆく。」と言はれた。間もなく夕食。初年兵らしい方が御飯をよそつてくれる。非常に手傳ふ勇氣が出なかつた。非常にすまない樣な氣がした。然し誰も手傳ふ勇氣が出なかつた。そして隅の方では「明日の朝は御飯をさりに行かうか」など言ふ者もあつた。森岡先生が「食事前には交代に御飯をさりにゆくのだ」と仰言つたからだ。食事がすむとすぐ食器を洗ひに行つた。水をくんできたら上等兵が非常に喜ばれた。夜の兵營は靜かであつた。酒保の側にある猿を見にゆくものもあれば酒保にゆくものもあつた。兵隊さんの面白い話を聞くものもあつた。ラツパがなつた。何時の間にか九時になつてゐた。點呼をし軍隊の如何に正確で如何に嚴しいかを知つた。一人でもなまぬるい號令をかけると何回でもやりなほしだ。班長の簡單な御注意があり皆な一緒に軍人勅諭を誦讀した。そして明らかに　明治大帝の御意の通りに完全に實行されてゐる事がわかつた。點呼がすむとすぐ就寢、消燈。習慣からか一すれむりにくゝ感じないでもなかつたが、何時の間にか夢もなくぐつすりねむつてゐた。

五月十九日

ラツパが鳴つた。何時もラヂオを通して聞いてゐるラツパが今勇ましくなりひゞいた。僕等は反動的に飛びおきた。五時半だ。「學生も外に出ろ。」點呼だ。空は少々曇つて見えた。何處からともなく流れてくる清らかなブリーズを胸一杯にすひこんで顏を洗ひに行つた。

朝飯後間もなく集れの命令があつた。またゝく間に集つた。兵營に來ただけでもかうまで違ふものかと我ながら感心した。それは全員が心を協せて機敏にしたからである。突然向ふから柏木先生が見えた。そしてちつともあの先生の猛虎の如き然も慈愛に滿ちた一瞥をあびせられた時僕等は非常になつかしく又うれしく思つた。その瞬間僕の心にはあの運動場で松原で叱られ、或ひはほめられ、又夏の炎天に先生の指揮で校庭整理に努力したなどのその日の事が昨日か一昨日の事の樣にまざ〳〵と思ひ出されしみ〴〵と師の御恩に感謝した。間もなく僕等は先生の御受持ての事の酒保や炊事場に行つて色々爲になるお話をうかゞつたが我が日記に我が心に特にこく特にふとく書き記されならぬ一つのお話があつた。その一事こそは軍隊の全てが如何に綿密なる計畫裏にあるかといふ事である。

而してその實行能力である。先生が話された。「諸君の勉強も一緒だ。入學試驗の準備にしろ學期試驗の準備にしろ全て何日から何日迄何時間、その間には何頁から何頁までをよむと綿密なる計畫が出來たならばそれを徹底的に確實に實行することがその試驗なりに成功する秘訣だ。」と。あゝこれぞ人生必勝の秘訣そのものではなからうか。僕等は我が日常生活にくらべつゝ感激にあふれてそこを出た。

靴工場や鐵工場の見學の後歩兵砲や機關銃について機關銃中隊の中隊長殿の御說明をうけた。そしてその最後に力說されたのは「我が陸軍は兵器人員の少いのを時間と軍人精神とによつて補ひこゝに世界無比の强陸軍たるものを建設してゐるのだ。」といふ事だつた。お話おはり再び繰り返された我が聯想は何であつたか。それはほかならず。我が學校の事であつた。我が學校の現狀は位置こそがへ全く我が日本陸軍と同じだ。人員は少ない。從つて設備は不充分、然し我々はこれに甘んじて他校に追隨しようか。否々我々には眞、健、美を眼目とする耐久精神あり、そこに時間の充實あり、そこに全員の一致あり。今や向上進歩の刻々をしかさふみしめつゝ眞の學びの園を完成、自由の里の完成に精進してゐるのだ。

午後は通信機關見學の後かなり遠い射擊場にゆく。重機關銃、輕機關銃の實彈射擊、僕は勿論生れて始めてである。眼前に展開されたものすごき光景、向ふの山に砂けむりがあがつた、と見る間に三四十發は發射されてゐるのだ。僕等はあの滿洲事變を、更に久しくうわさされてゐる日米戰爭を太平洋間題を想像せずにはゐられなかつた。而してそのすばらしい發射、實に一分間に實に六百發驚くではないか。少し雨が降りだした。然し兵隊さんには雨なんどは全く問題外だ。一心に的をねらつては「射て」の命令と共に天地もわれるが如き轟き。向ふでは頻りに旗をふる。兵隊さんは丁度僕等が試驗成績の發表をでも見にゆく樣に「我が組勝たばや」と一散に走つて行つては點數を報告する。益々雨が降りだす。然し悠然として射擊をつゞける。全くその熱心なのには感服せざるをえなかつた。然し後で實戰を考へ合はせて僕等には堪へがたい苦痛とも思はれる樣な事がごく普通なることを知つた。營にかへつたら島原先生が見えてゐた。その晩は特に皆なが無事で健康なのをうれしく感じ先生もさぞ御滿足だらうと思つた。

五月二十日

目がさめたのは四時半だ。然しもう皆な起きてゐる。ラツパをざけて出てゆく人もあれば一心に銃を磨いてゐる人もある。皆な非常に忙しさうだ。さう〳〵今日は演習日だつた。

僕等も急いで朝飯をすましてすぐ集合。出發。今日こそ偉いなる何物かをつかむのだ。僕等の肉は躍り血はたかなつた。ラツパの音勇ましく營門をゞる。空はどこともなく曇りおだやかなお誂への演習日和だ。進軍、進軍。もう一里は確かにきた。突然向ふの山で機關銃が轟き渡つた。戰鬪開始。雨が降りだした。

然し僕等は汗と土にまみれて忠實に上官の命令を徹底的に實行するあの無名の兵士を前にどうしてこんな雨に負けられようか。僕等は雨中を堂々と進んだ。やがて何とか山にかゝる。最後の一戰に我おくれじと機關銃の一隊、走る〳〵、球の樣になつて走る。何と壯なる、何とけなげな姿ではないか。これぞ日本軍人精神の象徵だ。最後まで突き進むのだ。功名、名譽は問題外、たゞ我が味方のために、正義のた

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

めにあく迄も死力を盡すのだ。ラッパの音聊慌こひゞき渡りこゝに涙習は終りをつげた。そのときあの上官の命令をどこまでも忠實に實行しどこ迄も大和魂そのものを以て遮進し血潮にまみれて遂に戰場の露ときえる無名の一兵士！而してその血と肉とのかたまりの勝利、さては凱戰さを思ひくらべざるを得なかつた。歸つたのは一時すぎ。晝食は殊の外おいしかつた。やがて僕等は可なりつかれた體を何すこもなくぼんやり休めながら銃劍の稽古に見入つてゐた。「武裝して集合。」先生の御命令だ。僕の心にはその時「なんだらさい。これほどつかれてゐるのに。」といつた様な所謂惡心と「あの忠勇なる兵士を見よ…」との良心のさゝやきとが同時におこつた。然に勿論勇みたつた。武裝も手早く僕等は練兵場にと進んだ。

さうして本當に眞劍に今日みたあの兵士達の様な心持で先生の命令に服することの出來たのを心から感謝した。斜陽をあびながら營に歸つたのは丁度五時頃だつた。

五月二十一日

愈々最終の日となつた。鬱き渡るラッパの音に僕等は更に自覺を新たにした。さんより墾つた空からは今にも雨がたれさうだ。梅雨の近づくのも思ひ出される。

朝があれば夕がある。新年があれば歲暮がある。入學があれば卒業がある。僕等は今正に少くともこの三日間に獲得した軍隊の美風を、尾所を清算すべき時になつた。動もすれば人間は物事の終りに近づくとだれやすいものである。然し僕等にはその自覺なるものがある。僕等は有終の美をおさめんと緊張にみちて中隊の兵器及び各班の具備品についての説明をうけることの出來たことを喜ぶ。

四日の（兵營）宿泊も瞬く間にすぎ、僕等は聯隊長殿にお別れに行つた。そして心から感謝の意を捧げた。中食もすみ班の方にもお別れする頃から雨が降りだした。間もなく僕等は或滿足を感じ希望に溢れて歸途についた。雨は愈々降りつゞけた。電車で停車場迄行く。汽車が紀三井寺を通過する頃には僕はもうぐつすりねこんでゐた。目がさめたら丁度有田川の鐵橋を轟々と走りつゞけてゐた。下車。雨は尚もやまなかつた。僕等は雨中を行軍して校門に進む。

軍隊の綿密なる計畫だ。適確なる實行だ。僕等の希望は唯これを完全に我がものとせんのみである。そして小なりと雖も梅陵先生の御精神に添ひ得た事を感謝した。

港の夕ぐれ

四年　堤　正久

濱邊の松にもたれ西の空を見守つてゐる。玉のやうに輝く太陽は將に西の空にかくれやうとしてゐる時父の歸りを待つ濱の乙女も赤港の唄を歌ひながら西の空を眺めてゐる。暮くかすんだ夕映の中に沈み行く入日の運命を考へてか、悲しさうに別を惜んでゐる。

ふと東の空を見ると月はまばろしの様な淡い雲の陰に包まれて丘の上に太陽の沈むのを見つめてゐる。僕も一層さみしくなつて來るのを感じて來た。其時小舟はすら〳〵と海面をすべつて漕がれて進んで來る。その影はゆら〳〵と暗くゆれてゐる。波の音、あゝ私は何でかさみしく、暗くすべての物は曇つた青色に見えてゐる。

私はいつも此の様な時、土井晩翠の萬里の長城を思ひ出して歌ふのだ。

春乾坤に回りては　空こゝここく霞み行く
天地の色は老いすして　人間の世はうつろふを
歌ふか高く大空に　姿は見えぬ夕雲雀
鳴呼跡ふりぬ人去りぬ　歲は流れぬ千載の
昔に返り何の地か　今秦皇の羽圖を見ん
殘壘壁も無し　春朦朧のたゞ中に
俯仰の遊子影一つ

港の燈はいつしかきら〳〵と波打際を照してゐる、あゝもう太陽は靜に西の空に沈み、月は益々明るく松の葉の間に昇つてゐる。このやうに、永遠に返つて來ない今日の日もくれて行つた。其の時沖の島かげから氣笛が「ボー〳〵」「ボー」と聞えて來た。あゝもう僕は靜かな物思より覺めて現實のさわがしい荒波にまかれねばならない。と考へた時いつしか心は一變し修養の途にある若人の腕をみがくべきけはしき山坂を征服しようと決心した。僕は急に晴々と元氣に滿ちた。樂しい少年にかへつて行くのを感じた。

演劇王
シエークスピヤを稱ふ

四年　堤　正久

喜劇あり深刻なるありナンセンスのものありその手法に至つても多種多樣である事が感ぜられる。

彼の作品では中期「ハムレット」を人生悲劇とすれば、後期の「オセロー」は人間悲劇であると聞いて居る。殊にシエークスピヤは浪漫劇の完成者である。彼の前にリリー、ユーダル等の先驅者がない事はなかつたがそれまでの演劇の總てを集め大成し、尙多くの要素を附加して浪漫劇を樹立した。シエークスピヤの業績は眞に奇蹟といふ外はない。英國文學史を繙いて見るに其の最も華かな時代はエリザベス王時代とヴイクトリヤ朝の時代である。

然るにシエークスピヤにはゲーテの深刻さ及びユーゴーの如き雄大さは少ないと或る人は云つてゐる。だが何といつてもシエークスピヤは彼等よりも偉大である。英國式の紳士、善良なるシエークスピヤが何故其のやうに偉人であるかと云ふに彼はあらゆる意味に於て大自然を感受し得たからである。創作の場合彼はあらゆる人物になりきつてゐる。嵐の如く吼號し優人の如く囁き帝王の如く威嚴を持ち守錢奴の如く卑屈となる。卽ち彼はあらゆる種類の人心を深く洞察し、その底に含まれたる眞理を把握する。彼は宏大であると共に非常に纖細である。そして彼の藝術的な才能に至つては今更喋々する生意氣を持たない。

曉の自然感

四年　吉村靖司

宮詣りに門を出る。空を仰げば殘月淡く西に傾き、四方は薄墨の幕

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号 10

にささされてまだ明けきれない。初夏の緑に包まれた田園の朝の新鮮な空氣を心行くばかり吸つて歩み行く。家々の戸のさゝされた道を左に折れ右に曲つて家屋の疎な所へ出る。尚一町ばかり行くと電氣會社の所へ來る。赫々たる二百燭光の門燈が不意にプツツリ消えた。附近の街燈も。あたりが急に初夏の曉の香がたゞよび出した。

向ふの松原にすゞ〳〵く一本道がほの白く空に浮び出てゐる。叢の奥には微に虫の細い音を聽くばかりである。何處も森々とした或崇的な、詩的な感が深く腦裡に植えつけられる。あゝ偉大なる大自然よ。かくの如き力を有する太陽が一度沒すればこの世界は暗である。太陽がもう出なかつたらどうなるであらうか。等と頭に浮んだ。否太陽は幾千萬年の昔から朝になるとあの勢膽な光を必ず現すのだ。偉大なるかな自然の力。又人力が如何に發達したと云へ、それは大自然の足許へも及ばないのだ。この光は世界の人類に特にセンチメンタルな東洋人に特別な曉の爽快を味はせるのだ。

暫く行くと、いよ〳〵森にさしかゝつた。一番列車の勢のよい響があたりにこだまする。すぐ後から白煙のラインが昇る。森の雀が何かに驚いたのか數十匹むらがつて飛び去る。東の空も餘程明るくなり、中天の浮雲も段々と染められて來た。

偉大なる自然は目覺めつゝある。この光景を眺めると自然に對する尊敬と偉大さがおのづから頭に染入る様である。林中の古い神社も一層崇高な感がする。澄み切つた空氣は足の底までもすが〳〵しく爽かな氣持になる。太陽は終にその一角を山の峯から現はした。一條の金線はさつと天地に輝き出した。おゝ見よ、平和な我村にまでこの惠みを授けてくれるのだ。このすが〳〵しい神前でこの美感に打たれ、感慨無量、しばし呆然としてたゝづみ、全く我を忘れて、無我の境に入るのである。

けがれた浮世や、いそがわしい人生等は全く洗淨されてしまふ。詩人であつたら、歌人であつたら、この氣持を、この感激を、必ず詠ずるに違ひない。今僕は自然の餘りに大きい幸福と、之に對する感謝の念によつて胸がはりきつてゐる。もうすつかり全貌を現はし赫々として四方を照み、天地萬物何處を問はず嬉びる所なくその和やかな光線を投げてゐる。

おゝ平和の象徴、我等の太陽よ。

火事

四年　峠原敏夫

夕飯時分であつた。

僕は豫習をすましてゐるので、何もする事がなく、弟と一緒に火鉢のふちにすわつてゐた。

其の時、兄さんが「火事、火事、北の方が火事だ。」と、表障子をおけて、あわただしくかけこんで來た。「ええ本當に？。僕は、半信半疑で弟と一緒に表にとび出して行つた。兄さんの言つたのが本當らしく北の隣家の屋根の上が眞赤である。近くらしい。向ふから二三人がや〳〵言ひながら、ころびさうに走つて來る。ポンプを引いて行く人達であらう。

僕は弟とよく見えさうな場所に走つて行つた。見ると、あまり大きくないが眞赤な炎が天をこがしてゐる。其の火の反射によつて四邊は眞赤である。よく見ると、棟の裸体が火の中にくつきりと浮き出てゐる。

其れを見た時、僕の心はじーとして來て、胸は早鐘を打つ様にどき〳〵して何んともいへない感じがこみ上げて來た。弟はふるへてゐるのであらうはなからう。

提燈が田甫のあぜ道をいくつも〳〵飛ぶ様に行く。まるで螢が飛ぶ様に……折折消えたり、ともつたりするのは、木の幹にかくれるからだらう。

よく耳をすまして聞いてゐると、人の騒ぎ聲や、泣き叫ぶ聲が聞える。凄慘言語にぜつして、本當に生地獄も此のやうであらうと思はれる。なんと可愛さうな、氣の毒な事であらう。なんだかまぶたが熱くなつて來た。

何時の間にか僕と弟とのまはりは、一ぱいの人になつた。

僕等の村の半鐘がどすぐろい空に鳴り響き出した。前の廣い道をポンプを「えんや〳〵。」と、言いながら引いて、火事場に急いで行く。遠くの方から鉦鼓の音が「ゴーンゴーン。」と、かすかに響いて來る。どこかの女の人が「なんと可愛さうによ、火事に會つた人達は、今頃さぞかしとてゐるよにの、氣の毒な事だなあ——。」と、自分が火事にあつた樣である。皆も「可愛さうになあ。」と、相槌をうつた。

段々火も小さくなつて、棟が落ちた。僕は何か重たい物がおりた樣にほつとした。弟は「もう歸へらうよ。」と、ふるえ聲で僕を促した。

他の人達もがや〳〵言ひながら歸り始めた。僕等も歸途についた。

自分の家も火事をひくやうな事があるまいかと、氣になる。氣のせいか自分の家の土が濃赤い。まだ半鐘が鳴つてゐる。

翌朝其の所を通つて見ると、黒こげになつた木からまだ白いゆげがたつてゐる。火事にあつた人達であらう巡査と焼跡で何かさがしてゐる。其れを見ると一入、可愛さうな、氣の毒な感じがする。此の時の火事が最もよく心に殘る事であらう。

鄉土有田を讃ふ

四年　箸尾德一

あゝ、有田！　我が永遠の墳墓の地有田は山水の美を兼備し、往く所として住ならざるは無く、松は耳目を清うし、竹は衣襟を碧にし、清景良く人を樂しませ憩として歸るを忘れしめ、眞に遊子をして仙境の地に遊ぶ心持を生ぜしむ。山秀で水清き有田こそ眞に樂天地の感有りと言はんかな。

三方は翠巒につゝまれた秀峰峻嶺波濤の如く起伏し、面前には出入の白帆もいそがはしく、絲波一面鏡の如き洋々たる蒼海をひかへたる有田の風景こそ實に雄大豪壯にして、嫵麗幽婉の趣少なからず此、實に山河襟帶の地ともいふべし。

有田の東端、那賀、海草と境を爭ふ所、其所に有田の美峯たる峻峯生石山巍々として中空に聳え、頭に去來せる點綴の徽霊をいたゞき、足下には、八重の疊の衣をまとひ、嚴然として行手もまよふ廣漠無限の有田平原を朝に、夕に下瞰す。それより降りて諸山、谷々峯々を傾け秀を競ひ高さを相爭ひて蜿蜒として、橘の香あふるゝ平原をおのがじし懐にいだき、遠近の山々眉黛を凝して南に、北に、東に、西に、別れがたなの秋を分ちて去る。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

我が郷土の名を取りて生れし有田川は浮世はなれし眞言祕密の靈跡高野山に源を發し谷間々々の細流を併せ、奔流十有餘里、延々として龍蛇の走るが如く、春は桃、櫻、梅、の岸邊、翠柳の渚を流れ、其の間幾多の芳蜂峻嶺の姿を、秋には滿山紅と化し、紅葉水邊にさし交し紅の雫をたるゝ風情を、あるは帝城はなれて遠き山又山奥に秋の月照り映えて、千葉の座に鳴く虫の音もすゞしき、仙人の住める所にやあらんと思はるゝ水邊に望める一軒屋のものさびしき景色を。かゝる多種多様、千變萬化の姿を一巻のフイルムにおさめつゝ、天女の天下りして銀鈴を振るが如きすゞやかなる聲をたてつゝ終に洋々たる大海に名殘りをさゞむ。

茫々たる大海限りも知らず、水天遠く相連なり一色にして差別分かず、四國の連山にや、波間に姿を見えつ、かくれつす。其の間あまたの白帆、繁く往來し、いづれの鳥かは知られどもすれつゝ上りつ、羽打ち心嬉しげに飛びかへる姿などいと面白き心持ぞする。一瞬目を轉じて、足下浪打ち上ぐる海邊を見やれば長汀曲浦遠く、蒼龍地に伏せるが如き松林あり大海原を襲ひ來る風颯々として枝間にうなり、金の波銀の波、打ち上ぐる白沫、延々と打ち續き、それより渚をつたひて南行すれば、連山海に迫り奇岩怪石の雨眼より電光を發するが如く、海面を睥睨し涙怒り立ちて忽ち襲ひ來り、恰も雨虎肉を爭ひ、双龍珠を爭ふが如く實に壯觀極り無く、人をして股慄せしむる所亦多し。又其の波の底を見るや、諸々の美しき魚泳ぎ、麗はしき貝靜かに眠り赤、綠、紫色とりどりの海草、幾重とも知らずしげり龍宮城もかくやと思ひ知らるべし。

山水の美、海の美、三つを兼備せる我が郷土はいつにても麗はしけれども、わけて春、秋の景、舌筆に盡しがたく遂子をして低回去るあたはざらしむ。春暖、一度もよほして春風嫋然として若草の上に遊び老霞の靉山野にひゞく新綠の候おとづれんか、空には行手も知らず雲に入る雲雀のみ高く、地には花烟漫として咲きほこり、もつれ〳〵つゝ舞ふ雄蝶雌蝶の低く高く。諸山皆翠をしぼり青嵐梢をならし、松柏の綠濃やかなる中に目覺むるばかりなる櫻花散在し烟漫として所々に亂發せる風精など實に紅雲の峯にかゝりしが如く此等の美觀言ふべからざるなり。

和らかに吹く春風にリンゴの如き頰をなぶらせつゝ、すみれ、たんぽゝ、れんげさう等咲き亂れたる小川のほとりに美しき少女の花摘める姿。落花をのせて下す筏舟など此我が有田の特色とする所なり。

一度春去つて、秋風いつしか吹き來り平原に黄金波打ち、天高く馬肥ゆるの候おとづれる時、漠々たる平原に秋の七草、野をいろどりて美しく、草蔭にすだく虫の音いと高く野人の籬に咲きそろふ黄菊、白菊、など見るにつけ、車を停めし古の詩人の心中もかくやと思ひ知らるなり。秋の有田川は紅葉の雨を集めて右に左に、紅葉せる有田の姿をながめつゝ流るゝ樣など古の人の歌ひし「立田川紅葉亂れて流るめり。渡りは錦、中や絕えなむ。」をしのばせるかな。

春夏秋冬、月みち月かくるの時、花咲き花散るとき、朝に夕に千變萬化の美景を呈する我が郷土有田！

有田は實に山紫水明の所といへども決して過言にあらざるなり。

春雨と大泉先生

四年　松下政巳

「先生本を忘れて……」「君は馬鹿だね」

これが先生と僕の最初の會話であり、又それが僕の先生に對する第一印象であつた。僕と先生との馴染は淺い。先生は僕なんかを直ぐ忘れて終ふだらう。きつとさうだ。併し僕は先生のざんばら髪を何時までも忘れない。今ーしとゞ〳〵雨が降つてゐる。ぬか雨が。絹糸のやうな春雨が。思へば先生はあの雨脚のやうに細かつた。かんしやく持だつた。卒直だつた。又美術の先生特有の無精もあつたやうに思はれる。このやうな點に於て先生は僕と酷似してゐる。僕は自分の細腕を見る時に先生を思ひ出すだらう。僕の細腕がある限り。昨日先生が轉任されるのなら少々の病氣でも押して來ればよかつた。そして先生と別れを告げたらよかつた。又何時の日か會ふ日があらうか。（窓の外を氣早な蝶が風に乘つて行く）今、無風狀態です。

故郷の春

三年　西井龍三

遲き汽車に乘り、遠く感ぜられる道を過ぎて僕は故郷に歸つた。故郷にも春が來た。總べてのものが生きがえり又美しく見える春だ。

僕は此の春を最もあこがれてゐた。その春が、今自分の前に控へて私を待つてゐる。何といふ幸福でせう。こういう時には僕はいつも弟をつれて野山に散歩するのが常としてゐた。

色々の花の香を後に大きな樹木なき山に登つた。面白い。眞に春を味わうとするならばやはり野山は一番よい。日が暖く照りあたり一面にかげろふが燃えてゐる。寒くもなく暑くもない。私は野山に仰向にれころんだ。そして空を仰いだ。雲雀は空高く囀つてゐたが、やがて雲の中にかくれてしまう。雀の群も飛びかう。こうして樂しい春の一日を私は野山で過すのが、毎年もの役目であつた。

やがてさびしい夜だ。宵のかゞり火も消えて、賑わひし螢の聲も消え、うす曇りたる月は、平和な下界を照して行く。氣持よい夜半の空氣を充分にすひながら昔の私の最も親しんだ森に行く、おゝ！僕の遊び友だちであつた樹も昔の面影をそのままに殘してゐる。

あゝあの樫ともよく遊んだものだつたな、昔をしのぶ思ひが後から〳〵と起つて來る。あたりに物音一つたたない。時々輕い微風と共にバイオリンの音も聞へて來る。隆夫君だらう、昔に變らぬ陽氣さが浮ぶ。やがて私は朽木の上に坐し、しばし呆然としたが、やがてあたりを見まわしながら人生を考へた。釋迦の事も考へた。霊のつかれが一時に身に感じると私はつと立つて親しい森に明日も來るといつて別を告げた。

月は尚照り續けてゐる。先の、のんきなバイオリンが、今度は眠をさそふ歌となつて聞えて來る。

宵の海邊

三年　神人三代治

一日の海の勞働を終へた漁師達は「ヲーイヲーイ」と大い調子づいた

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

聲を重い櫓に合せてこぎよせて來る。婆や子供達は嬉しさうに大きな頭ほどの鱗の着いた桶を持つて海邊に我が舟の來るのを待ちわびながら健康そのもの樣な顏に美しい夕日を一杯受けてほゝえんでゐる。

舟が岸につくや否や、子供達ははしやぎまづ父の獲物をのぞく。そうして大きな網にキラ〳〵光る太刀魚を一杯入れて勇んでかついで行く。魚問屋へ持つて行くのだろう、親達は舟の始末を終へると、父親は大きなざるを脊に、話し合ひながら我家へと歸つて行く。

何時の間にか金色の玉は輝く雲の中より美しい數條の線を描いて居たが、はや滴るばかりの黃金を身にたゝへ水平線の彼方へ發した。

あゝ、透明な沈みきつた中に慈愛の笑をうかべながら……。右手の岬は、前方の小さい島をのまんとしてか、暗い奥深い不氣味な手をさしのべてゐる。

鏡の如き、油を流した如き水面に、たゞ獨りさみしさうに、小さな傳馬船が親船を待ちわびてゐる。

やがて紫の雲も濃くなつて、薄さばりが空を被ふた。

或る夜

三年　梶野正雄

今迄さら〳〵降つてゐた雨はもうやんでポタ〳〵と石の上に落ちる雨垂が可憐な音を立てゐます。靜かな夜です。一輪挿にさされた白い花が音もなく机の上に落ちる。

私は机にもたれてヂット深い想に耽ける。

學校の方からかすかにハモニカの音が聞えて來る。その音は靜かな夜を平和な氣分に滿す。

私はそつと窓を開いた。空はいつしか晴れて小さな星が銀でもふりまいた樣に輝いてゐる。ハモニカの音はハタとやんだ。公園の電燈を見つめてゐた私は何だか悲しくなつて思はずホロリとした。

初夏の夕べ

三年　吉非俊一郎

南窓のそばで椅子にもたれて、吹き終つたハーモニカを手にしながら、ぼんやりと外を眺めてゐた。前に有る梨はこんもり茂つて晴い、時折その葉は風にふかれて、サラ〳〵と音を立てる。

清い風は、すうーと體を簡單に洗つて窓内に流れ込む、葉は音を立てたかと思ふと涼しい風が吹き込む。あまり氣持がよいので椅子に、もたれた體を今度は窓さはに寄りそへた。澄みきつた空には星は輝いてゐた。ハーモニカを再び口に當てて輕く吹いた。その音も又澄んだ音だ。

突然梨の木の根元で白い何物かが「パツ」と跳れる樣に動いた。初めはふいの事で驚いた。よく見るとそれは自宅の猫だ。何をしてゐるのかと思つたら木の幹に有る雨蛙を取つてゐるらしい。初の内は氣持よく思つてゐたが、あまり涼しすぎるので少し寒さを感じた。

向ふの山の下の小川邊で二、三の螢が低く時には高く輕やかに飛び廻つてゐる。よく見ると梨の木の葉に一匹夜露に光つてゐる。その青く光るのを私はぢつと見つめてゐた。

耳を澄ますと遠くの方で螢を呼んでゐるらしい子供等のはしやぐ聲が微かに聞えて來る。自分も小學時代の頃友達と螢狩に行つて取つた事等が想ひ浮んで來る。籠を持つて行つたり、或は木の小枝を折つたりして取つたものである。そして着物のすそを夜露に濡らして母にしかられた事等を想ひ出して我ながら、おかしくなつて來た。もう子供の螢を呼ぶ聲が聞えない。又彼等も私と同じ樣に着物を濡らして、しかられるのではないかと、いらぬ事を心配する。そして又微笑ずにゐるを得なかつた。

空を見ると雲が少し出てゐる。あまり夜風に吹かれるのも良くないだらうと思つて室の中に引込んだ。

神社奉仕

二年　上野富造

不圖目が覺めた。朦朧としてゐる頭に「ハツ」と氣付いた。それは、「今日は神社奉仕の日である」からだ。外は明るい。「さては遲れたか」と思つて時計を見ると、五時半だ。「やれ、〳〵これで安心した」と思つて寢具を片づけ、顏を洗つた。

外に出て清い空氣を思ふ存分吸つて、箒を持つて鐵道線路に沿つて輕便湯淺驛の方に歩み出した。夜露にしつとりとぬれてゐる草の上を「ざく〳〵〳〵〳〵」と踏みしめつゝ……。片方に杉の垣ある小路を通つて、耳を澄まして聞くが、人聲だにせない。さては「矢張り遲れてゐたのか」と思つてどきどきした氣持で驛に行くと、大分人が集つてゐた。やつとのことで、安心して彼等の中に入つて行つた。

係りの先生も來て、點檢を受け列を造つてお宮に向つた。そこで、拜殿前に並んで最敬禮を爲し、掃除にかゝる。僕等は道路附近の掃除となつた。長い間掃除をせないのであらう。塵に澤山積つてゐた。丁度、雨上りの少しかはいた位だつたので、掃除しぬくかつた。始めの方は誰も一生懸命にやるが、終りの方は倦んできた。その中に腹が減つてくる。今日は塵を燃やすにも濕つてゐて燃やされない。が、適當の處置をとつて、掃除も終つた。

再び拜殿前に集合して氣持よく解散した。

この日の奉仕は僕等下級生よりも上級生の方々の方がよくしてくれた。僕は後に反省して見て、上級生の方々に濟まないと思つた。しかし我等は氣持よく解散し、面目を一新した境内を眺めながら、歸途についた。かくして今日一日をたのしく過すことが出來るのだと思ふとうれしかつた。

進級の喜びを恩師に知らす手紙

二年　矢部總一郎

拜啓今や春風和やかに吹き、鳥囀り花匂ふ季節になりました。先生には益々御壯健の事と、お喜び申し上げます。

さて私も此度中學校の二學年と云ふ學年に進級致しました。御喜び下さい。これも、先生から受けた色々の御教訓の爲めと深く感謝し喜んで居ります。小學校の校門を去るに臨んで先生から受けた「仕事に向つて邁進せよ。」との御教訓が、今猶ほ僕の腦裏から離れません。今は春です。此の人生の春に於て、我等はあの若芽がぐん〳〵生長して行く樣に、僕等も延びなければなりません。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

僕も正しく強く麗はしく物事を行ふて立派な人物となつて再び先生に喜んで戴かうと思つて居ります。

なほ來る五月七日から當校創立八十周年記念祝賀會が盛大に擧行されその翌日からは展覽會、運動會等があります。御暇の節には御觀覽にお出下さいお待して居ります。

終に臨み先生の御健康をお祈り致します。さやうなら

夏

二年　ノ野信吉

此の頃の日和はよく晴れた日和だなと思つてゐると、暫くして、空模樣があやしくなつて來る、そして何となく陰氣になる。だが此の陰氣の中にどこか夏といふ感じが起つてくる、あわて、干物をかたづけるのも眞夏の夕立とよく似てゐる。僕はこの感じが好きだ。夏ーおゝそれは何んと快ろよい響きを持つた所の言葉であらう。森、山、野原到る所に初々しい綠の色を呈して活々として大氣を呼吸してゐる。この男性的な美を見る時、その時の僕の心持は、潑溂たる元氣に充ち〳〵る。これは誰にしても同感だらうと思ふ。又、夕立のさあと降つた後のすが〳〵しい心持、こんな心持は夏にのみ持つものだ。そして水泳山登りなどで體をきたへ、暑さに打勝つて行くのだ。夏は精神をきたへ身體をきたへるのにもつて來いの時だ。秋の季節もよいが、夏のやうな男性的な所がない。夏はどつしりと落着を保つてゐる。吾等の心もこの感化を受けて落着きが出來てくる。之等の事は夏だけしかない。その点で僕は夏が四季の中で一番よい時季だと思ふ。

弟の死の悲しみ

二年　安井富夫

僕の弟が生れたのは丁度僕の七つの時であつた。僕が弟の生れたのを喜び毎日の樣に負つたり、又いだいたりして可愛がつた。丸々と太つた體はとても僕より太かつた。その太かつた弟が悲しいことには僕の尋常一年の時に病氣になつた。或日學校から歸つて見ると病氣がよけいに惡くなつたと見えて一そう顏色が青くなつてゐる。僕は傍によつて笑はしても少しも笑はないで泣くばかりである。三四日の後途に死んでしまつた。僕は非常に悲しかつたので弟にすがりついて大聲で泣いた。だが死んだのであるから仕方がないと思つて外に出た。日は雲の上に隱れて今にも雨が降りそうになつてゐた。僕はただ何も思はないでボカンと遠くをながめてゐた。

今僕があの弟があつたら勉强に飽きた時等には何時も愉快に遊べることだろうにと思ふと今更新しい淚がこぼれて來る。

近所の家の兄弟仲よく遊んでゐるのを見ることに僕は羨ましくなつて來る。

初夏の夜

二年　淺井彌三郎

僕はふと勉强の手を止めた。

外ではガーガーと何かの虫が夜の淋しさを一そう淋しくして鳴いてゐる。俄かに懷かしくなつた僕はそつと雨戶を明けて、外を見た。蟲は言合した樣にぴたりと鳴き止んだ。しばらくしつとして、外を眺めてゐると、虫は再び鳴出した。「ガーガーガー」と何か悲しみをかくんでゐる樣に……。

僕は虫に誘はれて外へ出た。そして空を見た。空には數限りない星がキラ〳〵とまたゝいてゐた。何處か遠くの方で汽笛の音がする。僕は一つ大きく呼吸をした。すが〳〵しい空氣が胸に流れて、心を一そう淸くする。その時風がそうつと吹いて來て僕の体の中へ、しのび込んだ。僕は鳴く虫の姿を心に描きながら家へ入つた。

そして「禾ヲ鋤キテ日中ニ當ル……」と漢文の復習にとりかゝつた。

野球

二年　嶋田伊三郎

僕は野球は好きだ。何故ならばあの廣々とした「グラウンド」の中で元氣一ぱいに張り切つた氣持でもつて野球をやるのが何よりも興味深いものである。又「ユニフーム」を着た若い少年が「グラウンド」の中で「バッチング」をやつて「カーン」といふ有樣「ピッチヤ」の投げた球が「キヤーチ」「ミット」にさまる「パカン」といふ音は見るからに少年王國の意氣を表はしてゐると思ふ。

野球は少年のやるべきものであると僕は信ずる。共同生活をする上にも、引込思案である我が國の少年にしてもよい「プレイ」である。だから僕は野球をやる事を進めてやまない次第である。

最後に野球をやると病氣になるとか勉强が出來ないとかと世間では

いつてゐるが決してそうではない。自分の精神一つであるから僕は一生懸命に野球をやりそれによつて心身を練り鍛へて他日成功しやうと心懸けてゐる。

蜘蛛と蝶

二年　田口穰

ヒラ〳〵と蝶々は樂しさうに舞つてゐる。木の葉の上に止つた黃色の蝶、見るからに美しくあつさりとした蝶である。するといつの間に張つたのか大きな兵隊ぐもが、柿の木の間に大きな巢をかまへて此の大空を我が物顏に視張つてゐる。僕がそのくもの樣子が何となしに小にくらしくなつて來た。落つき拂つて長い足を延ばしきつて、巢にかゝつてゐる樣子。僕はたまらなくなつて其處にあつた木片を巢に投げかけた、するとくもは益々落ちついた樣子で、巢にかゝつた木片を、一生懸命に振つて振り落さうとした。丁度其の時だ、前の黃色い蝶がヒラヒラと舞つて來ていきなりその巢に引掛つた。あの黃色い蝶の命はそれ切だつた、くもは「待つて居ました」といふ樣な足どりで蝶に飛び掛つて行き眞白な、ねば〳〵とする液のような物を出して蝶を完全に包んでしまつた。蝶は苦しいのかばた〳〵やつてゐる。

僕は此の樣なことを眼の前に見て蝶があまりに可愛さうになつたので、くもを一もみにもんでしまつて、憐れな蝶を助けてやらうとも考へた。がしかしくもの事も考へると、今まで澤山な糸を口からはき出して作つた所の巢で今よう〳〵ある獲物を取つたのだ。こう思ふとくもも無視する事が出來なかつた。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

此の憐れな蝶もとう〳〵死んだのかちつと身動き一つしない。くもは歓喜に溺ちた様に蝶に近よつて行く。

此の蝶の爲か、午後の日光が蝶の上に照つてゐた。

春を惜んで

一年　川口量雄

月、雪、花、風に雨に六ヶ年の御靈生活が僕にとつて、可なりに長い思ひ出、嬉い巣立の道場であつた。たとへ卒業といふ喜が一方にあづたにせよ、いざといふ日は何ともいひ得ぬ淋しさと、名殘惜しさに心が沈み果ててゐた。住みなれた教室、可愛がつてくれた先生達、ましてや大勢の弟達から「蓋の光」を歌つて送られ、「師の恩」を唱へて、恩師の前に立つた時、僕の目頭は熱い泪で一ぱいであつた。

もしこんな時、僕の前途に「中學校入學」といふ新らしい大きな希望が漲らなかつたら僕は毎日どんな暗い想に沈みはてた事であらう。

三月二十五日といふ日は強い土砂降りの日であつた。湯澁行を中止せればならんかと一人心の中で心配してゐたが「こんな雨くらゐ、汽車にさへのつたらなんでもない。量雄の入學のためぢやもの」と母は勇み立つて下さつた。

すつぽり濡れて、一抱に餘る澤山の教科書を大畑で買ひととのえて歸つた頃は日暮にも近かつた。ここにも待わびてゐてくれた父から、「御苦勞であつた」と、母子をいたわつてくれた。

それから幾日、新らしい教科書の香や、挿絵のあれやこれと、色とりぐ〳〵な地圖や附圖をめくりめくつて、起きても、寢ても、教科書いじり、机と本棚を父からもらつて、立ち並べた時の嬉しさ、僕は一人ほゝえんだ。

入學の六日が明日になつた。病氣で全く元氣を失なつてゐる父は、「岩を杖にしても量雄の入學式には必らず出席してやる、校長先生にお目にかゝつて、是非教育上のお話を承つて來るんぢや」と一月前から口ぐせのやうに云つて居つたが、何分にも足の自由さへきかぬ位、弱りはてゐるので「とてもだめだ」と僕は思つてあきらめてゐた。とう〳〵六日の日が來た。家から學校まで僕おも一しよに、自動車で乘り詰めてまで出席して下さつた。僕は思つた。「お父さんがほんとうに命がけだ」と父も亦「他人の事なら金の拾圓、百圓で出來た事でない。」といつてくれた。

弱り果てた。身体を、母親の肩に凭けられもて餘に寢ころんだ時「こんな嬉しい日がなかつた。くたびれなんか一つも問題にならんぞ、あの校長さんの教育上の深い御信念なり方針を聞かせてもらつて、もう〳〵自分の平常の意見とピッタリじや。量雄は安心じや。よい學校へ入れたものじや。先生方全体の御様子振りといひ一見して、わしは耐久の空氣が味はへた。」と母親を喜ばせ一人と滿足してくれた。

さあ明日から「いよ〳〵スタートを切るのだぞ」「ただ一生懸命あるのみじやあぞ」と激勵して下つて最早や一ヶ月。

花は散り果てて綿目の山野はすが〳〵しい青と綠の五月に入つた。

春を惜んで若葉の蔭で「たゞ一生懸命あるばかりだ。」

野球の感想

一年　久堀俊隆

「ユラーアウト」審判官が手を斜めに振つた。僕等の眼は一時に審判官にむけた。やつぱり自分の學校が勝つてほしい。僕の心は其れで一ぱいになつた。

「カアーン」打たれた。飛ばすに居てほしなあ!!。ところが球は伸びる〳〵、センターの上を越した。三塁は打たれた。やれ点は、はいらなかつた。僕は餘りおそろしい氣がして運動場は、見られないような氣持がした。

「カアーン」鳴つた。ヒヤッと體に水をかぶせられたような氣持でソットのぞいた。球は青空高く舞上つた。やあ——。僕はただ球を見つめるばかりであつた。レフトが見事にうけた。わあ——見物人もほめたたへる。僕は嬉しさの餘り。わあ——と聲が出た。ところが一点は入れられた。僕は氣が氣でない。じつと見ていないで、後をむいたり下をむいたり、横をむいたり、じつとしていられない。「カアーン」又打たれた。あのやつよく打つなあ一念ににく〳〵しく見えた。

一点は又入れられた。一回の表で二点もとられた。

僕がなあ。天才を持つて、野球が上手であつたらなあ。此のやうに打たれはしないのだがなあ。

僕は殘念であつた。しかし此れも運であると思へばそんなに殘念ではなかつた。

こんどの耐久軍の攻撃はどうだろう。僕は胸をおさへて待つていた。其の心の底にはいつしか我が校の勝利を祈つていた。

自分の家

一年　坂中哲

僕の家はさびしい家です。

お父さんは僕が三つの時妹はまだ生れてゐないとき私たちを殘してなくなつたのです。今では僕とお母さんと妹と三人でありましたが今僕が學校に來ましたので家は二人で大へんさびしい家です。

勉強に飽いてくるといつも自分の家の事を考へて見ます、いつ考へてもお母さんや妹の事がすぐ頭にうかんできます。

妹は病氣もしないで學校に通つてゐるがお母さんは元氣でお仕事をしてくれているか、こんな事を考へてくるとつゐ家に歸りたくなつてきます。僕は其の時夏休が來たら歸れるんだからそれまでがまんしたらよいと思ひながら又心をとりなほして一心に勉強にかゝります。

あゝ八時がなつた、今お母さん等はれる用意をしてゐる所だ、いつも八時頃になつてから休むことになつてゐたから。

どう考へても自分の家ほどなつかしい所はないと思ひます。そのなつかしい僕の家はさびしい家です。

校舍がらの眺め

一年　由良金次

耐中の校舍から眺めた雪々とした松、その影が波にうつつて非常に美しい眺めである。山手を見ると、紡績の煙突が高くそびへ、田には白い花が美しく頭を並べてゐる。

又あの美しい日の丸の旗、廣い劍道場、美しい土手其處此處の草木

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

何ともいえん風景である。廣い青空大きい太陽、歴史ある耐中非常によい氣持がする。雀がちう〳〵鳴きながら飛廻つてゐる。たのしい夏を向へ、海を見渡して見ると、遠く續く松原、長く續く波戸、荷物船が白煙をはきながら、はいつてくる。

遠く霞む湯淺港小波の上に舟が、あちらこちら浮んで見える。北には遠くつき出る青い山、氷會社が大きく見える。昔のやうに白帆の上げた舟の出はいりする時分ではどんなによい景色であつたでせう。

最後の五分間

一年　增岡好彦

時は中間考査の第一日の一時間目である。

それは國語の考査であつた。僕は最初よかつたが後になると、だん〳〵むづかしくなつて來た中もとにあつた、書取は殆ど知らなかつた始め本のとほりに書いたが字の寫りが惡いので消してしまつた。いくら考へても考へても出てこない癖にさはつて「えゝ」これでいゝと思つた。だがどうしても變だ、他の人のを見てはならないと思つて目を閉ぢて、じつと考へた。するとがた〳〵と二三の友達が席を立つた。目を明けて見ると、僕と、もう一人野田君がいるだけである。時間はあと五分である。僕はどうどう「ケン」と言ふ字をこんなに書いた、それはこうである「研答案を出すと、續て野田君も出した。

後から本を見るとやつぱしちがつている。あはてゝはいけないと後から覺つた。しばらくしてサイレンがなつた。此の五分間はとても長いやうに僕は感じた。

出動兵士からの通信

一一八

昭和六年九月滿洲上海事變突發するや我校生徒より、心からなる慰問狀を發送した。それに對し左の通信があつた。

○　○　○

拜啓御手紙有り難う御座いました貴殿には熱心に御勉强なされて居る由結構な事と存じます。小生も御陛様にて事變以來頗る元氣旺盛にて各所轉戰し皆様方の御期待に添ふ如く奮勵し支那兵匪を射殺、刺殺等隨分殺してやりました其の內でも奉天の北大營の攻擊の如き又近く哈爾賓の攻擊の如き敵の死者にて足の置く所無き様に數多の人生を地下に送り支那兵匪否支那國全土の支那人をして再び立つ能はざる如く又他國に對しても我が武士の如何に勇敢なるか如何に正當なるかを示し結果の有利に解決する如くやつたのです。何卒御安心下さい右如き動作の出來るのも皆我が同胞の厚き情に外有りません。戰爭の終る毎に慰問袋、慰問狀等を頂戴して奮起し國家の爲に我身の如何をかへり見ず働く事の出來たのも自分の力では有りません。今更何も述つて下されなくとも我々の心中及動作には二樣は無いのです。御安心を、小生も光定道夫君と同鄉です紀州男子の意氣を東北健兒と共に充分發揮しました貴殿の先輩として目下事變以來多忙の爲出來なかつた事を整理中で有ります。又近頃は北滿方面のみにて鐵嶺附近は平穩で有ります。

有難う御座いました。

貴殿も御壯健であらん事を。

時々情況の通報を。

昭和七年五月十三日

鐵嶺獨立守備步兵第五大隊第四中隊

青木宗一

後藤敏光殿

○　○　○

拜復貴翰有り難く拜受いたしました。御貴君には御無事に御暮らしの由何よりと存じます。次に自分事何等の障りも無之吳淞水產學校にて警備勤務に精勵致し居ります御安心下さい。

平素は勤務繁忙の爲に失禮勝ち何卒御赦し下さい。內地も今は梅花も散り果て、葉櫻の陰で語り合ふ頃とおもいます。當方は何の花草もなく柳の新芽の陰で步哨に立つ時に、次から〳〵へと鄉の懷さを感じます。停戰會議も波亂の中に協定され我が精銳なる兵士は撤收の餘儀なきに至りました。遠からん中に歸省もかなふと豫想して居ります。今尙便衣隊が各所に出沒してゐる。數日前も十二名の便衣隊を逮捕しました。當隊には異狀はありません後便にてくわしく御返事申上ます。先は御返事申上ます。

御一同樣へよろしく御傳へ下さい。

上海派遣兵

機關銃第四大隊小銃內　金野五郎

堤　清秀樣

○　○　○

拜啓前畧御免下さい。

其後は御無沙汰致しました。皆樣お變りは有りませんか。降つて私事お陰樣にて至極强健多忙なる陣中の軍務にいそしんでおりますから他事ながら御安心下さい。

征途上海到着以來早や二ヶ月餘も北飛南翔のうちに暮れ皇軍出動の目的を完全に達し乍らも次期作戰準備に尙一日の愈安も許して呉れません。

吹き來る風は和ぎ木の芽吹く、春來り我が同胞は今安らかに生きんとする情況にあります。併し乍ら國の處發はず出沒する不良分子便衣隊の存在を忘却する事は出來ません。殊に國民性の然らしむるところ暴虐不逞の橫行するところ當然其處に隋從の鐵鎚は藏せればならぬ事は火を見るより明であります。日本は擧國一致して困難に當つてゐます各地より續々と出來る飛行機、愛國號は何を物語つてゐませうか。國防の第一線にあるもの殊に身を航空界におく私達は此の上もない力强さと運命の誇りを感ぜずにはゐられません。そして尙一層盡忠報國の誠を致さればならぬと思ひます。

向ふ所敵なき皇軍の武威を彼さ彼等は何と評してゐませうか。破竹の勢の前に何を以て抵抗せんとしてゐませうか。「精神の破壞」是が最後の採るべき敵國の手段であらればなりません。されば八十萬の同胞は何を以て敵を征すべきやは云ふまでもありません。更に心の源泉を究め强くして更に祖先の靈を恥しめてはなりません。この心只一つの大和魂こそ最上の武器であり心の武裝であります。

將來の日本を背負ふ皆さんは正しく步むべき道の「スタート」を誤つてはなりません。日本の思想國難は誰が受難すべきか皆樣をおいて他にありません。何卒皆さんは健康に朗に勉學を續けて下さい。國防の第一線にありて只管御願ひ致ます。

右近況と皆さんへの御願ひを述べて御無沙汰を御詫び致します。敬具

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

四月十日　　飛行場にて　　岩橋之夫

生徒御一同様

右岩崎之夫君は昭和四年第二十二回の本校卒業生である。君は昭和六年二月遞信省委托生として所澤航空隊に入學、十ケ月の過程を終つて卒業、十二月一日立川飛行第五聯隊に伍長として入隊、一月から四月迄飛行操縦士として上海敵匪の心膽を寒からしめ次いで凱旋。昭和七年七月二十三日納入機の性能試驗飛行中小田原上空に於て機体分解てふ故障にてあたら有爲の才を抱きながら墜落慘死されました。こゝに謹んで哀悼の意を捧げます。

なほ左記の佈告は同君等が上海活躍中飛行機上から落下したビラです。參考までに掲げます。

佈告

日華両邦　同文同種　本極親善　毫絲嫌隙
斯年以來　組織僞黨　嗾唆良民　與之合作
排外抗日　無所不爲　十九路軍　再雖坐視
擾亂租界　害及僑民　容忍至久
爰遣海艦　復調陸軍　救吾僑胞　登諸衽席
本軍到滬　意之所在　祇即膺懲　抗日黨軍
不應牽涉　善良民衆　且對領土　以反主權
決無野心　早向列强　聲明在案　此心此志
如有窃小　凡吾両邦　一般民衆　安心復業
佈告通告　使共知之

大日本軍司令官



竹柏句集抄（昭和七年一月以降）

元日、冬の月（七、一、一五）

初光かゞよひそめて雞の聲　洗雪
輝ける顔、顔、顔や初詣　山田花井
元旦や下駄音高く宮詣で　一葉子
寒月に早寢の町を通りけり
大いなる犬現れぬ冬の月　洗雪
井戸端に來ざる音や冬の月　古沼や窺物の住みて冬の月　村尾
哨兵や橋上照らす冬の月　岩崎
破れたる障子を照らす冬の月　玉置

梅、霜、火鉢（七、二、三）

一峠越えてまた見ゆ梅林　一葉子
水車小屋水涸れてあり梅の花　洗雪
谷底に白く見えたり梅の花　辻岡
家普請の槌音高し霜日和　洗雪
道中に藁眞白し霜の朝　東（道）
霜朝に鴨の聲や裏の森　平松
たれも居ぬ火鉢のそばに句集哉　一葉子
老人のうとゝ眠る火鉢哉

節分、椿、青麥、雪（七、三、三）

豆撒きて大戸を鎖す老舗かな　一葉子
敏道に落ちひろがりし椿かな

青麥の中に家あり雞個へる　洗雪
落椿流るゝに添ひて歩きけり　宮木
麥畑で今日も精出す親子かな　平松（道）
積む雪の下に青麥二三寸　奥田
青麥や雞舍の隅に生へてあり　光定
ぐん〳〵と伸びよ伸びよ青麥よ　辻岡

櫻、雲雀、春雨（七、四、二四）

寺の屋根わづかに見えて櫻かな　洗雪
校庭や井戸も廊下も花吹雪　一葉子
闇に浮く牡丹櫻や門の前　田中
海見つゝ櫻の下をくぐりたり　岩崎
窓開けばさつと入り來る花吹雪　本
春雨の降り止みて空に朧月　松林
春雨や茄子の芽生への二葉して　最田
春雨に北山望む風呂の中　平松（道）

若葉、蛙、草花（七、五、一八）

雨含む牡丹の花を切りにけり　一葉子
非齋の灯更け行くまゝに遠蛙　洗雪
町出でゝ若葉の村やマラソン子　田中
からたちの若葉垣根に雞の居る　井非
春雨の池に蛙や蓮の上　宮吉
古家をめぐりて若葉崩え出づる　最田
雨明けて一面咲きぬけしの花　岩崎
凱旋の勇士迎ふる若葉かな　武田
苗代に蛙なきあふ月夜かな　松本
ひきがへる植物園に雲の雨

梅雨、杜若、燕（七、六、一五）

凱旋兵待つ驛頭や梅雨の傘　一葉子
燕の巢を吊したる大藁家　桂河
つばくらめ眞白き腹を見せにけり　洗雪
つばくらめ川すれ〳〵に三つ四つ　岩崎
五月雨れて藁屋出迷ふ烟かな　最田
曙や魚跳れ上る菖蒲池　片下
五月雨や假泊の漁舟烟立つ　山峠
煤ぶつた伏屋に巢くふ燕かな　玉置（麓）
武者人形勢ひ立てる菖蒲かな　島兒
五月雨四山こめて雲深し
菖蒲湯の父呼ぶ聲や雨の中
泥沼を埋めつくせる菖蒲かな
電線に仲よくとまる燕かな

螢、田植、朝顔（七、七、五）

田植馬しぶきを立てゝ進みけり　一葉子
もと住みし家のまがきや朝な草　いづみ
雨にぬれて螢光れり傘の上　洗雪
朝顔に思ひ浮べり母の眉　桂河
握る兒の指間這ひ出す螢かな　洗雪
水音の增す瀧壺や飛ぶ螢　桂河
螢籠腹かけの子の這ひよりぬ　宮井
朝顔に一家の顔の集ひけり　岩崎
小笹持つて追ひ行く千等の手の螢　武田
朝顔のあす咲く蕾數へけり　岩崎
星の影うつりて涼し田の面かな　藤田
花凉の前をかすめて螢かな　栗山

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

朝顔の咲きてありけり埃捨場　玉置　片山
螢狩いつぞや連も歸りけり

西瓜、夕立、蚊（七、九、一四）

夕立の晴れ行く方や松並木　洗雪
蚊遣して隣と語る縁の先　一葉子
病める身の蚊遣をそばに端居かな　平木
暮暑子の赴逸にあり大西瓜　平松
西瓜まさまさり來る子供手と手と手　岩崎
夕立の三粒けろりと大地かな　藤田
夕立や障子にうつるいなびかり　片山
西瓜食ひ顔中濡らす弟よ　杉田
夕立やみ待ちかれたりと赤とんぼ
風上に蚊遣火置きて碁を圍む

鯊、虫、鳴子、案山子（七、一〇、五）

鯊釣りや橋に出揃ふ秋日和　桂河
ころ〳〵と虫のなき居る陽のたまり　いづみ
流の中鯊釣る竿の並びけり　一葉子
鯊釣りの杭を踏まへてありにけり　洗雪
内堀に流れ入り來る鯊の潮　竹内
鈴虫やさみしく響く壺の中　江尻
鯊を釣る竿にさんぼのさまりけり　兒島
引板引けば社の烏の群飛びぬ　森澤
吾が庵の近くに鮫や虫の聲　最田
夕暮れて戸鎖せばこほろぎ鳴き出でぬ　峠林
こほろぎのあちこち〳〵と草の中　岩崎
柿の葉落ちて小田の案山子傾けり　片山
月入りて虫の音高し背戸の庭

菊、夜學、秋の鳥（七、一一、一〇）

張り替へて障子明るし菊日和　洗雪
見上げたる塔の高さや渡鳥　洗一葉子
湧き立ちて又しづまりし小鳥かな
夜學生夜店の群をかきわけぬ
明りもれて窓に開ゆる夜學かな　桂河
秋晴れて大輪ゑがき蔦の鳴く　宮井
病床の父にみせけりもらひ菊　林澤
朝日して障子にうつる百舌鳥の影　森井
ガラス打つ風音寒き夜學かな　花置
百舌鳥鳴くや入日さしこむ背窓　玉崎
月仰ぐ空に一群渡鳥　平松

麥蒔、時雨、兎（七、一二、五）

麥蒔きや畦にならびてお八つ食ふ　一葉子
遠足子しぐるゝ驛にあふれ居る　洗雪
月の風呂麥蒔き終へて入りにけり　田中
時雨來て立ち寄る堂や煙れる　宮井
灯ともしの巷歸るや兎狩　岩崎
桐の葉を散らして時雨去りにけり　片山
大和平野五萬の戰士時雨けり　花井
麥蒔きて歸る親子や星明り　光定
麥蒔や朝日に光る鍬の先　置
山の端に夕日かゝりて麥を蒔く　玉林
麥蒔や腰のして見る日の高さ　林杉
落葉山兎追ひかく犬の聲
殘りたる桐の葉末に時雨けり

門松、大根、足袋

足袋をつぐ老母の面の細りけり　一葉子
大根車坂道にしてこぼれけり　桂河
柿の木の千大根にひるの月　泉
小兒科の土門に足袋あり赤き足袋　泉雪
門松や軒並低き漁夫町　洗
大根船泥川に潮待ちてあり　松下
足袋はきて喜びにけり赤ん坊　林
店頭にならびし足袋や暮の町

雪、入營、寒稽古、枯木

雪國の雪を運びて汽車つきぬ　桂河
入營兵落ち會うてこむ小驛かな　洗雪
雪催ひ暮の町行く旅役者
山なみの空明けそむや寒稽古　泉
汽車の窓雲も動かず枯木原　一葉子
電柱に凭ひてよれり下駄の雪
七頭の小牛つれ行く枯木坂　玉置
小荷駄馬の鈴の音浮えて雪の降る　林井
朝霜に聲すき通る寒稽古　花
焚火すや雪とけ初むる藁の中　柳本
何時までもひつそりとして寺枯木

梅雨、青梅、蟻、夏帽子（八、六、二四）

梅雨雲の動かずありぬ法の山　洗雪
夏帽子發車間際を駈け居る　一葉子
不機嫌な顔の集る梅雨の宿　桂河
押し合うて小枝に生りし實梅かな
梅雨小袂ともに落ちにけり
梅雨つゞき顔のぞくなり木賃宿
梅雨空に星とおもほゆ二つ三つ　白夢
梅雨はれた魚飛んで波一つ　水矢
蚊帳ごしに梅の實ばむを眺めけり　岩崎
梅雨の間のベースに光るひざしかな　玉置
五月雨や沖晴れにして舟の行く　片山
鯉躍る綠の池や五月雨る、　杉田
青梅や三つ四つ落ちて棒のあり　花
夏帽のまた見えにけり峠茶屋　平松
波の音蟻の道あり崖の下　林
夏帽子眞白き齒並みせにけり　辻岡
店頭を埋めて白し夏帽子　花井
釣人や岩間がくれに夏帽子　松
田に出でゝひるげの膝に蟻はひぬ　平山
青梅や湧の草邊に落ちてあり　片田
汽船來て艀の上の夏帽子　杉
夕なぎや濱に捨てたる夏帽子　吉村
なにもかも吊してほせり梅雨の宿　竹内
梅雨の窓ひれもす蚊帳をつりゐたる　敗見
ながくとごこまで續く蟻の道　口
夏帽を紳士田面に飛ばしけり

岩屋戸にたてる松の木なれを見れば
むかしの人に逢ひ見るがこと
博通法師

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

三一會各部報

圖書部報

昭和三年御大典記念文庫として寄特別校舎の西南隅に建てられた我が圖書室は、其後教室の都合により博物標本室として使用される事となつた。そこで止むなく圖書及書架は現二年甲組教室の後部に移すことゝなり圖書は唯、日を定め、貸し出しだけをなすより外なき狀態になつて居た。次いで昭和七年七月特別教室改築にさりかゝるや、圖書室除去の必要おこり、移轉か壞滅か二者何れかその一を選ばればならぬ立場となり、移轉には相當の費用を要する事故結局壞滅に歸せしむるより外なき悲運にまで立ち至つた。校長先生には御大典記念圖書室を壞滅のまゝにするといふことは偖りにも恐れをほいことゝして父兄有志にお謀りになられた、父兄有志の方々も大いに最もな次第と共鳴されこゝに新に地を卜して移轉と決定、改築校舎落成と同時に武道場の南側に並んで建てられた。

總建坪二十坪、堂々たるとはいひがたいが三方明け放たれ採光には遺憾なき地の利を占め前後左右眼をさへぎる不快なるものとてはなくそれのみでなく綠色濃き山と川とが背後をめぐり讀書子には絶好の圖書室である。

落成するや從前の圖書の改革整理を斷行し其の他の施設も日を追ふて進み目下殆んど完了の域にまで進んだ。

現在の圖書冊數は

修養之部	一二四冊	文藝之部	一七二冊
歷史傳記之部	二四二冊	地誌之部	五五冊
受驗之部	一〇一冊	理化之部	五四冊
計	七四八冊		

さて圖書室は立派に出來あがつたが、內容の貧弱なのには今更驚かざるを得ないのである。これを他校のそれに比較して見るとお話しにならぬ淋しいものである。せめて一日も早く圖書室らしい——圖書室にさへ行けば殆んど凡ての學科の豫習復習も出來る程度のものに——ものにと、それこそ心は矢竹にはやつて居るけれども色々の事情に左右され中々思ふやうにゆかず只年々歲々と時を俟つて發展充實をはかるより外ないものと思つてゐる。

しかし如何に貧弱なといつても眞劍に勉强しやうといふ心さへあれば參考になる書物は全然ないといふのでもないのだから今後出來るだけ圖書室に親しみをもつてほしい。

目下二名の先生と五名の理事と三名の部員とで朝は始業前一時間放課後約二時間開放圖書の閱覽と貸し出し、圖書の整理整頓及其の他の雜務にあたつてゐる。

尙この際一段の讀書子に御願ひしておきたいことは前申しました通り內容は如何にも貧弱ではあるが盛んに利用してほしいといふことと定められた圖書室の規則を嚴守してほしいといふ二ヶ條である。

いふまでもなく團体の定めた規則といふものは個人の幸福と多數の人々との幸福利便の爲め設けられたものであるから、この規則をよく守るといふことは自己の本務でもあり又團体に對する本務であるといふことをお考へになつて借覽圖書は叮寧に扱ひ紛失などの事は絶對になき樣且返濟期限には遲れず必ず係員の手を經て返濟してほしいこの二つは是非實行してもらひたい。

今一つの御願は諸君の中で自分が讀んで了へば不要になつた書籍でもありましたら寄贈して戴きたい署名して永久に保存しておきます、參考書でも文藝雜誌、科學雜誌何でも結構です諸君が不要なものでも多數の讀書子には參考になることも多々あらうと思ひます又卒業生諸君からいへば金のかゝらぬ至極よい卒業記念品である一册でも結構です學校の爲め後輩の爲め續々寄贈されたい。

なほ雜誌は本年度は受驗と學生新日本科學知識等です。

新聞は大畑書店寄贈の大阪時事新報です、之亦精々利用してほしい。(圖書部理事)

辯論部

那昔の濱邊の老松が年と共に益々深緑を加ふる如く我が耐中の校風は次第に昇り縣下否オール日本に今將に輝き出でんとしてゐます。學問運動の二方面に邁進して居る此の意氣は我等の自覺を示し三一會各部の發展に於ても近來誠に目覺しきものがあります。

我が辯論部は過ぐる昭和七年の春沖、雜賀の驍將二君を失ひもの淋さしを感じましたがその年の新學期には九名の新入部員を迎へ新しい希望の中に力强い活動を初めたのです。三十二名の部員は他の部に劣らず眞面目で部長、理事の指導の下に一致して益々名聲を發揚せんと努めてゐます。練習は土曜日の運動時間の外に一週を適番に區分して學年別に行ひ練習場は普通講堂でありますが時には大聲を發はんが爲海邊に出掛けます。廣い太平洋を相手として萬里の彼方より吹き來る風と戰ひつゝ怒號する時は咽喉も破れるばかりであります。斯くして鍛へあげられた我等の力を示すべき日は漸くやつて來ました。即ち六月十八日和歌山高等商業學校に開催された第七回全國關西中等學校英語辯論大會に五年生である吉井光雄君が"Strengthen our National Spirit"の題の下に出場し、當日の參加校二十四の中で「模範的英語演說」として激賞されたのであります。此れ實に數週間の彼の汗が報ひられたと云はねばならない。

その前年玄後一郎君が此の會に於て優秀なる成績を擧げ本年も亦是に最高成績を示す事の出來たのは本校の面目を高からしめ英語辯論に於ては耐久中學ありとの誇と自信とを得たのであります。續いて七月二日の湯淺町に於て開かれた高城青年團主催南紀學生青年辯論大會に於ては五年生渡邊武四郎君、桑正義君、三年生熊岡顯君の三君出場し日頃鍛へ磨いた大威力を以て獅子吼した結果五年生二君は優秀地位を個人にて獲得し、總点に於ては團体優勝の光榮ある花環が我が校に飾られたのであります。八月十八日南廣村井關分教場に於て開催せられた郡青辯論大會には五年濱野善一君、四年松下季彥君の二名出場し濱野君は七等の榮冠を得ました。斯くして休暇も過ぎ第二學期が初まると諧勢力を養つた部員の猛練習を續ける時九月二十四日海草中學校に於ける第五回全國中等學校優勝辯論大會に松下季彥君が出場することゝなり「先づ日本を知れ」と題し堂々の論陣を張つて奮闘したのであります。當日は參加者は何れも天下の雄を以て自ら任するの士、優勝の女神は和歌山縣を見捨て、遂に京洛の地に環境を異にされた京都第二商

稲むらの火の館所蔵 渋谷家文書 資料番号 10

業に凱歌は擧つたのであります。是に於て我等は須く天下に眼を放つて奮闘努力すべきを誓ひ菊の香高き青空に耐久の學舍より逐り出づる我等部員の聲は朗々として那壽灣上に木魂して響いたのであります。日月過ぎて十一月二十四日には校内辯論大會兼學藝大會が開催ぜられ當日は昨年の英語劇竝に和漢詩吟に獨唱、齊唱、狂言等を加へ、我等の雄辯に限りなき温和さを含ませて盛大裡に終つたのであります。そして冬休の刹まるや一時中絶した地方遊説を敢行したのであります。

湯淺、保田、鳥屋城村と、向ふ所皆聽衆場内に溢れ文字通りの「滿場」で重大時機に直面して我が國の現狀を明かにし、緊張せる國民をしていやが上にも國家的觀を明暢にし、我等自身の自覺を喚起したのであります。然し其の遊説の價値を喜ぶ間もいつしか消へて此所に我々にとつて、針を以てさゝれる如き悲しい事が起りました。それは部としての「ベニファクター」とも言ふべき五年生諸兄の卒業でありました。然し之如何ともする能はず我等は唇をかんで別れねばならなかつたのです。然し其の悲みの中にも又一つの新なる希望があるのです。それは新部員の入部です。滿洲問題の結果は滿洲國獨立、我が祖國の國際聯盟離脱となり、今や世界經濟會議を開かんとしてゐる……この混沌たる世界の現狀にかんがみ、眞に祖國を憂ふれるの士は一時も早く我が部に來れと熱血を吐露して大獅子吼せんとして居るのであります。

美術部

理事K記

昭和六年の春。大泉先生吾が校に就任されるや直ちに生徒有志を集められ美術部を創立された。その後三一會の一部として加へられ先生の御熱心な御指導により着々發展し、毎日樂しく練習を續けてゐたが本年四月に至り先生は御轉任せられる事となりわずか二年で吾々は先生と御別れせねばならない事になつた。四月中旬櫻の花校庭に咲亂れ雨がしと〳〵と降る一日先生は遠き〳〵新潟へと出發され吾々全校生徒名殘を惜み湯淺驛まで御送り申した。先生は行かれた。部長を無くした美術部は非常な寂しさに被はれた。毎日の練習も十分行はれず寂しさの内に日を過ごした。日頃快活な部員の中にも失意の風が見受けられた。……

今となり吾等は過去をふりかへり見るに、部としては年月は淺しと雖も、餘程な進歩を示したと思ふ。和高商主催縣下中等學校美術展、海南中學展覽會等の展覽會にも出品する事が出來る樣になつただけでも吾等にとつては進歩である。水彩に於て(四年)峠原、福島(三年)田邊、(二年)福等いづれもすばらしい進歩の度を示してゐる。今の所油繪を描く者は三名しか居ない。もつと油繪を學ぶ者が居ると好いのだが。……一寸吾々美術部も頭を上げ始めた時部長大泉先生は遠く新潟へと御轉任なされたのである。

先生につれられ野外で寫生をしたり、或は教室でデッサンを學んだり、時としては先生の御宅を訪問して色々お話をうかがつたりした二ヶ年があり〳〵と頭の中に浮んで來る。先生も此の紀州の土地、那智の濱、青い松並木「耐久」など當校に務められし二ヶ年が御思出される事と思ふ。唯今としては吾等は先生に對して厚く〳〵感謝すると同時に遠く離れた此紀南の地より先生の御健康を御祈りするばかりだ。

其の後大泉先生の後任として金成先生を御迎へする事が出來美術部にも喜ばしい日が來た。先生の御指導の下に再び部としての活動が始められた。

そして今度新しく美術部に工藝科が設けられた。工藝科は各種の工藝品を製作すると同時に校内の美化に努める目的を以て設けられたのでこれが實現すれば當を學ぶ外に簡單な校内の設備品を製作したり、或は校内の修理、裝飾など非常に面白い活動が展開される事と思ふ。

部員一同これが現實の一日も早き事を期待してゐる。……

それから今度美術部ももつと組織的に改良を加へられるはずであるが、その一つとして先づ從來吾が部の缺点とも云はうか、あまり十分運動が行はれなかつた。それで此度日を設け色々運動を行ひ土曜日の三一會の活動の時は半分を運動に殘りの半分は部としての活動と云ふ樣にしたいと思つてゐる。……

何しろ吾等はまだまだ幼稚だ。これからだ。もつと〳〵練習を重れすくなくとも縣下に於て「美術の王座は耐久にあり」と云ふ境地を目指して部員一同毎日練習に練習を重ねてゐる。

劍道部　昭和七年度

一、四月九日　廣村招魂祭に劍道部參拜し、午後二時より左の劍士發源寺庭にて試合す。

五年　永野、兒島、枠谷
四年　花井、野田、鉢内、栗山、濱口、竹中、三木
三年　吉村、堤、河島、三木、生駒
二年　田邊、野田、神人、長田、島洋、崎山、神山、吉井

一、六月十三日　和歌山有段會主催第八回縣下劍道大會に出場

個人試合成績は六勝一敗、團体試合は和商に惜敗

(支部　田中　○○上野　(本校○○花井
本校　○○川島　(本校　○○濱口　伊中　硼
(海南　橋本　(本校　○○枠谷　(支部　奥出
本校　○○野田　(粉中　○○酊田　(本校　○○兒島
(本校　○○永野
支部　○○高橋

一、六月二十六日　五年枠谷、四年花井、野田、濱口の四名和歌山武德會に於て進級試驗を受けた四名初段を充許さる。

一、七月二十五日より開始の京都本部主催全國青年演武會に出場。

出發　二十四日午後十二時半湯淺驛
歸校　二十七日

選士　五年　兒島、永野、枠谷
　　四年　濱口、花井、野田
　　三年　吉村、河島、堤

個人試合成績は六勝三敗、團体試合は二回戰にて敗。

○(堤　○(吉村　○(河島
川島(京都一中)　熊本(第一神商)　杉本(京都三中)
○(野田　○(濱口　○(花井
鈴木(滋賀神崎商)　松居(同　上)　山林(津　山中)
○(枠谷　○(兒島　○(永野
曾野(釜　山中)　湯淺(熊　本師)　古市(香川高松中)

團体試合

第一回戰

本校(三)(一)香川丸龜中

大將○永野　千代

第二回戰

本　校(二)(三)明倫中
永野　○小川

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

一班午前五時四十分より同六時四十分まで、二班午前七時より同八時まで、三班午前八時より同九時まで各一時間行ふ。成績良好にて各組の皆勤者数左の如し。

一甲	十八名	二甲	十七名
一乙	十五名	二乙	十七名
一丙	二十八名	二丙	二十三名
三甲	十七名	四甲	十三名
三乙	十三名	四乙	十三名
三丙	二十八名	四丙	二十三名
五甲	十七名	五乙	十三名
五丙	二十八名	以上計二百十六名	

一、昭和七年度本校創遊大会を午前九時開始し午後五時半終了。

一月二十八日午前九時開始し午後一時半終了。

イ、剣道の部

剣道型　打太刀　永野兎島　仕太刀　弘沼鐵

ロ、試合の部

難波一甫流静術　仕太刀　兎島弘　中村宮平先生

各學年甲乙別試合

五學年の部　甲組勝　乙組勝
四學年の部　甲組勝　乙組勝
三學年の部　甲組勝　乙組勝
二學年の部　甲組勝　乙組勝
一學年の部　甲組勝　乙組勝

ハ、個人試合

湯浅智雄	本田殿校	本田殿校
○田宮	○○吉森	×○○三木久保
中地	村田	眞保
湯浅智雄	本田殿校	本田殿校
○田殿	○○藤校庭	×○○三神宮
森土	○○山宮	神三
田井	名地	人枝
藤原重智	本湯智校	本湯智校
○宮御	○○巽土	○○生田
地木	山井	駒中

ニ、九月二十五日　雛壇一回戦

本校(四)	大将	大将	大将(三)
○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
谷口井	花井谷	松木口	北井上
○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
野田島	野神田	野永田	丸兒井
○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
野永島	神谷田	野永田	兒島坂
○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
永兒島	谷井花	田野加	橋本石
○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
兒島中	井谷神	野平戸	谷口竹
○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
島田崎	谷野口	戸野口	口中村

三回戦

補欠	○○○○	○○○○
高垣	横田	横田
○○○○	○○○○	○○○○
先鋒(七)	先鋒(六)	先鋒(五)
○○○○	○○○○	○○○○
谷口井	谷口井	谷口井
○○○○	○○○○	○○○○
花井谷	花井谷	花井谷
○○○○	○○○○	○○○○
神谷田	神谷田	神谷田
○○○○	○○○○	○○○○
野永島	野永島	野永島
○○○○	○○○○	○○○○
田野加	田野加	田野加
○○○○	○○○○	○○○○
本田坂	本田坂	本田坂
○○○○	○○○○	○○○○
倉本橋	倉本橋	倉本橋
○○○○	○○○○	○○○○
藤倉加	藤倉加	藤倉加
○○○○	○○○○	○○○○
田井三	田井三	田井三
○○○○	○○○○	○○○○
村津	村津	村津
先鋒(七)	先鋒(六)	先鋒(五)
○○○○	○○○○	○○○○
口谷	口谷	口谷
○○○○	○○○○	○○○○
野谷	野谷	野谷

ホ、夏期徒別稽古

日時　八月二十日より同三十日まで毎日午後一時より三時中きで

参加者　本校選士及び一、二、三年の剣道部員、一年は入学後一ヶ月位にて卒業生。

一、九月二十三日　第五回部内剣道大会に出場(男子団体戦)

団体試合　一等兒島、二等野田、三等永野、高垣(優勝)

本校選士及び兒島、永野、高垣(優勝)

一等兒島、二等野田、三等坂口(三名共本校選士)

二、九月二十五日　雛壇十一回戦下武道大会に出場

一回戦

本校(四)	大将	大将	大将(三)
○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
谷口井	花井谷	松木口	北井上
○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
野田島	野神田	野永田	丸兒井
○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
野永島	神谷田	野永田	兒島坂
○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
永兒島	谷井花	田野加	橋本石
○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
兒島中	井谷神	野平戸	谷口竹
○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
島田崎	谷野口	戸野口	口中村

三回戦

補欠	○○○○	○○○○
高垣	横田	横田
○○○○	○○○○	○○○○
先鋒(七)	先鋒(六)	先鋒(五)
○○○○	○○○○	○○○○
谷口井	谷口井	谷口井
○○○○	○○○○	○○○○
花井谷	花井谷	花井谷
○○○○	○○○○	○○○○
神谷田	神谷田	神谷田
○○○○	○○○○	○○○○
野永島	野永島	野永島
○○○○	○○○○	○○○○
田野加	田野加	田野加
○○○○	○○○○	○○○○
本田坂	本田坂	本田坂
○○○○	○○○○	○○○○
倉本橋	倉本橋	倉本橋
○○○○	○○○○	○○○○
藤倉加	藤倉加	藤倉加
○○○○	○○○○	○○○○
田井三	田井三	田井三
○○○○	○○○○	○○○○
村津	村津	村津
先鋒(七)	先鋒(六)	先鋒(五)
○○○○	○○○○	○○○○
口谷	口谷	口谷
○○○○	○○○○	○○○○
野谷	野谷	野谷

以下學校さしての行事なるも附帯す。

一、全校生徒創遊稽古

十日間之を行ひ一月十日終了す。二班に分け第一班午前五時四十分より同六時四十分まで、第二班午前七時より同八時まで、第三班午前八時より同九時まで各一時間行ふ。

一、一月二十日開始し同二十日終了す。

一、卒業生十九名、四年以下部員九〇名は遊技に於て行ふ。

一、二月十五日　部員各業生送別會開催。

卒業生　高垣勝、兎正久、吉村晴司、川島義治

初段四名　二段二名　花井義正

兒島弘高	○○○○	○○○○	○○○○
花井義正	谷口井	加藤倉	三田井
○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
高垣勝	花井谷	石橋本	村津
○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
吉村晴司	谷田野	倉本田	谷野口

先鋒(七)　先鋒(六)　先鋒(五)

○○○○　○○○○　○○○○
谷口井　谷口井　谷口井
○○○○　○○○○　○○○○
花井谷　花井谷　花井谷
○○○○　○○○○　○○○○
神谷田　神谷田　神谷田
○○○○　○○○○　○○○○
野永島　野永島　野永島
○○○○　○○○○　○○○○
田野加　田野加　田野加
○○○○　○○○○　○○○○
本田坂　本田坂　本田坂
○○○○　○○○○　○○○○
倉本橋　倉本橋　倉本橋
○○○○　○○○○　○○○○
藤倉加　藤倉加　藤倉加
○○○○　○○○○　○○○○
田井三　田井三　田井三
○○○○　○○○○　○○○○
村津　村津　村津

先鋒(七)　先鋒(六)　先鋒(五)

○○○○　○○○○　○○○○
谷口井　谷口井　谷口井
○○○○　○○○○　○○○○
花井谷　花井谷　花井谷
○○○○　○○○○　○○○○
神谷田　神谷田　神谷田
○○○○　○○○○　○○○○
野永島　野永島　野永島
○○○○　○○○○　○○○○
田野加　田野加　田野加
○○○○　○○○○　○○○○
本田坂　本田坂　本田坂
○○○○　○○○○　○○○○
倉本橋　倉本橋　倉本橋
○○○○　○○○○　○○○○
藤倉加　藤倉加　藤倉加
○○○○　○○○○　○○○○
田井三　田井三　田井三
○○○○　○○○○　○○○○
村津　村津　村津

一、十月十七日　第二回部内級別昇段試合

出場　國体試合は本校花井、瀬口、野田組優勝

高点試合は本校花井、瀬口、野田の手に勝す。

一、一月二十九日　和歌山武徳會に於て昭和七年度後期進級試験を受けた左の者昇段す。

二段	兒島弘高、花井義正	二名
初段	高垣勝、兎正久、吉村晴司、川島義治	四名

一、二月十五日　部員各業生送別會開催。

卒業生十九名、四年以下部員九〇名は遊技に於て行ふ。

以下學校さしての行事なるも附帯す。

一、全校生徒創遊稽古

十日間之を行ひ一月十日終了す。二班に分け第一班午前五時四十分より同六時四十分まで、第二班午前七時より同八時まで、第三班午前八時より同九時まで各一時間行ふ。

一、一月二十日開始し同二十日終了す。

一、卒業生十九名、四年以下部員九〇名は遊技に於て行ふ。

一、十月十七日　第二回部内級別昇段試合

出場　國体試合は本校花井、瀬口、野田組優勝

高点試合は本校花井、瀬口、野田の手に勝す。

一、一月二十九日　和歌山武徳會に於て昭和七年度後期進級試験を受けた左の者昇段す。

二段	兒島弘高、花井義正	二名
初段	高垣勝、兎正久、吉村晴司、川島義治	四名

一、二月十五日　部員各業生送別會開催。

卒業生　高垣勝、兎正久、吉村晴司、川島義治

初段四名　二段二名　花井義正

兒島弘高	○○○○	○○○○	○○○○
花井義正	谷口井	加藤倉	三田井
○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
高垣勝	花井谷	石橋本	村津
○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
吉村晴司	谷田野	倉本田	谷野口

先鋒(七)　先鋒(六)　先鋒(五)

○○○○　○○○○　○○○○
谷口井　谷口井　谷口井
○○○○　○○○○　○○○○
花井谷　花井谷　花井谷
○○○○　○○○○　○○○○
神谷田　神谷田　神谷田
○○○○　○○○○　○○○○
野永島　野永島　野永島
○○○○　○○○○　○○○○
田野加　田野加　田野加
○○○○　○○○○　○○○○
本田坂　本田坂　本田坂
○○○○　○○○○　○○○○
倉本橋　倉本橋　倉本橋
○○○○　○○○○　○○○○
藤倉加　藤倉加　藤倉加
○○○○　○○○○　○○○○
田井三　田井三　田井三
○○○○　○○○○　○○○○
村津　村津　村津

一、十月十七日　第二回部内級別昇段試合

雛壇中級の部　優勝者　井谷花

永野神谷	○○○○	○○○○	○○○○	永野神谷
野田谷井	○○○○	○○○○	○○○○	野田谷井
入村岩	○○○○	○○○○	○○○○	入村岩
宮中垣	○○○○	○○○○	○○○○	宮中垣
入保垣	○○○○	○○○○	○○○○	入保垣
永野口	○○○○	○○○○	○○○○	永野口
兒島口	○○○○	○○○○	○○○○	兒島口
本校(三)	大将	大将	大将(四)	本校(三)
兒島中	○○○○	○○○○	○○○○	兒島中
島田崎	○○○○	○○○○	○○○○	島田崎
永野橋	○○○○	○○○○	○○○○	永野橋
野田橋	○○○○	○○○○	○○○○	野田橋
兒島橋	○○○○	○○○○	○○○○	兒島橋
本校(三)	大将	大将	大将(四)	本校(三)

△本校創立祝勝試合

優勝者　井谷花

永野神谷	○○○○	○○○○	○○○○	永野神谷
野田谷井	○○○○	○○○○	○○○○	野田谷井
入村岩	○○○○	○○○○	○○○○	入村岩
宮中垣	○○○○	○○○○	○○○○	宮中垣
入保垣	○○○○	○○○○	○○○○	入保垣
永野口	○○○○	○○○○	○○○○	永野口
兒島口	○○○○	○○○○	○○○○	兒島口
本校(三)	大将	大将	大将(四)	本校(三)
兒島中	○○○○	○○○○	○○○○	兒島中
島田崎	○○○○	○○○○	○○○○	島田崎
永野橋	○○○○	○○○○	○○○○	永野橋
野田橋	○○○○	○○○○	○○○○	野田橋
兒島橋	○○○○	○○○○	○○○○	兒島橋
本校(三)	大将	大将	大将(四)	本校(三)

△本校創立祝勝試合

優勝者　井谷花

永野神谷	○○○○	○○○○	○○○○	永野神谷
野田谷井	○○○○	○○○○	○○○○	野田谷井
入村岩	○○○○	○○○○	○○○○	入村岩
宮中垣	○○○○	○○○○	○○○○	宮中垣
入保垣	○○○○	○○○○	○○○○	入保垣
永野口	○○○○	○○○○	○○○○	永野口
兒島口	○○○○	○○○○	○○○○	兒島口
本校(三)	大将	大将	大将(四)	本校(三)
兒島中	○○○○	○○○○	○○○○	兒島中
島田崎	○○○○	○○○○	○○○○	島田崎
永野橋	○○○○	○○○○	○○○○	永野橋
野田橋	○○○○	○○○○	○○○○	野田橋
兒島橋	○○○○	○○○○	○○○○	兒島橋
本校(三)	大将	大将	大将(四)	本校(三)

△本校創立祝勝試合

優勝者　井谷花

永野神谷	○○○○	○○○○	○○○○	永野神谷
野田谷井	○○○○	○○○○	○○○○	野田谷井
入村岩	○○○○	○○○○	○○○○	入村岩
宮中垣	○○○○	○○○○	○○○○	宮中垣
入保垣	○○○○	○○○○	○○○○	入保垣
永野口	○○○○	○○○○	○○○○	永野口
兒島口	○○○○	○○○○	○○○○	兒島口
本校(三)	大将	大将	大将(四)	本校(三)
兒島中	○○○○	○○○○	○○○○	兒島中
島田崎	○○○○	○○○○	○○○○	島田崎
永野橋	○○○○	○○○○	○○○○	永野橋
野田橋	○○○○	○○○○	○○○○	野田橋
兒島橋	○○○○	○○○○	○○○○	兒島橋
本校(三)	大将	大将	大将(四)	本校(三)

野球部

昭和七年九月よりの成績左の如し。

九月十一日　和歌山商業對耐久　五對三頁(於和中球場)
十月　八日　大鐵港町對耐久　七對六頁(於　本　校)
十二月廿七日　田邊中學對耐久　一對一引分(於田邊球場)
十二月廿五日　箕島商業對耐久　六對一勝(於箕商球場)

昭和八年六月迄の成績左の如し。

一月　二日　和歌山商業對耐久　五對一頁(於和中球場)
同　三日　海草中學對耐久　三對二頁(於　同　)
同　四日　海南中學對耐久　十六對三頁(同　同　)
同　五日　和歌山中學對耐久　十二對五頁(同　同　)
四月廿三日　大鐵港町對耐久　十三對六頁(於　本　校)
五月　六日　日高中學對耐久　十二對八勝(日中球場)

耐久中學創立八十週年記念祝賀行事の最後である野球大會は五月十四日本校球場で開催され參加チームは和中、和商、海草、箕商、日中と本校とを合せて六チームで先づ最初箕商對日中戰は午前九時十五分廣瀬校長の始球式を以つて血戰の火蓋が切つて落された。日中惜しくも十三A對五の戰跡を殘して戰敗した。第二回和中對耐久戰は午後零時四十五分和中先攻によつて開始し雨軍の打擊力は殆んど大差はなかつたが、守備力の缺陷及び最後迄頑張る力即ちラストヘヴイーが足らなかつたのが主な原因によつて惜しくも勝を敵に讓らればならなかつた。成績左の如し。

和	2	0	3	0	0	0	3	0	3	11
耐	0	0	2	0	3	1	0	0	0	6

かくして捲尾の和商對海草の決戰は三時四十分から開始、和商六對一の成績を殘して海草に收る。

五月廿七日　和歌山工業對耐久　十五對二勝(於　本　校)
六月十一日　和歌山商業對耐久　十五對四頁(於和商球場)

四月田上君を關西大學に送つた後何となく寂しく感ぜられ、四月以來の成績もあまり香ばしくなく、その上本年の紀和豫選大會も近づき不名譽を取かへすは此の大會であり、しかして挽回するのは我等の任務である。

新チーム編成後メンバーは色々と變化をしたが大体左の如くである

P	戸野　藤田宣澤畑田野山川井
C	松林後持嗣森岡柏高鍵島宮
1B	
2B	
3B	
SS	
LF	
CF	
RF	
(補)	

庭球部

新學期を迎へ新な腕を以てラケットを持つ時候は來たとは言へ、吾部として五人の選手を送り出し、準硬球使用者として殘された僕等三人は、聊か物淋しく感じながら新しく加はつた四、五人と共に那當湖を眺め、大空を頭上に頂き輕い音を縫かせて、何物かを目指して練習を始めた。

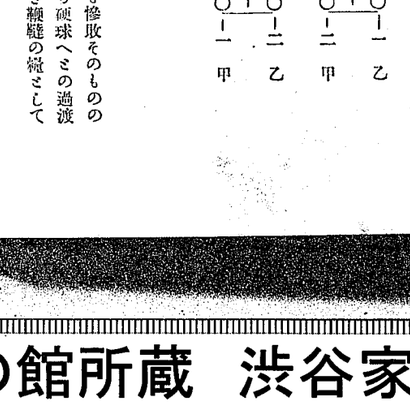
然し六月九日より、中等學校庭球界の時勢に鑑み、準硬球を改めて硬球を使用して、益々庭球界に進出する樣に決心をした。僕等として

も、初めて硬球を見、そして物珍しく思ひながら打ち初めたが、思ふ樣に打てず、唯々面白くも感ぜずにコートを走り廻はるに過ぎなかつた。本年も去年に引き續いて數度の試合に出場したけれども、硬球を始めて日未だ淺い爲、又硬球使用後の最初の事とて、思はしい成績を示すことは出來なかつた。

九月十三日、選手六名、補缺二名は伊藤先生に引率されて、海南中學遠征の首途へとのぼつた。當日は、前夜來雨盛んに降つた爲天候の具合を氣付かはれたが、晩近くなつて雲行きよく、晴天になる樣に見えたので、コートの濕度を氣付ひながら出發したのであつた。然しその後天氣よくなり、無事ゲームを終了することが出來た。練習不足と試合不馴との爲に惜くも勝を敵に讓つた。この日ダブルスに於て最初永井、江尻組は岡本、長澤組と對戰したが接戰して遂に八對六で破り大いに士氣をあふつた。次に岩崎、今井組と田淵、花畑組、山本、山田組と宮井、追間組との試合に移つたが敗退した。シングルスに於ては、四名出場したが、何れも力及ばず、遂に全敗し恨を呑んで歸校した。

和歌山高商主催關西中等學校大會に出場出來なかつたのは僕等として非常に殘念であつたが本年度に於ける最後の庭球大會即ち大毎和歌山支局主催第十三回縣下中等學校庭球大會は十一月二十日高商コートに於て行はれた。僕等選手四名は前田先生に引率されて出場することになつた。今日こそは少しは自信を持つて臨んだのであつた。然しNo1の山本、山田兩君は都合により出場出來ず、No2、No3の四人で心細く感じながらも重躍して行つた。第一回戰は奇しくも兩組とも伊都中學と組み、兩組とも勝たばと意氣込んでゐたが、伊中の藥樓によつて不戰一勝となつて次の試合を待つた。第二回戰は岩崎、今井組は和中のNo1前田、出來組と當り、永井、江尻組は海南中學のNo1宮井、追間と當り、何れも背水の陣を敷いて戰つたが力及ばず遂に慘敗してしまつた。因に前田、出來組は今夏、大毎主催濱寺庭球大會に於て準優まで進んでゐる強者である。

又十月一日を期して、軟球奬勵の爲、校内庭球大會を行つた。この日午後絶好の庭球日和に惠まれ、大いに見るべきものがあつた。青年部、少年部に分け、何れも組對抗のトーナメント式によつて行つた。各組の出場組數は何れも三組とした。そして青年部に於ては四甲、少年部に於ては二甲が優勝した。成績を畧記すると次の樣である。



これで戰蹟を終へるが、振り返つて見るに偖りにも慘敗そのものの感がする。然しこれは軟球から準硬球へ、準硬球から硬球へとの過渡期が大に原因してゐると思ふ。この慘敗の歷史を善き鞭韃の縄として

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

今後大に努力する積りである。

尙本年度に於ける試合出場選手は左の様である。

一、海南中學との對戰

ダブルス No3（永井 江尻）No2（岩崎 今井）No1（山本 山田）

シングルス No4 今井 No3 岩崎 No2 山本 No1 山田

補欠 戸田、谷口

二、縣下中等學校大會

ダブルス（岩崎 今井）（永井 江尻）

（理事岩崎記）

水泳部

T Y 生

昭和七年四月以降

新緑滴る四月以來水泳部では多くの名選手に巢立たれ我等は恰も雛が親鳥を見失なつた樣に唯ピーピーと鳴いてゐたのである。此の水泳部を願ん見るに、縣下或は關西の各水上競技に於て、かなりの地位に腰を下した。しかし此の位の事では滿足し得ない。まだ〳〵前途は廣し、目標はオリンピックに在り部員は確かに心を大きく持て。七年度の成績は大体良い方に向いてゐる。其の譯は各大會卽ち廣くはオール關西、狹くば縣下、對抗試合であつて、何れの戰にても榮ある昔からの耐久スピリットにさからう事なく、部員は單に中井先生及び諸先輩に至るまで一個に糾合したのである。而して部員は我が部に對する理解と熱心、眞面目さを以て專心事にあたる。ヲ云ふ意氣込をして部に就ては我物の樣にした。部長の方、諸先輩は夏期休暇に色々と御盡力なされ、お忙がしい中にも非常なる御熱心にあづかつた事は厚く〳〵感謝せねばならない。其の諸先輩或は部長の方の敎にかなつたのでせうか、めき〳〵と强味を有するに至つたのであります。休暇には諸先輩諸兄の熱情的精神を以て我々を指導されたるは、口には言へない妙な嬉しさが胸に躍つてくる。

扨て昭和七年我が水泳部の活躍振りをあらかじめ記して見よう。此所に斷はつて置くが僕は昔よりつたない文ばかりを作つてゐるので、あまりに長々の事を綴つても諸君の感情を害してはどうかと思ふので……では昭和七年度の各試合の有樣及び一部の人の事から初めやう。

先づ第一に我が水泳部と和歌山商業水泳部の第四回目の對抗試合があつた。六月十二日和歌山商業プールにて擧行し、七九点對六三点の接戰を演じて終に和商の勝に我々は涙をのんで、しのばればならなかつた。但し此の樣な点を稼ぎ得た事は我が部に對して何等困通を感じない寧ろ愉快に思ふ。と云ふのは和歌山商業には王座を占めてゐる四百米、八百米の島本君あり、引いては關西、縣下の覇者平泳の川崎兩君及び百、二百米或は背泳の水田君、背泳、八百自由型或は背泳の木下君等を持つてゐる爲、到底をつつかないと信じてゐたが案外良かつた。豫想以上に此等の点を運ぶ事が出來た原因を云へば、唯耐中への新進木谷君の大奮發のたまものなりと信じ、斷じて疑がはない。僕は初めて和商プールに身を入れて泳いだので最初は妙な感を惹起したが終によく身体が水なれをして全力を吐く事が出來た。長距離の自由型王兒島君は、落付き拂つて雄々と水上をすべる樣にして泳いでゐた。

平泳の新進上野山治夫君は素晴らしい立派なフオームで案男の平泳家川崎君に肉迫して一層の感を與へた。平常から熱心なる平泳藤岡君は相當の泳力を持ちながら發揮する事の出來なかつた事は殘念に考へる。二百米リレーレースの際兩チームは、出たり入つたりの大ぜり合で其の時三番の小中君はタッチを送る時手を伸ばした爲に、おしいかな、又もや敗するに至つた。此の敗は兎角全部の点に一大影響を來した。八百米リレーレースの椿原君の力泳もむなしく勝を和商にゆづる事になつた。次に第二番は第七回縣下中等學校水上競技大會で和歌山中學プールにて九月四日に開催され一等和商六六点、二等和中で五八点、三等耐中で三八点まだ後に多くの學校即ち和師、伊中、田中、箕商等が控えてゐた。此の試合では二百米の平泳は殘念ながら振はなかつた。唯身體の大きくない上野山治夫君は一点を稼いで縣下に名を擧げ各選手達は注目のまとこゑ以て恐懼の的とした。耐久の花形木谷君は百米自由型に於て見事な獨特の泳で一分十秒をはるかに切り意氣揚々として決勝に殘つた。耐中の大關たる上野山長治君は立派な何處一つなほす所のない泳ぎであつた。タイムの点から見れば必ず決勝に殘るべきであるがあしくも番組の結果、決勝に力を入れる事の出來なかつた事は不運と思はればならぬ。あくる日からは今迄の無氣力の不注意な練習を脫して、各人は滯迷せる前世紀的遺物を擲て各自の泳法を研究しつゝ水泳スピリットに立脚し、ある決心のもとに猛練習に取りかゝつたのである。日は刻々とせまる七年度最後の試合それは關四中等水上競技大會が至つた。戰氣愈々滿ち、我が選手の面には力强い決心の色が浮んでゐた。

水泳スピリットによつて築き上げられた、此の雄々しい體驅を以て水ならしの試合前ロングを引き始めた。號砲一發の下に二百米リレーレースの幕が展開されてます〳〵試合氣分はみなぎつた。和歌山高商プール（九月十一日）に開かれたのである。人々は黑山の樣に盛況を呈した。終に勝利は和商！なんと云つても和商で六二点、和中は四三点で相變らず耐中は第三位を以て三三点を運び後五、六校があつた。八百米自由型兒島君は、中學時代最後の水泳で氣持よく頑張り、强敵として永遠に名を殘した。唯兒島君が此の時に貰つた優勝盃をかえさればならない事は甚だ遺憾である。しかし今度は取らないにしても何日かは又耐中の手に取りもどされるだらう。次に九月廿五日大阪府、和歌山縣中學校選拔選手水上競技大會は大阪の住之江プールに開かれ、我水泳部よりは兒島君、木谷君、柳本、上野山（長）君の四名出場終に和歌山は七八對七二で勝つ事が出來た。

今迄の我が水泳部の各種目のレコードに筆をすべらす事にしよう。

種目	タイム	保持者	年度
八百米リレー	十分三八秒	宮本義一、伊藤茂次、栩野善一、上野宗男	昭和四年
二百米リレー	二分三秒一	上山宗男	同五年
百米自由型	一分五秒六	上山宗男	同五年
二百米自由型	二分二六秒五	上山宗男	同五年
四百米自由型	五分二六秒五	上山宗男	同五年
八百米自由型	一一分五秒二	兒島高一	同六年
千五百米自由型	二一分三二秒下	兒島高一	同六年
五十米背泳	三七秒六	柳本友雄	同七年
百米背泳	一分二一秒下	柳本友雄	同七年
百米平泳	一分二六秒	桑原初藏	昭和四年
二百米平泳	三分八秒	桑原初藏	同四年

以上

稲むらの火の館所蔵 渋谷家文書 資料番号 10

競技部

一九三二年のロスアンゼルスに開催せられるオリムピック大會のために全國民が熱狂してゐる頃、紀南の一角那智の海の波が打ち寄せるグラウンドには胸間に白く染め拔ひた三星章のユニホームに熱血を包んだ吾等の選手は主將棒高跳の田中の統率の下に短距離の宮井、井爪中距離の江尻、川口、槍投の久道、平木、ヂヤンプの吉田(勇)、砲丸の吉田(英)、長距離の拔井、瀧本打つて一丸となり、夕暗迫る頃まで毎日土に突き差すスパイクの音を心持よく立て續けた。

目指すは縣下の大會。紀北の楽和中、粉河、師範、紀南の雄田邊中學と戰つて如何なる程度の戰績を殘し得るか。環境に惠まれない吾々それだけ努力が必要だ。鐵の意志だ、身体だ。灼熱の太陽よもつと照れ。肉を刺す北風よ荒みに荒め。戰へ!! 戰へ!! 而して『先づ自己に勝て』思へば昨年三月關西の豪傑山を始め、幾多の先輩を送り出した吾が部は新チームを編成したのは四月下旬早くも五月中旬頃本校校庭に箕島商業チームを迎へて第一回目の戰の幕を切つた。スコア五十八点對三十点。樂々と一蹴して終つた。此れより吾が選手の意氣益々旺盛となり六月十九日箕島商業校庭に於て、同校、湊南倶樂部及び箕島青年と對抗競技を擧行、午前十時開始午後五時終了戰績は左の通りです。

湊南倶樂部	一〇〇点
耐久中學校	四六点
箕島商業學校	三三点
箕島青年	五点

この戰に於て吾々一同は種々の点に於て大いに得る所あり益々猛練習を續けて行つた。愈々夏休みとなり八月十日から十三日まで寄宿舍の一室を借りて合宿をなした。人數十四人平硏マネーヂヤーの統率の下に無事終了した。越へて九月二十三日海南中學チームを迎へた。昨年遠征して一蹴された苦い過去をもつチームだ今年こそはと雪恥の意氣すさまじく接戰又接戰火の出る樣な戰ひの後終に之を破り前年の宿恨を晴らすことが出來た。

次いで一週間後紀北のダークフォース、和商チームを迎へた。

この日前日からの降雨のため運動場のコンディションが最も惡く一時中止の話も出た程であつたが午前十時フイールドだけを全部濟ますと云ふ變則的のプログラムで試合が開始された。

フイールドに短所をもつ吾がチームは苦戰又苦戰彼我の点の開きは一戰一戰大きくなつて行つた。而し吾が選手の意氣益々旺盛、午後トラックの開始されるや耐久スピリットを發揮し全然先づ精神的に敵を壓倒した觀があつた。遂に最後の幕が下された。戰運吾に幸ひせず僅かの差で涙を飲まればならなかつた。

越へて昭和七年拾月三十日終に目指す縣下の大會は來た。參加校數拾參。吾等の選手の意氣又天を突くものがあつた。而し其の結果はここに記すには餘りに悲しいものになつて終つた。されど吾が選手の努力を感謝する意味でその大要を記して見よう。

先づ主將田中のコンディション最も惡く且て紀南の競技會に於て二米九〇を跳だ其の後の練習の結果三米を跳ぶことの彼我共に許してゐたのにどうしてか二米八十を跳んで一〇点を獲得したのに過ぎなかつた。若寇井爪、四百米に於て最後の半週に和商選手矢野君に勝をゆづり決勝に出ることの機會を失つたのは實に殘念であつた。スプリンター宮井は第一豫選に於て一着、第二豫選に於て四着になり、平木、吉田兩君は高跳に於て一米六十を越へたが得点にならず。久道、平木の槍、破戸の砲丸も又無得点に終つて了つた。而し瀧本五千米に於て第五位になり貴重なる二点を得たことはせめてもの慰めであつた。敗軍の將兵を語らず、唯反省、沈默而して實行あるのみ。

去る三月七名の良選手を送り出した我々は今年こそはと「一個人一種目として縣下の記錄を把握せよ」とのモットーの下に本年の四月新陣容を立て直し一致協力一大飛躍を試みんものと日々努力精進を續けてゐる。

相撲部

我が相撲部の榮ある歷史を持つて居る事又昔より傳統的に强く世に聽き誇つて居た事は誰しも承知の事と思ふ、故に敢て述る必要もなからう。

傳統の誇も我々の時代になり全く衰へたのだそれは我々はまだ充分の活動も出來ぬうちに先輩等は卒業してしまつたので昨年の如き實に哀れなみじめなものであつた、然し我々は先輩の遺したあの優勝旗を見て默つて居られようか先輩に對して實に濟まないばかりでなく何とも申譯はない唯我々は一生懸命稽古するより他にない部員一同は互に誓ひ相勵まし合つて北風吹きすさぶ一二月の那智灣頭に寒氣を忘れて昨年の恥辱をそゝぐ猛練習を續けたのである、やがて春が訪れ校庭の芝生も美しく敷詰られ松原の松にも軟い風が撫吹いて行く三月の未だ凍寒い頃老練北山主將を見送り冷い土俵に立ち來るべき戰の準備をたてた、併し北山主將を失つた我々は實に今年の期待も望も失つた樣に思はれた、よつて岩崎を主將として新陣容を整へた、春が益濃厚に陽氣となつたが我々は血と汗とを乾かす暇もなかつた位四月早々確か學校初まつて間もなく廣村招魂祭に招かれて最初の小手調と云ふ風に多くの選手を出場した青年と相對して戰つた。其日や久保、岩崎、村上、濱中石井、橋本の意氣凄く青年を一撫にした、これで少しの自身もついたやうであつたが勝つてかぶとの緒をしめよと昨年砂の丸に於ての慘敗のみじめさよ二度とは繰返したくはない目ざすは砂の丸大會だ、稽古師範のなき我等は只自己流無茶流で元氣でゆくより他になかつた、しかし增子、菅原兩先生の熱心に我々の練習を見て下さる事は我等ないやが上にも意氣づけるので有つた。五月金屋に於ける青年學生相撲大會に招待され岩崎、久保、石井、村上、濱中、橋本出場すこの日有田は勿論日高、海草からも力士が來て居た、學生としては本校のみでありまた其島商業は出場の筈だが來なかつた、我々は學生特有の意氣と元氣を以て有田、日高、海草青年の剛者に當つたのだ、併し我々は負けず五人拔、三人拔等をして優勝旗を手にして好成績であつたのは自己流だけにうれしい限りであつた、この五六月の間には四年の村上、橋本濱中等は一度に頭を上げて來た、七月に入れば四月に先輩になつた北山も夏中休暇で歸り稽古をしに來てくれた、七月二十三日試驗も終り箕島商業に於て箕商選手と混合練習をなし十分と技量の練磨をいそいだ、休暇も半ばすぎた、八月二十日より練習を開始、愈々縣下大會も目前に迫つて居る、部員一層張りきつた元氣である、先輩楠原、北山君熱心に部員を指導してくれた毎日〳〵砂と汗とで体は一杯である、

稲むらの火の館所蔵 渋谷家文書 資料番号 10

それを水で洗ひ取るのは面白い程であつた、九月に入り益々猛練習をなし天星山に日の入らんとするのも忘れて勝たんが爲に苦しむ我等のいぢらしさ愈々昨年の惨敗を雪辱すべき日が來た、九月二十三日この日や岩崎主將、久保、石井、村上、濱中、橋本の各選手の意氣ものすごく秋空晴れて風凉し、されど運命の神よ又も我々に勝を與へずか皮肉ばかり、和歌山の剛和師、和工、田邊商と組んで居た、仕方がない我々は力一杯背水の陣を敷き文字通りの玉碎主義で頑張つたが僅か六点しか得られず風拳一年の努力はむくいられず恨を呑んで歸校した。然し我等は落膽する勿れベストを盡したのであつた、願れば我々にはまた練習の余地がある、試合度數はないために吾等は負けたのだ。さて今度我等は大濱大會を目標とし九月末より廣紡の杉野氏をコーチに猛練習だ大濱の大會も本年は大分大もの揃ひで豫選なしで行く所は和歌山縣だけだ、大阪でもどこでも皆蹴選で三校か五校だ、併し元氣でやれば勝つ事も至難ではなからふと思ふ。

やがて十月九日岩崎、久保、村上三選手は藤井寺に於ける阪和對抗相撲大會に選拔され出場力戰苦闘したが加盟校三十に近き大阪軍は三十二名を選手するのに遙かに有利であつたゝめ本校軍は惜敗したのであつた。

スポーツの秋收獲の秋はいよ〳〵酣である。十月十六日、十七日大濱に於ける全國中等學校相撲大會へ久崎、久保、村上の三選手を派遣し輝く先輩の光榮をあらはすために燃ゆる意氣と悲壯の覺悟を以て大會に參加いづれも初陣であつたが關東の雄早稻田實業と二對一で惜敗更に第二回戰兵庫の中外商業と對陣してまたも惜く敗れ個人に於いても第三回戰で岩崎主將力闘大いに秘術をこらして對したが惜くも敗れた。

かくて希望と意氣とをもつて終始した一ヶ年も終つた。二月上旬、岩崎主將、久保、石井、窪浦四先輩は送らるゝ日あふるゝ熱誠を以て部及び部員の將來のために、懇々訓へられた事は忘れることが出來ない。

やがて新學年度の四月を迎へ村上主將、橋本、北山の三理事統率のもとにあふるゝ若人の熱意を以て堅實なる練習しかも耐中創立精神を發揚し得る誠意ある練習に精進努力することを誓ひ且つ力行することにした。

恰も創立八十周年記念事業の一として角力大會のあるを好機會に毎日猛練習をつゞけたのであるが師範もないことゝて期待する程ではないが新興の意氣旺なものがある、現二年生の將來は黄金時代の再現をみるであらうと豫期される程多幸である、現在は五年二、四年一、三年二、二年六、一年六、計十七名の部員ではあるが汽車通學生九人もあることゝて練習不足は免れない、傳統と光榮とを持つ歷史ある母校のために絶えず有形無形の絶大なる校友先輩諸氏の厚意に報ゆるため機會をめざして相互ひに勵みあひ我部の發展を念願して居る、かくて創立記念事業の五月十四日午後本校土俵に於いて笹商對抗をはじめとして花々しき角力大會をひらき部員の意氣を示すことが出來た。六月早々湯淺にしばらく滯在の玉の森力士の應援を得て猛練習に善處してゐる。

學校日誌

昭和七年一月ヨリ八年五月マデ

七年一月一日　四方拜拜賀式ヲ行フ
一月八日　第三學期開始
一月十一日　寒稽古開始
一月十五日　竈山神社本納相撲大會ヘ相撲部選手五名派遣ス
一月十六日　丙務部長齋藤氏來校視察セラル
一月十八日　學務部長連氏來校視察セラル
一月二十日　寒稽古終了
一月廿二日　本校ニカクル教練査閲ノタメ歩兵六一聯隊長歩兵大佐大谷龜藏氏來校セラレ午後三時ヨリ約一時間同氏ノ軍事講演アリ同日縣視學官寺島圭三氏來校視察セラル
一月三十日　午前九時ヨリ武道大會擧行シ寒稽古皆勤賞狀ヲ授與セリ
二月十一日　紀元節拜賀式ヲ行フ
二月十二日　縣主催ニカヽル本校教諭ヲ主トスル成人教育講習ヲ湯淺小學校講堂ニテ開始ス
二月十七日　第五學年及第四學年一部ノタメ學年末考査開始ス（六日間）
二月二十日　三一會歌、（一）、（二）入選者ニ對シ賞品授與ス
二月廿一日　學務課長杉山俊郎氏來校視察セラル
二月廿五日　成人教育講習本日（二週間）ヲ以テ終了、夫々講習證書授與セリ
二月廿七、八日　上海事件急ヲツゲ召集セラレタ出征兵士ヲ町村別ニテ見送ル
二月廿九日　五年及落判定會議ナス
三月六日　第廿五回卒業式擧行、縣知事代理上松縣視學臨席ノモトニ七六名卒業セリ、午後講堂ニ於テ校友會春季總會並ニ卒業生歡迎會ヲヒラク
三月十日　陸軍記念日ニツキ午後講堂ニテ教官森岡大尉、三木教諭ヨリ時局ニ關スル軍事問題ノ講演アリ
七年三月十九日　昭和六年度終業式ヲ行フ
七年三月二十日　新第一學年ノ入學考査施行ノ結果七四名合格セリ
三月廿四日　第四學年以下及落判定會議ヲナス

昭和七年度

四月五日　新任兒玉宏逢教諭着任セラル（山梨縣ヨリ來任）
四月六日　午前八時ヨリ本學年度始業式ヲ行ヒ午後一時ヨリハ入學式擧行七三名ニ對シ入學許可ス
四月七日　朝禮ノ際ニ新嘗生徒ノ對面式ヲ行フ
四月九日　午後一時ヨリ養源寺ニカケル廣村招魂祭ニ代表者參列余興トシテ劍道部相撲部出場セリ
四月十八日　本學年度ニカケル三一會各部理事任命セリ
四月廿一日　椿陵祭ニツキ全校職員生徒墓參ヲナス
四月廿九日　天長節拜賀式擧行ス
五月八日　本校創立記念日ニツキ祝賀式ヲナシ十日午後マラソン競走ヲ行フ
五月十五日　野球部、日高中學ト對戰九對一ニテ大勝、籠拔部箕島商業ト對戰五對三〇ニテ勝ツ　角力部和歌山工業ノ關西中等學校大會ヘ出場セリ
五月十六日　縣參事會員、會計檢査ノタメ來校
五月十八日　第四學年兵營見學ノタメ森岡教官引率ノモトニ歩六一聯隊ヘ本日ヨリ四日間宿泊セリ
五月二十日　第五學年高野山ヘ遠足ノタメ中井、前田、伊藤三教諭附添ノモトニ金屋口出發、徒歩ニテ八幡安諦村ヘ向フ
五月廿一日　第三學年ハ遠成寺ヘ第二、一學年ハ鄰境ナル明神山ヘ小雨ナルモ決行シ耐久健兒ノ意氣ヲ吐ク

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号 10

五月廿四日　庶務課長歌田忠藏氏來校視察セラル
五月廿七日　海軍記念日ニツキ學校長ヨリ訓話アリ
六月　三日　上海事件ヘ出征セル兵士ノ凱旋除隊ヲ湯淺驛ニテ出迎フ
六月　五日　日高中學野球部ヲ迎ヘテ對戰五對一ニテ本校勝ツ
六月　十日　時ノ記念日ニツキ學校長ノ訓話アリ
六月十二日　劍道部、武德殿ニオケル大會ニ出場個人試合六勝一敗、團体試合和商ニ惜敗セリ、水泳部和商プールニテ對校七九對六三ニテ惜敗
　野球部和中ハ遠征シ和中ト試合、本校二A對〇ニテ古榮和中野球部ヲ大敗セシメ本校ノ新興チーム大イニ認メラル
六月十八日　和高商主催關西中等學校生徒英語雄辯大會ニ吉井光雄出場優秀ナル成績ヲ收ム
六月十九日　和中グラウンドニテ海南中學野球部ト試合二對〇ニテ惜敗
六月二十日　視學官寺島圭三氏本校授業ヲ參觀批評セラル
七月　二日　湯淺小學校講堂ニオケル郡内青年學生雄辯大會ニ波部武四郎、桑正義二名出場、團体ニテ優勝ス
七月　三日　滿洲事件ニ名譽ノ戰死ヲトゲタル湯淺町出身ノ弓場川瀨兩氏ノ町葬ニ職員生徒參列セリ
七月　四日　野球部海草中學ヘ遠征七對六ニテ本校勝ツ
　本日ヨリ水泳練習開始、特別教室改築調査ノタメ縣ヨリ管轄技師松田友嗣氏來校視察セラル
七月　十日　野球部箕商ト對戰六對〇ニテ本校大勝ス
七月十一日　水泳大會A班刈藻往復、B班同片道ニツキ遠泳ヲ行ヒ參加者六十一名アリ
七月廿一日　全校生徒耐熱行軍保田村千田方面廻リ歸校、行程約十八粁
七月廿二日　午後二時ヨリ講堂ニテ校友會總會ヲ開催セリ

八月廿一日　四、五學生有志ハ英、漢、數受驗講習、一、二、三年有志ヘ英、漢、數補充講習（イヅレモ向フ十日間トス）アリ
八月三十日　上級、下級講習終了、特別教室延築諸負師來校
九月　一日　第二學期始業式終ッテ休暇中課題考査ヲ全校生徒ニツキ國語、英語（五甲ハ珠算）、數學三科目ニ對シテ行フ
九月　四日　水泳部ハ和中プールニ於ケル縣下中等學校水上競技大會ヘ出場シ三十八点ヲトリテ和商、和中ニツギ第三位トナル（參加八校）
九月十一日　水泳部和高商プールニ於ケル關西中等學校水泳大會ヘ出場シ三十三点ヲ得、參加七校ノ中第三位トナル
　野球部、和中ニ於テ近畿選拔大會豫選ニ出場和商ト對戰五A對三ニテ惜敗ス
九月十七日　滿洲事變一周年ヲ迎ヘ泰岡教官、三木教諭ヨリ時局問題ニツキ講演ヲヒラク
九月二十日　午後會議室ニテ校友、父兄、職員合同ノ八拾周年祝賀ニ關スル協議懇談會ヲヒラク
九月廿三日　和師ニオケル器械体操大會ヘ三名出場、市砂ノ丸ニオケル縣下中等學校角力大會ヘ出場Aノ第五位、庭球部海南中學ト對シ六對一ニテ敗ル、田殿小學校ニ辯論部ハ海草中學ニオケル全國中等學校雄辯大會ヘ出場ス
九月廿四日　五年神谷、四年濱口、花井、野田ニ對シ劍道初段允許狀授與、午後校内相撲大會ヲヒラキタリ
九月廿五日　市公會堂ニオケル縣下劍道大會ヘ出場シ伊中、日中ニ勝チ粉中ニ四對三ニテ敗ル、競技部ハ本校グラウンドニテ對海南中試合七九点對七五点ニテ本校勝ツ
　水泳部、大阪市住ノ江公園プールニテ阪和對抗試合

七八對七二ニテ木縣軍勝、本校ヨリ選手四名參加セリ
九月三十日　東京ニオケル全國器械体操大會ヘ加藤敎諭引率ノモト二五乙竈石泰造、三乙竈門一郎二名參加ノタメ上京ス
十月　一日　午後校内庭球大會チヒラキ少年部二甲、青年部四甲夫々優勝ス、内務部長松崎謙二郎、平川縣土木課長來校視察セラル
十月　八日　大阪鐵道局チームト本校グラウンドニテ對戰六對五ニテ惜敗
十月　九日　本校グラウンドニ和商競技部ヲ迎ヘ對戰八一對七二ニテ惜敗セリ、阪和對抗學生相撲大會ヲ府下藤井寺土俵ニヒラカレ本校ヨリ岩崎、久保、村上三選手管原敎諭付添ニテ出場本縣軍惜敗セリ
十月十六日　本年度体育大會ヲヒラク、大濱ニオケル全國中等學校角力大會ヘ增子敎諭引率ノモトニ岩崎、久保、村上三選手出場第一、二回戰ニテ敗ル
十月廿一日　四、五年夜間演習ヲ森岡、山本敎官指揮ノモトニ西廣、山本、學校附近ニテ行ヒ校庭ニ夜營拂曉戰ニテ終ル
十月廿六日　午後自力更生講演會チヒラキ一、二、三年八一人四五甲乙選出シテ非常時ニ對スル覺劍ナル叫ビヲ發表ス
十月三十日　講堂ニテ敎育勅語奉讀式ヲ行ヒ式後伊東天山氏ノ軍事講演アリ、競技部ハ和中グラウンドニオケル縣下中等學校競技大會ニ出場セリ參加十四校ナリ
十一月　一日　特別敎室ノ上棟式アリ
　明治節拜賀式擧行セリ、本日ヨリ更生運動強調週間トシ實施要綱ヲ生徒ニ配布シ標語募集每月第一日曜ハ神社參拜酒掃デー、每週水曜ヲ梅干デート定ム
十一月　三日　午後講堂ニ於テ武石潛藏氏ノ南米ブラジル移民ニツイテ講演アリ
十一月　十日　午前七時六分紀伊湯淺驛ヨリ大阪城東練兵場ニオケル御親閲ヘ參加ノタメ本校代表四、五學年四十名、廣瀨校長、森岡敎官、中井、島原敎諭引率ノモトニ出發ニツキ職員生徒一同見送リチナス、午後一時二十五分湯淺着ノ陸軍大臣荒木中將ヲ出迎ヘ午後三時ヨリ約四十分間廣小學校ニオケル講演チキク
十一月十五日　大阪城東練兵場ニテ御親閲拜受、代表者一同午後九時十七分湯淺驛着ニツキ附近町村職員生徒出迎ヘ解散セリ、同日、秋季遠足ヲ行ヒ三、四、五學年ハ生石山ヘ（行程約二十八粁）一、二年ハ三本松ヘ（行程約十六粁）夫々少雨ヲ犯シテ耐中健兒ノ意氣ヲ吐ク
十一月十六日　午後講堂ニ於テ御親閲拜受、拜觀ニツキテ校長ヨリ報告及訓話アリ
十一月十七日　午後秋季マラソン競走ヲ行ヒ青年部ハ本校保田橋間
十一月廿六日　少年部ハ糸我局間夫々往復チナス
十一月廿七日　高橋縣學務部長、寺島視學官、松田技師來校視察セラル
　劍道部ハ市武德殿ニ於ケル大會ヘ出場、和師、和商ニカチ準優伊中ニ惜敗セリ、野球部ハ田中グラウンドヘ遠征シ一對一和圓十三合遂ニドロンゲーム
十二月　一日　午後本年度學藝大會チ開催ス
十二月　九日　本年度軍事敎練査閲アリ步六一聯隊馬淵中佐來校セラレ査閲終了後講堂ニテ講評及講話アリ更ニ職員ニ對シテ詳評アリ
十二月　十日　午後容所祭ニツキ四、五年ハ安樂寺ヘ參拜、三、二一年墓參セリ
十二月十三日　八十周年記念祝賀會ニ關スル協議チナス
十二月廿二日　全校生徒三本松方面ヘ耐寒行軍チナス

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号 10

十二月廿五日　野球部鉄商へ遠征六對一ニテ勝ツ
十二月廿六日　本日ヨリ十日間冬季講習(英、漢、數)チヒラク
八年一月一日　四方拝賀式チナス
一月二日　本日ヨリ和中、海草、海南、耐久、和商五校主催、大阪時事後援ノ五校ウインターリーグ戦ニ參加四戦四敗ス
一月八日　第三學期開始ス
一月十一日　本日ヨリ寒稽古開始
一月二十日　寒稽古終了、午後縣建築課ヨリ大村技手來校シ改築中ノ特別教室チ檢査セリ
一月廿八日　午前九時ヨリ武道大會擧行シ寒稽古皆勤賞狀ヲ授與セリ、夜ハ湯淺小學校ニテ御大典記念事業チ復シテ辯論部主催ノ辯論會チヒラク
二月四日　本日ヨリ改築ノ特別教室ノ使用チ始ム
二月五日　御大典記念辯論會チ鳥屋城小學校ニヒラク
二月九日　午後八十周年記念事業ニ關スル發起人會チ開催セリ
二月十一日　紀元節拜賀式チ行フ、午後保田小學校ニオイテ御大典記念辯論會チヒラク
二月十六日　第五學年及第四學年有志ノタメニ學年末考査ヲ開始ス(六日間)
二月廿八日　五年及落判定會議チナス
三月五日　第廿六回卒業式擧行、縣知事代理若尾縣視學臨席ノモトニ六十五名卒業セリ、午後講堂ニオイテ校友會春季總會並ニ卒業生ノ新入會歡迎會チヒラク
三月八日　東北地方ノ震災義捐金チ募集シ發送ス(縣社會課ヘ)
三月十日　第廿八回陸軍記念日ニツキ四年ハ午前中附近五ケ町村青調聯合ノ演習ニ參加午後ハ湯淺町ニオケル愛國行進ヘ參加セリ、三年以下ハ講堂ニオイテ廣瀬校長三木教諭ヨリ時局ニ關シ軍事講話アリ
三月十八日　四年花井ニ對シ二段、三年堤、吉村、河島ニ對シ初段チ劍道階級ニヨリ免許證チ授ク
三月二十日　新第一學年ノ入學考査チ行ヒ六十三名合格セリ
三月廿二日　學年末行軍トシテ鄉土ノ神社參拜チナス青年部ノ行程三十粁、少年部ハ廿二粁
三月廿三日　第四學年以下及落判定會議チナス
三月廿五日　本學年度終業式チナシ賞狀授與チナシ成績發表ス
三月廿九日　午後一時ヨリ淺源寺ニオケル廣村招魂祭ニツキ代表トシテ四乙、廣出身ノモノ參列セリ、劍道、角力部出場セリ

昭和八年度

四月五日　第一學年再募集ノ考査ノ結果十名合格セリ
四月六日　午前八時四十分ヨリ本學年度始業式チ行ヒ午後ヨリ入學式チ行ヒ七十三名ニ對シ入學許可ス
四月七日　國際聯盟脫退ニ關スル詔書奉讀式ノ後新舊生徒ノ對面式チ行フ
四月十日　創立八十周年記念式及ビ事業ニ關シ協議會チヒラク
四月十二日　記念式及事業ニ關シ校友、父兄ノ役員ノ來校ヲ求メテ協議會チヒラク
四月二十日　大泉敎諭新潟縣ヘ出向ノタメ告別式チ行ヒ午後三時十七分ノ出發ニツキ職員生徒ニテ見送ル
四月廿一日　哲陵祭ニツキ午前中五年廣八幡神社ノ式ニ參列シ午後ハ四、五年安樂寺ヘ參拜、三年以下ハ墓參セリ
四月廿三日　大阪鐵道局チームト對戰本校野球チームハ十三對六ニテ敗ル
四月廿四日　創立記念式ニ關スル最後ノ打合セ會チヒラク
四月廿五日　講堂ニテ後藤蒼洋氏ノ時局ニ關スル講演チキク
四月廿七日　靖國神社臨時大祭ニツキ休暇チ賜ル
四月廿八日　金成勇夫敎諭ノ新任披露チナス(新潟縣ヨリ來任)
四月廿九日　天長節拜賀式チナス、午後劍道部ハ龍山神社奉納大會ヘ參加シ二勝二敗第三位トナル

五月一日　校次、父兄ノ合同記念式ニ關スル最後ノ打合會ヲナス
五月六日　愈々本日ヨリ創立八十周年記念行事ノ第一日、午前九時三十分ヨリ安樂寺ニオケル物故、殉職員、校友生徒ノ慰靈祭ヲナシ終ツテ寶山校長背像除幕式ヲ行フ、午後國旗掲揚式チ行ヒ展覽會第一日ニテ祝賀氣分校内外ニアフル
五月七日　午前十時半ヨリ講堂ニ於テ清水知事外多數ノ顯官參列ノモトニ創立八十周年記念式典チ擧行ス
正午スギ道場ニテ祝賀會チ行ヒ午後講堂ニテ記念講演會チヒラキ展覽會第二日ト相マツテ非常ノ盛會裡ニ終了
五月八日　創立記念行事第三日目寒祓体育大會チヒラキ觀衆多ク本日モ亦盛況ニ終ル
五月十三日　創立記念行事第四日午前中校内武道大會チナシ午後校外武道大會及相撲大會チヒラキ快晴ノタメ觀衆多ク又午後六時半ヨリ演藝大會ガアリ校友奔走ニヨリ非常ノ人氣チヨビ興ノツクル所チ知ラズ翌午前一時半終了ト云フレコード振リナリ
五月十四日　記念行事第五日野球大會チヒラキ日中、和中、海草、和商チ招キ三試合チナシ之又非常ノ盛況裡ニ終ル、之ニテ記念行事終了、イヅレモ天候ニメグマレ幸ノ極ミ
五月廿一日　和高商グラウンドニオケル縣下陸上競技選手權大會ヘ五年瀧本、森田出場シ五千米ニ瀧本三等トシテレコードヲ得

現職員

三一會長	修
三一副會長	國、漢
水泳部長	物、化、理
野球部長	歷、作業
庭球部長	敎
國書部長、雜誌部長	國、漢
劍道部長	劍、漢
角力部長	歷、地、作業
水泳部長	英
園藝部長、辯論部長	公、農、作業
辯論部長、競技部長	英
雜誌部長、角力部長	國、漢
庭球部長	數
競技部長	体
園藝部長	博、理、作
藝術部長	國、習
國書部長	數、化、物
藝術部長	英
野球部長	英、商
	音
	敎練
劍道部、會計	
庶務	
珠算、理化助手	
軍事敎官	
六一聯隊付	
校醫	

廣瀨實造	
佐藤安一	
中井英一	
三木俊雄	
浦田隆一	
西岡亮	
南條正次	
增子久三郎	
島原清二	
榎本萬吉	
津々見正路	
菅原季雄	
伊藤弘	
加藤清晴	
野田彰	
金成勇夫	
助廣將	
兒玉宏達	
川村善助	
植本政楠	
山原保雄	
梶内勝祐	
武岡信之丞	
森堤清彦	

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号 10

舊職員動靜

（誤謬遺漏等多々あらん、御氣付の方は御通知ありたし）

和歌山縣　創立者　亡　濱口梧陵翁
和歌山縣　創立者　亡　濱口東江翁
和歌山縣　創立者　亡　岩崎明岳翁
和歌山縣　元校主、舍長　亡　濱口容所翁
有田郡廣村　元校主　亡　濱口儀兵衛
千葉縣　漢文　亡　海上六郎
和歌山縣　漢文　亡　佐々木久馬之助
山口縣　漢文　亡　小野名齊
和歌山縣　漢文　亡　石田冷雲
和歌山縣　劍道　亡　乙田八十吉
和歌山縣　劍道　元舍長　亡　中村嘉右衛門
兵庫縣　漢文　亡　濱口松塘
和歌山縣　敎頭　亡　松本德行
和歌山縣　漢文　亡　桑村元愷
和歌山縣　敎頭　亡　濱口彥雄
和歌山縣　元舍長　亡　野田四郎
和歌山縣　敎頭　亡　伊東溫
有田郡石垣村　漢文　亡　大島常枝
栃木縣　英、歷、漢　亡　狩野廣崖
大阪市北區淨上江町九ノ一五本願寺會館內　地　亡　妻木憎暢
京都府　元校長、修、英　亡　雜賀貞淨
和歌山縣　校醫　亡　賓山良雄
　　亡　吉村英徵

一四二

和歌山縣　劍道　亡　西山柳太郎
和歌山縣　唱歌　亡　前山昌次郎
東京府　地、歷、英　亡　市川勇
兵庫縣　國、漢　亡　狛忠雄
秋田縣　物、化、數　亡　渡邊運治
石川縣金澤市石坂角堺二番町　英、數　亡　金子重太郎
愛知縣　朝鮮　化、數　亡　瀧川廣保
有田郡田殿村上中島　體、唱、國、漢　亡　菅原得水
廣島縣　數　亡　小森志解太
京城府大和田町三ノ九　手、書、體　亡　榎本榮
和歌山縣　劍道　亡　朝井彥四郎
石川縣　劍　亡　杉尾懸藏
和歌山縣　劍　亡　高井米吉
東牟婁郡高池町　數　亡　川島榮次郎
大阪市西區新町通四　體　亡　淺利清太郎
有田郡湯淺町　漢　亡　小原可夫
熊本市大江町是法至六九州學院勤務　體、地、歷　亡　金野正雄
海草郡四ケ郷村有本　農　亡　高木又男
和歌山市板屋町一七　英　亡　玉置光三郎
有田郡藤並村　數　亡　井村信一
熊本市黑髮町坪井六九六　國、漢　亡　坂井德藏
有田郡廣村　英　亡　池田喜雄
靜岡縣磐田郡下阿多古村寺谷　國、漢　亡　濱口八十五
大阪市北野中學　數　亡　林昇太郎
京都市上賀茂北山通六ノ一六　理、化　亡　保科美雄
有田郡湯淺町　英　亡　瀧浦文彌
和歌山縣　地、歷　亡　西尾秀
　　國、漢　亡　熊代彥太郎

靜岡縣濱名郡北濱村高畑　博　敎　亡　糟谷綱藏
有田郡廣村　敎　亡　泉嘉一郎
山口縣阿武郡萩町呉服町　體、唱　亡　久保田庄作
愛媛縣吉古多郡新谷町　英　亡　大野龜次郎
愛媛縣新居郡大保木村東ノ川山　理、化　亡　藤珠夫
海草郡海南中學校　博、唱　亡　星野伊三郎
京都市西洞院魚棚下ル東側町　體　亡　河村龜之助
福島縣　國、漢　亡　小針重吉
熊本市大江町大江　書　亡　田島蕃樹
和歌山縣　國、漢　亡　池永忠太郎
大阪市　英　亡　香村直通
有田郡廣村　劍　亡　小山辰吉
愛媛縣　漢　亡　尾崎周逸
有田郡藤並村　英、法、經　亡　山下定市
大阪市北區西梅田町　元校長修、英、歷　亡　香川直勝
和歌山縣　書記　亡　植木俊一
靜岡縣　數　亡　內田包松
兵庫縣　地、歷　亡　坂本周吉
新潟縣　書、習　亡　波部織衛
有田郡藤並村高瀨　書記　亡　崎山永太郎
臺北帝國大學學生監　元校長、修　亡　近藤壽治
和歌山縣　英　亡　中野獻夫
京都府　國、漢　亡　的場連彌
和歌山縣　數　亡　井上大次郎
靜岡縣　國、漢　亡　秋野要藏
有田郡藤並村野田　國、漢　亡　野田宏
有田郡廣村　數　亡　濱口惠瑋
石川縣金澤市御歩町二ノ二二　國、漢　亡　山本孝太郎
鹿兒島縣櫛島　英、地、歷　亡　園田英世
福岡縣　　亡　緒方雄平

一四三

有田郡湯淺町　英、幾　亡　名島繁太郎
兵庫縣多紀郡篠山町西新町一五　體　亡　岸峻
高野山總寺院住職　書記　亡　濱野秀水
岐阜縣稻葉郡鵜沼村大伊木　劍　亡　岡部常一
和歌山市新堀北軒町　英　亡　土岐才次郎
有田郡湯淺町　體　亡　油谷保太郎
金澤市材木町五ノ三四　體、劍　亡　中村嘉市
福岡市築紫高等女學校　地、歷　亡　楠田鎭雄
富山縣婦負郡寒江村中沖　英　亡　中性慶次
熊本縣阿蘇郡內牧町內牧　數　亡　家入辰
金澤市石坂角堺四　博　亡　山科龜義徵
石川縣河北郡小坂村小坂　英　亡　深山海音
兵庫縣氷上郡久下村玉巡　國　亡　林田剛三
山形縣鶴岡市二百人町　國、漢　亡　菱木岩四郎
京都府久世郡宇治町一二三　英　亡　兼松線
岐阜縣可兒郡伏見村　國、漢　亡　高橋觀隆
群馬縣　助　手　亡　津村慶四郎
有田郡湯淺町　體　亡　岩崎辰吉
兵庫縣第三中學校　物、化　亡　川合久
岡山縣小田郡大江村五二七　數、理　亡　戶口愉策
田邊高等女學校　地、歷　亡　中島岩三
群馬縣碓氷郡原市二五二六　英　亡　吉井嘉太郎
廣島縣福山市胡町二七　博　亡　城本藤太郎
日高郡由良村　英　亡　廣瀨又一
京都府船井郡吉富村大鏡一一　國、漢　亡　三井三男人
長野縣　英　亡　山下義靜
京都市下京區猪熊通松原下柿本町　國、漢　亡　波部辰男
新湯縣西蒲原郡坂井輪村須賀　助　手　亡　松屋得悟
和歌山高女校長　元校長　亡　高原市太郎
有田郡湯淺町　書記　亡

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

和歌山市雜賀屋町東ノ丁二一	物、化	阪本八十四郎
有田郡湯淺町	英	北村松丘
熊本縣飽託郡池田村六四二	英、國、漢	福間壽雄
大阪府三島郡芥川村鄭家		幸名信行
有田郡湯淺町	國、漢	林善雄
愛知縣名古屋市東區新出來町一丁目三五番地二ノ七	數	川浦銳次
大阪府立富田林中學校教諭	助手	栗生功
三重縣一志郡天白村曾原	數	橋本萬三郎
鹿兒島縣大島郡東方村阿木名	數	森信吾
長崎市本紺屋町五	英	古賀芳雄
伊都郡橋本町東家一〇八	体	奥村光治
山形縣南置賜郡南原村芳泉町	地、歷	佐藤昇
伊都郡笠田町東	國、漢	松浦友義
福井縣敦賀町蓬萊二九	英	角野喜六
兵庫縣立神戸第一高女校長	元校長	酒井榮太郎
有田郡田殿村井ノ口	書記	前田浩
那賀郡田中村打田	英、國、漢	森田民夫
山梨縣中巨摩郡落合村落合	修、法	鹽澤守太郎
田邊町南新町一九	体	三谷三五郎
和歌山師範學校	物、化	勝田健夫
奈良縣生駒郡郡山町北郡山	國、漢	樋口正信
和歌山市東仲間町一ノ一四	劍	岡本重夫
六一聯隊付陸軍少佐	軍事教官	山田三郎
滋賀縣八日市中學	國、漢	笠松彬雄
和歌山市北桶屋町二四	英	久保昌夫
京都市左京區大德寺內關西高等專門學校	英	安賀正彥
岡山中學校	國、漢	正路正
奈良縣生駒郡富雄村中	數	大植忠利
香川縣木田郡庵治村	物、化	川口雄三郎
島根縣簸川郡江南村二部	英	中尾功一
和歌山縣	簿記	狩野三郎
高野山中學付陸軍大尉	軍事教官	柏木求馬
京都市	元校長	瓜生兵吉
兵庫縣柏原高等女學校	數	田中伊之吉
湯淺町	化	手塚光雄
西牟婁郡上秋津村	地	高木楚太郎
東京市本所向島二ノ一二ノ八	英	川島松雄
新潟縣立村上高女校	圖、習	大泉米吉

昭和八年度三一會役員

部名	部長	理事
雜誌	西岡、菅原	五甲岡田庄司、五甲上野山隆、五乙金森義制、五乙辻岡治男
圖書	西岡、助廣	五甲岡田庄司、五甲木村良信、五乙金森義制
辯論	津々見本	五乙松下季彥、五乙案志竹之助、四乙熊崎顯、四乙石垣嘉男
藝術	兒玉	五甲梁山俊雄、五乙三木京次、四甲峠原敏夫、四乙綿島忠夫
劍道	南條、森岡	五甲野田宏和、五甲淵口義夫、五甲谷口重治、五乙花井義正、五乙馬參見瑞穗
野球	三木、川村	五甲破戶芳松、五甲柏田清一、四甲持田千洲、四甲休藤五郎、四乙淵宜保市、四乙岱野隆雄
庭球	伊藤、福田	五甲岩崎勇、五甲永井旭、五乙山田俊次、四甲江尻可孝、四乙今井利弘
水泳	中井、島原	五甲柳本友雄、五甲宮本覺治、五甲伊藤辰夫、五甲吉田敬次、四甲上野山長治
競技	加藤々見	五甲瀧本和美、五甲坂井悠三郎、五乙平木秀、五乙井爪良一、五乙吉田勇二
角力	增子、菅原	五甲村上靖次、五乙橋本弘、四甲北山重宮
園藝	榎本、野田	五甲古寺善、五甲平松道夫、五乙最田正吾、四乙敬見泰雄、四乙管尾德一

庶務	會計
榎原	山本

出身町村別生徒數（昭和八年六月末現在）

町村名＼學年別	五年	四年	三年	二年	一年	計
箕島町	〇	一	一	五	四	一一
保田村	一	二	一	〇	三	七
宮原村	三	二	四	七	三	一九
糸我村	一	二	一	一	〇	五
田栖川村	四	一	一	三	四	一三
湯淺町	八	一二	一四	一八	一七	七八
廣村	九	三	四	三	九	二八
南廣村	七	三	四	五	四	二三
津木村	〇	〇	一	〇	〇	一
藤並村	一〇	五	三	二	六	二六
田殿村	五	一二	一	五	七	三〇
生石村	二	二	一	二	四	一一
御靈村	一	一	一	二	五	一〇
石垣村	二	〇	四	二	二	一〇
鳥屋城村	六	七	六	七	三	二九
五西月村	〇	二	一	〇	〇	三
岩倉村	一	一	〇	〇	一	三
八幡村	三	〇	一	二	二	六
小計	六三	六五	四八	六三	七四	三一三

日高郡＼町村名	衣奈村	白崎村	由良村	東内原村	湯川村	御坊町	川上村	小計	西牟婁郡＼田邊町	周參見町	小計	海草郡＼椒村	加茂村	安原村	三田村	小計	那賀郡＼山崎村	粉河町	小計	和歌山市	合計
	〇	二	〇	一	〇	〇	三	六	〇	〇	〇	一	〇	〇	一	二	一	〇	一	三	六八
	〇	〇	〇	〇	〇	〇	二	四	一	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	六八
	一	〇	〇	〇	〇	〇	六	七	〇	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	五五
	〇	〇	〇	〇	〇	〇	四	四	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三	七二
	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	一	〇	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	一	〇	七八
	一	四	一	二	一	三	一六	一四	二	一	三	一	一	一	一	四	一	二	三	三	三四一

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

昭和六年度
三一會費收支決算書

收入ノ部

一金參千參百貳拾貳圓九拾貳錢

内譯

六百五拾參圓拾五錢	前年度繰越高
七百四拾貳圓	三一會第一期分
七百拾八圓	三一會第二期分
參百五拾六圓	三一會第三期分
六拾四圓	三一會入會金
參百五拾七圓	体育會費
七拾五圓	職員寄附
五拾圓八拾九錢	利息
貳百拾參圓	其他寄附
九拾參圓八拾八錢	大阪朝日新聞ヨリ受

支出ノ部

一金參千參百貳拾貳圓九拾貳錢

内譯

百貳拾五圓	雜誌部
貳拾五圓六拾四錢	辯論部
五拾圓六拾錢	圖書部
百貳拾九圓五拾錢	劍道部
八百八拾九圓拾參錢	野球部
百貳拾六圓拾七錢	庭球部
貳百參圓七拾九錢	水泳部
百九拾參圓七拾錢	競技部
八百九拾六圓拾參錢	相撲部
貳百參拾參圓八拾六錢	園藝部
百參圓	庶務費
貳拾貳圓六拾參錢	一般運動會費
豫備費	

右決算ノ通リ相違無之候也

昭和七年度
三一會費收支決算書

收入ノ部

一金貳千四百貳拾七圓六拾五錢

内譯

九拾貳圓四拾六錢	相撲部
六百六拾圓	園藝部
參百參拾貳圓	庶務費
八拾圓	一般運動會費
參百貳拾八圓	豫備費
七拾五圓	
拾七圓四拾壹錢	
百三圓	

七拾六圓五拾八錢　大阪朝日新聞社ヨリ受
三圓貳拾錢　其他

支出ノ部

一金貳千四百貳拾七圓六拾五錢

内譯

三圓貳拾錢	雜誌部
貳拾四圓	辯論部
參拾九圓八拾七錢	圖書費
百七圓五拾七錢	劍道部
七百七拾五圓五拾參錢	野球部
百拾圓	庭球部
貳百參圓參錢	水泳部
百五拾九圓八錢	競技部
八拾圓	相撲部
七拾九圓八拾參錢	園藝部
貳拾圓參錢	藝術部
百五拾八圓四錢	庶務費
五拾五圓七拾五錢	一般運動會費
五拾六圓貳拾參錢	豫備費
貳拾壹圓六拾參錢	昭和五年度末迄ノ未拂年賦償還
參百圓	翌年度へ繰越金
貳百參拾參圓八拾六錢	

右決算ノ通リ相違無之候也

前年度繰越高
三一會第一期分
三一會第二期分
三一會第三期分
三一會入會金
体育會費
職員寄附
利息
其他寄附

昭和五年度末迄ノ未拂金年賦償還
昭和五年度末迄ノ未拂金償還
翌年度へ繰越金

父兄會々報

一會員數　三百十二名　昭和八年六月三十日現在

内譯

有田郡	二八五名	日高郡	一五名
西牟婁郡	三名	海草郡	四名
那賀郡	二名	和歌山市	三名

昭和八年度父兄會豫算

歳入ノ部

一金四百九圓貳拾八錢	前年度繰越金
一金六百貳拾圓	年會費(三百二十人分)
一金壹百圓	入會金(五十人分)
一金壹百五拾圓	基本財産ヨリ繰入金
一金拾六圓	預金利子
計 金壹千貳百九拾五圓貳拾八錢	

歳出ノ部

一金壹百五拾圓	學力補習教育費
一金貳百五拾圓	學校設備其他充實費
一金八拾圓	學校職員講習會其他出張旅費
一金六圓	卒業生賞品代
一金拾圓	弔慰餞別費
一金參拾圓	職員轉退職慰勞準備積立金
一金六拾圓	職員慰勞懇談會費
一金貳拾五圓	勤續職員小使贈呈記念品代
一金貳拾五圓	會報印刷費
一金拾圓	總會費
一金拾五圓	役員會費
一金壹百圓	基本財産蓄積費
一金五圓	諸用紙及印刷費
一金參圓	通信費
一金五拾圓	會活動費
一金參百九拾圓	學校創立八十周年記念圖書閲覧室移轉改築費
一金貳拾四圓	嘱託書記手當
一金拾圓	雜費
一金五拾貳圓貳拾八錢	豫備費
計 金壹千貳百九拾五圓貳拾八錢	

父兄會役員氏名

顧問	戸田保太郎	竹林乘三郎	岩崎勝
會長	川口彌兵衛		
副會長(會計)	永井徹		
常任幹事	崎山房吉	支後宇一郎	花手啓三
	森音次郎	周參見信助	伏木貞
幹事	濱口八十五	平木正	
	光定正次	最田長太郎	吉村廣
評議員	浦清兵衛	岩崎保	神人三治郎
	上野貞次郎	橋本伊右衛門	白子虎楠
	三ッ村勘太郎	籠谷勇助	崎山正次
	直山政吉	梅本助右衛門	平松竹次郎
	松下義太郎	林善次	岩本信亮
	辻岡治助	藤田安太郎	東三朗
	川口龜一	佐々木善治	今井左近右衛門
	濵藤亮平	西井源吉	石井竹次郎
	伊藤彌助	上野山信一	

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号 10

耐久中學校生徒父兄會々則

第一條　本會ハ耐久中學校生徒父兄會ト稱シ事務所ヲ耐久中學校内ニ設ク

第二條　本會ハ左ノ會員ヲ以テ組織ス

一、正會員　生徒ノ父兄又ハ保證人

二、特別會員　卒業生父兄並ニ學校職員

第三條　本會ハ學校ト連絡協同シ子弟教養ノ徹底ヲ圖リ教育施設ノ後援ヲナスヲ以テ目的トス

第四條　本會ハ前條ノ目的ヲ達センガ爲メ左ノ事業ヲ行フモノトス

一、式典、會合、運動會ニ關スルコト

二、學校職員ニ對スル慶弔、送別ニ關スルコト

三、學校ノ設備改善ニ關スルコト

四、生徒ノ奬勵表彰ニ關スルコト

五、其他必要ト認ムル施設ノ援助

第五條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長　一名

副會長　一名

幹事　若干名（内五名ハ常任幹事一名ハ會計）

評議員　各學年毎ニ若干名

第六條　役員ノ任務及選定方法左ノ如シ

會長ハ本會一切ノ事務ヲ總理ス

副會長ハ會長ヲ輔佐シ會長事故アル時ハ之レヲ代理ス

幹事ハ本會ニ關スル諸般ノ事務ヲ處理スルモノトス

會計ハ本會ニ關スル會計事務ヲ掌ル

評議員ハ本會ニ關スル諸般ノ協議ヲナス

會長ハ總會ニ於テ正會員中ヨリ推薦ス

副會長並ニ其他ノ役員ハ正會員中ヨリ會長指定選任ス

各役員ノ任期ハ特別ノ事情ナキ限リ其生徒在學年中勤續スルモノトス

第七條　本會ニ顧問ヲ置キ顧問ノ選定ハ役員會ノ決議ニヨル

第八條　會議ハ總會並ニ役員會ノ二種トシ必要ニ應ジ會長之ヲ開ク

第九條　本會ニ要スル費用ハ左ノ收入ヲ以テ之ヲ支辨ス

一、入會金貳圓

一、會費金貳圓

一、寄　附　金

會計年度ニ於ケル剩餘金ハ次年度ヘ繰越スモノトス

第十條　本會々則ノ變更ハ總會ノ決議ニヨル

校友會員動靜欄

母校耐久中學校創立八十周年記念祝賀會擧行に際し、大方の會員諸君並に父兄會員諸君の絶大なる御賛同を得て去る五月中に盛大なる擧式を見たるは誠に喜ばしき限りであつて諸君が母校の隆盛を憶ひ發展を希ふ赤誠に對し失禮ながら厚く御禮申上ます。茲に記念號を出版廣く會員に頒布するに當り昭和八年度分校友會機關雜誌「耐久」を包含して御送り致す事になりました。此義御了察下さい。就きましては毎誌で御願申して居る事ながら、會員中の住所職業動務先等往々相違せる方ありて折角發送しても返つて來たり其他災禮を重れて居る樣な始末然し之は役員調査の怠慢ではなくてベストをつくして而も不可能なる事なれば若し御本人又は友人等にて相違点發見の節は何卒役員共を助けると思召して必ず御一報下されむ事を特に御願申上ます。何卒御寸暇の節には寸節なりとも御近況御通知の程幾重にも御願申上ます。

校友會役員

御通信の場合は和歌山縣湯淺町校友會長阿瀨卯兵衛宛御願申します

校友名簿

（註有田郡丈ハ郡名ヲ略ス）

明治二十七年度

姓名	現住所其他
御前政一郎	亡
井爪宇三郎	亡

明治二十八年度

姓名	現住所其他
久保田新太郎	御坊郵便局長
船渡要次郎	大阪市南區天王寺大道　原籍西牟婁郡日置町

明治二十九年度

姓名	現住所其他
花岡佐四郎	海草郡宮前村
林利三郎	藤並村　實業
塩崎好之助	亡

明治三十年度

姓名	現住所其他
中本小四郎	西牟婁郡日置町
山下定市	東京帝大法科卒業　藤並村長
船渡德一	大阪市南區天王寺大道　原籍西牟婁郡日置町
水崎鐵次郎	千葉縣銚子市　ヤマサ醬油醸造課長
橘敬次	亡

明治三十一年度

姓名	現住所其他
田島高助	亡
津村芳太郎	日高郡和田村助役
丸谷末七	東京府荏原郡平塚村石越　原籍西牟婁郡日置町

明治三十二年度

姓名	現住所其他
千川正一	岡山地方裁判所檢事
澳泰之助	宮原村　農業
小瀨新太郎	在大阪
直山庄次郎	亡　明治三十八年陸軍少尉ニテ病死
浦清一郎	僧侶　田殿村
近藤芳亮	大阪市北區澤上江町九ノ一五本願寺會館内布敎師
雜賀貞淨	藤並村　實業
周佐見信助	亡

明治三十三年度

姓名	現住所其他
羽田一	南廣村　實業
崎山正次	鳥屋城村　實業　所得調査員
瀨藤亮平	亡

明治三十四年度

姓名	現住所其他
栩野清兵衛	御坊町中吉　旅館營業
中野吉次郎	

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号 10

明治三十五年度

大阪市北區龍田町　若松　淳
天龍川水力電氣會社在勤　川島榮次郎
大阪高工卒　千葉縣海土郡銚子町　山崎善一
銚子醫油會社釀造部長
中央大學法科卒業　和歌山市徒町　和歌山瓦斯株式會社支配人　和歌山市會議員　廣田米三郎
安東驛前通り三〇〇　會社員　栖原常三郎

明治三十七年度

亡　池永忠太郎
湯淺町　金野正雄
久留米市篠山町三ノ一八五　會社員　山崎甚之助
田栖川村　家居　水崎式撰果機製作販賣　水崎綉一郎
湯淺町　伏木　貞

亡

明治三十九年度

御坊小學校訓導　日、東內原村　岩畑長太郎
大阪府　長谷川利一
京都市花園妙心寺事務所　遠山禪益
大阪市天王寺區國分町一二一　會社員　堂三四郎
那賀郡小川村　大澤徹
日高郡岩代村　光照寺住職　吉水鑑瑞
亡　上田米吉
亡　梅本靜夫

第一回(明治四十年度)

大阪府泉南郡鳥取村　山中一二
熊本醫專卒業陸軍豫備三等軍醫正八位　矢船茂一
田殿村ニテ開業
鳥屋城村　實業　後安貞義
西牟婁郡有田村　清野正楠
日高郡比井崎村　實業　塩崎謙三
京都醫科大學卒業　藤並村下津野　歯部醫院長　平松正巳

和歌山市新中通三丁目　醫學博士　糸川角次郎
西牟婁西富田村收入役　岩崎英男
北海道北見國常呂郡野付牛町　林吉夫
王子製紙會社山林派出所長　農學士　濱部佐四郎
泉州佐野町新町　林豊吉
萩野善雄
廣村　齒科醫開業　雁主一
三四銀行御坊支店員　橋本竹藏
和歌山市十二番町日本勸業社　田村正則
西牟婁郡田邊町　圓中忠太
盛岡高等農林學校卒　廣村家居　津村嘉四郎
大阪市北區富田町三五ノ一　辯護士　要木隆三
和歌山市布經町二　和歌山師範二部終了　商業　上田啓二郎
愛知醫專卒　城山村　醫師　上北幸隆
東京市　野村太郎
京都醫學士　大阪府岸和田市野田町　開業醫　楠部敬一郎

東京市外岩淵町稻付在住　昭和銀行在勤　山本富之助
田殿村長田　農業　藤田信吉

保田村　實業　兒玉了眞
尼ヶ崎市宇治川電氣會社支店長　佐原太郎
c/o Okura&Co., 30Church Street, Newyork City. U.S.A.　湯川三郎
廣村　雜貨商　宮田準一
日高郡中津川小學校長　三崎金吾
宮崎縣油谷女學校長　椎崎亮太郎
銚子市ヤマサ醫油店人事課長　塩路敏郎
大阪市住吉區大道三丁目　工學士　菖蒲谷義鄉
茂野三善
新宅知太郎

第二回(明治四十一年度)

日方郵便局長　日方町　(舊姓齋藤)畑山鐵亮
和歌山市新堀町　花井秀太郎
和師二部卒、內原信購販組合長　日高郡東內原村　楠睦三
亡　二澤正三
長崎高商卒　和歌山市中橋筋三丁目　(舊姓崎山)堀田岩楠
和歌山瓦斯會社在勤　富上芳太郎
田栖川村吉川　農業　戶木保太郎
湯淺町　酒類販賣　小川雅一
日高郡由良村畑　家居　岡室平八
海草郡加茂村　岡本宗明

東京府大森町新井宿一四八〇　內務省技師　工學博士　金森誠之
旭川市一條通九丁目　日本齒科醫專卒業　齒科醫　吉村敦
有田高等女學校在勤　廣村　橘寬之
湯淺小學校長　高垣英一
朝鮮總督府外事課長　京城旭町總督府官舍居住　田中武雄
東京齒科醫專卒、開業齒科醫　竹中直三郎
大阪府中河內郡小坂町中小坂四八二　竹內眞
東京市澁谷區永住町五〇　津村理化學研究所　津村文次郎
東京高工卒　東京市麻布區東町二三　津守英五郎
田栖川村栖原　漁業　中尾彌右衛門
亡　中尾七郎
東京高商卒　英領香港三井物產株式會社廣東支店長　山崎龜之助
那賀郡下神野村大字神野市場四四七　松下廣之進
日高郡由良村小學校訓導　薦池秀興
銚子市濱口儀兵衛方　榎本勝吉
大阪市西區新町南通り四　醫學士　坂本稔
保田村　實業　(舊姓崎山)上野山龜一
大阪市天王寺區寺田町三九　商業　湯川繁次郎
廣村小學校長　三輪吉之助
和歌山新報社主筆　三井茂
皇學館講習所卒　宮原村　(舊姓井爪)宮本眞次
大阪府豐能郡南轟木町四三二　(舊姓名塩崎岩楠)佐野純三
日高郡船着村助役　塩崎秀松
宮原村　僧侶　茂野順實

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号 10

大阪市住吉區天下茶屋一丁目一五
內外除虫菊株式會社々員
南廣小學校々長
鳥屋城村
東京帝大工學部教授　工學博士
東京市赤阪區青山高樹町一六
日高郡松原村吉原
藤並村信用組合長

第三回（明治四十二年度）

和歌山市小松原通一丁目扇芝　クラブ營業　（舊姓名岩本佐仲）松本憲二
生石村　農業　井爪雅雄
岡山醫學卒　米國ワシントン大學卒ドクトルオブメヂチーネ醫學博士　和歌山市本町三丁目小兒科開業　生馬茂
朝鮮忠清北道清州西嘉町忠州金融組合理事　稻葉梅楠
永同郡永同面稽山里四八四ノ六　林豐楠
亡　西野理助
東京帝大工科卒　東京丸ノ內三菱鑛業株式會社在勤　土井眞三次
神奈川縣鎌倉郡中和田村中田　土岐音一郎
亡　大南作治
大久保捨三
秋田縣本庄町裏尾崎町二　齒科醫　渡邊辰雄
東京市外大井町北濱川二四六　山口銀行員　（舊姓宇野）渡邊綱一
亡　角谷精一
醫學博士　仙臺市堤通三二　龜井文吉

湯淺町　文具商經營　多仮田房吉
亡　田中耕二
兵庫縣西ノ宮市辻石町一二七　內外綿會社西ノ宮工場在勤　玉置佐一郎
西ノ宮市辻石町一二七
高知縣立安藝高等女學校教諭　廣島高師教育科卒　津村龜太郎
海草郡大崎村　成川信次
南廣村　家居　直山種吉
大阪市大同ビル紀陽木材貿易會社長　中尾良之助
湯淺町　家居　廣島高師卒　名島繁太郎
日高郡衣奈村　上出又一
大阪市西成區田端道ノ四ノ一六　桶山貞之助
那賀郡神野市場　保田金助
紀南農林學校教諭　松下邦一
海草郡加茂村　前田長之助
亡　小島鐵城
箕島小學校訓導　辯護士　關大講師　兒島繁松
東京帝大法科卒　近藤信慶
大阪市東區島町一丁目二番地　坂本憲三
亡　佐々木千尋
和歌山市湊長町三　醬油販賣業　（舊姓河野）堀崎寅藏　見矢定七
津木小學校長　平木正

第四回（明治四十三年度）

亡　射場孫三郎

和歌山市
日高郡御坊町　日高紡織會社在勤　（舊姓新宅）土井善次
大阪市西成區松原通一ノ三六　金物商　石橋傳之助
亡　（舊姓西端）石城才藏
西ノ宮市神樂町四十二　居住　大阪東區　秦邦一
淡路町四ノ二三　平山化粧品部經營　（舊姓林）平山峯雄
湯淺町　家居　橋本伊右衛門
御蓋村　星田義量
京都市岩上通五條南入　鳥淵信千代
八幡村小學校訓導　富上寛次郎
田殿村　家居　師範二部卒　大橋熊次郎
亡　大南與助
那賀郡南野上村　沖好一
亡　渡邊雄助
京都市大宮四條大宮祠院內　醫學士　川口遜
日高郡和田村　（舊姓鏡井）嵜崎龜七
大阪市住吉區桑津町三九　スター寫眞館在勤　梶本繁松
有田高等女學校教諭　竹中信親
釜山醫高雄州後壁林製糖所在勤　明大卒　寒川良雄
釜北市大和町四ノ二　醫學士　薗悌次郎
田栖川小學校長　中島昇平
那賀郡北野上小學校長　宗邦治
日高郡御坊町　製材業　高商卒　野村正一郎
亡　國中恭二
那賀郡南野上小學校長　久保田敏倫

陸軍大學卒　陸軍少佐英國駐在　楠山秀吉
亡　山戸茂一郎
和歌山市上魔匠町　陸軍大尉　（舊名孫十郎）山口巖水
東京市日本橋區馬喰町一ノ五　（舊姓山本）宮井勝二郎
亡　松野米藏
八幡村　家居　（舊姓梶岡）小林文三
奈良縣葛城稅務署　青石幸一
關西大學卒　大正海上運送火災保險株式會社　秋田正雄
大阪支店在勤　大阪市西成區田端通二ノ二　阿瀨卯兵衛
湯淺町　砂糖販賣業　現校友會長
辰ヶ濱小學校訓導　（舊姓上田）坂井藤三郎
大阪市東成區片江町三三八居住　（舊名常吉）下原祥多
山口高商卒　森正勝
亡　森英二郎
東京市日本橋區濱町一ノ四　森三樹
ヤマサ醬油店東京出張所在勤　瀨藤保三
大阪市住吉區田邊東ノ丁六ノ六　杉野富之助
和歌山市南休賀町三　醫學博士　（舊姓鈴木）岡室德之助

第五回（明治四十四年度）

亡　岩崎六郎
大阪藥學校卒　大阪市東區東雲町一ノ七七　藥局經營　石田豊三
大阪市南區順慶町一　醬油販賣業　服部清之丞
箕島小學校訓導　橋爪徹三
亡　西川清五郎

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

鳥屋城村　醫院開業　（舊姓塩路）遠山清太郎　西　珂四郎
東京市澁谷區南平臺四〇　法學士
和歌山市關戸矢田坪　神戸高商卒　土岐政藏
ケルン大學卒　和歌山高商教授　耐久中學校軍事教官　陸軍歩兵少佐
大阪市東區高麗橋詰町　外科病院長　醫學博士　大橋兵次郎
神戸市葺合町一九一〇ノ四　醫學博士　大阪赤十字病院在勤　醫學博士　森　四郎吉
大阪市住吉區晴明通一ノ二八　醫學士　（舊名義寛）柏木敬齋　自宅　大阪市住吉區田邊町五ノ一六　菅野秀信
（舊姓名谷口友助）吉田知邦
亡
田栖川村長　武内弘一
和歌山市島崎町一九　河内清吉
新宮町　成川有三
（舊姓赤松）植村寛次
藤並村野田　四高卒　農業　野田喜一
日高郡白崎村大引　勲性寺住職　佛教大學卒　野崎誠節
京都大學病院内科在勤　醫學博士　黒岩文一
大阪市浪速區大國小學校訓導　渠山芳雄
大阪市住吉區天下茶屋三ノ七七　桑原孝一郎
善通寺師團輜重兵第十一大隊附　輜重兵大尉　欽田秀一
海草郡大崎村　家居　山本久太郎
亡　前田寅之助
東京高商卒　大阪府英木町　深海勝男
西牟婁郡朝來歸小學校長　藤原武松
和歌山市宇須　東京美術學校卒　（舊姓齋藤）有本　廊
湯淺町中町　（舊姓林）北村松丘
那賀郡上名手村　木村寛三
亡　湯川守一

大阪市西區信濃橋突抜町　東京電氣會社在勤、慶應理財科卒　陸軍歩兵少佐　塩崎武彌太
耐久中學校軍事教官　森岡信之丞
大阪赤十字病院在勤　醫學博士　森　四郎吉
自宅　大阪市住吉區田邊町五ノ一六　菅野秀信

第六回（明治四十五年度）

湯淺町　書籍文房具商　（舊姓山本）岩崎平助
兵庫縣第三中學校教諭　体操學校卒　（舊姓岩崎）今井辰吉
埼玉縣大宮町　片倉製絲會社在勤　今井五六
御坊町　藥種商　原見米造
宮原村須谷　農業　林　正吾
日高郡白崎村大引　淨明寺住職　佛大卒　本願寺布教師　荻野善雄
尼ヶ崎市外杭瀬古樋八番地　商業　橋本榮太郎
亡　西川清三
八幡村清水　京都醫專卒　自宅開業　堀江正介
朝鮮京城府杏林洞一七一　片倉耕夫
藤並村　瓦製造販賣業　峠原軍之助
亡　大畑秀造
大阪市南區玉屋町二二七　關大卒　大谷安兵衛
南廣小學校訓導　角谷治良
御靈小學校長　（舊姓馬上）門田又一
吉備實業學校教諭　川口清一
和歌山市兵營前　醫師開業　醫學士　垣内　弘

廣島高師教育科卒　龜井彦一
京都帝大醫科卒　和歌山市三木町堀詰　醫師開業　瀧　秀信
三十四銀行御坊支店員　堤　三次
志賀小學校訓導　日高郡和田村　中西介造
高千穗高商卒　横濱正金銀行廣東出張所　采女美員
Yokohama Specie Bank, Shameen Canton China.　裏辻佐左衛門
海草郡日方小學訓導　海、西和佐村
保田村　家居　上野山信一
亡　植松庸次郎
山梨縣　久保啓三
東牟婁郡新宮町藥師町　生絲株式會社在勤　（舊姓名高垣照）楠部竹次郎
石垣村　農業　七高卒　楠山正夫
東京市目黒中目黒一四二九　法學士　柳岡俊敎
御坊町　常照寺住職　佛大卒　山崎清市
日高郡野口小學校長　山本巳之助
大阪南稅務署在勤　松尾綱一
那賀郡中野上村小學校長　松村富次郎
亡　前田靜夫
田殿村井ノ口　家居　保田村下中島　家居
伊都郡白藤村小學校長　和歌山市今福　和歌山市高松小學校訓導　（舊姓吉信）片山準二
糸我村　農業　豫備陸軍中尉　（舊名恒楠）加納長兵衛　狩野政治郎
日高郡稻原村　東京府豐多摩郡中野町三七八一　坂口幸二郎　東京美術學校卒　柏　貞二
石垣村　家居　佐々木善治　柏木伊祐
田栖川村吉川　農業　宮芝敏彦　谷脇正二郎
大阪市天王寺區石ヶ辻町九一　白井健一郎

京都市梅ヶ小路堀川通西入　小谷ゴム製造所在勤　森　友一
明治大學商業部卒　第一銀行兵庫支店在勤　森　季廣
神戸市須磨區磯馴町六丁目三九　瀨村政楠
海草郡宮前村　商業　鈴木弘宣
京都同朋學社卒　僧侶　田殿村

第七回（大正二年度）

亡　岩崎盛之助
亡　井上大次郎
日高郡上洞小學校長　日高郡矢田村　（舊姓橋本）小竹庫之助
南廣村　農業　西谷秀楠
亡　西本市藏
外川幸一
御坊裁判所内　大浦長之右衛門
御靈小學校訓導　田殿村　大倉茂造
日高郡比井崎村　大出彌太郎
日高郡船着村　加藤要三
亡　川口鐵杵
保田村下中島　家居　河島誠治
和歌山市今福　和歌山市高松小學校訓導　（舊姓吉信）片山準二
湯淺町　醬油釀造業　（舊名恒楠）加納長兵衛
東京市外巴端五五一　東京美術學校卒　狩野政治郎
横濱市青木町反町五四五　柏　貞二
亡　柏木伊祐
海草郡大崎村　谷脇正二郎

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

城山郵便局　城山村
日高郡船著村郵便局長
鳥取縣
神戸市東町英國サウス、アリチツシュ海上火災保險會社在勤　自宅　神戸市須磨區松風町五ノ四一
亡
京都市伏見區深草町野手　家居
御坊公民實業學校在勤
日高郡和田村第一生命保險會社代理店
和歌山市今福三壹　同市番町小學校訓導　（舊姓前田）中川吉之助
石垣村　陸軍豫備少尉
亡
京都市
大阪住吉內科院勤務　大阪市天王寺區北山町二七
糸我村　農業　（舊名清春）山崎實之助
奈良縣高市郡高取町下土佐　石川醫院
和歌山女子師範學校教諭　廣島高師教育科卒
亡
石垣村　實業
和歌山市元町來行町二丁目
大阪高等工業學校卒　和歌山工業學校　（舊姓後藤）由比　隆
濱松市　醫學博士
湯淺小學校訓導　（舊姓岩崎）木下長次
川崎造船所在勤　湯川岩吉
日高郡由良郵便局長　（舊姓湯川）原　慶吉

谷窪清一
高尾啓三郎
田中道夫
玉井友太郎
亡
園道郎
堤敬三
中西和太郎
中西悅太郎　（舊姓前田）中井純一
植田宗吉
山田一二郎
山口要造
（舊名清春）山崎實之助
松田清
松下正男
前田幸二郎
船越傳次
阿瀨喜左衛門
坂本修
湯川岩吉

海南中學校教諭　廣島高師卒
東京市外王子町下十條一五二七居住
海草郡日方高女教諭兼女子師範學校教諭
亡
和歌山市宇須　商業
和歌山市新通五丁目　商業
波米中日、比井崎村
御坊町　齒科醫院

湯田圭一
宮田敬二
宮下又七郎
宮本輕義
島村富次郎
島喜三郎
下野四郎右衛門
瀨見三四郎

第八回（大正三年度）

島屋城村
湯淺小學校訓導
日高郡切目村
京都府宮津高等女學校教諭
和歌山市橋向町
大阪市西區新中通五ノ二八
藤並村　家居
亡
千葉醫科大學勤務　醫學博士　同市千葉寺一三四二
湯淺町　村橋販賣業
日高郡和田村　私立常盤義塾在職
亡
川口光藏

岩本彰義
（舊姓大場）生駒德次郎
林由兵衛
林眞二郎
（舊姓上田）西村音吉
堀直次郎
堀眞澄
北條邦修
殿井香平
堂野前維摩郷
土岐久楠
狩谷勇
川口弘一

臺灣臺北在住
亡
名古屋市東區千種南畑　醫學博士
神戸市久保町二丁目西新開地　藥劑師　藥局經營
早大高等師範部漢科卒　日高郡川中村長
保田小學校來職
九州帝大工科卒　伊都中學教諭
宮原村　農業　豫備陸軍少尉
朝鮮平壤高等普通學校教諭　早大政經科卒
早稻田大學卒　內外綿布株式會社上海支店勤務
上海木登路九七號同會社社宅
武專卒　大阪天王寺中學校教諭　原籍日高郡湯川村
廣村　肥料商　（舊名政次郎）浦　清兵衛
亡
湯淺醬油株式會社在勤　湯淺町
亡
和歌山市宇須　丸福商店方
南廣小學校訓導
日高郡和佐小學校長
大阪府演寺七五　松尾別邸內
亡
大阪市西區土佐堀一丁目　大同ビル二階一號
齒科醫開業
亡

川口秀雄
片山嘉七
加田淳次郎
神山源治
柏木熊一郎
柏木永一
武內一男
竹內泰一
瀧川喜太夫
土田賢
中川正二
中野幸吉
野田陸三
久保清太郎
久喜米吉
楠山武夫
山本豊楠
（舊名山本）谷間常助
（舊姓藪田）松尾利一
松宮寬三郎
松本紹
兒玉徹一
椋本三右衛門

那賀郡小倉村
湯淺小學校訓導
和師二部卒　保田村
廣村
箕島町
上海福州路第三號　三井銀行上海支店員
和歌山市憲兵隊前　耳咽鼻喉科開業　醫學博士
日高郡和田村　家居
東京神學社神學校卒　牧師
千葉縣船橋町九日市一五一一
亡
東京帝典講究所卒　田殿丹生神社々掌兼田殿村長
那賀郡小川村　京都專賣局課長
東京市巢鴨町一八九四
東京市深川區鶴歩町二　材木商

寺田俊鬼
寺柚磐二郎
佐原毅
坂本哲
三浦清龍
宮本英太郎
御前慶造
塩崎龜三
塩路武鄉
塩路尚武
島田彌六
日浦德
栖原敏助
鈴木重次郎

第九回（大正四年度）

大阪西區役所在勤
廣村　大阪市東區高麗橋詰町
內外物產合名會社
大阪市此花區櫻島　大阪鐵板會社勤務
亡
大阪安田銀行堀江西支店勤務
亡
砂糖肥料商　湯淺町

池永龜一
（舊姓山中）池永銳郎
稻田重考
石井傳一
花岡近三
橋本儀藏
橋本定右衛門
堀川正一

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

合衆國ケンアリツヤ市宗教大學卒
東京府西大久保四八七日本新協會內
海草郡黑江町　醫學士
北海道札幌市役所電氣科技師　工學士
亡
和師二部卒(文檢地理科)　田邊中學校教諭
西田邊町中屋敷
藤田小學校教員
上野忍ケ岡小學校訓導
朝鮮京城第一高等普通學校　京城府孝子洞一八二
大阪市外豐中町櫻塚七九大阪海上火災保險會社在勤
北米合衆國ロースアンセルス市アリソ街九九四番
須磨村德田
西山專門學校卒　僧侶　京都府乙訓郡久世村久世
日高郡西內原小學校訓務
和歌山市中ノ店南ノ丁
那賀郡北野上村
兵庫縣武庫郡鳴尾村　阪神電氣會社勤務
東京高工卒　東京市化學工業學校在勤
東京市目黑區自由ヶ丘二七七
和歌山市雜賀屋町東ノ丁
東京市目黑區中目黑三ノ九六五　東京美術學校卒
由良小學校訓導
神戶市敎員養成所卒
大阪市南稅務署在勤　和歌山市高松町三三(舊姓上田)藪田覺一

士居米造
亡
岡田傳一
太田駒雄
太田丈夫
尾崎昌與
尾尻茂樹
川口米松
亀石豐太郎
具塚小學校教員
倉野富太郎
山田義雄
山ノ內義雄
山崎譽太郎
增本彦五郎
寺田義一
淺井壽男
淺山良一
崎山俊一
北野忠右衛門
北村四郎
三浦眞龍
白子虎楠
島崎太四郎
森口儀楠
森口源十郎

保田村　家居
亡
鐘淵絹糸工場在勤
兵庫縣武庫郡芦屋中程
日高郡御坊町　呉服商
大阪醫大卒　大阪市西成區東皿池町八二六
醫學博士　市岡難波病院內科
日高郡丹生村　酒造業
大阪市西成區南吉田町五〇
福岡高等學校助敎授
大阪市外今開町
大阪市東區平野町二丁目　第一製藥株式會社
原籍紀三井寺村
陸軍一等軍醫　陸軍幼年學校勤務
亡
大阪府屬健康保險課勤務
湯淺町　呉服商
亡
大阪市東成區關目町二三六
宇治山田市岩淵町二〇一　鳥羽ドック
東牟婁郡九重村　宮相小學校長
湯淺町　木炭陶器商
ブラジルサンパウロ市
南廣村助役
神戶市材木町　神戶木材會社勤務　原籍日高郡西內原

上野山茂
上出重森
野田國隆
(舊姓山本)尾形和七郎
野村良太郎
野尻榮一
栗本良太郎
倉野富太郎
山田實
山田義雄
山ノ內義雄
山崎譽太郎
增本彦五郎
寺田義一
淺井壽男
淺山良一
崎山俊一
北野忠右衛門
北村四郎
三浦眞龍
白子虎楠
島崎太四郎
森口儀楠
森口源十郎

早大文學部(西洋哲學科)卒
縣立橋本高女敎諭伊、橋本町
西牟婁郡近露村字近露
日高郡御坊町　南海信託會社勤務

(舊姓中西)菅田良嶽
杉中俊英
鈴木通太郎

第十回(大正五年度)

湯淺町　呉服商
日本醫專卒　醫師　日高郡由良村
亡
東京市牛込區筑土町一
東京帝大卒　日本勸業銀行在勤
東京市淀橋區柏木四丁目八七六ノ五
東京安田銀行本店在勤　杉並區成宗町一ノ一八
國學院大學卒　中等敎員
神戶市　湯淺竹之助商店內
在大阪　原籍田栖川村田
藤並小學校在勤
亡
亡
和歌山市高松
海草郡加茂村　家居
和歌山市旅籠町　山一洋服店
日高郡御坊町　雜貨文具商
御靈村德田

(舊姓吉田)市間光三
岩崎善良
池永文五郎
畑敏夫
西本文一郎
堀武芳
鳥越豊
土永國男
千川忠雄
大浦慶弘
奥井富一
角谷啓三
吉田章二
(舊姓吉信)勝宗二
田井忠雄
田中清一
塚原亮太郎
中井武一

日高郡西內原小學校在勤
保田村山田原
北海道帝大卒　青森縣廳在勤
大阪市住吉區坂南町中二丁目十五　日本電氣會社員
下關市　會社員
那賀郡中野上村
福岡縣三池中學校敎諭
湯淺町　製材業
木本小學校訓導
岡山醫專卒　日高郡川中村　醫師
大阪市此花區上福島南通
筑島町北湊　天理敎會主
大阪市西淀川區大仁元町二ノ一二
津木小學校訓導
廣小學校訓導

村田市太郎
上山雄次
栗原吉雄
熊谷豊四郎
九鬼彌次郎
(舊名八郎)柳瀨禎一郎
古谷虎武
(舊姓松下)小泉秀夫
小林律夫
(舊名守二)小林弘孟
小林三樹四郎
(舊姓江川)駒谷安次郎

千葉高等圖藝學校卒　司法省矯正院敎官
東京府八王寺市外由井村多摩少年院官舍
海軍機關大尉　軍艦韓崎乘組　呉市下山手町七七
日高郡東內原小學校長　東內原村
東京市外吾妻町　日清紡績會社在勤
海草郡山口村
福岡縣糸島郡波多鄉村西方寺住職
淨土宗西山光明寺派專門學校卒
神戶高商卒名古屋市新出來町株式會社
丸紅商店在勤

兒島武德
寺柚慳德
赤松柳三
阿瀨勘左衛門
左成謙次
佐々木綱雄
崎山一平太
崎山儀雄
(舊姓紀)湯川公
湯川壽
(舊姓花田)水崎信吉

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

亡　湯淺町　宮井正一
日高郡稻原小學校訓導　宮地芳信
亡　和歌山市宇治小學校訓導　塩川傳之助
和歌山市畑屋敷　メリヤス販賣業　（舊姓清水）中島正範
　（舊姓周參見）川邊賢次
　鈴間敏一

第十一回（大正六年度）

大阪市北區善源寺町二ノ七一　井原太郎
三菱海上火災保險會社在勤
大阪市西區土佐堀三丁目五二　（舊姓上田）伊藤傳吉
大日本除虫粉株式會社々員
箕島町　商業　石井幸次
日高郡東内原村　原谷小學校長　原見柳
箕島町　旅館經營　濱地雄吉
亡　濱田增一郎
長崎高商卒　大阪市淡路町三　住友銀行備後町支店員　橋本竹二郎
田殿小學校長　南廣村　長谷隆次郎
城山西小學校訓導　鳥彦太郎
湯淺町　呉服商　土岐清七郎
上海東亞同文書院卒　東京朝日新聞外報部在勤　千原楠藏
東京市中野區櫻山三一　岡本俊一
岡山醫專卒　和歌山赤十字病院在勤　奥山隆雄
日高郡川上村　笠松小學校訓導　大森清治
日高郡三尾村小學校訓導

早大商科卒　東京府荏原郡目黒町字下目黒二八八　渡部直喜
會社員
日高郡比井崎村漁場　（舊姓假谷）中井泰三
亡　龜井定楠
那賀郡西貴志村　樫一雄
大阪市住吉區阪南町西二ノ三四　（舊姓高辻）竹本正光
亡　竹中庄之右衛門
大阪市住吉區南田邊町
大阪天王寺商業學校教諭　（舊姓川口）中田謙藏
陸軍經理學校卒　第四師團司令部　中家眞秀
東京市神田區岩本町交叉點共營ビル　上山輝一
昭和會計事務所
藤並村　商業　梁山美雄
由良小學校訓導　山口丸太郎
德島縣土木課德島工區出張所　山本隆夫
奈良信託株式會社在勤　法學士　古川健六
和歌山無盡株式會社御坊支店在勤　深見隆藏
糸我村　農業　兒島重太郎
湯淺實業專修學校教諭　（舊姓田中）青石近之助
亡　北村正三
那賀郡下神野村　宮井勝衛
那賀郡下神野村　芝崎義一
大阪市西成區粉濱東町四ノ六一　水栁商店方　白井正一

和歌山警察署巡査部長　清水文治
湯淺實業專修學校教諭　（舊姓楠部）廣田權藏
那賀郡小川村　日浦清磨
明大商科卒　南廣村　鈴川文次郎
大阪市東區安土町四ノ三　大阪高商卒　川口淳藏
天王寺商業教諭

第十二回（大正七年度）

神戸市中山手通一丁目二四〇ノ七　五百崎信雄
℅ Furukawa Plantation Co., P. O. Box 154, Davao, Davao, P. I.
亡　糸谷孫一
藤並村　（舊姓林）長岡文一
高千穗高商卒　廣村醬油醸造業　濱口惠琳
峯口小學校訓導　橋本忠一
大阪北稅務署在勤　西澤近一
大阪府佐野町　日本海上保險會社員　栩野幸太郎
大阪松尾鐵骨橋梁株式會社内　千原桑太郎
大阪市西成區櫛通三ノ一五　千川善四郎
熊本醫專卒　日高郡船着村　太田彌四郎
　（舊姓神山）角田彦千代
亡　川口良三
御靈村　僧侶　龜井雲海
京都府立醫大卒　京大醫學部研究室　神山米千代
湯淺郵便局勤務　竹林節一
亡　竹中良次
耐久中學校在勤　武内勝祐
田栖川村　農業　伊達信三
大阪市住吉區田邊本町六丁目　（舊姓入野）土田喜彌太
堺市戎之町東四丁目四二　津守陸太郎
保田小學校訓導　（舊姓名根來齋作）芝崎晃海
大阪市西區千島町一〇五　平野大阪支店在勤　成川好雄
田殿小學校訓導　中井正三
中西英雄
中尾隆一
和歌山市東釘貫町三丁目二　綿布起毛業　中村豐吉
支那河南省鄭州日本綿花株式會社出張所　上松蓊
東亞同文書院卒
濱松高工臨教卒　日方高女教諭　野田眞夫
亡　栗原靜
神戸市兵庫塚本通一ノ五七　栗山吉松
神戸三宮外國郵便局事務員　山中濟
那賀郡中野上村　山本菊太郎
箕島町　醫師　松下英三
亡　前田三省
和歌山市雜賀屋町東之町　藤木儀一
湯淺町　雜貨商　小池爲一
大阪市此花區立堀川　商工專修學校教諭　五島德三
大阪市西區松島小學校訓導　後藤勉
伊都郡橋本町　大正新聞記者　兒島平四郎
箕島町辰ヶ濱　家居

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

天師二部卒　大阪市立貿英商工學校教諭　寺村善助
大阪市住吉區阪南町西三ノ二二　東京帝大大學院　文學士　東　諦
亡　淺井佳澄
那賀郡小川村　西陰地清庵
和高商卒　和歌山日日新聞社長　（舊姓佐原）山崎　稔
塩津村　湯淺町　（舊姓中尾）坂本惣太郎
遞信練習所卒　衣川富治
金澤醫專卒　京大耳鼻科研究　北又知一
亡　木村潮次
海草郡日方町藤白　酒類卸商　三角一郎
南廣村　農業　（舊姓平松）塩崎文治
海草郡岡崎村　森　虎雄
石垣村　家居　森　好熊
森田榮一
三十四銀行湯淺支店在勤　森　直一
大阪市土佐堀三丁目　大日本除虫菊會社在勤　森口一雄
兵庫縣川邊郡小田村杭瀬　森澤五郎

第十三回（大正八年度）

田栖川村　農業　五百崎英雄
湯淺町　印刷業　岩崎　幸
東京帝大經濟部卒　日本勸業銀行在勤　濱口彰太
東京市赤坂區青山南町一ノ四九

鳥屋城村吉田　醫師　橋本光治
東京帝大（農藝化學）卒　朝鮮裡里農林學校教授　橋本峰三
全羅北道裡里仲町五一〇
大阪府岸和田市宮本町　株式會社岸村商店在勤　長谷川蛟
日本火災大阪支店在勤　西本正雄
大阪府北河內郡香里園住宅地　土井正一
和歌山市新通六丁目　醬油販賣業　戸田信一郎
大阪商船會社本社在勤　岡崎義一
海草郡椒村　製網業　岡本雅一
亡　岡本文雄
慶大理財科卒　東京市外大井町原五三五八　相川方　澳　寧二
千葉高等園藝學校卒　宮原村　家居　川口富士太郎
保田村　實業　川口英一
早大卒　保田村　川島壽治
明大專門部卒　在東京　片田正樹
明大卒　兵庫縣芦屋局內打出　田島方　龜井英夫
住友ビル內扶桑海上火災保險會社勤務　田中重治
大阪市外布施町森河內五五二　談儀榮一
和歌山市　津田辰一
在東京　津村慶四郎
海軍機關學校卒　驅逐艦呉竹乘組馬公要港部　津守周二郎
亡　中村新一
海草郡楠見村　中東七郎
亡　久保貞次郎
湯淺町

亡　桑原榮之助
廣島文理科大學數學教室　楠部善二郎
京都帝大卒　深見芳雄
日高郡由良村畑小學校長　藤本幸太郎
湯淺町　酒類販賣業　小賀久七
小學校訓導　小谷旭
那賀郡龍門村　小玉一敏
早稻田大學（高師）卒　小山賢太郎
松山市蓼與町一九八　愛媛師範教諭　江藤俊雄
和歌山市黑田町八二　芦村辛太郎
南廣村　農業　崎山政千代
和歌山市北ノ新地町　佐々木武雄
大阪北稅務署在勤　和歌山市上野町二ノ四（舊姓宮崎）神太廟國廣
湯淺町　酒類販賣業　塩崎榮一
東京商大卒　大阪三十四銀行船場支店在勤　島田有吉
大阪市住吉區山阪町二二號
早大商科卒　東京市外日暮里渡邊町一四〇前島方　島田孝逸
隅田川合同運送店在勤
亡　東端善一郎

第十四回（大正九年度）

湯淺信用組合在勤　岩崎　茂
和師二部卒　箕島商業學校教諭　箕島町　岩崎茂助
亡　岩本正宣
東京美術學校卒　東京市中野區中野町城山五五　池田幸太郎

湯川村小學校訓導　日高郡由良村　原　胤承
三十四銀行湯淺支店在勤　原　太市
東京美術學校卒　東京市品川區上大崎一ノ五二五　花田　實
大阪市北區曾根崎小學校訓導　林　政一
宮原村　農業　林　茂夫
金澤高工電氣科卒　石垣村松原　（舊姓新田）鈴木芳藏
南水第三發電所在勤　同社宅
和歌山市三木町　金機業　西田林造
神戸市港區馬場町二三四ノ三　神戸郵便局在勤　西廣健一
和歌山市砂山町　和歌山新北小學校訓導　（舊姓青木）土肥定吉
南廣小學校訓導　（舊姓岡谷）稻內譽彌一
亡　小浦勇吉
日高郡比井崎村小學校訓導　大出彌次郎
大阪市西區土佐堀郵便局　小澤又一
明大卒　日高郡藤田村　家居　（舊姓尾尻）山本貞一
札幌市南八條西六丁目　電信局在勤　（舊姓渡部）眞過辰男
遞信官吏練習所卒
島屋城小學校訓導　加賀喜代楠
神戸市榮町二ノ二九　（舊姓龜井）玉田竹三
島屋城村　農業　吉田和夫
保田村　良田勢示
大阪高商卒　大阪天王寺商業教諭　谷口陸之助
湯淺町　橘保藏
東京藥專卒　千葉縣市川町三丁目　高尾英三
和歌山市中ノ店　雜貨商　（舊姓高垣）南方貞雄

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

亡
海草郡加茂村　材木商　竹添治武
大崎東部小學校訓導　中尾藤楠
亡
立命館大學卒　上野惠次
大阪府豐能郡箕面村平尾　小學校敎員　上野山延太郎
箕島小學校訓導　上出好助
丹生小學校訓導　馬部猪三郎
糸我村　農業　梅原勝藏
亡
札幌農大卒　北海道拓殖銀行在勤　栗生一男
大阪高工卒　大阪瓦斯會社在勤　桑原利三郎
京都帝大卒　楠山直吉
明治大學自治科卒　宮原村　農業　山下勉
德島縣板野郡松坂村　（舊姓矢船）生駒良二　山本倫雄
大阪歯專卒　志賀村　扶川雄志　山本辰雄
日高郡三尾小學校訓導　深見武雄
亡
中央大學專門部法科卒　日、衣奈村三尾川　小玉勝
明大商科卒田村取引所支店長　臺中橋町三丁目三　寺井幸雄
海草郡川永村川逸　里地喜平
湯淺町別所　農業　佐々木茂綱
大阪高商卒　北川政量
大連市但馬町　藥局　關西大學法經科卒　（舊姓宮井）小寺幸吉　北村櫨藏
亡　木村總一郎

第十五回（大正十年度）

東京市外上大崎三三　東京帝大眞鍋內科在勤　醫學士　宮田誠雄
南滿洲鐵道會社在勤　塩崎計藏
大阪市南區桃園第二小學校訓導　下野豊
東京帝大農學部實科卒　府農事試驗地勤務　平松文一
那賀郡安樂川村　森田重雄
日高郡矢田村土生　三十四銀行御坊支店員　瀨戸勇治
愛媛縣松山市海南新報社々員　五百崎謙治
熊本藥專卒　大阪市東淀川區本所川崎町　岩崎爲吉
田邊製藥所勤務
鳥屋城村　農業　岩本甫親
箕島町　田中肥料店　井上貞二郎
關西大學英法科在學　池本彌太郎
和歌山檢事局監督書記心得　原敬二
津木小學校訓導　畠山信一
日高郡比井小學校訓導　日、比井崎村　林宗治郎
箕島町　米穀商　醬油釀造業　（舊姓橋本）渡邊義明
白崎村　白崎小學校在勤　西端喜兵衛
鳥屋城村　家居　西本嘉治
亡　西本明恵
大阪高商卒　三井生命保險會社和歌山出張所長　堀川慶次郎
自宅　和歌山市屋形町一ノ八　岡三良
日高郡矢田村　小學校敎員

朝鮮清津　岡本常次郎方　岡本信雄
廣小學校訓導　大野久吉
京大經濟科卒　川瀨貞三
京都市岡崎東天王寺町　拓殖吉方　良田秀觀
日高郡川中村田尻　役場在勤　（舊姓寺杣）龍門貞二郎
石垣村吉原　農業　高垣八三
京大（哲學）卒　京都師範學校囑託　玉置修
京都市下鴨芝本町二八
京阪電氣鐵道株式會社和歌山支店在勤　竹內精治
小學校敎員　日高郡西內原村　土崎享
早大卒　和歌山署巡査　辻岡永治
亡　中井孝太郎
大阪高商卒　（舊姓中西）前田芳雄
關西學院高等商業部卒　三菱銀行大阪支店　中太郎
保田村星尾　宇野和夫
田栖川村小學校訓導　（舊姓上田）前田唯市
生石村　家居　上中馨一
大阪高商在學　栗原道一
土木建築請負業小川組專屬物品販賣業　（舊名喜一郎藏）野喜介
西牟婁郡田邊町元町　楠正治
松山高校卒業　勝丸誠兒
大阪市港區市岡第一小學校訓導　山本信量
神戸高商卒　日本動產火災保險會社朝鮮支店在勤　松下克巳
朝鮮慶尙南道咸陽郡咸陽　雜貨商　古川一夫
保田村　實業

日高郡稻原村　南谷小學校訓導　藤谷義一
國學院大學卒　東京市牛込區二十騎町二九　小山元一
明大卒　大阪市西區新町南通三丁目二〇　薦池勝藏
小浦喜多次商店內
亡　赤松圭三
北滿洲哈爾賓日露協會學校卒　湯淺町　淺井保
大阪市天王寺區石ヶ辻町一五三一九　朝山彰
神戸高商卒　鴻池信託會社本店勤務　北裏好之助
西ノ宮市產所町一七　湯川信
大阪外國語學校卒　湯田祥二
熊本五高等理科乙部卒　島屋城村　三原喜代一
鳥屋城小學校訓導　三輪義夫
神戸高等商船學校卒　國際汽船會社スエズ丸乘組　南秀一
早大專門部卒　保田村　御前正夫
和歌山高商卒　三重合同電氣會社紀南營業所在勤　椎崎最三
日、和田村
亡　森長三郎
海草郡日方町　丸通運送店勤務　瀨見武平
鈴川由松

第十六回（大正十一年度）

關西大學卒　大阪東區北久太郎町　井原龍雄
勤務　大阪市西淀川區塚本町七五六　大六株式會社　鈴木秀一方
湯淺町　呉服商　市間敏
日高郡由良村綱代　實業　岩崎亮

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

日大法律卒　オールガイド社支配人　（舊姓田淵）石川雄三
湯淺町
京大法科卒　大阪商大助教授　大阪市天王寺
烏ケ辻　大阪商大法律學研究室　湯淺町
宮原村　實業　原龍之助
關西學院英文學部卒　湯淺實業專修學校教諭　橋爪俊夫
湯淺町　助役　丹羽一男
有田高女教諭　早大高等師範部英文科卒　御霊村　堀本隆次郎
糸我小學校訓導　（舊姓川口）清水五郎　川口洋　栩野常次郎
宮原村　保險會社員　片山楠次郎
東京高工卒　朝鮮咸北明川郡西面　朝鮮窒素肥料會社　狩野辰雄
鳥屋城村　實業　吉田憲治
神戸市外西灘村原田北開地二三二ノ二　吉田健吉
神戸小學校訓導
廣村　戸田保太郎方勤務　田端英三郎
廣小學校訓導　湯淺町　田邊善一
東京帝大法科卒　京都市醫師會
京都市左京區下鴨下川原町三二　田口愼男
箕島町　家居　中西義夫
那賀郡東野上町　野上興業銀行支店長　豫備陸軍少尉　中谷哲三
師範二部卒　小學校訓導　宇和島太郎
湯淺町　實業　（舊姓宇野）平田信夫
朝鮮江原道春川郡川面大板里春川公立普通學校訓導　野原茂八
廣島高師理科卒　大阪府富田林中學校教諭　栗生功
日高郡丹生村　齒科醫　栗本武八郎

第十七回（大正十二年度）

早大英文科卒　廣村　飯沼仁一
東牟婁郡大島村　岩谷勢次
湯淺小學校訓導　廣村　岩崎功
東京市日本橋區小網町一ノ五　小松穐紙商店員　岩崎圭次
R.F.D. Box914, Ashlan dave, San Lorenzo, Calif U.S.A.　岩崎厚
湯淺町　吳服商　畑榮一
箕島町大字野　農業　秦博
新宮商業教諭　原三郎
田栖川村　家居　林善英
亡　林高二
京都同志社大學高商部卒　大阪市西區新町　橋爪和夫
南通一ノ一　橋爪正弘方
大阪市浪速區惠比須町二ノ九六　（舊姓道津）水島竹雄
金光教惠比須教會長
東京帝大卒　東京府廳社會課　土岐安一
亡　岡野正文
立命館大學法經部在學　京都府廳庶務課在勤　岡本泰次
京都市上京區油小路通中立賣上ル西側　渡部光彦
陸士卒　高知歩兵四四聯隊本部歩兵中尉　川口篤藏
和歌山高商卒　神戸市中山手町七ノ三三　三菱銀行在勤　川島悌三郎
長崎醫大卒　海軍々醫學校勤務　海軍々醫中尉　金野敏雄
大阪藥專卒　大阪市東淀川區國次町　谷口義孝
小谷藥局
廣島高師教育科卒　大阪市市岡第三小學校
大阪市音羽町一〇ノ三　奥野竹八方

富山藥專卒　大阪市港區三崎町四丁目　垣內良雄
石川ペイント製造所在勤　高垣昇
東京府下赤羽町稻附　高垣甚之助方　玉置洋治
彦根高商卒　三十四銀行和歌山支店　武內政千代
藤並村　家居　武內修巳
藤並村收入役　津村英二
和田村小學校訓導　日高郡志賀村　中西孝一
海草郡加茂村　村上義人
九州帝大法科卒　日高郡船着村　（舊姓上山）片山厚治
大阪府泉北郡北松江小學校訓導　栗原佳一
國學院大學卒　和歌山工業學校教諭　（舊姓栗原）塩路竹次郎
和歌山高商卒
御坊町白濱自動車會社在勤　久保田四郎
南廣小學校訓導　山際義雄
大阪外語卒　粉河中學校教諭　山本清一
大阪市住吉區我彌子町　依羅小學校訓導　藪信夫
那賀郡東野上町　曲里周三
那賀郡東野上町　信用組合在勤　松下順郎
亡　松田三七彦
日高郡藤田村　實業　小池啓二郎
亡　古久保省三
金座郵便局長　鳥屋城村　小槻正司
東京帝大理科卒　海軍航空廠發動機部　永廣武信
神奈川縣久良岐郡六浦莊村三分　福島方　青石喜一郎
廣村　醬油釀造業

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

和歌山市鷹匠町　高橋世志男方
關西工業專修學校卒
東京醫專卒　和歌山赤十字病院小兒科在勤
印南小學校訓導　日高郡東內原村
御坊町　酒造業
廣島文理大卒　富山縣魚津高女教諭
慶大醫科卒　濟生病院研究生
東京目黑區上目黑二　日逢家方
和歌山高商前　齒科醫
明治大學商科專門部卒　湯淺町
那賀郡上神野村　和歌山高商卒
和歌山市畑屋敷東ノ丁
海草郡仁義村
藤並村　商業
湯淺稅務署在勤

赤桐榮一
朝間金由
佐藤泰造
坂本雄馬
北野比呂吉
北村七三雄
木村稔
木下彥平
湯淺清
南準次
（舊姓宮井）田中美澄
宮本米一郎
平林芳之助
鈴木省一

第十八回（大正十三年度）

宮原村　農業
大阪稅務署監督局計理部在勤
大阪天王寺師範卒　橿窖市神奈川區六角橋
池ノ下一〇六　淺野和三郎方
大阪府泉南郡
鳥屋城村　醬油釀造業
箕島町　農業

伊藤勇三
池下寅夫
生駒謙三
（舊姓石井）三宅秀彥
石井純治
石井慶吉
牲川唯信

早大法科卒　藤並村
和歌山高商卒　金英除虫菊會社事務
和歌山高商卒　在滿洲
昭和醫專卒　警視廳防疫課　東京府荏原區
中延町三五六　小川百郎方
日高郡三尾川小學校在勤
龍谷大學卒
日高郡切目村
亡
和歌山高商卒　大阪高島屋經理部
奈良縣北葛城郡高田町片塩町南通
箕島小學校訓導
田殿村　農
亡
大阪市西成區粉濱中ノ丁　上田平四郎方
酒醋醬油販賣業
田栖川小學校訓導
湯淺町　醬油釀造業
五西月村　實業
大阪高等醫專卒　善通寺衛戍病院付　陸軍三等軍醫
生石村　大丸神戶支店在勤
早大商科卒　大阪市泉南郡春木町
東洋帆布株式會社在勤
藤並村　農業
東京帝大農學部實科卒　耐久中學校教諭

堀好澄
戶田保次郎
千川清吉
小川道郎
川原種松
川口了義
勝本保郎
狩野三郎
笠谷修
垣內秀楠
梶原潔
吉信利雄
高垣宏
谷英一
田中信一
玉川政雄
（舊姓武田）戶津井善男
津木種次
成川保夫
上中利雄
上山武夫
野田義雄
野田彰

宮原小學校訓導　岩倉村渠生
和歌山縣廳會計課
亡
國學院大學卒　靜岡縣豆陽中學校教諭
廣島高師臨教卒　德島女子師範教諭
德島市前川町一番地　岡田重吉方
東京帝大工學部卒　福岡縣大牟田市
三井鑛山株式會社三池製鍊所
八幡小學校訓導
宮原小學校在勤　田殿村
關西工業專修學校在學
東京齒科醫專卒　和歌山市新通四丁目一一五
宮原村
化粧品製造販賣業
和歌山高商卒　日本生命保險和歌山出張所
西牟婁郡秋津川小學校訓導
日高郡南部小學校訓導
田殿村　農業
大阪市土佐堀大日本除虫菊株式會社
福井高工卒　五西村　實業
東京帝大法科卒　日本徵兵保險會社勤務
東京市本鄉區駒川町一三五　群芳館方
和歌山區裁判所岩出出張所在勤　那賀郡岩出町
粟生小學校訓導　岩倉村川口
湯淺小學校訓導

久保靜雄
柳淵稔
山本熊三
山本哲夫
松坂末三
松下一夫
松本正信
前田敏夫
愛川滋
明樂通雄
澤崎源一
坂口源六
岸上英一
（舊姓三橋）中井常藏
水崎正美
御前重忠
三角德藏
近藤儀一
塩路正夫
平林福壽
森芳雄

和歌山高商卒
家居　農
和歌山縣廳統計課

第十九回（大正十四年度）

田殿村井口　呉服商
田殿村船坂　農業
湯淺稅務署在勤
在　大阪　東京帝大工科卒　福岡縣八女郡矢部村
鯛生金鑛業所內
湯淺町　肥料商
湯淺町　精米業
山田小學校在勤　湯淺町濱町
東京法政大學卒　家居
箕島小學校訓導　和師專攻科卒　御靈村
亡
湯淺町
箕島町　家居
日高郡松原小學校在勤　（舊姓田中）土橋義三郎
明大卒　和歌山市三木町南ノ丁
湯淺町　精米業
東京帝大醫學部在學　東京市本鄉區蓬萊町七
中原幸方

栖原慶一
佐原濟
森田俊一郎

岩倉勳
岩倉善一
和泉繁一
西林精一
堀川正三
堀田儁三
栩野伸二
小川鶴雄
岡本豐
川口誠一郎
川靖太郎
片田三郎
籠谷耀雄
米富弼敏
龍田馨

竹林重夫
竹內長次

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

大阪市港區南恩加島町　河南泰弘方　土田正之
日大卒　生石村　中西啓二
城山村二川　中幸一
湯淺　町　中四郎
岐阜鐵道建設事務所在勤　（舊姓浦野）三橋敏郎
藤並村土生　和師二部卒　湯淺小學校訓導　野田四十一郎
廣村　幸福無盡株式會社湯淺出張所　黒津武雄
藤並村　農業　山下富三
藤並村　農業　山下定胤
湯淺町　醬油釀造業　前中秀雄
御靈村　津木小學校在勤　津木村　古垣內宮次
日本大學專門學校在學　五西月村　福井四郎
八幡小學校訓導　五西月村　藤田良一
明大卒　日高郡由良村　藤本俊雄
在大阪　湯淺町　兒島庄吉
神戸高等商船學校在學　廣村　江川隆造
下津港商船會社扱店勤務　赤村義明
大阪藥專卒　田邊町　赤山清
神戸市林田區大塚町三丁目二四　天羽龍三
亡　阿瀨昭夫
和歌山高商卒　生命保險會社員　藤並村　坂井健次
亡　崎山宇一
亡　北野泰吉
廣小學校訓導　御靈村　木村利郎

一七〇

東京美術學校在學　東京府下赤羽町　木下繁
高垣甚之助方　帝展三ケ年入選
在大阪　生石村　木下式夫
日高郡衣奈村　家居　御影常二郎
湯淺町　醬油釀造業　水野吉太郎
藤並小學校訓導　糸我村　宮本清太郎
亡　茂野篤雄
內海紡績廣分工場在勤　下出源之助
日高郡衣奈村　兼辦文具商　東濱數雄
京大法科卒　東京日友ビル內扶桑海上火災保險會社　東　常夫
東京市目黒區中根町一、八〇二　吉原與方
大阪市住吉區住吉町三一七　和高商卒
大阪市屠燈草輸出業株式會社中和公司　（舊姓菅澤）角　督
津木村　菅澤正二
和高商卒　湯淺實業專修學校在勤　生石村　杉田武治
和歌山高商卒　濱松市立商業學校在勤　杉本秋男
大阪輜重兵第四大隊本部　曾我貢

第二十回（昭和元年度）

田震村舟坂　岩倉善治
應取鐵道工場勤務　岩崎寛美
日高部白崎村神谷　岩崎喜美
名古屋高工卒　和歌山縣廳土木課　池永一夫
大阪歩兵八聯隊七中隊幹部候補生　井原良治
宮原村役場在勤　生駒敬行

鳥屋城村小川　服部恭二
天王寺師範卒　大阪府泉南郡靱濶小學校在勤　原野操
自宅　湊輪村　早田常一郎
城山村二川　堀美雄
御靈村德田　坊岡富士夫
日高郡由良村　慈惠醫大　法眼晉作
東京帝大法科在學　東京市豊島區池袋三ノ一五六一　細平利雄
佐藤方　戸田正男
堺大濱大阪國道改良事務所　大橋榮一
早大卒　金英餘虫菊會社在勤　廣村　岡本泰二
田殿小學校訓導　小川誠一
在大阪　五西月村　岡善一
慶應義塾大學中退　湯淺町道町　化粧品商　（舊姓岡田）內原員雄
和歌山高商卒　東京市京橋區銀座二　若林良一
大同洋紙店東京支店在勤　加辻喜一
和歌山市小松原通一丁目　金森病院內　柏角治
和歌山市雜賀町東ノ丁一五　太田伊三武
鳥屋城小學校　川島武夫
日高郡由良村小學校在勤　片山進
南廣村東中　勝丸重雄
保田村辻堂　依岡敬藏
和歌山市紀陽織布會社在勤　吉田義男
東京市四谷區愛ケ岳町一二　木場貞二郎方
大阪商船會社支店　らぶらた丸

糸我村　農　（舊姓瀧川）山崎久男
山口縣　竹中一雄
南廣村東中　竹中正利
法政大學卒　在東京　竹林於菟三
廣村田町　中井長二
五郷小學校訓導　五村　中橋清
湯淺町　紙類及印刷業　中野作之助
東京外國語學校　永岡敬一
大阪府中河內郡長瀨村柏田八五　村山太郎
大軌電鐵經電所在勤　楠間隆男
東京市小石川區水道端　文明社　栗山賢瑞
南廣村山本　光明寺　山本宛
東京明大卒　東京市品川區品川町四丁目七一八　保田重藏
山本雄次郎方　矢船康之
城山高校在學　山田良吉
亡　山田嘉夫
湯淺町　肥料商　松田高大
大阪藥專卒　大阪市東區京橋三丁目　松田坦彌
內務省大阪衛生試驗所檢明部　（舊姓名丸畑半徵）濱口隆
在　朝鮮　福本孝一
城山西小學校在勤　古川高雄
早大卒　湯淺町御藏町　小槇廣
日高郡比井崎村小浦　
八幡村　
湯淺町中川原　
八、五、一五、亡

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

西牟婁郡周參見小學校在勤　小阪正治
大阪市南區瓦町五ノ四四　山本履物店　榎地幸次郎
東京外國語學校卒　在東京　朝倉一彦
八幡村清水　宵石正巳
京都佛專卒　湯淺町山田法湖寺　赤松智良
姬路市福島紡績會社在勤　保田村　佐原靜
和歌山師範專攻科卒　保田小學校訓導　崎山省三
和歌山市新南小學校訓導　衣川太郎
藤並村奥　木根陽三
和歌山紡績會社箕島分工場在勤　三浦榮一
藤並村天滿　南出一男
九州齒科醫專在學中　福岡市吉塚町七丁目　平林久一
大津慈雄方

第二十一回（昭和二年度）

濱松高工臨教卒　大阪府中河內郡枚岡小學校在勤　石橋恒孝
東京工業大學在學　田栖川村吉川　生駒一郎
田殿村井口　吳服商　岩倉正信
和歌山第六十一聯隊機關銃隊分隊長　石垣村吉原　射場悠三
東京醫專卒　東京市牛込區市ヶ谷臺町一〇　岩崎哲雄
久野病院在勤　井原康隆
京城醫專在學　日高川上村淺間　井原正雄
大阪市西區北堀江一番町　土岐吉之助
日高郡和田村　大原愛弘

和歌山高商卒　生石村六川
和歌山市元寺町二丁目三　春日家方
和歌山市役所在勤　湯淺町
龍谷大學本科在學　御靈村吉見
御靈青年團長　保田村山田原
保田村山田原　宮原村南
御靈村西丹生國　武藏野音樂學校在學
御靈村庄？　國立音樂學校在學中
湯淺町　醬油釀造業　有田郡聯合青年團幹事長
八幡村沼　家居
田殿村上中島　早大師範部國漢科在學
日大電氣科卒　田殿村
和師二部卒　修理川小學校訓導
和歌山市元寺町二丁目　春日家方　和歌山市役所勤務
早大法科在學　日高郡衣奈村衣奈
大阪帝大醫學部病理學專攻生
大阪市東成區片江町二四四　佐野藤作方　（舊姓高辻）
日高郡由良村　家居
大阪輜重兵第四大隊付軍曹
早大法科在學　廣村
和歌山師範二部卒　田栖川小學校訓導
和歌山地方裁判所檢事局在勤　田栖川
英領カナダ、バンクバー

大前保一
大畑武夫
牲川友惇
沖野弘
川口清
川口武夫
川口猛
龜井稻棄
鎌田弼一郎
片汪
片田盛次
吉田耕一
吉田正作
川中榮一
田邊盛雄
田中和夫
谷口繁雄
脊我貢
津野勤次郎
中野貞雄
中瀨孝一
村上磐司夫

大阪天王寺師範卒　御靈村德田
大阪市東成區鴫橋北ノ町一丁目五五八ノ二　醬油商　上田好雄
和歌山郵便局勤務　鳥屋城村　上門勇
同志社大學政治科在學　津木村　上田長次
保田村千田　家居　栗田信一
大阪外國語學校卒　湯淺町　上野山佐一
松江高校卒　關西大學在學　湯淺町　久保敏夫
國學院大學歷史科在學　保田村　山本正雄
大阪市西淀川區御町三八八　小賀建樹
早大英法科在學　東京市外野方町新井裏　糸我村　小林完
西牟婁郡日置町　家居　兒島藤松
立大文學部在學　東京市豐島區池袋　江川貫雄
聖公會神學院寄宿舍　有近康男
和歌山高商卒　在京都　鳥屋城村小川　戶田幸一
廣島高師卒　田殿村尾中　大南正雄
佐賀高校卒　岡山醫大在學　湯淺町　奥井實穗
南滿洲撫順西公園　本願寺出張所　教誨師　湯田富藏
師範二部卒　安諦小學校訓導　光定道穗
廣島高師卒　田殿村尾中　宮代英治郎
佐賀高校卒　岡山醫大在學　湯淺町　岡本顯潤
南滿洲撫順西公園　本願寺出張所　教誨師　勝丸久視
師範二部卒　安諦小學校訓導　川原眞一
師範二部卒　御靈小學校訓導　川村房一
藤並村水尻　東海道線吹田驛在勤　柏繁夫
大阪府布施町　九州齒科醫專在學　海瀨伊三郎
日高郡衣奈村衣奈　實業　吉田正晴
五西月村西ヶ峯　吉信正彥
明大專門部商科卒　湯淺町　武內英德

岩崎晃
岩崎克巳
生駒麟兒
板谷義信
岩橋之夫
花田憲司
橋本孝一
馬上秀雄
二澤忠雄
堀江保夫
戶田幸一
大南正雄
奥井實穗
岡本顯潤
勝丸久視
川原眞一
川村房一
柏繁夫
海瀨伊三郎
吉田正晴
吉信正彥
武內英德

第二十二回（昭和三年度）

藤並村植野
御靈村東丹生國
在朝鮮
藤並村岡田　農業
亡
師範二部卒　田殿小學校訓導
和歌山高商卒　有田鐵道會社在勤
和歌山郵便局在勤　御靈村庄
田殿村田口　農業
八幡村清水　農業
日高郡衣奈村　農業
鳥屋城村長谷川　實業
湯淺町　不動銀行在勤
關西大學在學
師範二部卒　御靈小學校訓導
八幡村室川
大阪天王寺師範卒
和歌山高商卒　和歌山市島崎　町山田隆方
岩倉村谷小學校在勤
東京陸軍士官學校
八幡小學校訓導
東京高師理科卒
高知市永國寺町六四五　武田方
高知第二高女教諭

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

藤並小學校訓導
津木村上津木　小島方
和歌山市小野町二
和歌山地方裁判所檢事局在勤　瀧野　功
大阪市北區大工町　久徳幸一商店在勤　竹林昌夫
日本大學醫學部在學　田殿村田口　農業　竹中廸雄
縣廳度量衡課　竹中一雄
神戸市脇ノ濱三丁目　日本香料藥品株式會社在勤　立垣善治
京都帝大法科在學　田中長治
埼玉縣文書課　浦和町鹿島鑒落合利助方　津木周夫
生石村糸野　農業　中島英夫
湯淺町　製材業　中西英三
鳥屋城村　山保自動車部內　永岡健二
大阪府下泉南郡貝塚町小學校訓導　室　忠雄
德島高工土木科卒　在和歌山　上野山福雄
田栖川村栖原　信用組合在勤　上田貞義
東京高師專門學校在學　東京市外世田ヶ谷町　上山榮一
下北澤七三五　沖田方　野田省吾
日高郡白崎村吹井　埜崎榮治
師範二部卒　糸我小學校訓導　楠山茂彦
早大英文科在學　東京市牛込區戸塚町諏訪二五　松野常夫
有隣舍
大阪市東成區南正道町四丁目　鐘巻良一方　藤原幸一
三重縣鈴鹿郡關町　小石川七右衛門貢
關西大學在學　御靈村　小林

廣村田町　醬油袋及綿木綿製織業　寺柚政雄
藤並村土生　坂井　清
石垣村吉原　佐々木廣海
早大英文科在學　木村弘二
上海市內外綿株式會社在勤　宮井健三
內海紡織尾崎工場勤務　大阪府泉南郡尾崎村福島　宮井政一
湯淺町　南海水力電氣會社出張所在勤　宮井新一
京都帝大法科在學　三尾新次郎
海草郡黑江町船尾　漆器問屋　（舊姓其島）竹中榮太郎
高知高等學校在學　東　祐次
鳥屋城村市場　農業　川村雄三
早大專門部在學　田淵正二
南廣村西廣　農業　前川榮一
湯淺町　金野顯

第二十三回（昭和四年度）

御坊小學校訓導　田殿村　生駒正夫
大阪府下佐野町　第一小學校訓導　岩崎順亮
鳥屋城村　岩本利
藤並小學校訓導　田殿村　花田武夫
裁判所書記　和歌山市大井戸町　吉田富四郎方　馬上靜夫
廣村　米穀商　林　昌治
京都醫大在學　大阪市西成區東田町三九　岡本彿一
日高川上村熊ノ鄕

宮原村南　川口次郎方
田殿村　家居　岡山昌一
東京高等蠶糸學校在學　湯淺町　尾上繁一
湯淺町山田三一四　農業　太田修次
通信事務員　天下茶屋郵便局在勤　大谷福一郎
大阪市南區難波新地三番町四七　太家靜一
生石村下六川　農業　岡本左右之助
明大商科在學　御靈村　小澤胤一
田栖川村　農業　嘉成一郎
東京高師文科第一部在學　片山清一
東京高師桐花寮第三寮室　柏保
和師二部在學　湯淺町　企森喜一郎
田栖川小學校訓導　田栖川村　川島眞次
大阪高等醫學專門學校在學　保田村　川口武次
御靈村　農業　河合信夫
大阪市東區博勞町二　八田齋助方勤務　武田武文
大阪遞信講習所卒　御靈村庄　高垣文次
石垣村吉原　農業　竹林遞平
湯淺町　家居　辻　稔
大阪無線電信電話學校卒　大同電氣株式會社
大阪出張所勤務　大阪市西區京町堀上通一丁目
二五　工藤芳雄方
明大商科在學　湯淺町　津浦榮藏
明大專門部在學　五西月村　上岡軍太
藤並村下津野　家居　上山秀造
京都四山專門學校在學　京都市外向日町島阪　野村正彦
植田末吉方

金澤市川岸町三六　金澤醫大藥學部在學　久保吉正
尼ヶ崎第二小學校訓導　南廣村　久保田謙二
湯淺町　楠井雄二郎
東京高齒在學　（舊姓熊取）竹中　昇
藤並村高瀨　實業　栗栖政雄
筧島町　家居　桑田隆雄
樺太豐原町西四條南十丁目　柳本規吾方　漁業　柳本芳樹
早大露文科在學　湯淺町　柳谷新次
日本大學建築科在學　藪內庄三郎
大阪府日新小學校訓導　生石村　柳瀨喜一
和歌山市東長町六丁目ライオン藥局勤務　湯淺町　前田茂一
大阪市博勞町四丁目　萬年久平商店方　田栖川村　前田榮治
田殿村井ノ口　松下瑞澄
西山派專門學校在學　湯淺町　決得武俊
大阪高等醫學專門學校在學　保田村　古川光雄
秋田鐵山學校在學　湯淺町　兒玉昇
高野山蓮花院　日高郡川上村　小石川三郎
三重縣鈴鹿郡關町中丁四八　實業　小山秀雄
東京高工卒　岩手縣廳土木課勤務　廣村　出口弘
京都高等工藝學校在學　廣村　朝山章次
大阪高校在學　湯淺町　淺井幸男
關西大學商業學科卒　大阪中央市場飲食業株式會社　赤桐光次
大阪市北區梅ヶ枝町五六　形岡敬三郎方　淺野正次
日本大學齒科在學　東京市麹町區三番町二五
牧齒科醫院內　湯淺町
三十四銀行湯淺支店勤務　湯淺町

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

京都高等蠶糸學校在學　石垣村
龍谷大學在學　大阪市北區澤上江町九ノ一五
雜賀貞淨方
東京高師在學　東京市豊島區西巣鴨一丁目
三四五六番地　千葉友治郎方
御靈村德田　實業
岩倉村岩野川　家居
亡
明大商科在學　湯淺町
神戸高等商船學校在學
藤並村　家居
藤並村　農業
那賀郡岩出町　家居
湯淺町　醬油釀造業
三重高等農林農學科在學　生石村
三重縣河藝郡栗真村町屋　別府モト方
岩倉村川口　實業
湯淺町　實業
池田師範二部卒　石垣村
大阪市西區靱上通　佐々木營業部內　津木村
八幡村三田　上田崇敬方

第二十四回（昭和五年度）

日高郡由良村
生石村　實業
宮原村

佐々木重邦
雜賀武夫
北山俊夫
木村正治
木村正義
木下和夫
湯淺　孝
宮本義一
宮地一正
三輪三四郎
斯波忠男
神人惣一
東　勇
平林　章
東　正二
森田恒楠
菅澤百四季
杉原敏雄

京都武德專門學校在學　糸我村
南廣村　實業
龍谷大學專門部在學　京都市下京區油小路二
八條上ル　武輪嘉一郎方
京都高等工藝學校在學　鳥屋城村
大阪市此花區下福島　大日本紡績會社在勤
池田師範二部在學　生石村
湯淺町　實業
帝國軍艦淺間第一分隊
大阪市浪速區敷津町一〇七　辻仁佐藏商店勤務
湯淺町
大阪市天王寺區下寺町二丁目　奥田治三郎方　湯淺町
大阪府南河內郡金田村騎兵第四聯隊第一中隊第三班
大阪齒科醫專在學　田殿村
東京專修大學專門部（商業）在學　東京市本鄉區
森川町一〇二　前田致遠方
宮原村信用組合在勤
大阪市北區浮田町　高岡食料品容器問屋在勤
日高郡印南町
關西大學法科在學　御靈村
宮原村
第四高等學校理科在學
關西大學專門部商科在學　廣村
廣　村
湯淺町　實業
京都西山派佛專在學　御靈村

生馬士郎
池永　勇
板原　明
井原湍雄
石井光彦
林　清三
橋本隆太郎
秦　一彥
西岡一郎
堀川　清
栩野善一郎
乙井憲三
大橋紀男
大南章雄
澳　正二
川口譽三
加藤綱夫
龜井岩鶴
川口久光
吉信　章
橘　寛
竹中和夫
谷本敏男
筒井常夫

湯淺町　染物業
湯淺町　家居
藤並村　家居
和歌山自動車學校卒　湯淺町
城山村
和歌山高商在學　湯淺町
師範二部卒　藤並小學校訓導
日高郡川上村
大阪市浪速區惠美須町四丁目
內外醫藥研究所內　岩倉村
廣　村
橫濱專門學校在學　廣村
富山藥專在學　湯淺町
神戸市須磨區太田町一丁目六七　前田松藏方　廣村
京都西山派佛專在學　印南町
大阪醫專在學　田殿村
田殿村　步兵第六一聯隊幹部候補生
南廣村　實業
海草郡宮前村手平
生石村　家居
田殿村　實業
八高在學　海草郡和田村
池田師範二部在學　保田村
糸我村　家居
湯淺町

長尾　勇
中井豊隆
中山常夫
長尾強二
上田藤一郎
上山宗男
上田律二
宇根利平
上田常七
野原得三
栗山武夫
栗原保省三
叢　良親
矢船良彦
矢船良視
山本政一
山本憲一
保井　清
前田正英
藤野貢
福田義三
兒島五郎
小原孝一

在大阪　保田村
湯淺稅務署在勤　湯淺町
第一高等學校理科在學　東京市本鄉區
向岡同校北寮八番
仙臺高校電氣工學科在學　岩倉村
和歌山高商在學　廣村
早大理工科在學　宮原村
日高郡由良村
大阪市天王寺區石ヶ辻七九　矢部岩次郎方　湯淺町
田栖川村　實業
湯淺町　家居
田殿村　家居
御靈村　實業
湯淺町
由良村畑　家居
城山村　實業
石垣村
湯淺町　實業
京都佛教專門學校在學　京都市上京區新町通
一條上ル　中原政次郎方

第二十五回（昭和六年度）

西山派佛教專門學校在學　同校寄宿舍
御靈村
浪華高商在學　安諦村

小賀宗一
近藤　誠
酒井千秋
坂上包二
崎山林一
澤崎憲一
笹裏昂
筏原正吉
北村茂
北野實
水崎四郎
南　照雄
水野信次
庄司芳藏
東　榮一
森田和夫
關根正清
菅原一敏

伊藤　稔
岩崎敬二
早野亮平

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

日高郡由良村
箕島町
富山藥專在學　日高郡衣奈村
湯淺町
御靈村
西山佛教專門學校在學　海、濱中村
八幡村　農業
野砲第四聯隊在營中　御靈村
御靈村
湯淺町
日高郡松原村　和歌山縣西川改修事務所勤務
鳥屋城村
保田村
湯淺町
池田師範二部在學　鳥屋城村
東京一中補習科在學　湯淺町
內海紡織廣分工場機械部在勤　宮原村
京城師範演習科在學　御靈村
湯淺町
金澤高工機械科在學　田栖川村
藤並村
關西大學專門部在學
宮原村
龍神村
藤並村

廣村
西山專門學校在學　京都府乙訓郡乙訓村栗生
同校寄宿舍
名古屋高工在學　湯淺町
湯淺町
京都關西高等豫備校在學　廣村
宮原村
龍谷大學在學　南廣村
和師二部在學　和師寄宿舍二寮四
湯淺町役場勤務　湯淺町
和歌山高商在學　廣村
湯淺町　ラヂオ商
湯淺町
國學院大學皇典講究所在學　宮原村
龍谷大學在學　京都市下京區西七條御領町二八
西村末吉方
田栖川村
內海紡織廣工場在勤　湯淺町
湯淺町
五西月村
慶應義塾大學醫學部在學　藤並村
南廣村
御靈村
大阪齒科醫專在學　大阪市西區江戶堀南通
四丁目一六　小池久吉方
南廣村

小石川義行
寺村雄四郎
寺井享
赤桐行三郎
赤桐義一
崎山正
澤崎成次
雜賀彰信
北山尙夫
北山稠
黍原啓三郎
宮井彌一郎
宮井長二郎
宮本眞喜男
宮崎勇
宮芝輝巳
見矢政吉
清水信二
清水義男
平松正次
森口弘吾
森田梭之助
森紀彥
田殿村
東洋大學專門部在學　湯淺町
鈴川靜男

藤並村

第二十六回（昭和七年度）

周參見哲夫

石井義之
岩崎丈夫
岩崎茂信
生駒新一
橋本勇
濱野善一
秦隆二
新田正次
星田龍介
額田英一郎
小中彌幸
太田正
枠谷與一郎
波部武四郎
川口勝
川口省吾
神山正久
吉井光雄
吉田英男
吉田忠隆
田中榮治

裕　要吉
富山憲一郎
戶田實
土岐義雄
小澤良次
沖富治
大久保政春
和田宏
片山正夫
數見清太郎
川村庄次
川口親晴
川上安夫
河合正夫
川岸茂
吉村濟夫
吉田滿佐成
瀧清
玉置勇藏
玉置俊一
竹中義憲
田中敬造
田廣實
辻岡正二

湯淺町
鳥屋城村
石垣村　農業
石垣村
湯淺町
津木村
大阪市北區天滿橋筋一ノ三六
綿糸商　上田稔商店方　五四月村
藤並村　農業
保田村
南廣村
糸我村
海草郡椒村　農業
御靈村
東京市神田區三崎町私立蒲蒙學校在學　南廣村
安諦村
兵庫縣宍粟郡須音
富山高校在學　藤並村
鳥屋城村
南廣村
生石村
靜岡高校在學　廣村
宮原村
湯淺町　實業
日高郡寒川村

妻木端夫
津田茂生
中井治八郎
中井正弘
中勝
梅本清三郎
浦光雄
上田俊男
上山粂治
栗山齋雄
桑原初藏
國中貞夫
栗生正二
久保田平吉
保田源四郎
八木信市
山下大二郎
前田秀夫
前川千代次
央得正隆
支後一郎
藤岡久夫
古田啓次郎
福島清藏

8 9 10 稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9

關西大學專門部在學　湯淺町
保田村
石垣村
和歌山高商在學　藤並村
湯淺町
關東州安東縣四番通三丁目三　馬場直藏方
日、由良村
津木村
大阪醫科醫專在學　湯淺町
廣　村
田栖川村
關西大學專門部在學　田栖川村
湯淺町
鳥屋城村
五西月村
茨城縣宍戸町友部日本國民高等學校在學
日、川上村
東牟婁郡色川村
藤並村
南廣村
五　村
藤並村
御靈村
鳥屋城村
田殿村
龍谷大學專門部在學　日、衣奈村

田上鶴雄
谷口幸一
高垣勝二
武內龍二
谷井國幹
曾根一悅
椿原政治
根來典夫
永野毅
中野宗弘
成田春男
上野甚一
來女昇
浦良太郎
桑正義
久保虎夫
久道功
山口弘市
山本正秀
山田茂
安井正夫
前田昌治
前田紀美雄
藤田信曉

保田村
和歌山市今福町一九七
關西學院專門部在學　田栖川村
日高郡川上村
鳥屋城村
御靈村
湯淺町
田栖川村
日高郡切目村
松江高校在學　湯淺町
糸我村
日高郡衣奈村
西山專門學校在學　箕島町
藤並村
湯淺町
東洋大學專門部在學　廣村
五西月村
藤並村
和歌山高商在學　湯淺町
日高郡白崎村

藤田千代壽
兒島弘高
兒島高一
兒玉富士男
江尻登久
寺杣利郎
寺石泰藏
坂本芳雄
木谷義信
湯淺毅
宮井新太郎
宮尾保
宮脇虎春
宮地二郎
蜜浦大八
守法禮治
平硲修
平谷政雄
廣瀨俊郎
元田喜文

× × × × ×

附記左記の人々は何れも中途退學者なれども會則第三條但し書きの條文に則り幹事會の決議を經て正會員に推薦せられたり。

明治三十七年度　湯淺町會議員　伏木貞

第五回　田栖川村長
第六回　朝鮮京城片倉組
大正八年度"廣八幡神職（皇典講究所入學）
大正九年九月、日高郡東內原村（高校入學）
大正十一年　日、御坊町島（醫大入學）
大正十二年　大阪府泉北郡橫山村（專修大學入學）
仝　箕島町野（龍谷大學入學）
大正十三年　湯淺町（三高入學）
仝　和歌山市甲賀町（關大入學）
大正十四年　廣村（六高入學）
昭和二年　安諦村（浪速高校）
仝　田殿村（龍谷大學）
昭和三年　廣村（龍谷大學）
仝　日、由良村（龍谷大學）
仝　元、糸我村得生寺（關大）
昭和四年　湯淺町（浪速高校）
仝　鳥屋城村市場（廣島高校）
昭和五年　宮原村（龍谷大學）
昭和六年　湯淺町（日大豫科）
昭和七年　保田村（陸士）
仝　湯淺町（龍谷大學）
昭和八年　東郡太地町（同志社大學）
右

河內清吉
片倉耕介
佐々木秀雄
坂本謂夫
松本正信
大植利勝
宮崎圓遵
近藤儀一
中村廣
岩崎伸
正示啓二郎
近藤昌信
板原顯示
岩崎哲貫
東山賢光
竹中敏郎
北山康夫
茂野義哲
山本一雄
岩橋重夫
北山好右
木下守夫

編輯後記

◎八十周年記念號が出來ました。人の和に天の時を得て全國稀に見る八十年の記念式典並に祝賀行事も萬事滯りなく盛況裡に結了し、こゝに記念號を發行し得たことは御同慶至極に存じます。
なほこの八十年を一期として職員生徒一同創立精神に遡り層一層の努力を重ね母校の發展隆昌に精進しやうと意氣込んでゐます。

◎式後大車輪で編輯にかゝり遲くとも夏期休暇中に御手許まで發送を終りたいと思つて居ましたが色々の都合で豫定より遲れました。

◎豫て準備しておきました生徒の作品をもつと多く取り入れ在校生の活躍振りをもお目にかけたい積りでありましたが經費の都合で遺憾ながら割愛せざるを得ませんでした、この点宜しく御諒察を願ひます。

◎表紙意匠は本校金成先生に御願ひ致しました先生には御着任後日なほ淺く而も學期末多忙の折柄にも拘らず本號の爲め快く御執筆下さいましたことを厚く感謝致します。
なほ巻頭言の上のカットも同先生の御考案になつたものです、遠く離れて居られる卒業生諸君にとつては思ひ出の深いものがあると存じます。

◎誠に欠點の多い編輯でありますが秋の夜長のすさびに舊師を懷しみ母校を思ひ舊友を偲びながら御一讀下さい。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10

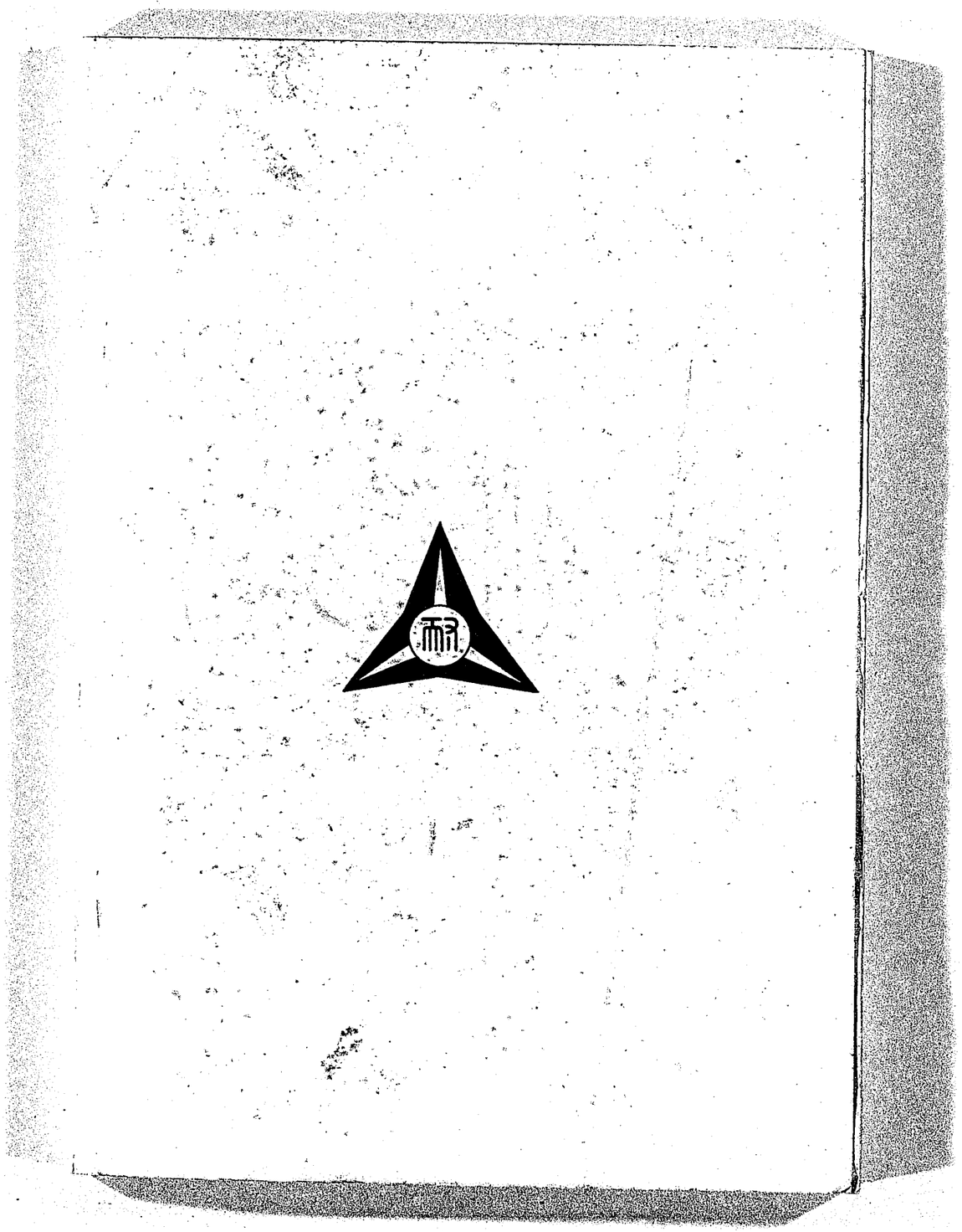
昭和八年九月二十日印刷
昭和八年九月廿五日發行

（非賣品）

編輯兼發行者　和歌山縣有田郡湯淺町　西岡亮
印刷人　和歌山市新中通一丁目九番地　田中政吉
印刷所　和歌山市新中通一丁目九番地　旭印刷所　電話二七二九番
發行所　和歌山縣立耐久中學校

渋谷

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10



稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　10